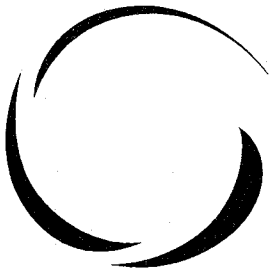
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

吉野文六

〔元駐ドイツ大使〕

オーラルヒストリー



GRIPS

政策研究院

政策研究大学院大学

C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

吉野文六　オーラルヒストリー

〈目次〉

[吉野文六・略歴] ／2

《第1回》

弁護士の家に生まれて／5　外交官試験に合格／7　独ソ開戦／9　命懸けの大使館生活／12　ベルリン陥落／16　帰国・終戦・結婚／20

《第2回》

親独派vs. 反独派／27　外交官の情報収集能力／31　佐世保の終戦連絡局へ／35　条約局法規課で調査活動／40　外務省と公職追放／42　外務省＝条約局／46

《第3回》

通産省vs. 外務省／53　スターリング地域との貿易／56　コメを買いにビルマへ／60　通商航海条約をつくる／64　日豪通商協定を結ぶ／69　ワシントン時代―余剰農産物協定／72　岸・河野の訪米／75

《第4回》

日印通商交渉に取り組む／81　ハーバード大学に留学／85　ドイツ時代―米ソの対立を見る／90　「浴衣がけ」の東南アジア外交／94　インドネシア援助と政治／99

《第5回》

アメリカ公使として／105　日米繊維協定と沖縄問題／108　国会答弁に奔走―機密漏洩事件／114　サンクレメンテの争い―ポスト佐藤／120　パリへ―ＯＥＣＤ大使／125

《第6回》

ＯＥＣＤの人事工作／131　造船問題からオイル問題まで／136　サミットの準備に追われて／139　東西対立の時代―ドイツ大使として／146

《第7回》

シュミット政権の自由主義／153　日独親善の旅／157　ドイツの核政策／163　日本外交の行方／166　サミットにおける日本の立場／170

[あとがき] (財)平和・安全保障研究所理事長／政策研究大学院大学客員教授　渡邉昭夫／177

〈速記〉第1・3・6回：川島由紀（ペンハウス）、第2回：丹羽清隆、第4・5・7回：戸部芳珠子（ペンハウス）

〈文中敬称略〉

吉野文六（よしの・ぶんろく）略歴

1918（大正　7）年　8月　8日生まれ（本籍・神奈川県）
1940（昭和 15）年 10 月：高等試験外交科、行政科、司法科試験合格
1941（昭和 16）年　1月：外務省在外研究員（ドイツ）
1944（昭和 19）年　4月：外務書記生（ドイツ）
1944（昭和 19）年 12 月：外交官補（ドイツ）
1945（昭和 20）年　7月：臨時外務省事務従事
1945（昭和 20）年　9月：終連地方事務局連絡官
1945（昭和 20）年 10 月：佐世保事務局
1946（昭和 21）年　4月：外務事務官
1946（昭和 21）年 11 月：条約局法規課
1947（昭和 22）年　3月：外交官補、条約局法規課
1947（昭和 22）年　4月：東京大学法学部法律学科卒業
1948（昭和 24）年　1月：大使館三等書記官、条約局法規課
1948（昭和 24）年　6月：通商産業事務官、通商局
1948（昭和 24）年 10 月：通商局市場一課
1951（昭和 26）年　8月：外務事務官、国際経済局一課
1951（昭和 26）年 12 月：経済局一課
1953（昭和 28）年 11 月：在アメリカ合衆国日本大使館、二等書記官
1954（昭和 29）年　7月：一等書記官
1956（昭和 31）年　7月：経済局第四課長
1958（昭和 33）年　5月：経済局スターリング地域課長
1959（昭和 34）年　8月：兼経済局外務参事官
1959（昭和 34）年 10 月：経済局外務参事官
1960（昭和 35）年　8月：在アメリカ合衆国日本大使館、一等書記官
1961（昭和 36）年　6月：在ドイツ日本大使館、参事官
1964（昭和 39）年 12 月：経済協力局外務参事官
1967（昭和 42）年　8月：大臣官房審議官、兼経済協力局
1968（昭和 43）年　2月：在アメリカ合衆国日本大使館、公使
1968（昭和 43）年　5月：特命全権公使、アメリカ合衆国日本国大使館駐箚
1971（昭和 46）年　1月：アメリカ局長
1972（昭和 47）年　6月：大臣官房
1972（昭和 47）年　7月：特命全権大使、経済協力開発機構（OECD）代表部
1975（昭和 50）年　2月：外務審議官
1977（昭和 52）年　6月：大使
1977（昭和 52）年 12 月：特命全権大使、ドイツ連邦共和国駐箚
1979（昭和 54）年　1月：大蔵省顧問（同月：免大蔵省顧問）
1980（昭和 55）年　6月：大蔵省顧問（同年 9 月：免大蔵省顧問）
1982（昭和 57）年　5月：ドイツ連邦共和国駐箚を免ずる
1982（昭和 57）年　7月：臨時に外務省本省で事務に従事、GATT 閣僚会議日本政府代表
1982（昭和 57）年 12 月：依願免本官
1983（昭和 58）年　1月：経団連参与、国連貿易開発会議日本政府代表
1983（昭和 58）年 10 月：国際経済研究所所長
1985（昭和 60）年　2月：同理事長に就任
1990（平成　2）年 11 月：勲一等に叙せられる
2001（平成 13）年　4月：国際経済研究所特別顧問、現在に至る

吉野文六
オーラルヒストリー

第1回

[1999年2月22日 13:40～15:30]

〔インタビュアー〕(肩書きはインタビューの時点)

渡邉昭夫(青山学院大学教授)

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

股野景親(元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員)

井上寿一(学習院大学法学部教授)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

武田知己(東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員)

(於：国際経済研究所)

弁護士の家に生まれて

伊藤　質問項目を差し上げておりますが、最初はお若い頃の話から、気楽にお話しください。

吉野　私は松本市の生まれですが、親父の里が、松本から汽車で一時間ぐらい離れた麻績というところで、大学を卒業して外務省へ入って横浜の現住所に移るまでは、麻績村野口に本籍がありました。ところが終戦当時、配給だ何だかんだと、いちいち「戸籍謄本を持ってこい」と言われまして、それを手紙に書いて村役場から送ってもらうのが面倒臭いものですから、本籍なんて富士山の上でも移すことができるということで、現住所の神奈川県に移したんです。移すときは、多少、そう簡単に本籍を移していいのかなと思いましたけれども、便利さのために今の本籍地に移したわけです。ですから、終戦当時の便利のためだけの話です。

渡邉　ということは、大学に入られるまでは長野県のほうで？

吉野　そうです。

伊藤　どういうご家庭にお生まれになったんですか。

吉野　私の父は松本市で弁護士をしておりました。東大を卒業した学士様なので、本当は東京で弁護士でもやれば良かったんでしょうけれども、親父の両親が麻績に住んでいたものですから、松本という一番近い町で開業したわけです。そこで、僕は長男として生まれました。

あの頃の我々の観念では、上級学校は東大しかなかったんです。ですから、それ自体、別にどうということはないんです。僕の叔父も二人ばかり東大を出ていますし、仮に上の学校へ行くといったら、一番月謝の安い官学しかなかったというか、あっても、それ以外のところは月謝が高くて行けないということでしょうね。

伊藤　東大に入るのは、ごく当然という雰囲気ですね。

吉野　そうです。

伊藤　行けなかったら、大変ですけど。

吉野　行けなかったら、行く必要がないということになるわけですから、別にそれ自体はどうということはないです。

渡邉　高等学校はどちらですか。

吉野　旧制松本高校です。

伊藤　中学は？

吉野　松本中学。今は松本深志（高校）とか言っていますね。

伊藤　旧制松本中学は県下随一の名門なんでしょう。長野中学じゃなくて……。

吉野　松本のほうが首都だという気持ちが強かったですね（笑）。

伊藤　長野市の人はそう言わないけれど、みんなそう言いますね。

吉野　長野県には松本平とか善光寺平とか、幾つも中心がありますね。

伊藤　小学校、旧制中学の時代はちょうど昭和の初めですが、その頃のご記憶はありますか。

吉野　非常にありますよ。まず第一に、私の親父も弁護士だったし、叔父も弁護士をやっていた関係上、物心がつく頃は小作争議だとか人権蹂躙事件などを小耳に挟んでいました。人権蹂躙という言葉は、その頃からあったわけです。それから、私が中学半ば頃から、高等学校の連中の共産党検挙が始まった関係で、そういうものには非常にセン

シティブになっていたわけです。そういう意味で、一種の社会主義的な思想にかぶれていたわけです。

伊藤　お父さんも、そういう弁護をなさったりしたんですか。

吉野　親父は適当にやっていたんだろうと思いますが、若い叔父のほうは、そういう問題には非常に慷慨して、いろいろ動き回ったりしていましたから、小作争議の話などは、こちらから積極的に聞き出したわけじゃないけれども、関心を持っていました。

伊藤　長野は、社会運動の先進県と言われるところですからね。

吉野　ですから、どうしても左翼的な、社会主義的な思想が大学を卒業してもありました。外務省へ入ったというのは、初めはあまり感激もなかったんです。大体、大学を卒業する前まで、何になるか非常に迷ったわけです。一番楽なのは、親父の後を継いで弁護士をやることだと思ったんですが、親父は、「弁護士なんかやったら一生うだつが上がらないから、官界へ出ろ」と言うわけです。僕は官界というのは聞いただけでも嫌だと思ったし、その前に、「哲学をやりたいから京都へ行きたい」と、哲学の先生に話したら、「それは夢だよ」と言われたということもあって、高文（高等文官試験）の試験でも受ければ、どれか道を決めてくれるだろうと、他力本願に三つ受けたんです。

伊藤　三つというのは？

吉野　行政科と司法科と外交科。そうしたら三つ入っちゃったもんですから、また困ったんです。

渡邉　当時の松高は、どういう雰囲気だったんですか。

吉野　僕が入った頃はレッド・パージが終わった頃です。その前は、一クラスの、ほとんど全部が引っくくられたことがあったくらい、相当、左翼運動が盛んだったですね。僕等が入ったときには、そろそろ戦時色というか、日本全体がだんだん右翼化していった経緯もありますし、先生の中にはマルクス主義者などはいませんでした。その意味では、もはやマルクス騒動は収まったわけです。けれど、僕の知っている先輩には、刑務所の飯を食った連中が相当いました。

伊藤　長野県では、昭和八、九年に一斉にやられましたね。

吉野　そうです。しかし、思想的にはそういう連中に心情的にシンパシティックになっていたわけです。

伊藤　本などをお読みになっていたわけですか。

吉野　いえ、"Das Kapital"なんていうのは、後になってちょっとかじったぐらいです。大学へ行っても、大学騒動はもう終わった頃ですが、その頃は軍部と反軍部という形に教授が分かれていました。しかし、経済学部の学者では、左翼的な理論をそのまま唱えていた人はいないですね。大河内一男さんの本などは読みました。その頃の学生は、これを読んだほうがいいといったような感じでしたね。しかし、「何だ、この人は同じことを何回言うんだ」と思ったんです（笑）。けれども、評判は良かったですね。

伊藤　中学、高校、大学と、ずっとご一緒だった人はいますか。

吉野　高校までは一緒で、通産省へ入った人が一人います。しかし、僕等の高校の卒業生の大部分は民間に行ったんです。というのは、卒業して間もなく、みんな兵隊に取られたんです。そのためだけではないけれども、そのときに高文の試験に受かっていれば、みんな官界へ行ったでしょうけれど……。

伊藤　どこで、その後まで続く友だちができましたか。

吉野　後まで続く友だちは、大学で偶然に知り合った人や、外務省に一緒に入った連中が主ですね。高校は今でも同窓会を開いたりしてい

ますけれども、そういう連中とは社会的な付き合いはないです。

伊藤　旧制高校は、寮生活でしたか？

吉野　地元の人は入る必要はなかったんです。一高あたりは全寮制だったですね。しかし、そうでないところは自分の家から通えたんです。

伊藤　寮生活をされたら、大分違っていたでしょうね。

吉野　いま考えれば、大分違っていたですね。

外交官試験に合格

伊藤　かなり早い時期から外交官を目指しておられたのかと思ったんですが。

吉野　そうじゃないんですよ。なぜ外務省に入ったかというと、面接試験を受けに行ったら、ちょうど日独防共協定ができた後で、ドイツ語を話す外交官が足りないんです。私も英語で試験を受けたので、ドイツ語はドイツへ行ってから勉強したわけです。外交官試験に受かり語学研究員に任命されると、三年間、徴兵延期の特典があったんです。もう一つは、ドイツへ行ってドイツ語を勉強できる。それじゃあひとつ……と思って行ったんです。後になって、外交官の道を選んだことを、それほど悔いていないのは、少なくもナチス・ドイツの崩壊を見たり、日本の終戦のお手伝いをしたり、個人的には直接手がけることのできない経験を踏むことができたからです。僕はあまり趣味もないし、体力もないんですけれども、非常に面白い経験をしたという気がします。

伊藤　他は面接されなかったんですか。

吉野　外務省の面接に行ったら、そういうことになったもんですから、他のほうはやめちゃったんです。他のほうは、何か暗い印象を僕に与えたんですね。一つは司法官で、判事とか検事になるのは嫌だという気がしたし、行政のほうは、僕の親父なんかはあまり勧めなかったんですよ。僕の親父は、東京には知っている役人さんも相当いたんですが、「外交官がいいよ」と言うわけです。僕は、外交官なんて金もかかるし、自分は体も小さいし、とてもじゃないと思っていたんですが、「外交官は親任官が多いから」と言うんですよ。僕は「親任官なんて、なるつもりはない」と言って反発したんですけどね（笑）。

渡邉　今、また外交官試験と一般の公務員試験を一緒にしようという話ですが、しばらくは別でしたね。この頃は、そういう感覚はなかったんですか。外交か行政か法律か、その中の一つというぐらいの感じですか。

吉野　一科目余計に受ければ、他はみんな同じ科目で通るわけです。ですから、それほど試験自体は難しくない。

伊藤　何か特別なものではないわけですね。

吉野　ええ。

伊藤　それは別々に受けるわけですか。

吉野　うまくアレンジすると、別々の日に試験があるんです。

伊藤　それは、どこで受けるのですか。

吉野　総理府か何かの建物だったと思いましたが、もう憶えていないです。いずれにせよ、もうなくなっていますからね。

伊藤　試験問題がやさしかったんですね。問題だけ見てて、周りは見えなかったんじゃないですか（笑）。

でも、外務省に入って、いきなり「ドイツに行け」と言うわけじゃなくて、研修か何かあるんでしょう。

吉野　いや、ないんです。入ったらすぐに、「ドイツで勉強しろ」と言うわけです。

伊藤　でも、どこかに配属はされるわけですよね。

吉野　一応、形式的にはされたんですが、今の欧亜局の西欧一課とか、そういうところですよね。

伊藤　身分は何ですか。

吉野　試補みたいなものですね。官補にもなっていないわけです。ですから、昔の書記生みたいなものですね。

伊藤　月給は、どれくらいだったんですか。

吉野　月給は憶えていません。もらったかどうかも憶えてないです（笑）。

渡邉　あまりお金にお困りじゃなかったんですね（笑）。

吉野　それで、ドイツに行くために、「すぐに旅行準備をしろ」と言うわけで、背広をつくったり靴を買ったりしていたんです。そうしたら、シベリア経由で行くはずでしたが、ソ連が通過ビザを出さないんですよ。当時の通過ビザというのは、日本人が一人通れば、ロシア人も一人、日本を通過するという形でしょうね。一対一ぐらいで、とても話にならない。だから、一月頃発令になって、三月頃まで待っていたんです。

伊藤　外務省には、いつお入りになったんですか。資料では昭和十六年一月になっていますね。

吉野　ともかく、受かって、すぐ採用になったわけです。

伊藤　すると、大学は卒業せずに……。

吉野　「卒業してしまうと徴兵延期が利かないから、大学は卒業しちゃいかん。科目は二、三残しておけ」と、外務省から言われたのです。みんな通ったら、卒業させられますからね。

渡邉　ということは、大学に籍があるということですか。

吉野　そうです。

股野　東大は二十二年の卒業、ずいぶんゆっくり卒業されたんですね。

吉野　当時は、外務省から「学校のほうは、卒業する必要はない」と言われたわけです。帰ってきたら東大のほうから、「お前、まだ籍があるから、興味があったら卒業試験を受けなさい」と言われました（笑）。

渡邉　それで、シベリアからどういうふうに行かれたんですか。

吉野　いつまで経ってもロシアのビザがこないものだから、「アメリカ回りで行け」ということで、四月の何日かに「八幡丸」、後に巡洋艦になったらしいのですが、それで横浜から出て、ハワイ経由でサンフランシスコに行きました。サンフランシスコからは、ロサンゼルスを通って、ともかくメキシコの国境まで行きました。それは切符の都合です。そしてシカゴに北上して、ワシントンへ行って、ニューヨークへ行ったんです。

渡邉　それは、鉄道ですか。

吉野　鉄道です。

伊藤　当時は、鉄道全盛時代ですからね。

吉野　鉄道の中で、何泊かしたりしたわけです。

伊藤　じゃあ、アメリカを見ることができて、かえって良かったんじゃないですか。

吉野　良かったです。それと、一等の寝台をくれたので、我々学生に

とっては……（笑）。

渡邉　ニューヨークからは、何ですか。

吉野　ニューヨークから船で、中立国・ポルトガルのリスボンへ行ったんです。ヨーロッパでは戦争が始まっていましたが、その頃、ドイツのUボートの活躍は、それほど激しくはなかったんです。後になると、中立国・アメリカの商船も攻撃の的となったのですが……。私の乗った船は「エクセター」とかいう、アメリカ―リスボンラインの小さな船でした。時々、救命ボートに乗り移る練習をしたりしました。憶えておられるかどうか知りませんが、ヘスというヒットラーの一番弟子が飛行機でイギリスへ亡命したということを、船の中で聞いたわけです。そのとき、一体、ヘスはなぜ逃げたのかということが大きな話題になった時代です。

伊藤　同行者がいたわけですか。

吉野　アメリカに行くときには、商社の人と、ニューヨークへ赴任する総領事の平沢さんが一緒です。ドイツへは、僕等と同じような研究員が他に二人いたし、フランスに行く研究員が一人いて、四人で行ったわけです。ですから、それほど孤独感はなかったですね。

伊藤　リスボンに入って、そこからどうするんですか。

吉野　ドイツは、占領地区を通さなかったんです。もちろん、無理すれば通すんでしょうけれども、許可を取るのが面倒臭いですから、なるべく戦闘地域を避けた。ポルトガルは問題ない、スペインも問題ない、フランスに入ってから……。

伊藤　ヴィシー政府ですか。

吉野　ヴィシー政府ですけれども、一部ドイツ軍が入っていましたので、フランスから直接ドイツへ行かずに、スイスへ入りました。それで、南のほうからミュンヘン経由で、ベルリンへ行ったわけです。その意味でも、方々を見て回ったわけです。それは余得でしょうね。

独ソ開戦

渡邉　国を出てからベルリンまで、どれくらいで行ったんですか。

吉野　ひと月以上かかったんじゃないかと思います。ベルリンに着いたのは、昭和十六年の五月の初め頃でした。それで大使館へ行きましたら、ハイデルベルクとかフライブルクとかゲッティンゲンとか、「それぞれの大学へ行って勉強しろ」と言うわけです。「日本人と話をしちゃいかんよ」とか、いろいろ言われて、ともかく「語学を勉強しろ」と言うわけです。

　そのとき初めて、僕は大島（浩）大使に会いました。非常に印象が深いのは、アメリカでも野村（吉三郎）大使が同じようなことを言われたんです――話の内容は違います――が、大島大使の場合は、「これはヒットラーから聞いてきたんだが、独ソ戦争が始まるから、そのつもりでおれ、驚くな」と言うわけです。ところが、それは（昭和十六年の）五月の中頃で、独ソ戦争が始まったのは六月二十四日で、ひと月ぐらい後の話ですから、まだ半信半疑で、「何を言っているのか」と思っておりました。考えてみると、彼が不用意に言ったのか、わざわざ我々にそういうことを言う、何かの意図があったのかは分かりません。別に僕は、それを人に知らせるつもりはなかったけれども、ある意味では、「そんな重大事項を聞いてくる大使は偉いな」と思い

ました。大島大使の話は出発前からいろいろ聞いていて、彼はヒットラーに非常に近いということだったけれども、そんなことまで聞いてこられるのかと感心したわけです。後になって分かったことですが、彼はその頃本省に対し、「ドイツがソ連を攻撃するから、日本はシベリアを攻撃すべし」と、連日電報を打っていたのです。

それで、僕はハイデルベルクへ行きまして、ペンションとかパンシオンとかいう下宿みたいなところへ入りました。ひと月ばかりしたら、ある朝突然、下宿のおかみさんがドアをドンドン叩いて、「吉野さん、大変ですよ。独ソ戦争が始まった」と。彼女の顔は真っ青でした。僕は前からその話を聞いているから、別に驚きもしなかったけれども、当時のハイデルベルクの市民や、もちろん一緒に住んでいた下宿の連中はみな、「さあ、これは大変だ」という顔色なんですよ。なぜかと申しますと、僕等が着いた頃は、ドイツは全欧州を併呑した後で、ソ連を除いてドイツに手向かうものはいない。あとは英国をどうするかという問題で、「おそらくヒットラーは、空挺部隊でやるだろうから、大したことはないだろう」と、一般ドイツ人は勝ち誇って、戦争は大方終わったものだと思っていたわけです。

ところが、独ソ戦争が始まったと聞いたら、ドイツ人は本能的に、「これは大変だ。また戦争が長引くし、必ずしも勝利は保証されていない」と考え出していました。ヒットラーは"Mein Kampf"という著書の中で、「第一次世界大戦は、本来ドイツが勝っていた。それに負けてしまったのは、カイザーという馬鹿な奴がロシアを相手に第二戦線を開いたことである」と書いていた。彼等の気持ちは、そういう両面作戦の怖さを知っている男が、また凝りもせず自分でやり出したのかということです。それで、「これは大変だ、もうドイツに勝ち目はない」と考えていたんだと思います。

夜になって、ヒットラーが例の調子でラジオ演説を始めた。「二週間ぐらいでロシアとの戦争は収まるから心配するな。今、ポーランドからドンドンと進撃を始めている」という話でした。彼等は、まだヒットラーを信じていましたから、「まあまあ、そういうことなら」と思い直していたんでしょうね。

渡邉　独ソ開戦をお聞きになったのは、ハイデルベルクで勉強なさっているときですね。

吉野　はい。一年目はハイデルベルクにいて、二年目はミュンヘンに移りました。「ミュンヘンは空爆されない」と言われていましたが、それがまた空爆されるようになったので、三年目にはヴュルツブルクという小さな町へ移ったんです。

渡邉　大島大使にお会いになったのは、ベルリンの大使館ですね。できたばかりの、すばらしい建物ですね。

吉野　そうです。

伊藤　そういう勉強をしている間は、時々は大使館に行かれましたか。

吉野　呼び出されました。呼び出されて、形式的に語学の試験を受けたり、大使館の館員が我々に注意みたいなことをしたわけです。でも、大したものじゃないです。

渡邉　大学では何を勉強なさったんですか。

吉野　フォルクス・ヴィルトシャフトと言って、ナショナル・エコノミーを勉強したわけです。というのは、他にテーマも何もないし、経済は自分の語学の助けになると思ったし、一番やさしいからと思って行ったんです。しかし、最初は教室に座っていても、先生が何をしゃべっているか分からなかったんです。後には、一応分かるようにはな

ったけれども……。

伊藤　友だちはどうですか。

吉野　当時のドイツの大学は、男は戦線に行っていますから、大多数は女生徒です。そんなわけで、大学での友だちは、案外少なかったんですが、後になって再会できるような人には恵まれました。

伊藤　戦後ですか。

吉野　戦後です。つい最近も会いました。まだ三人ぐらい生きています。一人は、アルザス出身のロバートというドイツ人ですが、僕と付き合っていたときはドイツで勉強していたんです。後に、フランスの「マキ」と一緒になってドイツに抵抗した男です。その後、国連の事務次長か何かになった相当有名な男ですが、三、四十年後に偶然東京で会いました。

それから、ミュンヘンではシュルツ・フォアベルクという学生と知り合いました。後に国会議員にもなりましたが、戦後はバイエルン放送局の新聞記者でした。彼も、まだ生きています。彼には、僕が戦後、ドイツに通商協定か何かの交渉に行ったときに、偶然にドイツ連邦議事堂内で会いました。本当に偶然なんです。そういう偶然がなかったら、そいつには一生会えなかったかも知れないですね。「あっ、お前、まだ生きていたか」っていう感じです。

あと三人は、ブルガリアからの留学生です。ブルガリアという国は、ロシアへ付いた人とドイツへ付いた人と二つあるわけですが、その留学生――ヴュルツブルクで勉強していた学生ですが、戦後、ミュンヘンとヴュルツブルクで、それぞれ会いました。やはり偶然ですね。

伊藤　それはブルガリア人としてですか。

吉野　ブルガリア人だけれども、ドイツへ帰化したのか、少なくともドイツの永住権を持っていた。というのは、彼等はドイツへ来ちゃったわけですから、もう帰れないんです。結構、商売なんかして、うまくやっていました。そういうように、ほとんど付き合いはなかったんですが、再会し、かつ今もある程度コンタクトを持っている連中はいます。

伊藤　大学の学生たちの、ヒットラーに対する信頼には非常に強いものがあったわけですか。

吉野　大学は分かれていたと思いますよ。しかし、大学生はヒットラーの悪口は言えなかったですね。ヒットラーの悪口を言ったのは、ミュンヘンの僕の下宿のおかみさんで、これは毎日のようにヒットラーの悪口を言うわけです。だけど、それは僕に対してだけです。外へ出ると、そんなことを言ったら、すぐ引っ張られちゃいますからね。

もう一つ非常に印象深いのは、ハイデルベルクにいたときに、岩倉具視の孫に当たる人が大学で日本語を教えていたんです。その人が住んでいるハイデルベルクの家は、ユダヤ人の家なんです。ユダヤ人は、日本人に家を貸していることで保護されると思って、非常に親切なんです。「お前に移ってもらっては困る」と言って、見たところ、いやらしいほど親切なんですが、その関係で私もユダヤ人と知り合いになったわけです。

その頃、ユダヤ人に対する迫害は形式的には始まっていたんですが、それほど悪くはなかったんです。少なくとも、目に余るような形では……。ところが、ハイデルベルクで勉強していた秋頃、十月か十一月頃になって、ある日突然、ユダヤ人は戸外へ出るときには黄色い星を胸に付けさせられたのです。外套を着ている場合は外套の上に、外套を着ていない場合には上着の上に……。僕等はナチスにえらく反対し

ていたわけではないけれども、「これは、酷いなあ」と思いました。その頃、人種差別の観念はそれほど定着してはいなかったんですが、これは私のような者でも「差別だ、けしからんな」と思いました。殊に、五、六歳の小さな子どもが胸に黄色い星を付けて歩かされているのを見ると、「これは人道に反するな」と思いました。ところが、間もなく、そういう連中は消えちゃったわけです。どこへ連れて行かれたのか分かりませんが……。いずれにせよ、ユダヤ人に「標識」を付けて歩かせるのは、本当に悪いことだと思いましたね。しかし、それよりもっと大きなことが起きていたのです。

渡邉　ヒットラーの話が出たんですが、よく「ハイル、ヒットラー！」と言いますけれども、そういう場面はご覧になったことはありますか。

吉野　しょっちゅうですよ。

渡邉　ヒットラーが演説するところで？

吉野　ヒットラーの演説は、ラジオか何かでしか聞いたことはないけれども、「ヴォッヘンシャウ」と言って、ニュース映画は毎週新しいやつをやりますから、そういうので見ます。いわゆる「ガウライター」と称する党の県知事――十人ぐらいしかいなかったでしょうけれども、そういう連中と大島大使や外交官が付き合うとき、彼等はヒットラーの子分ですから、「ハイル、ヒットラー！」の一本槍です。

ところが、不思議ですよね。配給の世の中ですから、「ハイル、ヒットラー！」と言って店へ入って行くと、サービスがいい（笑）。しかし、ミュンヘンはヒットラーが旗を揚げたところですけれども、「ハイル、ヒットラー！」と言ったら、なかなかサービスしてくれないんですよ。「グリュース・ゴット」とか、「ハイル、ヒットラー！」ではない挨拶言葉を使わないと……。というくらいに、ミュンヘン人は――今はミュンヘンも五〇パーセントぐらいは他地域から移って来た連中が住んでいますが――当時のミュンヘン人は、えらく反ヒトラーでしたよ、僕の下宿のおかみさんも含めてね。それは大変なもんですよ。

伊藤　ミュンヘンという意識が強いわけですか。

吉野　バイエルンという意識ですね。バイエルンは王国で、プロシアじゃない。少なくとも北の連中とは違う、と。ヒットラーは、オーストリアの国境近くの小さな町に生まれた、南の人なんだけれども、彼等の反感はプロシアに対するものです。つまり、フリードリヒ大王以来、「プロシアの連中は、けしからん」ということです。それにヒットラーが便乗してやったら、ますます……。

命懸けの大使館生活

伊藤　生活は、どうだったんですか。

吉野　我々は本当の外交官にはなっていないわけですが、外交官の端くれとして、普通の人がもらう配給券の六倍くらいの食糧配給券をもらっておりました。官補以上になると十二倍とか、たくさんもらえるわけです。それは、一つにはお客さんがあるということもあるでしょう。地方にいると、それをベルリンから送ってくるんです。しかし、それを「お前たちの六倍も持っている」と言って見せびらかすことはできないし、それでふんだんに買っていくと店の人は不思議に思うだ

ろうから、控え目にして、ほとんど券を余していたわけです。

渡邉　クーポンみたいになっているわけですか。

吉野　一〇〇グラムとか五〇グラムのクーポンです。レストランへ行くと、友だちの分も一緒に出したりしましたけれど、ふだんはそういうことはしなかったですね。その意味では、食事には困らなかったんです。

伊藤　一般の人は？

吉野　一般の人は非常に飢えていましたし、僕も下宿に入っている間は、一人分しか渡しませんでしたから、ペンションの食事では相当腹が空きました。だから一人で、こそこそチーズか何か買ってきて食べたことを憶えています。それで、ドイツのチーズが好きになったんですけどね（笑）。

伊藤　食べ物だけじゃなくて、衣類その他、すべてにクーポンがいるんですか。

吉野　衣類も、もちろんクーポンがいるんです。ところが、ほとんど物がないんです。外交官は、そんなことをしなくていいんですけれども、特別に市役所かどこかへ行って申請して、「洋服一着」というクーポンをもらっても、物がなかったから買えなかったです。

伊藤　物がないということですね。

吉野　ショーウィンドーには飾ってありますけれども、中にはないんです。そこで外交官は何をしていたかというと、スウェーデンやスイスなど中立国で調達して帰ってくるわけです。僕等は、外国へ旅行する許可は年に一回ぐらいしか与えられませんでしたし、また学生ですから、そういう必要性はなかったんですけれども……。

伊藤　行かれたときから、だんだん悪くなっていったんですか。

吉野　だんだん悪くなってきましたね。最初のうちは、食糧も一応配給制度は動いていたし、配給の量も、おそらくドイツ人にとっては不足でしょうけれども、我々にとっては、それほど不足ではないくらいにありました。しかし、戦争三年目、四年目となると、殊にロシアとの戦争が悪くなりますと……。

渡邉　給与は、日本円で出たんですか。

吉野　給与は、日本円が横浜正金銀行を経由して、マルクに替わってくるわけです。給与は悪くなかったです。ドイツは物価が抑えられていましたし、ドイツ・マルクと円との交換率も良かったと思いますから、給与は全然困らなかったです。ですから、ベルリンに住んでいる外交官は立派な家に住んでいたし、ハウスキーパーも使っていたし、別に苦痛はなかったですね。それに、自動車のガソリン券も潤沢にあったでしょうから。

渡邉　当時、自動車はどれぐらい使っていたんですか。大使館では偉い人だけ乗るんですか。

吉野　偉い人だけでなく、官補まで自動車を持っていました。もちろん、小さな車ですけれども……。

伊藤　フォルクスワーゲンですか。

吉野　ちょうどフォルクスワーゲンが出始めた頃で、大島大使に一台割り当てになっていた。大島さんは、おっちょこちょいみたいなところがありますから、ヒットラーの真似をしてフォルクスワーゲンを乗り回していました。しかも、ヒットラーは運転手の右側に座るわけです。右側に座ると、フォルクスワーゲンというのはぶつかったりすると危ないんですよね（笑）。しかし、運転手がいますから……。それでヒットラーばりで、「これはいい」と言っていたんです。当時のフ

ォルクスワーゲンなんて、いいはずはないですけどね（笑）。ただ、空冷で動くから、あの頃は非常に珍しかった。

渡邉　吉野さんは？

吉野　僕は持っていなくて、友だちの自動車に便乗していました。

股野　当時、大使館で、大使の次はどなたですか。

吉野　一応、佐久間（信）公使がおられましたが、この方は静かな方で広報関係に力を入れられており、経済担当には松島（鹿雄）公使がいました。松島さんは、大島さんのやり方に相当批判的のようでした。それから、河原（駿一郎）という参事官がいました。後に最高裁の調査官になった。その下には一等書記官の内田（藤雄）さんがいて、その下に三等書記官で、ロンドンから移って来た牛場（信彦）さんがおりました。それから、その下に官補が六人ぐらいいました。

股野　それから甲谷（悦雄）さんがおられましたね。

吉野　甲谷さんは陸軍の軍人ですね。

伊藤　海軍は別にいるわけですか。

吉野　海軍事務所が、どこかすぐ近くの別のところにあったんです。

伊藤　陸軍も別にあるんでしょう？

吉野　あったんじゃないかと思います。しかし、大使館の事務所で、時々お会いしました。僕は三年間は学生で、最後の一年間はヴュルツブルクから出て来て、ベルリンで三回ぐらい空爆に遭ったわけです。それで、最後のひと月か、ひと月半の間は、ベルリン戦争が始まっていましたから、大使館の地下壕に住んでいたわけです。というのは、大島大使のために、わざわざリッペントロップがつくってくれた地下壕があり、相当広いし、天井の厚さが二メートル、壁の厚さが一メートル。だから、二トン爆弾が直撃しても、まあ大丈夫だろうと言われていたんです。

伊藤　それは、大使館のそばにあったわけですか。

吉野　大使館の庭です。住んでいるところから、すぐに入れるようになっているわけです。ところが、最後の段階になったら、爆弾は上から落ちてこない、斜め横から来るわけです。そこで、壁は一メートルでは足りないから、「補強しなきゃいかん」と言って、土を掘り返し始めたわけです。それで、終戦になったわけです。むしろ土を掘り出していたときが、一番危険だった（笑）。

　大使館の建物自体は、直撃を二回ぐらい食らったわけです。そのときは、ぐらぐら揺れました。それで、ある朝起きると、ロビーの絨毯の上に一トン爆弾の不発弾が寝ているんですよ。雷管を外す奴もいないし、弱ったですよ。使用人が、彼等も命懸けでやったんでしょうけれども、絨毯にくるんで――トルコ絨毯だと思いますが、四人ぐらいで持ち上げて、五〇メートルか一〇〇メートル運んだ。大使館の前がティアガルテンで、その頃は爆撃で相当木がなくなっていたんですけれども、そのティアガルテンの真ん中に運び出して置いてきたんです。

伊藤　命懸けですね。

渡邉　すると、今の建物は修復したわけですか。

吉野　修復し、内容も模様替えしたわけです。その前までは、我々の仕事場であった二階の事務所とか三階の電信室とかは相当やられていました。

渡邉　でも、デザインは昔のまま？

吉野　殊に、ファサードは、ほとんど昔のままです。

渡邉　そのときは、吉野さん自身はどこへ配属されたんですか。

吉野　四年目に大使館へ帰ってきて……。

伊藤　昭和十九年四月に外務書記生ということになっていますね。

吉野　そこで最初、電信をひかされたんです。暗号電報の解読とか、発信電報を暗号に組むとか。そういう手伝いをさせられたわけです。これは、外務省へ入ると、入省者は昔から最初の数ヵ月間はやらされたようですが、私もそれを半年ぐらいやっていたわけです。タイプで打つと、暗号機械が違う文字の暗号にしてくれる。そのタイプの連結の仕様で、幾らでも変わる。それで、本省へ極秘の電文を送るわけです。「この暗号は絶対盗まれない」と言っていたけれども、後になって分かった話ですが、全部解読されていたわけです。それは分かるはずですよ。同じようなシステムの機械を使って、何回もやれば出て来るわけですから。

　それからしばらくしてから、「政務の手伝いをしろ」と言われました。政務の手伝いと言ったって、ヒットラーに会いに行くわけでもないのですから、ドイツの新聞に何が書かれているかということを、本省に送るわけです。

伊藤　それは平文（ひらぶん）で送るわけですか。

吉野　大部分は平文ですね。そうでない場合には、多少略号で送ったんです。それから、政務に移されたわけです。政務というのは、電報を書くほうです。僕等がやったのは新聞情報を送ることで、上の人たちは、ヒットラーに大島大使が会って、何と言ったかというような電報を起案していました。

　そうこうしているうちに、戦争が終末に近づいてきたわけです。それで、大島さん以下、ほとんどの人たちは、バードガシュタインという南のほうの温泉地――チロルのほうに逃避したわけです。僕等は、「お前たちは残れ」と、六人ぐらい留守番を言いつかったわけです。

伊藤　誰が一番偉いんですか。

吉野　その中には、河原という参事官がいました。そこで、ソ連兵が入ってくるのを迎えたわけです。

伊藤　刻々、ソ連兵が近づいてくるという……。

吉野　毎日、ベルリンの封鎖の輪が狭くなっていったわけです。

伊藤　すると、食べ物のなども困ってくるんじゃないですか。

吉野　食べ物は、その前に缶詰だとかを買い込んでいたわけです。ところが、ソ連兵が入って来ますと、僕等は、「ここは日本大使館だ。中立国の大使館でサンクチュアリだから、入っちゃいかん」と言ったわけです。ところが、彼等はいきなり自動小銃を向けて、「何を言っているか！　俺たちはドイツ軍と戦って、スターリングラードから、ここまで歩いて来たんだ。それに、日本は中立国と言うけれども、陰に陽にドイツを助けてきたじゃないか。だから、お前も敵と同様だ。大使館の不可侵性はない」と言ったわけです。彼等は、下の連中ですから……。

　このとき、僕等は地下室に住んでいたんですが、「女はいるか」と言って探すわけです。本当は二人いたんですが……。それから、「食糧はあるか」と言って、みんな持って行っちゃう。「明日からは、我々が食糧を持ってくるから心配するな」と言うわけです。ところが、その彼等の持ってくる食糧なるものは、カビの生えたような大きな黒パンを一つだけです。とても固くて食べられない。それから今度は、我々の持っている腕時計や万年筆を、みんな取り上げちゃうわけです。ある兵士なんかは、こんなところ（上腕）まで幾つも腕時計をしていて、しかも巻き過ぎちゃって、ゼンマイが切れたりしているんです（笑）。これは戦利品みたいなものですよね。

ベルリン陥落

渡邉　ソ連が入って来て、五月に大使一行は避難しますね。それから何ヵ月か、吉野さんはベルリンにいらっしゃったんですね。

吉野　何ヵ月はいなかったけれども、二週間ぐらいいて、違うところに移されたんです。しかし、それから間もなく「ヒットラーが自殺した」とか、「ドイツが降伏した」というニュースをラジオで聴いて、世界情勢も、ある程度分かったんですけどね。

伊藤　大使館の中で、北のほうに脱出した人はいなかったんですか。

吉野　一部、商務関係の人たちが三人か四人、北のほうに脱出しました。

伊藤　スウェーデンですか。

吉野　スウェーデンへ行ったのか、どこへ行ったのか知りません。しかし、最後には送還組に、どこかで合流したんでしょうね。それから、大島さんは南のほうへ行って、そこでアメリカ軍に捕まったわけです。

伊藤　海軍の人は、北のほうに行ったり、南のほうへ行ったりした。

吉野　それから、イタリアやスイスへ行った人もいた。しかし大部分の人は、そこへ残った人と、南のほうへ大島さんと一緒に移ったグループと、その二つのグループに分かれたわけですね。

　自動車は、トラックも含めてソ連軍が持っていっちゃったわけです。我々が、「もう動かないな」と思ったような自動車まで、みんな修理して動かしましてね（笑）。

渡邉　あの辺は、大体ソ連兵のほうが早く来た。

吉野　実際には、米軍のほうが早くベルリンに到着する状況にあったわけです。ベルリン人はみんな、「アメリカ人が来てくれればいい」と思っていたんですが……。アメリカ人は、ヤルタか何かの協定で、そう取り決めたのでしょうが、ベルリンの近くまで来て、エルベ川かどこかのあたりで待っていて、なかなか入ってこないんです。その間にソ連軍がベルリンを陥し、かつベルリン全体を占領したわけです。ですから、ソ連が数日後、戦勝記念とかをやったわけです。

　そこで、僕は一週間か二週間、ベルリンの大使館にいたんです。ベルリン戦争が終わって一週間ぐらいして、もうそろそろ外に出て歩いても危険はないだろうと思って、大使館の近くを歩いてみたわけです。そうしたら、ソ連軍が戦勝記念を明日か明後日にやるということで、一所懸命、町をきれいにしているわけです。というのは、当時ベルリンの通りは瓦礫の谷間になっていたわけです。両側が瓦礫の山になっていて、真ん中に電車の線路だけが残されていて、そこだけが通れる。だから、電車が来れば、我々は山の上へ駆け登るという状況でした。そこに、ソ連のタンク（戦車）がたくさん落座しているわけです。そうすると、ロシア兵も片づけてはいますが、通行人に、「お前たち手伝え」と言う。ベルリン市民もフウフウ言いながら、重たい鉄の屑を持ち上げて、トラックに積んでいました。そして、我々が通ると、「おい、お前も一緒にやれ」と言うわけです。そういうのに掴まると、大変です。「俺は日本人だから」なんて言っちゃいられないんです。相手は訳の分からん連中ですから、しばらくお付き合いさせられたんです。それで、彼等がいないとき、パッと逃げちゃうんです。

　ところが、先ほどもお話ししたように、ソ連の兵隊が入って来たと

きに、日本大使館に二人ばかり女性のタイピストがいたんです。どの程度、ユダヤの血が混じっているか知りませんが、両方ともユダヤ系なんです。そこで、ソ連兵が入ってくる前に、「女を隠せ」ということになりました。どこからそういう知識が出たか分かりませんが、終戦前に日本に帰ってきたときに、「アメリカ人はそうはしないだろうけれども、危ないよ」という話をしたことを憶えています。ベルリンでも同じことが起きるだろうと予想しまして、ソ連軍がベルリンに入って、ベルリンがいよいよ陥ちるという前の日に、その二人のタイピストを地下室の中の、マンホールのようなところに入れたんです。食糧と水ぐらいを与えて、上から鉄の蓋をして、その上にカーペットを敷いたんです。あの連中も、よく窒息しなかったと思いますけれどね。だから、ソ連兵が入って来て、「女はいるか」と言うから、「いない、いるはずがない」と言い張ったのです。それでも彼等は全部物色して、酒など、あらゆる物を持って出て行ったんです。

僕は、ベルリンの大使館に籠城する前に、三回爆撃を食らい、方々移転していました。最後の家は町の中にあったものですから、占領軍が大人しくなった頃、その家へ行ってみたんです。そうしたら、幸い爆撃がそんなに酷くなくて、フラットですから、二階か三階だったか、ドアを叩いたら、以前使っていたハウスキーパーが出て来た。「お前、大丈夫だったか」と聞いたら、「私は大丈夫だったけれども、周辺の女の人たちは、みんなやられてしまった」という話でした。「お前は、なぜ？」と聞くと、彼女はポーランドから来た女だったんです。「私がポーランド語で応対すると、ソ連兵も、ある程度ロシア系の言葉を話す女性には手を出さなかった。それで、うまく撒いていたから大丈夫だった」と言っていました。そういう具合に、最初の一週間ぐらいは、ソ連兵は凌辱極まりないことをしたんです。

ところが、一週間ぐらいしたら、戦勝記念をやろうということもあったんでしょうかね。ＫＧＢか何か知りませんが、特選隊が入って来まして、女に悪いことをしたりする兵隊は、小銃で皆の目の前で殺しちゃうんです。見せしめでやるんです。そうしたら、ソ連兵はそういうことをしなくなったんです。だから、ソ連軍は酷いというか、また、そういう厳しい訓練をしないと収まらなかったんでしょうね。そういう事件がありました。

それで二週間ぐらいすると、真っ先に出て来たのは売春婦ですね。これは一番古い職業だと言われていますが、明るいうちから、そこらを徘徊しておりました。

渡邉　ベルリンは、いつ頃までいらっしゃったんですか。

吉野　ベルリンが陥ちてから、二週間ぐらいいたと思います。それから、違うところへ移されました。

渡邉　移すというのは、日本政府が？

吉野　日本政府じゃなくて、ソ連側が指定した小さな村の建物です。

伊藤　キャンプみたいなところですか。

吉野　キャンプです。その記憶はあまりないんですが、ベルリンの近くです。そこに、欧州全体から日本のパスポートを持った人が二百人ぐらい集まって来たんです。

伊藤　南のほうからも？

吉野　南のほうとは関係なく……。向こうは、アメリカ軍が占領しましたから。

伊藤　ソ連が支配したところですか。

吉野　そうです。そこで今度は、ソ連が臨時列車を出して、モスクワ

経由でシベリアへ送還したわけです。その理由は、我々が第三国の外国人で、しかも占領地には居てもらいたくないという連中ですから。

渡邉　それは、何月頃の話ですか。

吉野　五月。

渡邉　まだ中立条約が生きているときですね。

吉野　そうです。

伊藤　危ない。間際だ。

吉野　シベリア経由は大変でした。まず第一に、ヨーロッパからモスクワまで行く間は、橋が落ちているわけですから、工兵がつくったポンツーン・ブリッジ――小船の上に線路を敷いて、その上を通らなければならない。川を渡る前に、汽車が通っても大丈夫かどうか、一応点検するわけです。そういうことで、えらく時間がかかって、モスクワまで三日ぐらいかかったんですかね。モクスワへ到着して、また違う列車に乗り換えた。

伊藤　途中は戦場だったわけですから、相当惨憺たる状態になっていましたか。

吉野　それはもう惨憺たる状況です。ポーランド、ウクライナ……。両方で壊し合ったんですから、見るべきものはないですね。

渡邉　一応は第三国人だということで、丁寧に扱ったわけですね。

吉野　形式的には、そうだったんでしょうね。

伊藤　食べ物も？

吉野　食べ物は黒パン。我々は外交官でも、一つのコンパートメントに九人ぐらい乗せられるんです。コンパートメントに、ベッドが四つあるわけです。それに二人ずつ寝て、真ん中に一人寝る。

渡邉　雑魚寝もいいところですね。

吉野　他の人たちは、もっと悪かったんだと思いますけど……。それでモスクワへ着いて、大使館に挨拶に行きましたが、その日のうちに、違う停車場から出る汽車に乗って、邦人二百名ぐらいでマンチューリ（満州里）まで入ったわけです。シベリア経由も大変なものでした。当時ソ連は、満州経由で日本を攻める用意を、万端整えていたときです。国境のそばまで行くと、窓からは黒い目隠しで覆われて見えなかったけれども、途中も、兵隊輸送をしているなんて、ほとんど気がつかなかったですね。ですから、どうやって彼等はやったのか。その後、五月末にやったのか……。

伊藤　国境近くは遮蔽していたんですか。

吉野　遮蔽していました。これは、昔から遮蔽していましたから、どうということもないんです。だから、そうだろうと思ったんですが、あれだけの兵員をどうやって送ったのか。我々は気がつかなかったんですがね。

渡邉　モスクワからマンチューリまで、どれぐらいかかったんですか。

吉野　あまり記憶がないですが、二週間ぐらいかかりました。しかも、我々だけがその車輛に乗っているんじゃなくて、シベリア経由のときは、普通の市民も乗り込んで来たんです。相当席が余っていたんでしょうかね。

伊藤　いろいろな物は持ち出したんですか。

吉野　ほとんど手に持てる物だけで、しかも小さな物しかなかったんです。最後には、新京――今の長春から羽田まで飛行機で飛んで来ました。そのときは手荷物一つで帰って来たわけです。その前までは多少持っていたけれども、最後は衣類ぐらいしかないですね。

伊藤　大使館の書類は、どうなったんですか。

吉野　ソ連がベルリンに侵入する直前、いよいよベルリン戦争が始まるという直前に、庭で、電信機械も壊したし、書類も焼いたし、暗号も焼いたし、みんなでそれをやったんです。それは大変な仕事でしたね。

伊藤　個人的な記録も、みんなそこで失ったわけですか。

吉野　そうですね。

渡邉　その頃、電信係でおつくりになって東京へ送った文書は、今でも残っていそうですか。ご覧になったことはありますか。

吉野　見たことはないけれども、アメリカ軍の日本上陸前に焼却した物を除き、残っている物もあるでしょうね。ただ、僕等が送ったのは新聞情報みたいなものですから。僕自身が書いた物は、おそらく残っていないでしょうね。

　だけど、ご存知のとおり、大島大使は僕等にもしょっちゅう話していたし、そしてヒットラーにも催促されていたし、彼の信念でもあったんでしょうが、「独ソ開戦したときには、日本はシベリアからロシアを討て」という電報を何回も打っておりました。「もし、これをしないのなら、私の首を切ってくれ」ということまで言っていたわけです。そういう電報は、米国か日本に残っている可能性があります。

渡邉　ベルリンからお帰りになるとき、モスクワに寄って、日本の大使館にご挨拶されたとおっしゃいましたが、モスクワには、まだ大使館があるわけですね。「そこへ残って仕事をしろ」ということはなかったんですか。

吉野　新京へ行ったときには、そういう話はちょっとありましたが、モスクワでは帰るだけの話です。ただ、あのころ法眼（晋作）さんが停車場へ迎えに来ておられて、僕等は若造ですから、そんなにお話しはしなかったけれども、「佐藤（尚武）大使が一所懸命、平和交渉をしているんだ」という話をしてくれたことは記憶があります。

　そういうことはベルリンだって分かっていたし、方々で分かっていたわけです。しかし当時、日本も考え方が非常に甘くて、ソ連はアメリカに言われて日本を討つことになっていたわけですから、それに平和を頼むなんて、ソ連にとっては……。

渡邉　ポツダム会議は東京へ帰られてからですか。

吉野　ポツダムは六月ですね。僕はシベリアを経由して新京に着いて、新京から飛行機で発ったのが八月一日です。ですから、その間ですね。

伊藤　ということは、新京にしばらくおられたということですか。

吉野　満州の国境を越えて出迎えに来た日本人に、「あなたは黄疸じゃないか」と言われたんです。当時、黄疸なんて聞いたことのない病気でした。マンチューリで風呂へ入ると、お腹がえらく膨らんでいたんです。それで新京に行ったら、まさに黄疸と診断されました。それで「静養しろ」と言われまして、新京の満鉄病院へ毎日通っていたんです。

伊藤　入院というわけじゃなくて？

吉野　幸い、新京で知り合った電信官の新居さんが、親切に、「私の家へ来て静養してください」と言われて、そこにひと月ばかりご厄介になって、満鉄病院へ通っていたわけです。そのときに僕が受けた印象を言えば、満鉄病院は確かにいいことをしてくれたと思います。ともかく満人も朝鮮人も日本人も、あらゆる患者を平等に扱ってくれたんです。行ったら、その順番で診てくれる。当時の言葉で言えば、支那人も満人も、満鉄病院には感謝していると思います。僕も、その一人の患者でした。

伊藤　その間は、外務省とはどういうふうに……。

吉野　満州国の日本大使館に時々顔を出していたら、参事官の宮崎さんが、「満州で働くなら、本省へ話してやるよ」と言ったんです。僕はどちらでもいいと思ったんですが、本省は「駄目だ、帰って来い」ということで、帰って来たわけです。

伊藤　良かったですね（笑）。

吉野　ドイツで一時一緒だった都倉（栄二）君は、当時、満州の大使館のプロトコルをやっていましたが、その後ソ連軍に捕まっちゃって連れて行かれたわけですからね。僕は八月一日に、新京から飛行機で羽田に直通で飛びました。よく帰れたと思います。それは本当に偶然だと思います。なぜかと言うと、その飛行機は、普通は新京を出て平壌かどこかに止まって、釜山、福岡、それから羽田という航程で行くんです。ところが天候の加減か、真っ直ぐに羽田まで飛んでくれたんです。羽田に着いたのは、昼の十二時です。

　その前の日までは、毎日のように昼頃になると、P－57というアメリカの戦闘機が富士山の周りを回っていたんですよ。制空権がなかったですから、旅客機が来たって、みんな撃ち墜す。僕が着陸するその日だけ、偶然にP－57がいなかった。それで、羽田に降りて見渡したところ、新宿まで見える焼け野原だった（笑）。

伊藤　大体、そういうことは想像してはおられたでしょう。

吉野　大体は想像していましたけれど、ドイツの爆撃と違うのは、ドイツは石の建物ですから、瓦礫とスケルトンが視界を遮っていたでしょう。日本はみんな木の家ですから、焼け野原です、黒こげの。そこで不思議に思いましたね。

帰国・終戦・結婚

伊藤　お帰りになって、外務省はどうだったんですか。

吉野　外務省はファンクションしていなかったですよ。帰って来ても、「そうか」ということで、「明日から出て来い」とか何も言わなかったような気がします。ですから、郷里の松本へ帰りまして、松本で広島の原爆投下のニュースを聴き、十日ぐらい経って、外務省に出て行きましたら、「条約局へ行け」と言われました。それで条約局へ行きましたら、「これを翻訳しろ」と。それが、マッカーサーの指令第一号というやつです。天皇の地位は……。

伊藤　では、八月十五日は松本で？

吉野　親父の郷里の麻績で、終戦のラジオ放送を聴きました。

伊藤　そのとき、外務省の庁舎はどうだったんですか。

吉野　一つは、第一師範というところにあったんです。東横線の沿線、東京学芸大学（世田谷区）のところにね。もう一つは、虎ノ門（港区）です。文部省の一部を借りていたんです。それで、指令第一号とか何かは、文部省で訳したわけです。殊に、例の"subject to"を、どう訳すかということが非常に問題になりました。「天皇の地位はマッカーサー総司令官の下にある」ということですが、それをどう訳すかということが問題でした。その前から交渉が始まっていたんですが、「全面降伏は受諾したものの、天皇制を保持しなきゃいかん」というのが、当時最も大事な条件だったんですね。これがなかったら、降伏

も何もない……。天皇の地位を侵さないこと、それを頑張って守ろうというのが、当時の日本政府最高部の関心事であったわけです。そういう状況を、我々は垣間見たわけです。

伊藤　そのときの先生の上司は、どなたですか。

吉野　まず、渋沢（信一）条約局長がいたんです。間もなく杉原（荒太）局長に替わったんですが、当時は渋沢さんだと思います。後に課長になった森治樹さんが僕の四、五年上ですが、その人が僕の翻訳を直したり、「こうやって書くんだよ」と教えてくれたような気がします。それから、中山賀博さんなどの先輩がおりました。

渡邉　下田（武三）さんは？

吉野　僕は、条約局の法規課というところに入りました。下田さんは後に条約課長になるわけで、その前まで条約局にいたんでしょうが、あまり知りません。

渡邉　知り合いじゃなかったんですか。

吉野　直接には……。私は法規課におりましたので。

伊藤　そのときは、どこにお住まいになっていたわけですか。

吉野　まず、松本へ帰って結婚しました。横浜に家内の家があったんですが、これもまた焼けてしまったあとなので、家内の家族と一緒に、近所の家の一部を借りて暮らしていたんです。ですから、東横線か東海道線で通勤していました。

伊藤　帰って来られてから、ご結婚なさったんですね。

吉野　ええ、帰って来てから結婚したんです。未だ戦争中でしたよ。それで結婚式を挙げて……。

伊藤　結婚式はできたんですか。

吉野　結婚式と言ったって、田舎ですからね。それこそ、麻績の親父――六月に他界していた――の旧家で……。その頃は食糧事情が悪かったので、家の者は松本か麻績か、どっちかに分かれていましたから、麻績で結婚式を挙げて、松本経由で帰って来たわけです。

渡邉　当時、切符を買うのも大変だったんじゃないですか。

吉野　はあ、切符を買うのは大変でしたね。

渡邉　気楽に「松本へ行って」なんて言われるから（笑）。

吉野　いや、大変だったですよ。麻績の駅で思い出すんですが、田舎の駅でも改札口には十人か二十人待っているわけです。そうしたら、警官が横から列を破って入って来たのです。私も若気の至りですが、警官に、「お前、列を破って駄目じゃないか。横から割り込んで」と、大いに口争いしました。そして最後は、警官のほうが恐縮したことを憶えています（笑）。そのくらい、当時はまだ私も強かったんです。

当時は、私が帰ると、「私は特高をやっていますが……」と、特高の人が尋ねて来て、「あなたはドイツから帰って来られたんですね。ドイツでは敗戦当時、どんなことが起きましたか」と、いろいろ訊くわけです。ソ連兵に婦女子がやられたなんていう話をしますと、「失礼ですけれども、そういう話はあまり外でしないでください」と言うのです。というのは、アメリカ兵が上陸する直前ですからね。そうこうしているうちに、条約局で「佐世保へ行け」と言われたんです。

伊藤　それは終戦になってからですか。

吉野　終戦になってから。八月の終わり頃でしたかね。台風が来る頃でした。佐世保には、ドイツから一緒に帰って来た河原参事官が終戦連絡事務局長として先に赴任していて、「来てくれないか」と言うわけです。そこで、新婚の頃でしたが、単独で佐世保へ行ったわけです。

伊藤　佐世保にあるのは何ですか。

吉野　佐世保終戦連絡事務局というのがあったんです。

伊藤　在京の出先ですか。

吉野　そうですが、佐世保には鎮守府があり、れっきとした地方終戦連絡事務局がありました。このような地方連絡局は、福岡にも京都にも横浜にもあったんです。あとは支局とか何か、そういうものが方々にあったんですが、「佐世保には米海兵隊第五兵団が上陸するから、急いで行け」と言うわけです。そこで、大日本航空の飛行機に乗ったんです。そうしたら、その日は天候が悪くて途中で引き返して来た。翌日もやはり同じようなことがあって、三日目に乗ったら、今度は不時着で、高松の飛行場まで、ようやく辿り着いたんです。

そこで、「皆さん、ここで降りてください。翌日、出ます」と言うわけです。道後の温泉で一泊していましたら、翌日から米司令部の命令で、日本の航空機は一切空を飛べないって（笑）。それで、どうするかと思案していたら、幸いに高松から豊後水道を越えて、大分かどこかへ行く艀みたいなものが出るから、「夜、乗ってくれ」と。その頃は豊後水道も瀬戸内海も、アメリカの機雷がたくさん浮遊していたんです。

伊藤　怖いですねえ（笑）。

吉野　幸い、機雷にぶつからずに大分に着いて、そこから汽車に乗って佐世保へ行ったんです。台風が酷くて、その年は特に豪雨が連日続いて、佐世保は水浸し、そうこうしているうちに第五海兵団が上陸して来て、いろいろいざこざがあったんですがね。

伊藤　向こうの連中は……。

吉野　米軍の軍政部（ミリタリー・ガバメント）ができまして、それが佐世保の女学校か中学校の校舎に事務所を開いていました。そこに僕等も一時事務所を開き（後に終戦連絡事務局は佐世保市役所へ移る）、彼等からいろいろ指令を受けるわけです。また、僕等も彼等に頼むわけです。「黒人が暴行したから、何とかしてくれ」とか、「米軍のトラックが事故を起こした」とか、そういう話をする。軍政部の連中は非常にリーズナブルな人たちで、ある程度我々の味方になってやってくれて、同時に、いろいろ注文を出したんですが、そういう交渉をやっていたわけです。

伊藤　そのときの身分はどういうものですか。

吉野　もう官補になっていました。

伊藤　経歴を見ますと、一九四五年七月に「臨時外務省事務従事」と書いてあるんですが、これは何の意味ですか。九月には「終連地方事務局連絡官」という肩書になっていますね。

吉野　これは、帰国途中です。満州に辿り着いた頃でしょう。その頃は、地位はなかったんでしょうね。

伊藤　「終連事務局」は、外務省ではないわけですね。

吉野　はい。外務省の建物の中に事務所があったけれども、別の機構ですね。大体、「もう外務省は要らんから、やめろ」と言われていたけれども、何とか残っていたんです。けれども、もう独立国の外務省ではなくなったですね。

伊藤　全部が「終連事務局」になったわけじゃないでしょう？

吉野　半分ぐらいに分かれて、「終連事務局」に鞍替えしたんです。

伊藤　最初は「終連事務局」にいて、それから佐世保の事務局に移られたわけですね。

吉野　そういうことでしょうか。

伊藤　この経歴には、ただ「佐世保事務局」と書いてありますが、

「終連事務局」なんですね。

吉野　そうです。

伊藤　これが昭和二十年の十月から翌年の四月までですから、足掛け七ヵ月、半年ぐらいですね。その間はもっぱら、いまおっしゃったようなアメリカ軍との間の折衝ですか。

吉野　はい。そこで、いろいろあるんですけど……。

伊藤　どうですか。大体、将校たちが相手でしょう。

吉野　大体が将校たちですから、質がいいんですよ。日本語を話せる人もいました。僕等には、日本語では話さなかったですが……。中には、後になって在日大使館に赴任してきた人もいますからね。

伊藤　軍人ではないわけですね。

吉野　職業軍人じゃなくて、日本語を勉強していて、軍に徴用された。軍人として、少佐とか大尉とかという形で来て、主として軍政部の関係の仕事をしていたわけです。

伊藤　生粋の軍人というほどではないんですね。

吉野　生粋の軍人もいましたけれども、ごくわずかです。それから、ＣＩＡの人もいたでしょうね。

渡邉　ちょっと遡りますが、ポツダム宣言受諾のほうですが、我々は中学一年生ぐらいで、校庭に集められて、よく聴こえないラジオで、「あっ、何かあった」という形で聴いたんですけれども、政府のお役人はどういう形でお聴きになったんですか。

吉野　僕は麻績へ帰っていて……。

渡邉　向こうでお聴きになったわけですね。

吉野　そうです。村役場へ、「日本に帰って来たから徴兵してください」と言いに行ったわけです。そして帰って来たら、「十二時ちょうどに、ラジオで何かあるから」ということで聴いたのが終戦の詔勅です。そこで聴いたんですね。

渡邉　そういうのが間もなくあるよ、という雰囲気は？

吉野　その前に外務省へ顔を出したときからあったし、戦争末期で大変な状況だということは分かっていたけれども、しかし戦争が終わるということは知らなかったです。

伊藤　「本土決戦」を言っていたわけですからね。結局、ベルリンのようなことになるんじゃないか、という予測なんでしょうね。

吉野　そうです。

伊藤　さっき、突然ご結婚なさった話が出たんですが、そのお相手は？

吉野　以前から知り合っていた女性で、学生会議なんかに一緒に出ていた人です。

伊藤　学生会議というのは何ですか。

吉野　日米学生会議というのがあって……。

伊藤　それは、いつ頃の話ですか。

吉野　昭和十三年、十四年頃です。

伊藤　日米学生会議……。

吉野　僕が出たのは第二回ぐらいですかね。

伊藤　それは、こちらから行ったわけじゃなくて、向こうから来たんですか。

吉野　そのときは、アメリカ人が日本に来たわけです。そして、明くる年には向こうに行くということだったけれども、それには私は出なかったんです。

伊藤　では、別に外交官の関係ではない。

吉野　関係ないです。家内はシドニーで生まれましたけれども、貿易商の娘で、外交官とは関係ないです。

伊藤　実業家？

吉野　ええ。

伊藤　お見合いをしてとか何とかというのではなくて、ご自分で決められた？

渡邉　一種の許嫁みたいな形で？

吉野　まあ、そういうことです。

伊藤　外務省の方は、外務省の方と結婚なさるのが多いでしょう。

吉野　そうですね。

渡邉　日米学生会議は、確か宮沢（喜一）さんなんかも出ておられた……。

吉野　宮沢さんは、僕の後にアメリカに行って会議をした組だと思います。僕が出たのは十三年ですかね。大学へ入った年ですから。それで十四年に向こうへ行って、十五年はあったかどうか知りません。

渡邉　その頃は、宮沢さんをご存知なかったんですね。

吉野　学生時代は知りませんでした。後に、彼が大蔵大臣の秘書官として司令部に出入りしていた頃は、よくエレベーターの中などで一緒になりました。彼は通訳をしていて、池田（勇人）さんに付いて歩いていたようです。

渡邉　その話は、また今度伺うことにしましょう。

伊藤　面白いお話を聞かせていただきまして、今日は本当にありがとうございました。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー
第2回

[1999年4月5日13:30～15:30]

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

渡邉昭夫（青山学院大学教授）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

股野景親（元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員）

井上寿一（学習院大学法学部教授）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員）

（於：国際経済研究所）

親独派VS.反独派

伊藤　先日は、いろいろと面白い話をありがとうございました。速記録を読み返してみて、非常に面白いと思いました。そこで、前回伺いましたことを、少し補足をさせていただきたいと思います。

まず、「日米学生会議に参加された」というお話が出て参りましたが、そのときのことで、ご記憶のことをお話しいただけたらと思います。あれは昭和十三年ですか、もう日中戦争が始まっていますから、アメリカの日本に対する感情が悪くなってきた時期だと思うんですが……。

吉野　とても悪くなりつつありました。我々学生は、それを良くしようと一所懸命、会議を通じて我が国の立場をディフェンドしたんです。向こうは、「満州や中国に侵略したのは、けしからん」と言っていたわけですけれどね。

伊藤　相当激しい非難でしたか？

吉野　学生ですから、喧嘩になるような非難ではなかったですけれども、彼等は正義心に燃えて議論をしてきたわけです。我々は、「あなた方は、新聞雑誌等のアメリカの書き物によって日本の行動を批判するけれども、アメリカのジャーナリズムというのは、人心を煽るような形で書くんだから、とにかく実情を見てくれ」というようなことを言いました。それで、会議が終わってから、彼等を満州国まで連れて行きまして――僕は付いて行かなかった――新京とか大連とか奉天の実情を見せて、帰したんですね。いま思い出すと、その頃はマーガレット・ミッチェルの小説"Gone With The Wind"が大流行でして、僕等はそういうことを、彼等を通じて詳しく聞いたことを憶えていますよ。

股野　私はアトランタの総領事でしたから、地元でございます。

伊藤　どういう形で日本の弁護をされたんですか。

吉野　やはりいろいろテーマが決まっていまして、一般論で、世界情勢とか人権とか戦争とか、そういう問題ですね。経済問題は、ほとんどなかったですね。しかし、例えば「日本は自前でやっていかなければならない。そのためには広域経済が必要なんだ。アメリカと断交するようなことは考えていない」などと、日本の立場を弁護しました。当時は、そろそろ鉄鋼スクラップの日本に対する輸出禁止という噂が出ていました。そういう雰囲気があったわけです。後になって、石油まで止めちゃったわけですね。「そういうことをすると、日本を東南アジアの方向へ追いやるだけだから、そういうことのないように……」というような話をした気がしますが、うろ覚えです。

伊藤　アメリカ側の参加者の中で、後々までお付き合いのある方もお有りですか。

吉野　いますよ。一人はアメリカの女流新聞記者で、いまパリに住んでいます。

股野　フローラ・ルイスですか。

吉野　フローラ・ルイスです。当時、フローラ・ルイスは大学を卒業していましたが、会議に付いて来ていたと思います。その後、僕は彼女にパリでも会ったし、日本でも、この研究所（国際経済研究所）に来てもらったりしました。彼女は、しかし相変わらず昔の面影のある

ような強い主張をしていますね。

股野　彼女は筋が一本通っていますね。

吉野　それから、二、三他にもいたんでしょうね。それは憶えています。なかなか辛辣な批評をした人もいました。日本の軍部のやっていることは、あまりディフェンドすることもなかったんでしょうが、僕等は学生会議ということで、大いに日本の立場を弁護せざるを得なかったんですね。しかし、まだ太平洋戦争が始まる前ですから、せいぜい満州国とか支那事変とか、そういうものの弁護です。

伊藤　外交官として、後でお会いになるとか、そういう人はおられませんでしたか。

吉野　いや、一人か二人いたかも知れないけれど、ちょっと思い出せないですね。向こうから出て来た人も、みんな外交に興味を持っている連中ではあったんです。当時は、シャペロンがいました。女性の学生もいましたからね。半分が男性で、半分が女性でしたが、シャペロンと言って、米国の大学の年を取った女の教授か助教授クラスの人が付いてくるわけですね。男と女の関係が、今よりもずっと厳しかった時代ですよ。だから、一種の監督の役ですね。そういう人が付いて来ましたね。

伊藤　日本のほうは男だけだったんですか。

吉野　いや、女子もいました。半分か四分の一ぐらいいましたね。日本女子大とか東京女子大、津田塾大とか。関西では関西学院とか、語学を主とした大学が二、三あるでしょう。そこの学生が来ていましたね。何か選考会というのがあるんですよ。一応、それで各大学の学生を選考して、参加させたわけです。

伊藤　よく国際会議では日本人は発言しないと言われますが、この場合はいかがでございましたか。

吉野　この場合は、学生同士ですから、その点では別に控え目ではなかったと思いますが、何せ我々は相手の言うことがよく分からんということが一つと、我々が学んだ英語というのは本を読むことにしか役立ちませんからね。そんなに、しゃべれない。そういう意味で、発言は少なかったとは思います。しかし、日本の学生の中には英語に達者な人も三、四人いましたから、そういう連中はチェアマンになったり、活発に発言していましたね。我々は論文のようなものを書いて、それを読み上げるんです。

伊藤　ペーパーを読むということですね。

吉野　ええ、ペーパーを読むんです。

伊藤　先生は、どういうペーパーをお書きになったんですか。

吉野　僕は、「アメリカ人は、カーネル某とかいう軍人上がりのジャーナリストが書いたアーティクルに影響されてはいかん、彼等は商売で、それを書いているのだから……」というようなことを書いたことを憶えています。ところが僕の論文は、僕が読んでも、どうも通じないようなので、アメリカ人が、「これはいい論文だから、俺が読んでやる」と言って、みんなの前で読んでくれたことを憶えていますね。それほど僕は、英語のコミュニケーションの力がなかったわけですよ。

伊藤　次に、前回お聞きした中で、ドイツ時代についての補足をお願いしたいと思いますが、一つは外務省に入省された頃の、親独派と呼ばれる外交官たちの様子は、どんなものだったんでしょうか。

吉野　それは非常にはっきりしていましたよ。

伊藤　はっきりしているんですか。

吉野　はっきりしているんです。まず第一に、親独派と非親独派とい

うか親米派、あるいは戦争反対派に分かれていました。つまり、まだ戦争は起きてはいなかったんですが、右翼と左翼みたいなものに外務省は分かれていました。もちろん、その中に中立派というか、どちらか分からない人もいたんですが、大体そういうふうに分かれていましたね。例えば、牛場（信彦）さんとか青木（盛夫）さんとかは昭和七年組ですが、七年組の人は大部分が右翼なんです。それに対して、法眼（晋作）さんとか宇山（厚）さんとか、あのクラスの人は、何年の試験ですか？

股野　十一年ですね。

吉野　そうですか。ともかく、その頃の人たちは、こぞって反独派ですね。だから、入省年次で分かれていたような感じですね。それだけではないんですけれどね。それで、新しく入って来た入省者を引っ張るんです。「俺と一緒に飯を食おう」とかいうような形ですね。そこで付いて行くと、直接「お前も我が組に入れ」と言うわけではないけれど、酒を飲みながら自分たちの主張をして、「親独派は、けしからん」というような話をするわけです。また、親独派の人たちも、「英米派は軟弱外交だ」とかいうような話をするわけですね。ですから、彼等は多数派工作をしていたんです（笑）。

　我々は、ある意味では、それによって得をしたんですね。どこに行っても、「一緒に飯を食わないか」と誘われるわけです。そういう意味で、我々は入ったばかりで書生っぽいのですが、珍重されるのは、ありがたい話でした。

伊藤　入省当時に、すぐそういうことは分かるわけですね。先輩が、そういうことを教えてくれるわけですか。

吉野　そういうことですね。だんだん分かるわけです。

伊藤　あの人は何派であるということが、ですね。

吉野　しかし、僕は入省して、すぐに外国に行かされることになって、それほどのこともなかったんです。ただ、外国に行きますと、スイスの阪本（瑞男）公使というのは反独派ですから、僕が挨拶に行きますと、うまいスパゲッチをご自身で料理してくれて、いきなり大島大使の悪口を言うわけです。「もう日本はどう頑張っても、この戦争は負けなんだ」というような話を強くするわけです。僕等はどちらか分かりませんでしたけれども、そういう話にエクスポーズされたわけですね。

伊藤　アメリカでの野村大使の印象について、前回も少し触れられましたが、いかがでしたか。

吉野　野村大使は、僕も彼が何を考えていたか分かりませんでしたね。ワシントンに到着して、ちょうど天長節の日でしたが、挨拶に行きました。「私は、これからドイツに行くことにしております」と言いましたら、彼は、「お前たち、もうアメリカとの戦争は明日か明後日か、すぐ起きるということを知らないのか」という口調でした。それが昭和十六年の四月二十九日で、起きたのは十二月ですから、日米交渉も最終段階に入っていた頃ですね。だから、「今頃出て来て、ドイツに行くのは大丈夫か」というような話でしたよ。私は、最初予定したロシアを通ることができずに、太平洋回りで来たんだという話をしました。彼は片目が悪かったでしょうか、私を見て、「お前たち、今の時代をよく知っているか」というような話でした。でも、彼が何を考えているかということは分からなかったですね。

　逆に大島大使は、初めから、私が着いて挨拶をしたときから、「私は再三、本省に電報を打って、『ドイツはソ連と戦争をするから、そ

の際、日本はシベリアを叩け』ということを催促しているんだけれども、本省ないし日本政府は全然動かない。けしからん、けしからん」という話をしていました。ですから、大使の意見は、はっきりしていたわけです。

それから、もう一つの話は、僕等が到着するひと月ぐらい前に、松岡（洋右）外務大臣がヨーロッパを巡遊して帰って行ったわけです。そのときに、帰りにモスクワで日ソ中立条約を結んで行ったわけですね。それで大島大使は、「松岡は、けしからん。彼がドイツに来たときに、わざわざ『ドイツは間もなくロシアと事を構えるから、日本は中立ではなくて、ロシアを討て』と言っておいた。彼はそれに反駁をしなかったにもかかわらず、モスクワに行って中立条約を結んだ。けしからん、裏切りだ」という話をしていましたよ。

僕等は客観的に何も分かりませんから、「はい、そうですか」というような感じでしたが……。そういうふうに、彼は悲憤慷慨していましたね。そのうちに独ソ戦争が始まって、最初は雲行きが良かったですから、大島大使も機嫌が良かったようです。その頃、僕は大学に行っていたので、よく知りません。

伊藤　その頃も、しばしばお会いになる機会はあったわけですか。

吉野　一年に少なくとも一回、おそらく二、三回あったんじゃないでしょうか。でも、最後の一年間は大使館で一緒ですから、しょっちゅう顔を合わせていました。そのとき彼は、怏怏として楽しまず、と言うんですかね。ドイツの旗色が悪くなってきていましたから、酒を飲んで歌を歌って……。

伊藤　憂さ晴らしですか。

吉野　ええ。

伊藤　人柄は、どういうふうにご覧になっていましたか。

吉野　人柄については、彼は軍人ですから、僕は最初は警戒していたんです。それから、体質もあまり合いませんでした。しかし客観的に見ると、彼は外交官に向いているようなタイプの人で、ある程度包容力もあると思います。ただ、それだけの話で、本当に知恵があるというタイプではないと思います。それから、初めからヒットラーないしはドイツの信奉者ですから、ドイツ政府には信頼が厚く、日本政府も、そういう意味で彼を大使にしたのであって、大島さんの外交的力量を買っていたからではないと思います。だから別に、外交官としてそれほど優れていたわけではないでしょう。ただ、彼は酒が強くて、ドイツ人と酒を飲み出しますと、ほとんどの人が大島さんにはかなわない。しかも相手にするのは、大部分がドイツのガウライターのような猛者ですからね。

「ガウライター（Gauleiter）」というのは、県知事の職を帯びた党の幹部ですけれども、そういう連中は、海千山千の荒くれ男たちですね。ガウライターの「ガウ」というのが県で、「ライター」というのが、その指導者という意味です。ところが、市民の一部では「ガウル・ライター」と言うのです。「ガウル（Gaul）」というのは馬なんです。「ライター」というのは引っ張る奴ですから、我々は「ガウル・ライター」だ。馬子、馬引きだ」と言うぐらい、ともかく粗野な連中です。そういう連中を全部抑えるぐらい、大島大使は彼等の中で人気はあったんです。

渡邊　大島さんは、言葉はできたんですか。

吉野　演説は、もちろんドイツ語である程度やるし、ドイツ語で日常のコミュニケーションはできましたから、そういう意味でも……。

外交官の情報収集能力

渡邉　そういう人たちと酒を飲んで、話が通じるわけですね。大したものですね。

吉野　彼はオーストリアの陸軍武官をやったことがあって、その頃から勉強もしたし、ウィーンの雰囲気も味わっていた人でしょうからね。

渡邉　その頃の情報についてですが……。スイスとかポルトガルですね。我々が子供の頃は、よく「リスボン発」なんていうニュースを聴きましたけれど、そういうところは情報収集で大事だったと思うんですが、ご覧になっていて、どんな感じでしたか。

吉野　それは、中立国の外交官は情報を集めていましたし、ドイツにいても我々外交官はＢＢＣを聴くとか、ヴォイス・オブ・アメリカを聴くというのは常識であったわけです。そういう意味で、自然に国外で何が起きていたかということには敏感でした。ただ、ベルリンの日本大使館の雰囲気は、「英米の情報なんか、みんな間違っている。あれは宣伝だ」という雰囲気でしたね。リッペントロップ、ゲッペルス以下、みんなそういうことを言っていたわけですから。そういう意味で、「昨日のヴォイス・オブ・アメリカでは、こう言っていましたよ」と言うのは、半分は嘘だというような調子で、大使館の、いわゆる右翼の人たちは本気にしてくれなかったですよ。

　それから第二に、日本の本省に対して、ヨーロッパの中立国から電報を打つでしょう。そうすると、それは英米のラジオで聴いたことを打つか、あるいはスパイか諜者を使って得た情報を打つか、そういう形ですから、みんな「ドイツは負ける」とか、「ドイツは苦戦している」というような情報が多かったんですね。それをベルリンに転電してくるんですね。それを僕等が、大使館の大使以下に配るわけです。そうしたら、大島大使が言い出したのかどうか知りませんが、「とにかくヨーロッパから出る電報は、ドイツから見ると、みんなミスリーディングだ。だから、今度からヨーロッパ各国発の、あらゆる本省宛の電報はベルリン経由にしよう」と。そうしたら、本省もそれを呑んだわけですね。それで間接にベルリンを経由して行くから、大島大使の目に触れる。そうすると、あまり変なことを書くと、またどこかで睨まれるからということで、間接的なレストレイントになったわけです。

渡邉　その範囲はどこまでなんですか。例えば、モスクワからもロンドンからも全部なんですか。

吉野　いや、モスクワは入っていませんでした。スウェーデンとか、ポルトガルとか、フランスも、もちろんそうです。スイスも入ります。また、「転電しろ」と言われても、依然として大島大使に都合の悪い電報は書けるし、送れるわけです。

渡邉　送ろうと思えば、直接送れるわけですか。

吉野　直接というか、ベルリン経由で送るわけです。ベルリンで押さえることはないわけです。ただ、ベルリンで大島大使の目に触れる惧れがあるということで、間接の……。

渡邉　自主規制ですね。

股野　転電しても、大島大使の目に触れるわけですよね。

渡邉　でも、転電というのは事後的でしょう。東京に行く前にベルリ

ンを通るということですね。

股野　検閲はしないんだから。まあ、精神的な制約度が多少違う。

吉野　おそらく、その口実の一つは電報料の倹約である、と。ベルリンと日本との間は、直接の回線があったので、「他もベルリン経由でやれば、安くなるはずだ」とかなんとか言ってやられたわけです。そういう意味で、多少そういうことがあったんですね。

渡邉　当時は、ベルリンとモスクワとロンドンは、もちろん大使でしょうが、全部が大使ではなかったんですね。

吉野　公使ですね。

渡邉　そういう場合、周辺国の公使というのは、近くの大使の、ある意味での指揮下に入るんですか。

吉野　それは、法制上はないと思います。しかし、大公使会議とかいろいろなものがありますから、一応そういうようなことにはなるんでしょうね。それから当時は、イタリアには有名な白鳥（敏夫）さんがいたしね。トルコには栗原（正）さんがいたけれど、これは大したことはなかったと思いますが、要するに要所要所を右翼の大使が押さえていたんですね。そういうこともあって、阪本さんとか森島（守人）さんとか、そういう人たちは、相当遠慮はしていたんでしょうね。

伊藤　須磨（弥吉郎）さんは、どうなんですか。

吉野　須磨さんはスペインにいましたが、あの大使は情報屋ということで有名でした。ともかく、「出入りの情報屋が、こう言って来ましたよ」というような話を流すわけです。でも、「須磨情報」というのは、誰が読んでも面白くて、特色があった電報でしたね。

伊藤　どういう意味で特色があったんですか。

吉野　つまり、情報屋がそういうことを聞いてきて流すわけですから、カラフルな電報があったように憶えていますね。別に、どっちに有利とか不利とかいうことはあまりなかったような気がしますけれどね。スペイン自身は右寄りでしたけれどね。フランコが頑張っていました。そうかと言って、電報はドイツが勝ちそうだということばかりではなく、「勝つ」という電報も出したし、「負ける」という電報も打ったということでしょうね。

伊藤　よく、「須磨情報」「須磨情報」と言われますけれど、どういうことなのかなと思っていたんですね。

吉野　それはカラフルで、読んでいて面白いということですよ。一貫性のあるものではないんですが……。

渡邉　特殊な情報を持っていたというわけではないんですね。

吉野　それはみんな、「誰々の言うところによれば……」という形でしたね。彼は相当の金を本省からもらって、情報屋を使っていたんですから。だから、面白かったような気がしますね。

渡邉　そういう点では、スペインを情報収集のために重視していた、という意味でもあるわけですね。

吉野　そういうこともありますね。

渡邉　本省とベルリン大使館とのお話で、何か付け加えることはありますか。

吉野　大島大使というのはヒットラーにえらく近くて、ヒットラーに会いに行って、直接彼からの情報を受けるという意味では重要でしたね。しかし本省というか、東京においては、大島さんがせっついて、「シベリアを叩け」とか言っても相手にしなかった時代ですから、ある程度「うるさい」とか「迷惑だ」という気持ちもあったでしょうね。そういう意味では、大島さんが言えば何でも通るということではなか

ったですね。

渡邉　東郷（茂徳）さんが、こちらでは外務大臣をやったりしている時代ですね。

吉野　けれども、大島さんは大島さんとして意見を述べていたわけですね。

伊藤　さっき、東京とベルリンとの間には直接の回線があったとおっしゃいましたが、電報の打ち方が中立国の場合とは違うんですか。お金が節約になるんですか。

吉野　そう思います。ベルリンと東京との間は、一部相殺し合っていたでしょうから、安かったのでしょう。そういう意味で、倹約にはなったと思いますね。しかし、それは形式的な理由で、全部ベルリンを通じてしか本省に行かないという形にしたわけですよ。しかし、審査はしなかった。

渡邉　大島大使がヒットラーなどと直接会って話をするときには、通訳は付いているんですか。

吉野　ええ、通訳として大賀（小四郎）書記官が付いて行くとか、あるいは内田（藤雄）一等書記官が付いて行くとか、一人ぐらいは一緒に付いて行きましたね。

渡邉　話が飛んでしまうんですが、前回、ソ連が入って来たというお話をいただきました。冷戦というのは気が早いかも知れませんが、その後どうなるか、ソ連がどうなるかという感触は、その頃多少ともお感じになっていたでしょうか。

吉野　僕等は、そういうことを心配していました。しかし、大島さんや内田さん、牛場さんは最後までいなくて、途中で帰ったんですが、そういう大島さんと行動を共にする人たちは、ドイツは最後にはまた勝つんだ、と。ヒットラーも、そういうことを言っていましたけれど、そういう信念に燃えていました。

　もっとも、ソ連については、もしドイツが万一敗れれば、英国を含めヨーロッパは共産主義に席巻されるのだという主張をしていました。これは、「鉄のカーテン」のチャーチルの演説と軌を一にするものがあります。

渡邉　この前伺ったかと思いますが、吉野さんが実際にベルリンをお発ちになったのは、いつでしたか。

吉野　五月の中頃でしたかね。

渡邉　一九四五年の五月中頃ですか

吉野　ええ。

渡邉　ということは、もうヒットラーは終わっていますね。

吉野　ヒットラーが終わって、ロシアが戦勝記念日を終えて……。

渡邉　そうすると、いわゆる「エルベの誓い」でしたか、アメリカとソ連が両方で、あちらとこちらからやって来て、両者が手を結ぶというようなことは、ヨーロッパにいる頃に分かっていたことですね。これは、どういう感覚でお聞きになりましたか。

吉野　まず第一に、ベルリンの包囲戦が始まってからは、我々は「もう、これは駄目だな」という気持ちをひしひしと感じていたわけで、その日その日の命をつないでいくことが唯一の関心事でした。ですから、無我夢中でいたわけです。しかし、ベルリンの戦争が終わりましてからは、我々は今度は一体どうなるかということと、その後の世界がどうなるかということに関心を持っていました。ベルリンが陥ちてから間もなく、ドイツの軍が降参したわけですね。海軍の提督が最後に降伏文書に署名したんです。その前後に、ヒットラーがベルリンの

総統官邸の地下室で、ピストル自殺したという話をラジオで聴いた。エヴァ・ブラウンと一緒にいなくなったという話ですね。これで第三帝国が終わりだ、という印象を受けたんですけれど……。

渡邉　そのラジオの放送というのは、どこの放送ですか。

吉野　それはヴォイス・オブ・アメリカとかＢＢＣとか、みんな英米の放送を聴いていたわけです。我々は、その頃は新聞もなければ、本省からの電報もないわけですから、唯一ラジオ放送が頼りなんですね。いわゆるポツダム会談とか、その前のヤルタ会談とか、そういうものはラジオで聴いていたわけです。

ドイツの新聞は、ヤルタ会談については英・米・ソが日・独の領土を分割したとか、いわゆるモルゲンソー案――ドイツを農牧地帯にする――等を大々的に報道していました。だから、ドイツの新聞だけを見ていたら、前後の脈絡もなく、読者は何も分からないわけです。しかし、我々は職業柄、「ドイツの新聞には、こう書いてありました」というようなことを、本省に電報で打つわけですね。しかし、そういう電報を書きながら、「拙い話だな」という気持ちでいたわけです。

渡邉　そのとき、いわゆる民間の日本人というのは、ドイツにはどのぐらいいたんでしょうかね。

吉野　民間の人？　特にベルリンの周辺には戦争末期には、かなり多くの日本人有力者が集まっていました。その中の数人は、何らかの形で任命されて大使館にやって来ていました。横浜正金銀行の支店長とか、三井・三菱のベルリン支店長だとか、そういう民間の人たちは、ラジオでいろいろ知っていたわけです。ただし、普通は外交官を除いては、民間の家では外国のラジオは形式的には聴けなかったんですよ。それは、どこでもそうでしたけれどね。東欧あたりもそうだったんですけれど、今の北朝鮮と同じで、ドイツの波長しか入らないようなラジオしか持てなかった。

渡邉　北朝鮮の一般の人は、ラジオを持っていない。

吉野　それから、外国製のラジオや短波が入るようなラジオを持っていると、取り上げられたわけです。しかし、日本人は陰でＢＢＣとか外国のニュースを聴くというようにして、本当に聴きたいものを聴いていたんです。普通は、そういうことはやっちゃいけないということになっていたわけです。

渡邉　そういう人たちは、多少早めに引き揚げちゃったんですか。

吉野　その中には二、三人、早く中立国に出て行ったりした人もいましたけれど、最後までベルリンに残った人たちは、我々と一緒に帰って来たわけです。邦人百五十名ぐらいが、我々と一緒に帰って来たんです。

伊藤　ドイツが敗北する前に、東ヨーロッパは既にソ連の支配下に入って行きましたね。それで、だんだんソ連が迫って来た。一方、連合国アメリカが迫って来て、ベルリン封鎖されるわけですが、ここから先、米ソが協調して戦後の世界をつくって行くんだろうな、という感じで、ご覧になっていましたか。

吉野　いやいや、それはドイツ側もそういうふうには報道していませんでした。一部、英米の報道が、それを匂わすようなニュースを流していましたが、ドイツ側は「ソ連と英米とは一緒にならないんだ。これは必ず、その後で、また戦争になるんだ。全然インタレストが違う連中が、ヤルタで会談をしているんだ」と言っていたわけですね。殊にドイツ側のニュースとしては、「ソ連共産主義というのは怖いんだ。英米は、そのことに、ちゃんと気付いているのか」ということでした

ね。後になって、コールド・ウォーが始まりましたから、それがまさに実現したわけですけれど、その頃から、「ソ連と英米という、全然違う体質の国が一緒になって、我々を攻めているんだ」という宣伝の方法を取っていました。

渡邉　既に大西洋憲章があって、連合国宣言があって、サンフランシスコで国際連合が成立するという動きが、確か四五年四月頃に始まりましたね。そういう動きの重要メンバーの一つとして、ソ連が入っているという形ができているわけですね。そういうことは、当時はあまり大したものではないという感じでしたか。

吉野　そう、大したことではないという形で、ドイツ側は宣伝していましたね。それで、ヤルタ会談なんかでも、「ソ連に早く日本をやっつけろとか言ったけれども、要するに彼等のインタレストは違うんだ」ということを強調していましたね。少なくとも、ドイツの新聞は……。

佐世保の終戦連絡局へ

渡邉　さて、日本にお帰りになって、また外務省に復帰されるわけですね。やや大雑把な質問で申し訳ないんですが、当時、外務省は誰が動かしていたのでしょうか。

吉野　誰が指導していたかというのは、印象がないくらい、僕は外務省で指導者らしい人には会わなかったですね。印象に残っていませんね。ただ、朝海（浩一郎）さんという人は、非常に英語もできるし、司令部に出入りするしで、活躍していましたよ。しかし、朝海氏自身の人格にもよるんでしょうが、決して彼は人を指導するようなタイプの人ではなかった。むしろ情報屋というか、こちらの意思を向こうに伝えるということはお上手であったけれども、自分の思うように外務省を引きずるというタイプの人ではなかったですね。その意味で非常に有能な外交官ではありましたが、あくまで外交官として彼は活躍しておられた。それから、いただいた質問表に最初に入ったときの条約局長は、「西村（熊雄）さん」とありますね。

渡邉　下田（武三）さんですか。

吉野　下田さんは、ずっと後ですけれどね。西村さんの前は萩原（徹）さん。萩原さんの前は渋沢（信一）さんと杉原（荒太）さん、僕は、萩原さんの前にも二人ばかりに仕えましたよ。しかし、みんな外務省全体を指導しようというタイプではなかったですね。

伊藤　外務省自体に仕事がないわけですね。

吉野　外務省自身は、終戦と共に一切の外交がなくなったわけですから、実際には細々と生きていくということですね。しかし、それが潰されなかったのは、おそらく外務省の一部の人が適当に司令部に出入りして……ということによるんでしょうね。

伊藤　そうすると、主力は「終連」（終戦連絡事務局）のほうに行ってしまうわけですか。

吉野　そうそう。主力は「終連事務」ということになったわけです。事務として、ですね。

伊藤　人材も、そうなんですか。

吉野　人材は、必ずしも行ったかどうかは知りません。ただその頃、吉田（茂）さんが外務大臣で、白洲（次郎）さんが「終連」の事務総

長か何かをやっていたんですけれどね。白洲さんというのは、横浜正金銀行か何かの人で、「吉田さんとロンドンで一緒だったことがあるので、非常にインフルエンスがあるんだ」ということが、外務省内では言われていましたよ。「吉田さんは白洲さんに左右される、だから白洲さんに工作しろ」というような形で、当時は動いていたんですね。しかし、上のほうのことは、それほど僕等には影響があったとは思いませんですね。ただ、上の局長クラスは「吉田さん参り」とかね。後になって、「吉田さん詣で」みたいなことが増えてきたと思いますね。

伊藤　まだ、この段階では「Y項パージ」とか、そういうことは言われていなかったですか。

吉野　そうですね。まだ、そういうことはなかったですね。

渡邉　その「終連」なんですが、「終連」に吉野さんご自身は早速行かれますね。これは横浜にもあり、佐世保にもあり、あとはどこにあったんですか。

吉野　あとは福岡と京都です。仙台にもあったかどうか？

渡邉　そして、この七ヵ月ほど佐世保でお仕事をされた。前回、「そこで、いろいろあったんだ」という含みのあるお話があったんですが、どういうことがあったんでしょうか。

吉野　「いろいろあった」というのは、アメリカ軍、住民、我々という三角関係ですね。つまり、佐世保の場合は鎮守府というのがありまして、総監と言うんですか、司令長官がまだおりまして、そこに我々が入って行ったわけですね。しかし、片方は海軍ですから、終戦とともに、「俺たちは、もう何もしないから、お前たちでやれ」ということで、我々が一切アメリカ軍との交渉をしてきたわけです。それは問題なかったんです。ところが、住民と終戦連絡事務局と米軍との間には、いろいろと問題が起きたわけですね。殊に第五海兵軍団――第五海兵軍団の下に第五海兵師団があった――という、沖縄戦を経験した、もっとも荒々しい連中が入って来たわけですから、最初我々は婦女暴行とか、そういうことをやるかと思っていたら、それはしなかったんですね。しかし、自動車事故は起こす。それから、我々が将校その他の住宅を提供することになっていたんですが、いい住宅を見つけると、「あの住宅に入りたい」とか、いろいろなことを言い出して、大変なものだったんですよ。我々は、その間に立って……。

渡邉　数は、どのくらいいたんですか。

吉野　数は、五万人近くいたんでしょうね。そのうちの大部分は、船の上にいたんです。上陸して来たのが、そのうちの……。

渡邉　これはマリーンですか。

吉野　マリーンです、海兵隊です。それで、軍団というのがどのくらいいたのか知りませんが、問題は女をどうやって世話するかということや、住宅を取られるのをどうやって防いだらいいか、あるいは提供するかという問題と、その他一般の自動車事故とか犯罪とか、そういう問題があったんですね。先方には、いわゆる軍政部というのがあって、軍政部と我々が連絡を取って、なるべく市民に迷惑をかけないように、という形で処理していったわけですね。

伊藤　その範囲は、どのぐらいの地域なんですか。

吉野　それは、佐世保地区占領地域というのがあったわけですね。日本全体が占領されていたのですから、それ以外にも出て行けないわけではないんですが、大体、兵站基地の周辺ですね。

伊藤　そうすると、佐世保の周辺ばかりということですか。

吉野　そうです。しかし、彼等はジープがありますから、どこへでも

出かけて行った。外にも出る。外でいろいろなことをすると、彼等も軍律が厳しいから、場合によっては軍法会議にかけられるんでしょうね。我々の場合には、これは日本人の知恵と言うんでしょうかね。まず、いわゆる慰安婦の施設をつくるわけですよ。慰安所、これはおそらく日本側が提案しているんですね。それは、警察の署長あたりが、「慰安所をつくらないと、良家の子女に手を出される」とかなんとか言い出してね。

佐世保には海軍の鎮守府があったので、遊郭ないしそれに近い芸者の置屋みたいなものがたくさんあったものですから、場所にも困らないし、女性にも困らないわけですよ。ただ、アメリカ側にそういうものをつくろうと提案したら、「それはいいアイデアだ。ただし、女性が性病をうつすといけないから、週に一回、身体検査しなければいけない。それを、ちゃんと守ってくれ。アメリカの医者が検査するから」という話なんですね。それで、うまくいったようですけれどね。

ところが、アメリカの兵隊の中には、慰安所に出かけて行っても、うまくいかなかったというような奴が出て来るわけです。それで、我々を呼び出すわけです。我々が出かけて行きますと、「日本の女性は、もうちょっとサービスしろ」とかなんとか言っている。相手は、こんなにでかい奴だったりする。そういう奴には太刀打ちできないですから、それで非常に困っていたんです。そこで、誰かがすぐ軍政部に電話をしますと、軍政部の少佐ぐらいの部長が、パーッとジープで駆けつけて来るんですね。「あとは俺が引き受けたから、お前はもういい」と言って、彼等がみんな、僕の見ている前で事態を収めちゃうんですね。中には酒を飲んでいる奴がいるから、喧嘩をしそうになりますけれど、本当に軍政部の連中が、荒くれ連中を弾一つ撃たずに、言葉で納得させるのを見て、僕等は感心しました。今にも殴り合いが始まるかと思うぐらい、顔を近づけてやり取りするわけですね。しかし、決して手を出さないんです、絶対に。僕は一時は荒くれの虜になるかと思うことがあったんだけど、救出されたことを憶えています。そのときは、本当にありがたいと思ったですね。と同時に、アメリカ兵に感心しましたね。

それから、もう一つは住宅ですね。彼等はジープを乗り回して、「丘の上の、あの家がいいから、あれをプロキュアしてくれ」と言い出すわけです。ところが、それが市長の家だったりしてね。市長や市民たちは、また彼等で、「この家は絶対守ってくれ」と言う。しかし、そうはいきません。我々が納得させようとしますと、また小さな政治問題になりかねないとか、いろいろ苦労しましたよ。しかし、アメリカ側には何とかして思い止まらせたりして、結局「終連」に訴え出れば、うまくやってくれるということになったんですけれどね。

その一つの例は、戦争中に儲けた人だと思いますが、ある大きな家を持っている人が、「終連事務局長に住居を提供するから、来てくれ」と言って、僕もお伴で、そこに半年くらい住んでいました。それは、僕等が住んでいれば、家は取られないと思ったんです。そういうことがあったんですね。

渡邉　食料の調達は問題ないですか。

吉野　食料は問題ないんです。彼等は、みんな自分で持って来ましたからね。むしろ、彼等の残飯を……。

渡邉　逆に、いただくほうですか。

吉野　そう。塩水にちょっと浸かったような砂糖袋を二トンか三トン、「これを処分してくれ」と言って、軍のトラックで持って来てくれる

んですからね。それは、市民には大いに役立ちますね。ところが、そういう物を我々が倉庫の中に入れて保管しておきますと、いつの間にかどこかの闇屋が嗅ぎ付けて、ぼろトラックを持って来て、翌朝前には、きれいにかっぱらって行っちゃうんです。ですから、それは大変な話でしたよ。

渡邉　その五万人くらいいた兵隊は、どれぐらいの期間、佐世保にいたんですか。

吉野　それは、僕等が去った後もいましたからね。人数は減ったかも分かりませんが、結局、平和条約発効までいたんじゃないですかね。

渡邉　食料は、そんなに備蓄があるんですか。それは向こうから持って来るんですね。船ですからね。

吉野　食料は、むしろ日本が助けられたほうです。彼等の残飯というのは、配給のエキストラとして入って来るわけですから、市民は非常に助かったわけですね（笑）。我々が、その一部をちょろまかして田舎に持って行きますと、田舎では大歓迎で、おはぎをつくったり、ぼた餅をつくったりしてくれて、「また来てください」と言われる。

伊藤　中央の「終連」との関係は、どういうふうになっているんですか。

吉野　海兵師団という特別の部隊でもあったためでしょうが、例えば福岡の「終連」とか、京都の「終連」とかというのは、ほとんど関係がなかったんです。もちろん、様子を見に視察に行ったりとかしましたけれども……。しかし、それぞれ部隊がありまして、その間の関係もないですからね。我々は、ほとんど中央政府とも関係がない状況でした。

伊藤　中央政府とも関係がないんですか。

吉野　ただ、終連本部は大きな指令はするわけですよ。例えば、「アメリカ側のプロキュアメントには直ちに応じなければいかん」というような指令ですね。「そのためにお金がいるなら、幾らでも送るから言って来い」というような話ですね。

例えば、アメリカ側はいきなり、「ゴルフバッグを百体用意しろ、クラブもボールも揃えろ」と言うわけですよ。当時は、我々はゴルフなんて、とんでもない。それから、戦前からゴルフをやっていた人も、戦争中はどこかにやっちまったわけですから、「百体なんかあり得ない」と主張したんです。しかし、向こうのプロキュアメント・オフィサーは悪い奴で、ひと月後だったか二週間後だったか忘れましたが、「もし、これを期間内に持って来ないと、お前の首をへし折るぞ」と言うんですね。それほど酷い奴だと、僕等は思っていた。しかし、日本側には知恵者がいて、「新聞広告を出しなさい」と言ってくれた。それで新聞広告を出したら、来るわ、来るわ。百体来たかどうかは知りませんが、相当集まったんです。僕も、びっくりしましたね。従って、それをプロキュアメント・オフィサーに持って行きましたね。

伊藤　それは買い上げたわけですか。

吉野　我々が買い上げたんです。出すほうも、二束三文で売ってくれたわけでしょう。そうすると、米兵が見たこともないようなブランド品があるんですね。それに、総皮のゴルフバッグとか。日本人ですから……。

渡邉　道具に凝るんですか。もう、その頃からですか。信じられないな。食うや食わずの時代にね。

吉野　プロキュアメント・オフィサーのほうは、「このいいクラブは、俺のために一つ取って置け」とか言い出すわけです。それ式に、我々

はだんだん彼等と、うまくゲットオンすることができたんですけれどね。あの頃は本当に、我々は食うや食わずの頃で、ゴルフの道具など見たこともないような情況でした。

渡邉　ゴルフ場は、どうしたんですか。

吉野　ゴルフ場は、久留米か雲仙か、どこか近くに二、三あったんじゃなかったですかね。芋畑になっていたかどうかは知りませんけれども……。

伊藤　戦前からゴルフはかなり盛んだから、地方にあったんですね。

渡邉　でも、感心ですね。そういう物を持って来て、それこそ「缶詰を寄越せ」とか、そういうことはなかったんですね。そうすると、先ほどの慰安所をつくろうなんていうのは、ローカルなイニシアチブなんですね。

吉野　そうだと思いますけれどね。

伊藤　それは内務省がやっているんでしょう。

吉野　他でも、みんなやっていたかも知れません。

渡邉　ああ、警察を通じてね。そうか、治安上ということでね。

吉野　おそらく、そういうことだろうと思います。内務省の出先も「終連」の中にありました。

渡邉　それは「終連」の仕事ではなくて、やっているんですね。

伊藤　「終連」が相手にしていたのは、米側の軍政部なんですか。

吉野　軍政部です。

伊藤　軍政部というのは、各県にあったんじゃないでしょうか。

吉野　……でしょうね。各県にあったけれども、占領軍がたくさんいないところは「終連事務局」の支部がありました。久留米か何かにも一つあったでしょう。九州には一つか二つ、そういう支部がありました。支部にも外務省の局長クラスではないが、その下の課長クラスの人が行っていました。

渡邉　久留米にも、かなり米軍がいたわけですか。

吉野　久留米にもいたわけです。それは陸軍で、海兵隊とは系統が違いました。

渡邉　そうですね。昔の久留米師団がありましたからね。そこの久留米師団長官舎は、しばらく米軍の将校クラブに使われていたということがありました。それこそ一番いい建物でしたからね。その後は、実は久留米市長が市長官舎として長いこと使ったという、有名な話ですけれど……。多少、私は縁があるものですから。

伊藤　佐世保事務局の局長さんは替わらなかったわけですか。

吉野　僕がいる間に替わりました。三浦（文夫）さんという、やはり元スペインの参事官をやっていた人が河原さんの後に来ましたよ。

伊藤　連れて行った人が（吉野さんを）連れ戻したわけではないんですね。

吉野　ええ、そうです。僕は、それからひと月ぐらい経ってから動いたんです。先に河原さんが行きまして、その次に僕が移ったわけです。

渡邉　そして、東京では条約局の法規課に移られるわけですか。

吉野　そうです。

伊藤　佐世保にいらっしゃったときは、家族はどうなっていたんですか。

吉野　家内は後から来ました。それは大変な旅行らしかったけれどね。

伊藤　そうですか。それで（昭和二十一年十一月に）東京に戻って来られるんですね。

条約局法規課で調査活動

渡邉　具体的には、先ほども話がありましたが、外交そのものはあまりない時代で、主として調査活動のようなことをなさっていたんですか。

吉野　法規課ですから、調査活動みたいなことをやっていたんですけれど、いろいろな諮問が「終連事務局」とか、司令部と接触した外務省の連中から来るんですよ。そういう仕事は、いわゆる占領の根本問題に触れる事項が多かったです。「アメリカの日本占領というのは、一体何か。これは無条件降伏ということである。だから、軍事占領なのか。条約ないし協定に基づいた軍事占領ではない占領か」というような根本問題でした。それで、いろいろ問題が起きたんですよ。

例えば、「天皇の権限はマッカーサーの下に付く」と書いてあるけれども、一体、日本政府の主権というのはないのかどうかとか、理論的に詰めていった。米軍が自動車事故を起こすとか、人権侵害をやると、一体、それは日本の裁判権があるのかないのか。ないとしたら、一体、日本人はどうやって請求権を行使できるかとか、そういう問題も我々が研究するようになったんです。それで、過去の外国の占領の資料が外務省、特に条約局の書庫にありますから、それを読んで、請求権があるとかないとか、いろいろなことを理論的にやったわけです。けれども、司令部に持って行くと、全部ペケですね。

伊藤　ペケですか。

吉野　ペケが多いんです。一番大きいのが、阿波丸事件というものですね。戦争中に、アメリカが日本の赤十字のマークをちゃんと付けた船を爆撃して、何人か犠牲者が出た。そのときに日本は、戦争中にもかかわらずアメリカに抗議して、アメリカは「戦争が終わったら補償する」という言質を（日本に）与えていたわけですね。「それを支払え、とアメリカに言え」ということなんですね。そのために、我々は抗議文を作文させられるわけです。それで、戦争中も戦時国際法というのがあって、「お前のほうは賠償すると言ったじゃないか。従って、それを払え」というような論理で、司令部に訴えるわけです。

しかし、司令部は、「日本は全面降伏して、あらゆる権限を放棄することになっているから、そんなものは払わない」と言い出す。「それは、お前のほうが、はっきり約束したはずだ」というような形で、我々は二、三回プロテストしたわけです。それは誰が持って行ったか知りませんが、我々は起案をする役ですね。僕がしたわけではないんですが、部内でそういう議論をしている。そういう問題があったわけです。占領下において、しかも全面降伏の下においてあったわけです。

伊藤　いわゆる第三国人の法的な地位ということも、当然問題になったわけですか。

吉野　当然あったわけですね。平和条約ができてから、ある程度それはクリアされたんですが、それまでは一体どうすべきかというような事件がしょっちゅう起きていたわけですから。

伊藤　占領中はどうなっていたんですか。彼等が犯罪を犯した場合、日本が警察権を行使できるのかどうか。

吉野　できたはずですがね。例えば、日本にいる韓国人が誰かを殺した場合には、日本の法律で処理をする。それは米軍とは関係なくて、

サブジェクト・トゥ・マッカーサーの下においてではあるけれど、あくまでもそれは日本の行政の一環だという形ですね。結局、日本の理論の構成は、天皇以下の日本の政府は全部マッカーサーの司令の下にある、しかし司令の下にありながら、その範囲内で行政権や司法権を従来通り適用されるということですね。「占領軍は場合によっては、それに介入できるかも知れないけれども、それは占領軍の権限としてしか介入できないのであって、それ以上のことはやってはいかん」というような議論をしていたわけですね。もっと詳しい内容で、我々は何回も作文を書いたけれども忘れました。相当に精緻な議論を展開したわけです。

渡邉　当時、占領軍の人たちはいるけれど、外国人というのはいないという事態ですか。

吉野　いましたよ。第三国人、韓国人とか……。

渡邉　そういう人たちは、もともと日本の国民の一部であったわけですね。

吉野　一部であったわけですが、そろそろ平和条約を前提として、彼等の独立は、ある程度見えていたわけですね。殊に、日本はポツダム宣言を受諾しているわけですから、日本が占領した一切の地域は放棄するということになっていたわけです。そういうことを予期して、彼等は「我々は違う人種だ」と言っていたわけですよ。汽車に乗っても、前以て集団で席を取ってしまって、我々が「その席は老人がいるから」と言っても、すぐ喧嘩ですね。日本人は、いま喧嘩したらまずいと思って、小さくなっていたわけですけれどね。

渡邉　中国人は、あまり問題がなかったんですか。

伊藤　いや、中国人もあったんですね。

吉野　台湾人は割に大人しかったんですが、韓国人が一番強かったですね。それは、いろいろ昔からの経緯があったんでしょう。

渡邉　ちょっと先走りかも知れませんが、いま言われた平和条約の話に関係することで、講和条約の準備というのは、いつ頃からなさっていて、吉野さん自身はどういう形で関係なさいましたか。

吉野　それは、相当前から始まっていたと思います。やはり我々の間で争ったのは、全面講和か部分講和かということが主なんですよ。どうもソ連が入って来ない状況だ、と。しかし、早く講和条約を結んで、ソ連抜きでも講和したほうがいいという説と、「いや、そんなことをやっちゃ駄目だ。この際、全部の戦勝国と一緒に条約を結ぶべきだ」という説との間で、議論がなされました。平和条約を結ぶと、一体どういうことがあるのか。政治的にも条約的にも調べさせられたことがあったんですよ。

伊藤　それは法規課の時代ですか。

吉野　ええ、法規課の時代です。しかし、戦後の一時期、僕は通産省に行かされていますからね。

渡邉　そうですね、一九四八年ですか。そこまでは法規課にいらっしゃったわけですね。

吉野　平和条約ができたのは、その後ですから。その前までの話ですね。既に、そういう話が出ていたんです。

渡邉　かなり早くから研究をしていますね。四六、七年に、イタリアと数ヵ国の間で平和条約が結ばれますね。それが先例だということで、どうなっているかという研究がございますね。そんな作業にも関係されましたか。

吉野　そうです。それから、当時、条約局では日本の大学の国際法の

先生をひと月に一回ずつぐらい呼んで、国際法学会と言ったかどうか知りませんが、条約局長が主催する形式で先生方の意見を聴いたわけです。その頃、京都大学には田岡良一先生がいましたね。それは、なぜ思い出すかと言うと、田岡先生は東京に出て来ても泊まるところがないから、僕の家に泊めたことを憶えているんです。それから、安井郁先生とか横田（喜三郎）先生とか、その他にも一橋大学の一又（正雄）先生とかがおられて、我々は若いですから、先生にいろいろ議論を吹っかけて、会議を面白くしたんです。そういうこともやっていましたね。それで、少しずつコンセンサスを醸成しようということになったんでしょうね。

渡邉　それは、主として講和問題に関してですか。

吉野　必ずしも、それに限るものではないのですが、主として講和問題に関するものでした。しかし、その中には阿波丸事件とか、その他懸案の問題も入っていたでしょうね。国籍問題とか、いろいろな問題ですね。慶応の英（修道）先生もいましたね。

渡邉　ああ、英正道大使のお父さんですね。ちょっと話が戻るんですが、四六年十一月に佐世保から法規課にお戻りになった。このときは、いわゆる新憲法なるものが出るんですが、これはあまりお仕事には関係なかったんですか。

吉野　いや、あるんですよ。まず第一に、「一体、憲法改正とか新憲法とか言っても、何を意味するか」とか、「占領軍の押し付けたものではないか」とかいう根本議論から始まって、「しかし、そんなことは言っておられん。ともかく基本的人権は人類の基本的な問題だ」というような議論が始まりました。だから、新憲法は我々が相当研究したんですよ。あの頃、憲法学者の若い先生がいましたね。

渡邉　宮沢俊義先生ですか。

吉野　いや、宮沢俊義ではなくて、もっと若い方……。名前を忘れましたが、東大ではなくて一橋の先生でしたかね。当時、かなりたくさんの著書を出していたんですが、そういう先生のご意見とか……。もちろん、宮沢先生は我々の先生ですが、まあ、いろいろ研究をしました。これからは法律体系がアメリカ式のものに変わって、従来の行政訴訟というものがなくなって、みんな法律、司法でいくんだとか。ともかく、アメリカの法体系を一所懸命勉強したりしましたね。

外務省と公職追放

渡邉　話が飛び飛びで申し訳ないですが、いわゆるパージ、公職追放なるものがあるわけですね。外務省関係はどうでしたか。

吉野　あまりなかったようですね。もちろん、古い人はパージされたんですけれどね。それから、巣鴨の戦争犯罪の裁判もありましたね。その弁護人の方々が、時々、我々のところに現われました。

伊藤　親独派ですか。

吉野　外務省の牛場さんとか内田さんとか、そういう人たちは自分から辞めて行ったですよ。パージの話が出る前か後か知りませんが、自分から責任を取って、辞表を出して行ったようです。後になって、みな帰って来ましたけれどね。ですから、パージ関係では、あまりなかったような気がします。なぜかと言うと、「終連」関係および朝海さんその他がうまく捌いて、外務省の人はあまり引っかからないような

話をしていたんでしょうかね。また、引っかかる理由もないわけですね。軍と直接関係がないですから。それから特高とか警察とか、そっちのほうとも、商売柄あまり関係がなかったですからね。しかし、逆に「吉田パージ」というのはあったですよ。

渡邉　それは、もうちょっと後ですね。

吉野　ええ。

渡邉　幣原（喜重郎）さんというのは、どういう存在でしたか。

吉野　幣原さんは、あまりにも上の方だから……。

渡邉　仕事でご一緒なさることはなかったですか。

吉野　なかったんですけれどね。ただ、人から聞いた話では、非常に如才のない方というか、できた人で、幣原さんと吉田さんの関係というのは、吉田さんのほうが下でしょう。

渡邉　もちろん、そうですね。

吉野　吉田さんが総理で、幣原さんが外務大臣ということはありましたか。

渡邉　吉田内閣ができてから、幣原さんは何かの閣員で入ったことがありますね。

吉野　何で入ったんですかね。

股野　国務大臣（復員庁総裁）ですね。

吉野　そのころ聞いた話ですが、何か吉田さんが「幣原さんと話したい」と言ったら、幣原さんが「それじゃあ俺が行くよ」と言って、自分から階段を上がって行かれたとか。僕は感心して、「幣原さんという方は偉い人だな」と思ったことを憶えていますよ。僕等は、ほとんど両方とも名前で聞いていただけですが……。

渡邉　四七年五月に片山内閣ができて、芦田（均）外相となるんですが、この辺はいかがですか。

吉野　特に芦田さんのときには、次官が吉沢清次郎さんですね。僕と同郷の人で、この人もそつがないと言われていた人です。芦田さんは学者みたいな人でしょうけれど、そんなに悪い感じがしない人でした。

渡邉　芦田さんが外相になってからのことですが、物の本によると、アイケルバーガーという横浜にいた第八軍の司令官の筋を通して、講和後の安全保障をどうするかというようなことを、最初に提起したという話があります。また、領土問題について、千島や沖縄のことに触れたとかで、占領軍当局から、かなりきついお目玉をもらったといった類の話が、物の本には書いてあるんですが……。

吉野　それは、僕はあり得ることだと思いますね。一つは時代の問題でしょうけれども、自国のセキュリティの問題を考えなければならない。そういうことは十分あり得ることだと思いますね。吉田さんの時代は、ともかく戦争放棄だ、と。あとは経済復興だけだ、ということですからね。

伊藤　先ほど戦犯という話がありましたが、外務省関係では重光葵さんも戦犯として巣鴨に収容されますね。これに対する救援と言いますか、対策と言いますか、外務省としておやりになったかと思いますが、それは法規課は関係ないんですか。

吉野　法規課も関係があるんです。というのは、まず第一に、戦犯なんていうのは初めてのことであって、伝統国際法にはないことだ、と。従って、それは占領軍、アメリカ軍の法制であって、こんなものは普遍妥当なものではないんだという、大上段の議論がまずあったわけですね。それから第二は、日本は自衛で始めたのかどうか知りませんが、要するにこれは戦争だ。従って、戦争に付き物の、ある種の犯罪的行

為というのは戦争法規が規定の全てであって、後から戦勝国が戦敗国を裁いちゃいかん、というような話ですね。

それから、もっと根本問題は、あの頃外務省の顧問として、ベイリーさんという英国人で、戦争中もずっと外務省の顧問をしていた学者がいたんです。その人が引退していまして、そこへ我々は意見を聞きに行ったわけです。そうすると、彼は伝統的な国際法を主張して、「今の占領軍が言っていることは、みんな普遍性のあるものじゃないんだ。それは、あくまでも占領軍のものだ。だから、国際法上は違反だ」というような議論をしてくれるわけですよ。小さな紙に書いてくれましたね。それを我々は基礎にして、国際裁判の冒頭で演説するときには、そういう思想で話したらどうか、ということを言ったことがありますよ。

殊に彼は、「パール・ハーバーの襲撃も、国際法では許されるんだ」と。「日本は、できるだけのことをやったし、仮にそうでないとしても、戦争開始というのは、宣戦布告をしなくても始まるというのが国際法なんだから」と。そういうような話から始まりまして、我々が昔教わった国際法の基をなすような思想を話してくれたわけです。ですから、法規課とか条約局とかの議論は、結局「犬の遠吠え」に似たような主張ではありましたが、しかし我々は正論を吐いていたと思っていましたね。

渡邉　そのイギリス人の方は、最後まで日本にいらっしゃったんですか。

吉野　ええ、そうです。日本で亡くなって、横浜の外人墓地かどこかに埋葬されていると思います。英国でも相当有名な国際法学者だったらしいんですけれどね。割合若かった人なんですが、どういうわけか、日本の外務省の顧問として雇われているうちに戦争が始まったんでしょうね。それで、彼は帰る機を失して、英国から、戦争中の日本政府への協力を理由に、英国籍を剥奪されたわけです。そういうことがあったんですね。

伊藤　そうですか。それで、結果的には日本国籍になっちゃったんですね。例えば、具体的に東京裁判係みたいなものはあったんですか。

吉野　それはなかったんですけれど、当時の東京裁判の様子を逐一我々に説明してくれたのは、柳井（恒夫）さんという、今の次官（柳井俊二）の親父さんです。彼は元条約局長で、しょっちゅう、裁判が終わりますと、条約局、殊に法規課に来て、我々にいろいろ説明してくれたですよ。よく話す人ですけれどね。

股野　弁護人をされていましたね。

吉野　重光葵さんの弁護人だったようです。それで、よく話をしてくれましたよ。それなりに僕等も、もっと勉強していれば良かったんですが、戦争裁判なんていうのは面白くないですからね（笑）。しかし、柳井さんはよく来てくれました。

伊藤　そうすると、それなりに法規課ないし条約局も仕事はあったんですね。

吉野　あったんですよ、それなりにあったんです。ただ、大部分はフラストレーションでしたね。「こういうプロテストを書いたから、持って行ってくれ」と、局長や次官、大臣まで上げるんです。しかし、彼等はそれを司令部に持って行かないわけですよ。いつも我々は課長に文句を言っていたんです。「なぜ持って行かせないんですか」と言ってね。課長のほうは、我々書生をそれなりにあしらっていたんでしょうけれどね。

渡邉　これも具体化するのは先なんですが、賠償の問題というのは、当時どういうふうに意識しておられていましたか。

吉野　おそらく僕が条約局をやめて、通産省に行って、通産省から帰って来て、経済局に入った頃でしょうね。大野勝巳さんが、「賠償問題をやらなきゃいかん」と言っておられました。その前に、おそらく西村（熊雄）さんが始めたと思いますけれどね。それで、賠償研究会とかいうものを始めまして、条約局ではドイツのベルサイユ条約の研究とか、その前の普仏戦争とか、いろいろ賠償問題はあったわけですから、そういう前例を調べましたね。殊にベルサイユ条約は、連合国が厖大な賠償を取り立てたけれど、後はインフレになって、第二次大戦の原因をつくった。賠償は時代遅れのものだ、と。そういう議論をするような研究会を開いていたわけです。

　そのうちに大野さんが主査になりまして、フィリピンの賠償とかインドネシアの賠償とか、ビルマの賠償とかを研究討議しました。大野さんは、これらの国をお回りになって、現地の様子を見聞して来られたようでした。要するに、彼等を助けることによって、将来日本の経済発展の基礎をつくるんだという気持ちで、フィリピンに幾ら、インドネシアに幾らという数字をいろいろ出して、まとめたらどうかというような話が、だんだん外務省の中で出て来ていたんです。

渡邉　さっき国際法学者のお話がありましたが、入江啓四郎さんはどうでしたか。

吉野　ああ、入江さんもいましたね。入江さんも、その国際法の研究会にしょっちゅう出て来た人ですね。彼の強みは、時事通信にいましたから、世界の動きを非常に詳しくフォローしていたわけですね。それで国際連合ができたときとか、その後の経緯とかいろいろな問題を、しょっちゅう外電を通じて、我々に講義してくれたわけです。同時に、国際法の学者の方々も、入江さんの話に熱心に耳を傾けていましたね。入江さんが一番発言が多かったような気がしますね。

渡邉　今の賠償問題も、入江さんが非常に詳しいですからね。

吉野　そうですね。その息子さんが、いまシカゴ大学の……。

渡邉　入江昭さんですね。

伊藤　賠償問題が具体化するのは、後なんでしょうけれど、最初に賠償指定工場というか、工場が指定されますね。

渡邉　中間賠償で取り立てるんですね。

吉野　そう。あの頃は持って行かれるかどうかということで、いろいろ心配していたんです。ソ連が満州国に行って、鉄道を引っぱがして行ったという話や、ドイツが戦後賠償を支払うことによって、いかに疲弊し、そのお蔭で結局ヒットラーが出て来て、かえって逆効果になったという例を挙げて、賠償指定はやめてくれ、と。そういう日本の陳情は、いったんは条約局ないし外務省内で議論されましたね。それを朝海さんが持って行ったか、誰が持って行ったか知りませんが、要するに「賠償指定は反対だ」ということですね。結局、そのうちに、それができなくなってきたわけですね。

渡邉　かなり早い時期から、若き日の大来佐武郎さんなんかが中心になって、その種の勉強会をやっているんですが……。

吉野　それもありましたよ。外務省内にもありました。それで、外務省に大来さんにも来てもらって、話を聴きました。やがて平和条約をつくることの前提にもなっていましたが、日本の鉄鋼生産を何百万トンにするとか、商船は何万トン持つべきかとか、そういうことを大来さんが経済学者として意見を述べられて、我々の素案みたいなものを

つくったわけです。それを司令部に渡して、彼等を啓蒙し、「日本を、あまり痛めつけたらいかん」ということに使わせようとしましたね。

外務省＝条約局

伊藤　外務省は「終連」でＧＨＱと連絡を取っていましたが、条約局なども「終連」を通してやるわけですか。

吉野　ええ、「終連」が一方において切った張ったの現実問題をやっていたというので、外務省はその陰に隠れて、そういう根本問題を一所懸命研究して、それとなく重要な問題を「終連」にアドバイズしていたんだろうと思いますね。我々は下のほうにいて、全体の空気は知っていますから、それで意見を書いたりしていたわけですね。

伊藤　「終連」がＧＨＱといろいろやっているわけですが、例えば渡辺武さんのように、大蔵省は大蔵省で、またＧＨＱとの接点を持つということのようですね。他の各省庁も、やはりそうだったんですか。

吉野　未だ通産省はできていなかったわけですが、その前には商工省、軍需省があったけれども、そのうちに貿易庁というのができるとか。しばらくして通産省ができますと、そこへは僕等が真っ先に乗り込んで行きます。その間、いま言った大来さんなんかが、鉄鋼の量を幾らぐらいにするとかというような形でやっていたわけですね。

伊藤　やはりＧＨＱとの接点は持っていたわけですね。

吉野　持っていたと思います。外務省は、主として Government Section とかと……。それから、経済安定本部というのがあったですね。それもそれで、日本の経済復興のためには、どの程度の輸入が必要だとか、輸出が必要だとかという意見を述べていたと思います。だから日本の官僚は、それぞれそれなりにやっていたと思います。

伊藤　「終連」だけがＧＨＱと……という形ではないということですね。

吉野　ではないと思いますね。むしろ「終連」は事件が起きたとき、あるいは日本政府が不都合なときに、司令部にそれを改善してくれるよう要請することが、主たる業務ではなかったかと思いますね。まあ、あらゆることをやっていましたからね。「終連」には各省から、司法省とか運輸省とか、そういうところからも入っていましたからね。だから、それぞれやっていたと思います。その頃、司令部との接触というのは、形式的には「終連」を通じてやっていくという建前であったようです。ただ、大蔵省あたりはだんだんと独立していったということでしょうね。

伊藤　そうですね、渡辺武さんの日記などを見ていきますと、ＧＨＱとの交渉の結果について、閣議や閣僚懇談会なんかに実際に出席して議論しているんですね。

吉野　ああ、そうですか。

伊藤　その条約局の時代の局長さん、萩原（徹）さんとか西村さんとか、そういう方々のご印象はいかがでございますか。

吉野　僕も、本当の意味で彼等を知っているわけではないですが、西村熊雄さんは非常に手堅い条約局出身の人でした。それで、どちらかと言うと、「てにをは」的なものを我々に教えたり直したりするようなタイプの人でしたね。彼は、しかし我々が過激なことを言っても動じない人でしたね（笑）。

渡邉　吉野さんでも過激なことをおっしゃったんですか（笑）。

吉野　ですから僕等は、「西村さんはあまり面白いキャップじゃないな」と思っていたんですがね（笑）。

渡邉　あまり手堅過ぎて、ですか（笑）。

吉野　その西村さんの前に萩原さんがいて、萩原さんは条約局出身ではなく、非常に活発でアクティブな人でした。彼はしかし、何かあったんですね。それで、そのあと西村さんを連れて来たわけですから。その意味で、条約局が元に戻ったようなものですからね。

　萩原さんは政務局出身の人で、この人は後になってＧＡＴＴをやったり、非常に有能な人であり、かつ、吉田さんその他とも割合に親しかったようですね。「じゃあ、俺が吉田さんに話してやる」というようなことで、我々は彼の下ではアクティブに働けたと思います。

渡邉　お父さん（萩原守一）も、外交官ですね。

吉野　そうですね。

伊藤　局長と直接お話しになるということはあるんですか。

吉野　しょっちゅうありましたよ。殊に萩原さんは、我々に意見を聞いたり、我々の意見を採用したりという意味では、働きがいがある局長でしたね。

伊藤　課長クラスは、いかがですか。

吉野　課長クラスは鶴岡千仞さん、下田（武三）さん、芳賀（四郎）さん。芳賀さんはもう亡くなられた人ですが、彼は静かな人でしたね。条約一課というのが下田さんで、二課は後になって法規課になりますが、鶴岡さんが課長で、その前は高橋通敏さんです。それから、下田さんの前は湯川盛夫さんでしたかな。それとも、下田さんの後に湯川さんが来たのかな。これが条約一課ですね。それから、条約第三課というのが後にできて、これは国連関係で芳賀さんが課長でしたね。

伊藤　課長クラスで印象深い人は、どなたですか。

吉野　それぞれ、みんなその道の達人だと思います。達人で、かつ僕等より何をやらせても、うまくやってのける人たちだと思います。印象に残っているのは、鶴岡法規課長は僕の上司でしたが、いろいろうまくこなすけれど、決してそれを行動に持っていかないようなタイプの人です。彼に、例えば阿波丸事件について、「早く抗議しないと、賠償金を取るチャンスがなくなる」と言っても、そういうプロセスを軌道に乗せようとしなかったわけですね。彼はおそらく、もっと大局から見て、「そんなことを言っても駄目だよ。それで司令部が動くはずがないじゃないか」と、達観していた人ですね。まあ、しょっちゅうコーヒーを奢ってくれる、いい課長でしたがね。

渡邉　どうなんですかね。当時、政務局と条約局とがありますね。その後、戦後になると、経済局とかいろいろ出て来ますが、伝統的には、この二つですね。それで条約局というのが、悪く言うと威張っているというか、「条約局が外務省だ」という見方もあるんですが、その頃の感じはどうだったんですか。

吉野　おそらく、そういう感じであったかと思いますね。僕も、ドイツから帰って来たら、いきなり「条約局に行け」と言うわけでしょう。僕はそのとき、条約局って何かよく分からなかった。それから佐世保に行って、帰って来たら、また条約局ですからね。要するに、条約局というのは政務局と違って、人を採ることがうまかったんじゃないですかね。条約局には、ある程度、「条約を通じて政策を動かすんだ」というような気分があったんでしょうね。

渡邉　自負もあったんでしょうね。

吉野　でしょうね。

渡邉　今、「人を採るのがうまい」とおっしゃったけれど、そういう人の動きというのは、時代によって違うかも知れませんが、「俺は、こっちに行きたい」とかというのは、どういうふうにして決まるんですか。

吉野　それは、私もそのプロセスは分かりませんが、僕がいま思い出すと、当時条約局というのは、僕等が幾らやってもフラストレーションの連続ですからね。幾らいい意見を出しても、上は動いてくれない。そこへ通産省というのができる。新しい省だし、その頃は、そろそろ日本は経済以外に行く道はないんだというようなことが感じられました。そこで、僕は通産省ができると聞いたら、「僕を通産省にやってくれ」と、時の課長の高橋通敏さんに頼みました。

渡邉　ご自分から希望なさって、通産省に？

吉野　そうです。そうしたら、高橋さんは、「ちょっと考えさせてくれ」と言って、なかなかウンと言わないわけですよ。当時は、仕事がないんですよ（笑）。

渡邉　にもかかわらず。吉野さんに逃げられたら困ると思ったんじゃないですか。

吉野　そのうちに、高橋通敏自身は僕には言わなかったけれども、その下に中山賀博という人がいて、彼が僕に、「お前、外務次官になるなら、そんなところに行っちゃいかん」と言う。彼も、後に通産に行くんですけれどね（笑）。「外務次官になりたかったら、条約局で頑張るんだ」と言われたんです。その頃は、もちろん外務次官なんかになるつもりは微塵もないし、大体、そういうことが分からなかったわけですから。それで結局、行かせてもらったわけですよ。結果的には、僕は大いにエンジョイしたんですが……。そのぐらい、「条約局にいれば、運が良ければ次官にもなれるよ」ということだったんですね。そういう空気でしたね。

渡邉　その後、外務省の中にも経済局とか、経済協力局とかいろいろ出て来るんですね。そして、これもある見方によると、外務省と通産省とは、必ずしも仲が良くないということになってくるんですね。この頃は、まだ外務省の中には、そういう経済専門家はいなかった時代ですか。

吉野　いなかった時期ですが、後になって分かったことは、外務省には戦前、通商局というのがあったんですね。通商局というのは、商工省の貿易局とライバルであった。

伊藤　貿易省設置問題がありましたね。

吉野　後になって、僕が通産省から帰って来まして、外務省の経済局に入ったときに、僕の上司の一人に亡くなった永井（三樹三）という課長がいたんですね。それから佐藤（健輔）という、課長から次長になった人――この方も亡くなったんですが、そういう通商畑の人がいました。彼等は、本当に通商でなかったら飯が食えないような専門家ですよ。ＧＡＴＴだ、何だかんだと、みんな知っている。それで、その人たちに、我々はまた新しく薫陶を受けたんですけれどね。

　それが今度は、通産省の松尾（泰一郎）さんらと、しょっちゅう権限争いをするんですが、相手をよく知っているんですね。通産省との間にいざこざがあるときなど、通産省内でも、「俺が永井のところに行って話して来る」とか、「俺は、あの佐藤のところに行くのは嫌だから」というような話を聞きました。それくらい犬猿の仲ではあったんですね。同時に、お互いに知っている喧嘩の相手だったんですね。

それは僕が通産省から帰って来て、また分かったんですけれどね。

伊藤　通産省のお話を伺っていると、時間がないですね。

渡邉　また日を改めますか。

伊藤　次回は通産省から、ということになるんじゃないでしょうか。通産省は二年間いらっしゃいますからね。

渡邉　そうですね。そのあたりから、次回お願いいたします。

伊藤　今日のお話も、思いもかけず面白いお話でした。

吉野　そうですかね。皆さん方に面白ければいいんですが……。

渡邉　どうもありがとうございました。

吉野　むしろ興味を持っていただければ、僕もありがたいです。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー

第3回

[1999年5月12日13:30～15:35]

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

渡邉昭夫（青山学院大学教授）

伊藤　隆（政策研究大学院大学教授）

股野景親（元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員）

武田知己（東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員）

（於：国際経済研究所）

通産省VS.外務省

渡邉　では、第三回のインタビューを始めさせていただきます。前回、お話しいただいたことを、おさらいするようなところがあるかと思いますが、これはテレビの大河小説みたいなもので、ゆっくりゆっくりと話が進みますので、よろしくお願いします。

吉野　思い出すのに、時間がかかりますから……。

渡邉　前回は、外務省の条約局法規課にいらっしゃって、その後、あえて志願なさって通産省に行かれたお話を伺いましたが、もう一度通産省の話を整理してお聞きしたいと思います。

　その前に、通産省へ移られる前、外務省にいらっしゃった時期のことで、もし何か付け加えることなどありましたら、最初にお聞きしたいと思います。

吉野　また何か思い出すでしょうが、今のところは……。

渡邉　この前もちょっと出ましたが、当時は外交らしい外交がなくて、主として賠償とか講和といった問題を念頭に置きながら、いろいろな調査活動をやっていたと言われました。例えば、後に残っている記録で見ると、杉原（荒太）さんなどがいらっしゃって、若き頃の大来（佐武郎）さんなどを中心に、経済問題を中心としたいろいろな勉強会を開かれたとか。そのようなことで、何か吉野さんご自身が関係なさったことがあれば伺いたいと思います。

吉野　具体的には、あまりないですね。ただ、この前お話ししたかと思いますが、法規課にいたとき、しょっちゅう柳井（恒夫）弁護士が出入りしていましたね。柳井さんは、今の柳井（俊二）次官のお父さんですが、彼は国際法廷で戦犯の弁護、殊に重光葵さんの弁護をしていたわけです。

渡邉　東京裁判ですね。

吉野　彼が裁判に出たりした後、法規課の我々に、別に教えるつもりではないでしょうけれども、いろいろなことを話してくれるわけです。つまり、柳井さんが国際法の立場から弁護するのに対して、アメリカの検事やその他は、我々の知らない新しい考え方で戦犯たちをアタックしていくという話をしてくれたんです。内容はあまり印象に残っていませんけれども、ただ、話は面白かったと思います。そういうのは、我々は仕事をしながら勉強したことです。

渡邉　外務省関係だと、重光さんのほかに広田弘毅さんも……。

吉野　広田さんは誰が弁護したか知りませんが、牛場（信彦）さんとか内田（藤雄）さんは大島大使を弁護したわけです。しかし、この二人は、我々のところへ来て、「助けてくれ」とか、そういう話はしなかったですね。

渡邉　牛場さんと内田さんは、当時、外務省でお仕事をなさっていたんですか。

吉野　内田さんは、（戦争から）帰って来て、間もなく辞められたと思いますし、牛場さんも、前後して辞めたんじゃないかと思います。

渡邉　後で戻っていらっしゃるんですか。

吉野　戻って来たんですが、戻って来るのも、いろいろ経緯があって、内田さんは、その間に弁護士試験を受けて、弁護士をやっていたんです。そのうち、いわゆる革新派の連中の中にも「元へ戻せ」という雰

囲気が高まってきたときに帰って来たわけです。

牛場さんについては、その前に、司令部の指令で外国為替管理委員会というのができて、木内信胤さんがその長になったわけです。委員会の委員長ですね。そのとき、事務局長として牛場さんを推薦して、牛場さんが委員会の事務局長を一年か一年半かやった。その後、彼の功績が認められて、通産省の通商局長になったわけです。彼の前の通商局長は、通商監も含めて、外務省の人が初めの二、三年、創業の時期にやっていたわけです。

まず最初に、小滝彬さんが通商監をされて、その後に武内龍次さんがされました。武内龍次さんは、小滝さんが通商監のときに通商局長として、外務省から行ったわけです。小滝さんの後、武内龍次さんが通商監になったときに、黄田（多喜夫）さんが通商局長になって、黄田さんの後に牛場さんがなったわけです。ですから、牛場さんが外務省へ帰って来たのは、その後、ビルマ大使館の参事官になって、ラングーンに赴任したときです。そういうように、牛場さんの場合には、自然に帰って来たわけです。自然と言うか、何と言うか、幾つかの段階を経て……。

それから、武内龍次さんや小滝さんたちの通産省出向については、相当、吉田（茂）さんのインフルエンスがあったんじゃないですか。つまり、その間に白洲（次郎）さんとか、そういう人たちがいたわけでしょう。白洲さんに近い人たちが、みんな選ばれたわけです。小滝さんは別かも分かりませんが、そういうような印象を受けました。

渡邉　ちょっと話は遡りますが、今、牛場さんの話が出たので……。最初にお聞きしたとき、ドイツ時代は、牛場さんは向こうにいらっしゃいましたね。その話は、この前、お聞きできなかったんですが……。

吉野　僕がベルリンに最初に着任したとき、牛場さんは、まだいなかったわけです。牛場さんはその後、ロンドン大使館から大島大使に呼ばれてベルリンに来たんです。僕がベルリンに着いたのは、昭和十六年の四月か五月頃でしたかね。牛場さんが来たのは、その後なんです。ただし、同じ年です。だから、どうして牛場さんに、その頃、会ったか……。

僕はその後、ハイデルベルクへ行ったわけで、ハイデルベルクで牛場さんにハガキを出したことを憶えているんです。ハイデルベルクは、牛場さんがかつて勉強したところです。そのハガキの内容は――牛場さんは覚えているかも分かりませんが――ノイエブリッケかアルテブリッケか忘れましたけれども、ネッカー川の橋をドイツの出征軍人が列をなして、歌を歌いながら渡って行くのを、観衆がみんな拍手しながら見ていた、というようなことです。そうしたら、牛場さんにベルリンで会ったとき、「お前の手紙をもらったぞ」とか言われたことも憶えています。そうすると、牛場さんは、あるいは僕が五月にハイデルベルクへ着いたすぐ後に、ベルリンに着任なさったんだろうと思います。

渡邉　内田さんのほうが上で、その次が牛場さんですか。

吉野　当時、内田さんは一等書記官で、牛場さんは三等書記官です。

渡邉　これまた時代がちょっと戻りますが、都倉（栄二）さんがやはりハイデルベルクで勉強なさいますね。これは吉野さんの後ですか。

吉野　おそらく一年後じゃないかと思います。

渡邉　そうすると、東京へ戻りまして、条約局にいらっしゃる頃は、お仕事の上で、牛場さんや内田さんとの接触はなかったんですね。

吉野　仕事の上ではなかったですが、牛場さんは外務省を辞職した後、

時々部屋に顔を出して、調べ物をしていたことを憶えています。

渡邉　いよいよ通産省のお話ですが、通産省では、もちろん通商局ですね。そのときの局長さんは、どなたですか。

吉野　武内龍次さんです。武内さんが初代の通商局長で、通商監が小滝さんだったんですね。

渡邉　通商監と言うと、通商局長の上ですか。

吉野　ええ。今の通商審議官のようなものですが、通産省というものをつくって、通商関係を強力なものにしようということで、通商監というポストをつくったわけです。その下に通商局長……。

渡邉　その局長が武内さんですか。

吉野　そうです。

渡邉　どんな雰囲気だったんですか。

吉野　通産省は昔の商工省ですし、商工省が軍需省になって、終戦まであったんですからね。それで、いわゆる通産官僚というのは一つに固まっていたわけです。殊に軍需省を通じて、日本の戦争中の経済をコントロールしていたわけです。物資の配給だとか軍需品の生産に至るまで……。だから、非常に大きな勢力であったわけです。岸信介とか椎名（悦三郎）さんとか、そういう人たちがいたわけですからね。だから、当然、権力も強いし、団結も強かったわけです。そこへ外務省の弱々しい官僚が、「通商をやるぞ」と言って出かけて行ったわけです。

　ではありますが、歴史的には外務省と商工省とは、いつも通商問題で争っていたのです、戦争の前から。外務省には通商局があり、商工省にも通商関係の仕事をしている局か部があって、その頃から既にライバリーがあったわけです。ただ、外国との通商交渉は、外務省が主としてやっていたようです。

　しかし、そういう歴史がありますから、今度はお膝元の通産省に外務省の連中が入って来たときに、上のほうでは相当軋轢があったんじゃないかと思います。殊に通商監が外務省に取られ、通商局長が外務省に取られ、輸出課という一番重要なものの一つの課長が外務省に取られ、市場一課長、二課長、後になって三課ができたら三課長を外務省出身者に取られたということで、通産省の官僚は、ある程度、危機を感じていたんだろうと思います。

渡邉　外務省が、それだけ重要なポストを占めることができたのは、どうしてですか。

吉野　おそらく、政治的には、吉田さんや白洲さんの影響力だろうと思います。しかし、客観的に見れば、これからは通商の世の中である、と。それで、ある程度、外国の知識を持った人が主導権を握るのは当たり前だというようなジャスティフィケーションも成り立つんでしょう。というのは、通産省は（戦時中は軍需省として）、もっぱら「物動」（物資動員計画）だとかコントロール、分配というほうに力を注いでいたわけですから。しかし、通産省ができても、すぐに日本の民間貿易が活発に動いたわけではないです。

渡邉　まだ占領期ですからね。

吉野　一つは、初めに公団貿易というものをやったわけです。これは、ほとんど官僚と業界の組合みたいなものが集まってやりました。しかも、司令部の指図で動いていたわけですからね。なぜかと言うと、当時の日本は、計画など何もなく貿易をした。司令部から、「スペインから日本の生糸の注文があるから、これだけ出せ」と言われたら出すとか、「米国から原綿がこれだけ入って来たから、引き取れ」という

ような話ですから――今なら差別用語ですが――当時は「盲貿易」と言ったわけです。しかし、それはみんな公団の名前でやっていて、その間に、昔から知識のあった三井物産とか三菱などの商社がエージェントとして入って来たわけです。

そういう状況でしたが、だんだん民間に移さなければいけないということで通産省ができて、そろそろやり出したんですけれども、なかなか司令部が権限を渡さないのです。それで、僕等は自然に司令部に近づいて、彼等からインフォメーションを得て、それを通産省の局ないしは、それぞれの課へ伝えて、あるいは、それぞれの課の在庫の数字なり輸入要請なりを持って司令部へ行って、その仲介をするというようなことをやったんです。

例えば、まず第一に日本の鉄工場が動き出しますと、「鉄鉱石がないから、鉄鉱石を買ってくれ」という要求が出て来ますが、一体幾らぐらい買ったらいいのか、司令部は全然知らないわけです。どの程度買って、どの程度、どこへ配給するかということも知りません。通産省は、戦争中は軍需省であったわけですから、そういう資料が全部あります。だから、このくらい買ったらよろしいとか、どこどこの工場が足りないから、そこへ持って行けばいいということを知っているわけです。その通産省の、昔の「物動」の知識を持っている連中に、我々が数字なり需要量を聞いて、司令部に知らせるわけです。司令部は、それに基づいて判断して行動する。こういう形になっていたわけです。ですから、ある意味で我々は、通産省にとっての耳や目の役目をしたわけです。

スターリング地域との貿易

渡邉　その頃、経済安定本部があったりして、経済政策では鉄鉱、石炭、電力などを優先するとかという話がありますね。その「安本」とはどういう関係になるんですか。

吉野　一年間に、これだけの鉄をつくるためには、これだけの鉄鉱石が必要だということを、司令部は知りたいわけですね。司令部の命令でやるのか、司令部がその話を聞くかどうかは知りませんが……。その「安本」の要求が元となって、司令部から我々のほうに、「鉄鉱石は、どこでどうやって買ったらいいか」という話になってくるわけです。全体としては、そういう形で動くわけです。ですから、「安本」の連中も、しょっちゅう司令部に呼ばれた。後にＮＨＫの経済解説担当になった藤瀬清さんとか、そういう人たちがいましたから、よく司令部でお会いしました。

渡邉　実際に、インドならインドから鉄鉱を買うというときの支払い、つまりドルとスターリングの話がありますね。これは、大変面倒だったんじゃないですか。

吉野　面倒だった。というのは、司令部は、根本的には日本は輸出が非常に強いと考えていた。鉄板も絹糸も出す力がある。時にはアメリカにも輸出できる体制にある。ただ、日本の当時の実力では、アメリカにそんなに物を売るような力はない。しかし、戦争で弱ったイギリスの領土――スターリング地域とか、その他のヨーロッパの地域に対

しては、日本の品物は相当売れる。従って、日本はまず、それを強くして、最終的にはアメリカに物を売れるような形にしたいという気持ちでいたわけです。

それをどうやってやるかということについて、例えばインドやパキスタン、あるいはヨーロッパの、ある国に対しては、日本は輸出品で外貨を稼ぐ能力があり、またそこから物を買う能力もある。しかし、アメリカには買う能力は十分あるけれども、ドルはない。従って、なるべくドルを使うのを倹約する。その当時、「ソフト・カレンシー」と言っていましたけれども、不換紙幣であるポンドを使うとか、「オープン・アカウント」と言った、貸したり売ったりする貿易勘定を創設する、つまり「ツケで買いなさい」と。そして、「ドルは、なるべく倹約しなさい」と。こういう方針だったわけです。

それで、司令部がまずやったことは、各国と協定を結んで、なるべく「オープン・アカウント」の協定を結ぶ、あるいはポンド・スターリングで払う支払い協定を結ぶ。それで決済しようじゃないかということです。ドル地域とは、協定を結ぶ必要はない。これはキャッシュしかないから。それで、その協定を一年か二年かにわたって、各国とやったわけです。オランダとやったり、イタリアとやったり……。

渡邉　それは各国別に？

吉野　各国別にやったわけです。当時は、日本はまだＧＡＴＴに入っていませんし、向こうも差別待遇をしていたし、彼等自身も、そんな状態ではなかったんです。

その中で一番成功したのは、ポンド・スターリング地域とやったスターリング地域協定です。インド、パキスタン、オーストラリア、南アと、広い範囲で英ポンドを使う地域がありますから、「スターリング・ペイメント・アグリーメント」というものを、まずスターリング地域と結び、それによって英国を含めたスターリング地域と貿易をしようということになったわけです。それで、向こうからもスターリング地域のコーディネーターというのが来ました。

渡邉　具体的には、どこと交渉するんですか。イギリスですか？

吉野　イギリスと交渉します。イギリスはトレジャリー（treasury）の代表なんです。あとの連中は、例えばインドや何かはパーティシパント（participant）として出て来るんです。しかし、スターリング地域とは一括して交渉したわけです。司令部とスターリング地域と……。それで、その協定によって、日本はいつも「出超」になったわけです。なぜ「出超」になるかと言うと、当時の日本にはアメリカの援助によって、アメリカの余剰の産物とか原材料が入って来ているわけです。この原材料を加工して出すわけですから。ドル地域は、その当時から原材料が非常に安くて、品質も良かったわけです。それを加工して出す。英国などにしてみれば、本来、アメリカから直接原材料を買うならドルが要りますが、日本を通じてなら製品になっていて、しかもスターリングで買える。ですから、スターリングがどんどん増えて、日本の輸出がどんどん増えていくわけです。

渡邉　ポンドが溜まっていくわけですね。

吉野　そこで、スターリング地域との「ペイメント・アグリーメント」では、あまり日本から買い過ぎないように、と。実際には、それはアメリカから買うことになるから、と。日本の工場が活発化するのはいいけれども、スターリング地域が買い過ぎないように、幾らだったか忘れましたが、五百万ポンドとか一千万ポンドぐらい日本にポンドが溜まりますと、その上の余剰分は、いつでも日本側がスターリン

グ地域側に、「これをドルに替えてくれ」と言える。向こうは不換紙幣で買っていたわけですから、「余剰分は不換紙幣をコンバートしてくれ」という要求が出せることになっていたわけです。原材料の大部分は、アメリカが日本の国民に使用してもらいたいと思っているのに、それがみんな輸出に向かってしまうのもどうか、という気持ちもあったんでしょう。

ところが司令部は、余剰が溜まっても、「ドルにコンバートしろ」ということを、なかなか英国に対して言わないわけです。それから英国側も、コンバーティビリティのクローズがあっても、「そんなもの使っちゃいかん」というプレッシャーをかけたんです。

渡邉　イギリスから見ると、ドルを払わなきゃいけないわけですね。

吉野　そう。

渡邉　向こうも、ドル不足の時代ですからね。

吉野　「日本との貿易に、ドルを払うのはおかしい」という気持ちでいたわけですよ。彼等は、「戦勝国だ」と思っていたわけですからね（笑）。よく分かりますがね。ところが、ご存知かどうか知りませんが、一九四九年でしたか、スターリングが二割ぐらいデバリューしたわけです。例の労働党内閣で、相次いで二回ぐらいデバリューしたんです。本来なら、司令部はデバリューする前に、コンバーティビリティを要求すべきなのに、それからデバリューした後に要求しても、ちっともおかしくないのに、そういうことをやらないわけです。

それで、我々の間で、「せっかく日本人が汗と労働で稼いだ外貨だ。ドルに替えることができると書いてあるのに、司令部はその事務を怠っていて、けしからん。早速、司令部に抗議しよう」という話が起きたわけです。僕等は、「そうだ、そうだ」ということで、一所懸命作文しまして、「通商監を通じて、司令部の上へ持って行ってもらおう」という話になったわけです。

渡邉　どうしてＧＨＱは……。

吉野　ＧＨＱ自身は、そういう協定を結んだ当事者ですから、やりたかったんでしょうけれども、ファーイースタン・コミッティーと言って、ワシントンにある、連合国の代表でつくっているＳＣＡＰ（連合国軍総司令部）の上位機構あたりで、「これは、とんでもないことだ」と抑えたんだと思います。大きな米英関係の政治に支配されて、むしろＳＣＡＰの連中は、お気の毒だと思われます。

渡邉　イギリスに遠慮しているわけですね。

吉野　ところが、我々は一所懸命作文までしまして、「司令部に持って行って欲しい」と、上のほうへ上げ、上の人も「行くぞ！」と言ったんですが、だんだん上へ上がって行くに従って、政治的に考慮するようになって、「ちょっと待て……」と。結局、一回もそういうことをやらなかったんです。

渡邉　結局、駄目だったんですか。

吉野　スターリング地域は、その意味では得したわけですね。しかし、日本の製品は、インドを含めて各国へどんどん出て行きました。

その次になると、日本の強さは紡績機械等です。これも、どんどんインド、パキスタンへ出て行った。要するに、アメリカのドルが背後にあればこそですが、スターリング地域と日本との通商はだんだん拡大していったわけです。初めは繊維関係の話ですが、後には機械類も、スターリング地域やオープン・アカウント地域には、割合に売れていたわけです。向こうも、日本品は当時のアメリカ品ほどは良くないかも知れないが、ツケで買えるからということだったんです。

渡邉　一ドル＝三百六十円というのは、もう決まっていましたか。

吉野　通産省ができた昭和二十四年の四月には決まりました。しかし、最初に公団を通じて貿易した頃は、円レートは物によって違ったんです。例えば、生糸などは非常に高かったわけです。繊維なんかは、おそらく安かったんだろうと思います。幾らでもつくれますから……。

渡邉　高いというのは、ドルが高いんですか。

吉野　一ドルが七百円とか千円とか。

渡邉　つまり、円が安いわけですね。

吉野　そうです。だから、輸出にはいいわけです。繊維などは、そういう類であったわけですね。ただし、生糸みたいなものは、幾らか知りませんが、割合に貴重品ですから、レートは高かったんです。

渡邉　それは、どこで誰が決めるんですか。

吉野　公団の意見を聞いて、司令部の連中が決めたわけです。中には非常に貴重品もあったわけです。例えば、今は、むしろ日本が輸入しているんですけれども、北海道の厚板があったんです。カシかブナか知りませんが、床の間に敷くような厚い板で、この北海道の厚板は、飛ぶように売れたんです。

伊藤　不思議な感じがしますね。

吉野　今は、日本が輸入しています。それから、養蚕農家の繭のタネです。

伊藤　蚕種。

吉野　あれが非常に高いんです。高いのみならず、司令部がコントロールして、「これは日本の唯一の技術だから、どこにも売っちゃいかん」と。ところが、公団や商社のほうでは、「インドからバイヤーが来て、『高く買う』と言うから、ひとつ契約しよう」と言うのです。しかし、司令部は止めるわけです。そうすると、それを闇で輸出する奴が出て来る（笑）。司令部のほうでは一所懸命、日本の「宝物」を保護しようとするんだけれども、下のほうでは、どんどん儲かるから安く売っちゃえと……。

渡邉　公団というのは、お役人ですか。

吉野　長とか何とか、上のほうの人にはお役人がいたかも分かりませんが、大部分は昔から商売をしていた連中で、繊維輸出組合とか生糸輸出組合とか、組合が母体でしたから、その組合が商売していた貿易商社と一緒になってつくっていたわけです。

伊藤　貿易公団ですか。

吉野　そうです。

渡邉　それは、通産省ができる前ですか。

吉野　前です。貿易公団です。だから、貿易庁の時代です。

渡邉　その監督下にあるんですね。

吉野　そうです。貿易庁が幾つかの公団をつくって、それがまとまって商売をする母体をつくったんです。

渡邉　貿易庁のお役人さんは、通産省ができると、こっちへ入り込んだんですか。

吉野　通産省ができたときに移って来た者もいますが、その大部分は官僚の人たちです。あとはエキスパートか何かですが、貿易庁ができた頃には、自分の会社をつくっていたかも知れませんね。

伊藤　いろんな業界の団体の人になったんじゃないですか。

吉野　そうです。業界の団体の人が、役人みたいなことをやっていたわけです。名目上は公団貿易であって、司令部がやるということになったわけです。外国との接触は、日本人は直接にはできないというこ

とですが、そうは言っていられませんからね。向こうの民間人が、どんどん日本に物を買いに来ますからね。

渡邉　まだ通産省にいらっしゃる頃に、朝鮮戦争が起きますね。その辺は、どういうご記憶ですか。

吉野　特需になってきますと、日本からの鉄鋼だとか自動車の部品だとか、そういうものが売れるようになったわけです。

渡邉　それから、「糸偏」とか言って……。

吉野　そういうものがブームになっていたわけですけれども、僕は特需であるということは意識していたし、日本も貿易が全般としてどんどん伸びているということも意識していたんですが、特需から来る何か特殊な点は、記憶にないですね。

渡邉　お仕事には直接関係ない？

吉野　なかったですね。あまり憶えていません。

コメを買いにビルマへ

渡邉　話がちょっと戻るようですが、局長は武内龍次さんで、そのほか市場一課で一緒にお仕事をなさった方には、どういう人がいらっしゃるんですか。

吉野　課長は日向（精蔵）さんです。

渡邉　通産畑の人ですか。

吉野　外務省の人です。後にスウェーデンの大使になりましたが、ご健在です。

もう一つ思い出したのは、その頃、僕は司令部の命令でビルマにコメを買いに行ったんです。あの頃、日本は米不足ですから、「コメを買いに行け」と言われた。どうして僕が選ばれたか分かりませんが、ともかく接触している司令部の、貿易関係のことをやっているフォリン・トレード部の命令で行ったんですよ。

当時、もちろん日本の飛行機はないですから、ＢＯＡＣ（ブリティッシュ・オーバーシーズ・エアー・コーポレーション）で、羽田からまず香港へ飛んで、香港で一晩泊まるわけです。この宿泊代は、飛行機代の中に入っているんです。ペニシラー・ホテルか何かに泊めてもらって……。それから、香港からバンコクまで行って、バンコクでまた一晩泊まるわけです。そして翌日、ビルマのラングーンに着く。そういう旅行をした。

そこで、司令部にどうやってコンタクトを取るかと言うと、ビルマのアメリカ大使館の代理大使とコンタクトする。司令部からの指令は全部、アメリカ大使館を通じて僕のところへ来るのです。それから、僕が訓令を仰ぐのも、アメリカ大使館を通じて、向こうへ電報を打ってもらうわけです。それで、二百万トンか何かのコメを買えと言われていたわけです。

伊藤　相手は何ですか。

吉野　「ライス・マーケティング・ボード」と言って、コメを売る公団みたいなものがビルマにあるんです。

伊藤　役所ですか。

吉野　役所ですが、半官半民みたいなものです。そのチェアマンは、向こうでは農林大臣の下ぐらいで、相当経験豊かな中年の男でした。彼と、僕が交渉するわけです。それで、二百万トンのコメを買う交渉

では、値段の点、品質の点、船積みの点など、いろいろ合意するまで、ひと月近くかかったんです。その間に僕は、ビルマの通商大臣や大蔵大臣に会えるわけです。未だ日本では官補にもなれないような者が、司令部の命令でやるのです（笑）。

面白いもので、僕はコメについて何も知っているわけじゃないんです。日本の商社のエージェントが現地にいまして、前から店を開いていましたから、（日本から）僕に一緒に付いて来たとは思いません。彼が、「日本人は、こういうものを好みますから、これを買ったらいいでしょう」とか、「船積みには、あの港は波が荒いから、こっちの港にしなさい」とか、みんな教えてくれるわけです。その知恵を借りて、彼等と交渉したんです。

そして、協定を結ぶまで、ひと月くらいかかったんですが、僕は一週間か二週間の旅費しか持って行かなかったんです。ホテルは、その後、経営が悪くなって（社会主義の時代は）廃業していたようですが、当時はラングーンで一番有名なストランド・ホテルでした。そこへ泊まって、終戦直後ですから、日本ではひもじい思いをしていたのに、急にターバンを巻いたインド人のボーイにサーブされました（笑）。

渡邉　急にお殿様になっちゃったんですね。それは、いつ頃ですか。

吉野　平和条約が発効する前でした。帰って来てから一ヵ月ぐらいして、平和条約が発効しました。五一年の三月頃ですかね。

渡邉　その頃にコメを買いに行って来い、と。

吉野　そうです。その頃、日本はタイからも三百万トン買って、ビルマからも二、三百万トン買っていたわけです。それは二、三年続いて、その後日本のコメ事情が良くなって、やめになっちゃったんです。もちろん、当たり前の話ですが……。しかし、当時は外米でも何でも、足りないくらいですからね。

伊藤　契約して、無事に日本に着いたんですか。

吉野　ええ。契約が成立する直前になって、武内龍次さんが市場二課長をやっていた外務省の加藤匡夫――二、三年前に亡くなった――と、当時、通商局参事官の松尾秦一郎を引き連れて、ラングーンにやって来ました。彼等は、世界旅行をしている途中でした。もちろん司令部の許可を受けて、戦後初めての日本側の発意による海外出張です。

というのは、日本人は司令部の命令でいろいろやってきたけれども、担当者は世界の事情に暗い。これから、追い追い日本人は自前でやって行くことになるから、その前に一回世界を見ておきたいということで、許可を得たんでしょうね。武内龍次は吉田総理に覚えが良かったから、吉田さんの口添えもあったんでしょう。それで、武内龍次が加藤さんたちを連れて、ラングーンに回って来たんです。

伊藤　お金が足りなくなって、ホテル代はどうしたんですか。

吉野　結局、どうにもならないですよね（笑）。現地のエージェントが、「我々が出しますから」と、ホテル代を払ってくれたんだろうと思います。

武内龍次と一緒に来た松尾秦一郎は、後に通商局長になって、通産省を辞めてからは丸紅の社長になりましたね。彼に、「こういうことで、初めは一週間か二週間の予定で来たのが、もうひと月になって、旅費がなくて困っている。どうしたらいいか」と相談すると、「私が商社の奴に話すから、商社から借りておけ」と言われました。それで、おそらく貸してくれたんだろうと思います。帰って来て、「商社の連中から借りた金を払わないわけにはいかんから、何とかしてくれ」と松尾さんに訴えたら、通産の会計課が払ってくれたらしいです。

渡邉　武内さんが見えたのは、吉野さんがラングーンにいらっしゃる頃ですか。

吉野　そうです。僕は前以て知っていたわけではなくて、偶然に。

渡邉　「吉野救出作戦」に行ったわけではないけれども、偶然、そういう時期に重なったというわけですね（笑）。

吉野　松尾秦一郎と、武内さんと、加藤さんが見えたんです。それは官吏の、戦後最初の世界旅行じゃないですかね。

渡邉　……でしょうね。その頃は、あまり外へ出る人はいなかったでしょうからね。

伊藤　行かれるとき、旅券はオキュパイド・ジャパンですか。

吉野　もちろん、オキュパイド・ジャパンです。司令部が出してくれたんだろうと思います。旅券はあまり憶えていないから、持って行ったかどうかも忘れました。司令部発行の証明書みたいなものを持っていたのかも知れません。

伊藤　でも、旅券なしで行くということはないでしょうからね。

吉野　それはないですからね。向こうは独立国ですから。

伊藤　コメは無事に着いたわけですか。

吉野　無事に着いて、配給されたと思います。船をどれにするかとか、いろいろなアレンジもしなければなりません。それから、その間に価格の交渉をしなきゃいけないんです。僕は、「もう飛行機をブックした。明日発つから、これでサインしろ」と、ビルマ側に詰め寄りました。本当に、毎日のようにＢＯＡＣにブッキングしていたわけです。ところが、向こうが折れないもんだから、その度に延ばしていたんです（笑）。そういうことが二、三回あって、ＢＯＡＣのローカルの連中から、「吉野さん、あなた、いつ本当に発つんですか」というような話があったんです（笑）。

武田　お一人で行かれたんですか。

吉野　そうです。

武田　特命全権ですね。

渡邉　我々も知らない間に、ビルマ米のお世話になっているかも知れませんね（笑）。

伊藤　外米を食べたからね。

渡邉　通産省時代の話をずっとお聞きしてきましたが、総まとめとして、どんな感じですか。通産省対外務省なんていう大きな話は、当時ありましたか。

吉野　上のほうでは、しょっちゅう人事の問題とかがあったらしいけれども、僕等は別に通産省とか外務省のために働いているという気は全然なかったです。むしろ、日本のために働いているというつもりですから、「自分の仕事さえできれば、どこでもいいわい」と思っていたわけです。そういう意味では、思う存分働く機会を、当時の通産省は与えてくれたと思います。

渡邉　実務レベルでは、通産省系＝商工省関係の人と、外務省の人とはミックスしてやっていたわけですね。

吉野　そうです。

伊藤　同じ課の中でも、そうなんですか。

吉野　同じ課の中でも。大部分は通産省の人でしょうね。けれども、課長の日向さんと僕と、あと二人ぐらいは外務省の人がいました。一期下の谷（盛規）さんとか、後にガーナの大使になられた檜垣（正忠）さんもいました。

伊藤　課の中では係とか、そういう形で分担があるわけですか。

吉野　分担はありました。僕は市場一課の首席事務官ということになっていました。

伊藤　全体の総括ですか。

吉野　そうです。そして市場課も、地域を分けた。最初は一課、その後、二課ができて、市場一課は東南アジアとスターリング地域、二課が米国とかヨーロッパです。そのうちに三課ができまして、これが中国でした。そのように決まっていったわけです。仕事が増えてくるに従って、課を増やしたわけです。

伊藤　許認可権は？

吉野　許認可権は、ないんですよ。許認可権は、輸出については輸出課が、輸入については第一課、第二課と二つぐらいあったかも知れませんが、我々はもっぱら市場のサーベイだとか、協定を結ぶ仕事をしました。もっとも、オーソリティーは司令部にあって、我々はそのお助けをしたり、知恵を出したりすることになっていたわけです。

けれども、初めのうち司令部の連中は、「我々のほうが、よく知っているから、お前たちは聞いていろ」というふうだったんですが、そのうちに事件が起きたんです。

それは、パキスタンと日本が通商協定を結ぶということで、ハスニという向こうの農林次官がやって来たわけです。そして、彼は一所懸命、司令部と協議をするけれども、司令部は、すぐには通商協定を結ばないわけです。ハスニは一週間ぐらい、ぼやいておったわけです。我々はその状況を知って、ある日、密かにハスニと話をして、我々が協定文をつくって司令部に持って行ったのです。「ハスニは応諾したから、司令部側はサインさえすればいい」と。そういうところまで、お膳立てをしたんです。だんだんと、その辺まで日本は知恵が付いてきたわけですね（笑）。

ところが、司令部の外国部のクロスナーという課長――彼は弁護士です――は、「いつかは、お前たちに権限を移譲しようと思っているけれども、未だ外国と協定を結ぶ権限はない。それをどうして、ここまで交渉したんだ。けしからん」と言って怒るんです。ところが、彼は僕に対しては、そんなに怒らないわけです。僕は、しょっちゅう彼と親しく付き合っていたから……。そこで彼は、「誰の許可を得たんだ。通商局長を呼べ。そいつを連れて来るまで、『うん』と言わん」と言うわけです。

通商局長というのは黄田多喜夫さんで、僕は困って、「実は、密かに先方と通じて協定を結びましたから、ひとつ謝ってください」と、彼を連れて司令部へ行ったわけです（笑）。そうしたら、クロスナーは黄田さんの前で、「どうして、お前たちは権限がないのに先方と交渉して、こういう文章をつくったんだ」と怒るんです。黄田さんは黙って聞いているだけです。「悪かった」とも言わないんです（笑）。それで、クロスナーは机の上のパーカーのインキ壺を持ち上げたんです。インキ壺を投げたら、黄田さんはケガしちゃいますから、僕は、「ああ大変だ。そこまでいかないように……」と祈っていました。彼は、二、三回持ち上げたんです（笑）。

しかし、結局うやむやになったんです。それは、彼等もだんだん分かってきたわけです。当時の状況としては、「今にお前たちに権限を渡すから、よく覚えておけ」と言って、我々にいろいろ教えるわけですが、いつまで経っても権限を渡さないのです。我々はニュースで、極東委員会の決定で、早晩、権限を我々に委ねることは分かっているのです。だから、その準備のために、こういうこともやったんだ、と。

ある程度のジャスティフィケーションはあるわけです。しかし、確かに、未だ権限がないのにやったわけです。

そういうとき、黄田さんは、決して司令部に胡麻すりなんかしない。クロスナーが「首にしろ」という指令も、当時、その課長が上司に上げてSCAPに報告すれば、できないことはないんですけれども、雰囲気は、もうそんなんじゃないのです。我々も、「彼等には、早く退いてもらわなきゃいかん」という雰囲気になってきたもんですから、そういうことができたんでしょうね。そういうことで、うやむやになっちゃった。

渡邉　GHQ／SCAPのセクションはどこでしたか。

吉野　FTS（フォリン・トレード・セクション）ですが、クロスナーの上にヘールという、かなり切れる次長がいて、マーカットが一番上で、局長です。その下に課長がいて、それがフォリン・トレードのアグリーメントなんかの責任者でした。

渡邉　そうすると、先ほどのビルマにコメの買い付けに行くというのは、レギュラーのお仕事の範囲なんですか。

吉野　おそらくマーカットか、その下のところから出て来たんだろうと思います。

渡邉　吉野さんの市場一課のお仕事とは、ちょっと違うんでしょう？

吉野　そうですね。スターリング地域ということでは関係がありますけれども、それしかないです。

伊藤　でも、一種の協定じゃないですか。

吉野　まあ、協定ではありますね。しかし、それは司令部の代理として……。

渡邉　市場一課の仕事からは……。

吉野　本来は、司令部がやることだから。

渡邉　でも、そのお蔭で、好い目を見たところもあるわけでしょう。ラングーンで一ヵ月……（笑）。

伊藤　向こうに、商社員がいたから助かった。いなかったら、立ち往生じゃないですか。お金がないし……。

吉野　本当に、そうですよ。

通商航海条約をつくる

渡邉　では、ぼちぼち外務省にお戻りになってからの話に移りましょうか。一九五一年の八月に外務省の、当時は国際経済局と言ったんですか、そこに戻られた。

吉野　国際経済局と言いました。

渡邉　後で、経済局と名前が変わるんですね。

吉野　「国際」を取ってね。しかし、経済局という名前は、「通商局じゃなくて、経済局だ」ということを意識して付けたわけです。湯川（盛夫）さんが局長でしたね。

伊藤　通産省へは出向ですか。

吉野　出向です。

伊藤　そうすると、二年ぐらいで戻すというような感じですね。

吉野　そうです。二年か三年で帰って来たわけです。

伊藤　それで、また誰かが出て行ったということですか。

吉野　日向課長の後任には、山本良雄さんとか、島静一さんとかが行

きました。

渡邉　通産省に、外務省の人がずっと居るというのは、いつ頃まで続くんですか。

吉野　最初は司令部の命令で通産省ができて、それでやった人事ですが、そのうちに通産省はエスタブリッシュしたわけですから、そこで通産省と外務省との人事交流が始まったわけです。やはり外務省から人が来て、刺激を与えてくれたほうが通産省のためにもいいという結果になったのでしょうね。

渡邉　そういう人事交流は、その後も続くわけですか。

吉野　相当長く続いたわけです。

伊藤　人事交流ということは、逆に通産からも外務省に？

吉野　その頃から、通産省の人が外務省にも入って来ました。外務省の課長、つまり経済局の課長の一人ぐらいは、通産省から来ていました。僕は経済局の課長をやりましたが、そのときは通産省の首席事務官クラスの人が三代ぐらい続けて来ていました。みんな優秀な人で、それはそのままずっと続いたわけですね。だから、ある意味で通産省とはライバルではあるけれども、お互いに内部を知り合った、お互いに相手のメリットを認め合った関係ではあったわけです。

渡邉　吉野さんは約二年間、通産省にいらっしゃった。出向は大体、それぐらいの期間だということで、外務省にお戻りになられたわけですか。

吉野　そうです。もう一つは、平和条約ができて、これから外務省も……。

渡邉　本来の仕事が忙しくなる。

吉野　だから、帰って来いということもあったんだろうと思います。

渡邉　ちょうど、講和の時期ですからね。そして、いまお話しのように、湯川さんが局長で……。

吉野　森治樹さんという人が課長でした。

外務省へ帰って来ますと、もちろん我々は通産省で得た知識は持っていますけれども、やはり外務省は外務省らしい仕事で、「まず通商航海条約をつくれ」ということだったんです。その手始めとして、まず米国との通商航海条約を締結しようじゃないか、と。それから、イギリスと締結する。こういう順序でやろうということになりまして、その交渉の準備としての勉強を始め、そしてアメリカ大使館と日米通商航海条約（日米友好通商航海条約）の交渉を始めたわけです。この交渉は一年以上かかりましたが、ウエアリングという、アメリカの経済担当の参事官が湯川局長のところへ来て――僕等も参加して――だんだんと決めていったわけです。

その前に、準備として、過去において日本が結んだ通商航海条約の「典型」というものをつくったのです。最恵国待遇や内国民待遇というものが、どの条約にはどう書いてあり、どの条約にはどうあるか、それを最初の日米通商条約（一八五四年、日米和親条約）から始まって、ずっと明治、大正時代に結んだ条約を全部洗って研究したんです。そうこうしているうちに、アメリカ側が、戦後最初に結んだイタリアとの通商航海条約を見せてくれたわけです。

伊藤　アメリカが、ですか。

吉野　アメリカが……。それで、我々は戦後の新しい通商航海条約は、こういう形になるんだというヒントを受けたわけです。アメリカ人らしく、非常に詳しく書いてある。しかし、本質は全然変わっていない。そこで、最恵国待遇とはどういう形で、どういうように使うのかとい

うことや、内国民待遇とは一体何かとか、そういうことを法律的にも研究したわけです。部内で、そういう研究会を開き、他方、彼等と交渉していったわけです。

いま顧みると、一番大事なことは何か。日米通商航海条約（一九一一年二月）を結んでから四十年ぐらいでしょう。それから、その間の日英通商航海条約（一九一一年四月）も同様ですが、今となっては、こういう通商条約は、ほとんど無意味なんです。その間に日本はＧＡＴＴに加入（一九五五年六月）して、初め日本は三五条の適用があって、全面的な最恵国待遇を受けなかったけれども、そのうちにこれが撤回され、更にＧＡＴＴよりコンプリヘンシブなＷＴＯ（一九九五年一月）というものができた。そうなると、どうなるか。

例えば、日米通商航海条約には、「金融業は、お互いに他の国には許さない、その国の専管事項である。ただし、もし金融業の一部を他の国に許した場合には、相手国はそれに均霑する」と規定されているんです。それから、小売業も同様です。「小売業はデパートも含めて、外国人は排除してよろしい」と規定しているわけです。アメリカも、そういうことに同意したわけです。また、鉱山業も自国の専管事項になっています。ところが、そういうものが全部、この三、四年のうちに変わってしまったわけです。そんな制限は一切やっちゃいかん、と。

マレーシアなんかが、つい最近までごねていた保険業も含めて、「全部自由化しろ」という世の中になっちゃったんですね、その間に……。だから、あれだけ苦労して、あれだけ一所懸命、国益を守ると言って交渉してきた航海条約も、その後ＧＡＴＴやＷＴＯの進展で、全部変わってしまった。そういう世の中になってしまったわけです。

それは、ペリーが来て結んだ通商条約（日米和親条約）や、次に結んだ日米通商航海条約の存続期間に比べても、もっと短い期間に、条約の意味が全部なくなっちゃったわけです。

渡邉　後知恵なのかも知れないけれど、私なんかが見ると、どうしてあんなに一所懸命、二国間の通商条約を結んだのかなと、ちょっと不思議だったんですが……。当時、少なくともＧＡＴＴというものがあるし、これからそういうものになるという認識はあるわけでしょう。

吉野　だから、貿易のほうはＧＡＴＴでカバーする。しかし、国内の産業のうち、小売業、流通業、金融業、保険業、鉱山業は最恵国待遇のみです。鉱山なんて、今、日本で手を出す者は誰もいないですけどね。それから、アメリカへ行って、する人もいないから、あまり意味がないんですけれども……。

渡邉　紙の上では、未だ、これは残っているんですか。

吉野　もちろん。

渡邉　破棄は、していませんよね。

吉野　だから、時々、役に立つんです。通商航海条約を根拠にして、「おかしいじゃないか」と言うことが、何かあるんです（笑）。

渡邉　しかし、条約というのは面白いもんですね。破棄しない限り、いつまでも残るものなんですね。

伊藤　期限は、ないわけですか。

吉野　期限は、ないです、破棄するまでは存続する。例えば、ＧＡＴＴやＷＴＯでカバーしないこと――役人になれるとか、なれないとかというようなこと……。

渡邉　それも入っているわけですか。

吉野　それは規定されていませんから、形式的には、もちろん役人にはなれないわけです。

渡邉　でも、それも最近、変わったんじゃないですか。

吉野　それも変わりつつあるんです。

渡邉　少なくとも、東京大学教授にはなれます。

吉野　こっちは許すことはできますが、相手は要求できないんです。しかし、アメリカ人に東京大学の教授を許したら、豪州人にも許すことになる。そういう問題はあるんです。

渡邉　なるほど。とにかく、そういう一連の通商航海条約が、その頃のメインの仕事であるわけですね。

吉野　その次は、これはメインの仕事ではなかったんですが、「経済局としてフォローしろ」と言われたのは、外債交渉です。日本の外債です。戦前にドイツ、フランス等で日本の国債を発行しましたから、それをイギリスやアメリカの外国銀行が相当持っていたんです。ところが、戦争によって、それが払えなくなったし、今度は一ドル＝三百六十円になって、外貨で返さなきゃいかんわけでしょう。それを我々は、あまり意識していなかったのですが、あるとき吉田総理から「紙」が下りて来たんです。その「紙」は、二回ぐらい下りて来たかも分かりませんが、一つは「アメリカ一辺倒になっちゃいかん」と。そのときに初めて「一辺倒」という言葉は、どういう意味かということが分かったんですが、吉田さんも洒落た言葉を使ったもんですね。

　次に、当時の日本は、まだ金がなく、一九六五年までは日本の外貨事情は苦しかったわけです。そこで、外債を募ろうとしたわけです。しかし、信用のために、まず旧債を全部処理した後で外債を募集する形にしなきゃいかん、と。従って、「旧債の弁償問題を研究しろ」と。それから、賠償問題です。

伊藤　外債問題のほうが、先じゃないでしょうか。

吉野　先でしょうね。それで、津島寿一という人が日本の代表として、上田事務官という大蔵省の人を秘書に、欧米を回って支払いの交渉をして来たわけです。そのときも金約款だとか、約款にもいろいろあるんです。金（きん）で払うものとか、ドル建ての外貨で払う金為替約款とか、何かいろいろ条件が違うんです。それをどうやって解釈するかということで、「ともかく外務省としても、それをフォローしろ」ということだったんです。

伊藤　しかし、これは大蔵省の……。

吉野　最終的には大蔵省の仕事ですね。しかし、国が補償していますから、国という形では外務省も関係がある、と。これは、吉田さんのほうから下りて来たんでしょうね。だけど、交渉自体は大蔵省の人がやったわけです。

　その次に、賠償問題があります。これは、むしろ東南アジアをだんだん開発していかなければいけない。日本も東南アジアとの貿易を拡大していかなければいけないし、東南アジアに投資しなければいけない。そういう考慮からと、もちろん（戦前日本は）彼等を侵略したわけですから、その償いをしなきゃいかんということで、インドネシア、フィリピン、ビルマ……。

伊藤　ベトナム。

吉野　ベトナムは後ですね。

渡邉　ビルマが最初ですね。

吉野　そういう国に、どういう率で賠償するかという問題です。その前に、大野勝巳さんが東南アジアを回って来て、「こういう率でやったらいいんじゃないか」という話を、我々にしてくれました。だから、これは大野さんに訊くのが一番いいと思います。しかし、我々に「交

渉の助けをしてくれ」ということで、別にインテンシブにやったわけじゃないですがね。

渡邉　これは外務省の中では、どうなんですか。アジア局と……。

吉野　アジア局の主たる仕事ですね。

渡邉　主管はアジア局で、経済局のほうは……。

吉野　間接に聞かされていたわけです。話はちょっと飛びますが、インドネシアは賠償もあったんですけれども、後になってスカルノが日本を含めて――日本が一番大きいんでしょうが――外国からかなりの借金をしたわけです。

股野　賠償担保借款もありましたね。

吉野　それが、スカルノ政府が倒れてしまって、しばらくはマリック外相だとか、その他の連中がやっていて、それからスハルトになったわけですが、その間に過去の債務をリスケジュールして、さらに新たに援助するという交渉があったわけです。

渡邉　六〇年代に入ってからですね。

吉野　そうです。僕が経済協力のほうをやった頃の話です。

渡邉　国際経済局は、このときに新設されたんですね。

吉野　そうです。

渡邉　初代が湯川局長で、黄田さんが戻って来られて局長になるという感じですが、その辺は上司として、どういう印象をお持ちですか。

吉野　その頃、外務省へ戻って来て初めて、「電報を書け」と言われて訓令を書きました。すると、まず第一に森課長が僕の書いた文章を直すんですよ。直されると、確かに直したほうがいいんです。「はあ、電報文はこうやって書くのかあ……」と思ったんです。その後、その電報を湯川さんのところへ持って行くと、湯川さんが、またその上に訂正するのです。これもまた、確かに表現といい、内容といい、実に妙を得ている……（笑）。だから、「はあ、こんなに外務省の人は電文を書くのがうまいのか」と感心したことを憶えています。

　ところが、そのうちにテレックスになりますから、散文的になっちゃって、これは誰でも書けるし、詳しく書けばなおいいということになって、その風習はなくなっちゃったんです。しかし最初は、「我々の上司は、何て、その道に長けた人たちか！」と感心しましたよ。

渡邉　いつ頃、そういうものがなくなるんですか。

吉野　テレックスができてからですよ。仕舞には、電文は上の人が見なくなっちゃって、「早く打っておけ」ってことになったのです。

伊藤　このときは、国際経済局の一課ですか。

吉野　一課、二課……と、五課、六課ぐらいあったかな。だんだん増えていったんです。

伊藤　どういう分課ですか。

吉野　一課は総合的なことをやって、二課がアメリカ・南米、三課がアジア、四課がスターリング地域、五課が中国その他です。

伊藤　吉野さんの日常的なお仕事というと？

吉野　一課のときは、総合的な話ですね。賠償だとか外債だとか、そういう問題がまず下がって来て、そこから各省に跨るとか。それから、アメリカとの通商航海条約の交渉は、湯川局長とウエアリング参事官がやるということですから、その主な仕事は一課が担当したわけです。それで二課のアメリカ課は、あまりタッチしなかったですね。

渡邉　これには条約局は？

吉野　もちろん、条約局も参加しています。

伊藤　どっちが主なんですか。

吉野　交渉の主は湯川さんです。湯川さんは条約局の出身でもありますから、どっちでも良かったんでしょうけどね。

伊藤　本来は条約局の仕事ですね。

吉野　だから、もちろん条約局からも参加していましたよ。

伊藤　ただ、中心になったのは湯川さんなんですね。

吉野　ええ、経済局ですね。

渡邉　かなり例外的に、そうなったということですか。それとも、その種の通商航海条約は経済局長のマターですか。

吉野　昔は、通商局の仕事でもあったわけです。

渡邉　戦前はね。

伊藤　では、日米だけじゃなくて、日英等々と、ずっとやっていくわけですか。

吉野　そうです。しかし、英国の場合は経済四課です。

股野　日英の通商航海条約は遅いですね。

渡邉　あれは、大野勝巳大使の頃です。

股野　六二年十一月ですね。日米通商航海条約が五三年四月ですね。日英は、どうしてそんなにかかったんですか。

吉野　日米が先行していたんですね。それで、その次に日英をやったんです。

股野　日英の勉強はされたけれど……。

吉野　日英は勉強しただけじゃなくて、交渉もしたんです。日米が先で、それを結んだ後で、同じようなものをつくろう、と。

伊藤　日英のほうが難しかったんですね、いろいろ利害関係が……。

吉野　そうかも知れません。何か、いつまで経っても交渉はまとまらず、だらだらしてはいました。

伊藤　これも二年ぐらいですね。

渡邉　五一年から五三年ですから、約二年間、今のポジションにいらっしゃったということですね。

伊藤　一課の何ですか。

渡邉　首席事務官ですか。

吉野　憶えていませんが、少なくとも僕の上には森さんがいて、中山（賀博）さんか、宇山（厚）さんが……。宇山さんは課長になったかな。外務省では、僕は首席事務官ではなかったんじゃないですかね。首席事務官らしい仕事はしたことはありません。

渡邉　いずれにせよ、湯川局長、森課長、そして吉野さんというセッティングですね。

吉野　そうです。

日豪通商協定を結ぶ

渡邉　戦後は特に、外務省の中で、だんだん経済問題が重要になって参りましたね。そうすると、外務省のお仕事で、経済局というのは端的に言うと、よくできる人を送り込むとか、そういうふうになってくるんですか。

吉野　割合、人数は多かったですね。世帯も大きかった。他に、外務省としては地味な仕事もあったんでしょうが、それらは、それほど目を惹くようなことはなかったので、国際経済局ないしは経済局の仕事は外務省の中では相当派手だったと思います。

伊藤　外務省の経済局は、新聞記者なんかの取材の対象としてはどうなんでしょうか。

吉野　今ほど新聞記者はハッスルしていなかったですけれども、しょっちゅう取材はありましたよ。

伊藤　記者が取材に来るということですか。

吉野　取材とか、訊きに来るということはありました。それは通産省の場合も、同様ですけれども……。

一つ、それで思い出すのは、後の話ですけれども、僕が第四課長、つまりスターリング課長をやっていたとき、日豪通商協定を結んだわけです（一九五七年七月）。これはまた、二年か三年かかってやったんです。そのとき、日本の代表として牛場さんに二回ぐらい豪州へ行ってもらって、一回目はできなくて帰って来てもらった。また、もう一回、頭を下げて頼んで、出張してもらって、結局、最終的にはうまくできたんですが、そのとき新聞記者と話をしたことは憶えています。

それは、一週間ぐらい前、いよいよ協定ができるという頃になって、急に豪州側が、「協定がサインされるまでは一切、新聞に発表してもらっては困る」と。というのは、豪州には国内の中小企業の反対を抑えて、日本から安いものが入ってくる、と。それは、日本に小麦や鉄鉱石を売るために必要である。つまり、両国とも貿易を拡大するために必要である。しかしながら、この協定は日本に最恵国待遇を与えることになっている。それから、ＧＡＴＴの三五条の撤回も、三年後に行うという条項も入っている。従って、これが、もし新聞に漏れたら協定が駄目になるから、一切話しては困る、と。その代わり、協定ができたら、すぐに新聞に書いてよろしい、と。「日本側では、追い追い新聞記者に、会見その他で漏れているらしいから、その点は絶対に気を付けてやってくれ」という頼みがあったわけです。

そこで、どうして前以て新聞に出さないで済ませるか、頭を悩ましました。つまり日本の場合は、今度の「四ヵ国会議」だとか、すぐ出ちゃうでしょう。そんなことは不可能だと思いました。また、一方においては、上司や各省はブリーフしながら、何とかして豪州の要望にも沿わなければならない。「どうしたらいいのか」と思案した末、霞クラブ（外務省記者クラブ）のボスか何かに相談したんです。そうしたら、「あなたが各新聞社の編集局長を訪ねて、『こういう事情だから、絶対に出さないでくれ』と頼み込む以外に、方法はありませんよ」と言われました。

それで、「面倒臭いことをやらせるなあ」と思いましたけれども、朝日、毎日、読売、日経の編集局長を一人一人訪ねて、「サインが終われば一切書いてよろしいから、それまでは出さないよう頼みます」と言って回ったわけです。そうしたら、「日本と豪州が最初の協定を結ぶんだから、私たちも我慢します。しかし、協定文を始めとして、あらゆることを、ちゃんと教えてくれ」と。どうやって教えたのか、それは憶えていませんが、そういう約束をしました。そして、いよいよサインが済んで、でき上がりましたら、その翌日の新聞に全部ダーッと出たんです。それで初めて、ほかの人は、「そんなものができたのか」とびっくりしたんですが、それがかえって効果があったんです。新聞もよく協力してくれたし、そのお蔭で日豪協定がえらいパブリシティを浴びたんです。だから、それは非常に効果がありました。

渡邉　「書くな」と言うから、みんな関心を持つんですね（笑）。そんなに大事なことがあるか、と。

吉野　もう一つ、先ほどちょっと触れましたが、豪州側が協定の附属

文書として、「ＧＡＴＴの三五条のインボケーションを、三年後にはやめます」というサイドレターを書いたんです。我がほうは、鬼の首でも取ったように喜んだわけです。長年の懸案が、まず豪州から外れるということで……。ところが、協定を結ぶについては各省と相談するわけですが、最初は農林省も反対したし、通産省も反対したし、みんな反対したんです。一番反対したのは、大蔵省なんです。

なぜかと言うと、そのときの課長か首席事務官が堀という、その後、「世銀」にも出向していた男なんです。僕と同じぐらいの年で、アメリカにいたときは、一緒にいろいろやったので、よく知っているんです。その堀が、「豪州が三年後に三五条を撤回するなんてことは、あり得ない。信じられない。俺の首をやるよ」と言ったんです。そう言われると、どうにもならない。どうしたらいいかと思ったら、「各省の次官を直接訪問しなさい」と忠告してくれた人がおりました。だけど、局長を差し置いて、そんなことができるわけがない。湯川局長は、日豪協定にはあまり熱心じゃなかったんです。

渡邉　それは、まだ湯川さん時代ですか。

吉野　そうです。それで弱っちゃって、「局長を差し置いて、それはできない」と思いましたが、しかし勇を鼓して、僕は課長でありながら大蔵の森永（貞一郎）次官と、通産の上野（幸七）次官と、それから農林次官（塩見友之助）と、その三人に会いに行ったんです。そうしたら、当時は次官がちゃんと会ってくれたんです。それで、「下の連中は、まだ反対しているけれども、この機会を失したら協定ができなくなります。次の閣議を通しますから、ひとつ協力をお願いします」と言って、説き伏せに回ったことを憶えているんです。幸い、その頃の次官は、みんな人柄が良かったのか、鷹揚だったのか知りませんが、よく僕が局長を通さずに言って来たことを聞いてくれたと思います。それで局長のところへ行って、「次官をみんな下ろしましたから、ひとつ頼みますよ」と言ったことを憶えています。

渡邉　通商航海条約というのは、日豪の場合も、先ほどの日米の場合も、東京で交渉をやるんですか。

吉野　日豪の場合は、通商航海条約じゃなくて通商協定です。もちろん、通商航海条約的なものも入っていますけどね。この交渉は、大部分はキャンベラでやったんです。それで僕等が訓令を書いたんです。それで牛場さんが二回出かけて行って、向こうで交渉してくれたんです。

伊藤　牛場さんは、どういう立場で行ったんですか。

吉野　彼はビルマから帰って来て、まだ外務省で新しい職に就いていなかったから、「ちょうどいいな」と思って頼んだわけです。彼は通商協定ができた後に、経済局に来たんです。それで、結果的にはうまくいったわけです。

渡邉　どういう資格になるんですか。大使は向こうにいましたね。

吉野　ですから、日豪通商交渉の日本代表です。

渡邉　先ほどの日米通商航海条約のほうは、湯川局長とウエアリングさんで、主として東京でやったんですね。

吉野　ほとんど、東京です。これはウエアリングが非常に熱心だったし、湯川さんも熱心でした。

渡邉　こういうのは決まったパターンはないわけで、その時その時の事情でやるわけですね。

吉野　そうです。

ワシントン時代——余剰農産物協定

渡邉　経済局第四課長の話の前に、二等書記官および一等書記官として三年間ほど（一九五三年十一月～五六年七月）、アメリカにいらっしゃったときの話をしていただけますか。

吉野　いろいろ印象はありますが、そのとき初めて接触した問題の一つは、当時、日本はアメリカから金を借りたり、援助をもらったりしていたことです。我々の一番大きな目的は、いかにアメリカからの援助を増やせるかという問題なんです。当時の日本は、それほどアメリカの援助が欲しかったわけです、どういう形でも……。そこで、どうやって援助をもらうかということを、策略として考えていたわけですが、アメリカにアンダーソンというコンサルタントみたいな人がいたんです。彼はヨーロッパで、アメリカの援助を配分する仕事をしていたんです。その彼に頼んで、日本大使館に薄給で来てもらって、僕が接触したわけです。

渡邉　ヨーロッパというのは、マーシャル・プランですか。

吉野　マーシャル・プランの配分をやっていたわけです。彼は、大使館から月百ドルもらっていたか、五百ドルもらっていたか知らないけれども、当時の大使館はあまり余裕はありませんから、大してもらっていなかったと思う。僕と、よく近くのカフェで二ドルか三ドルでコーヒーを飲んで、昼飯を食っていたんです。彼が言うのには、「日本がアメリカから援助をもらうチャンスは、幾らでもある。しかし、日本のプレゼンテーションは、非常にまずい。マーシャル・プランの参加国みたいに、もっとシスティマティックに計画をつくって来なきゃいかん」と。例えば、「日本は貿易の結果、外貨がこれだけ不足するとか、これだけの国内のインフラストラクチャーを一部外資で賄うために、アメリカから幾ら援助してもらえるかとか、日本経済をもっとシスティマティックに分析して、その上で算出された援助を要求しないと、ただ単に『援助をくれ、援助をくれ』と言ったって、やりようがないんだ」という話をしてくれたんです。

　そういう援助の要請の仕方は、今は当たり前ですよね。ＩＭＦができ、ワールド・バンクができて、そういう形で援助要請ができるわけですけれども、当時は考えたこともないことですから、初めて「はあ、そういうものかなあ」という印象を受けました。それで、当時は島（重信）公使ですね。

股野　新木（栄吉）大使が、ご在任のときで、次席は？

吉野　武内さんじゃないかな。

股野　武内龍次公使。

吉野　だから、武内公使の後に、島公使が来たのです。

股野　経済の班長は？

吉野　関守三郎さん。後に小田部（謙一）さん。

股野　着任されたとき、おられましたか。

吉野　着任したときはいなかったね。

股野　通産の松村（敬一）さんはおられたんですか。

吉野　いました。その上に通産の井上（尚一）公使がいました。援助要請問題は、島さんとも話したことがあるんです。

股野　島公使がおられたんですね。

渡邉　はっきりしませんが、確か新木大使のとき、島さんはいらっしゃったような記憶があります。大使館はマサチューセッツ・アベニューに当時からあって、今のところと同じですね。

吉野　そうです。ただし、武内さんが最初に住んでいたのは、国務長官のダレスの家の隣ですよ。そのあと島さんも、そこへ住んでいたわけですからね。

股野　じゃあ、交代したんでしょうか。

吉野　交代したんです。

股野　同じ家に住まれたんですか。

吉野　と、思いますがね。ともかく、島さんにアンダーソンの話をしましたら、「そうか、その通りしなきゃいかんかな」と言いまして、理解していただいたんです。しかし、日本側はそういうプレゼンテーションはしないわけですよ。大体、日本は、「助けてくれ、助けてくれ、援助が欲しい」と言いながら、政治家がその都度行って、「これ欲しい、あれ欲しい」という話をして、お土産をつくって帰って来る。あるいは、駐留軍の費用をまけさせてくるという形で、日本向けのお土産をつくって来るだけであって、欧州のマーシャル・プラン式の援助を、組織的にアメリカから引き出すことはしなかったわけです。それは、無理ないですよ。占領の形態が、全然違いますからね。それが、まず第一です。

渡邉　政治家が行って、お土産をもらって来るという意味で、最初の大きな機会が、五四年の吉田訪米のときじゃないですか。

吉野　彼は、何をもらって来たんですかね。

渡邉　「ハイウェーをつくるので、金をくれ」とか。世銀借款か何かになるんですか。

吉野　そういうことですかね。もう一つは、それとの関連で、岸さんが幹事長で、河野一郎が農林大臣ですね。

渡邉　それは、次の鳩山内閣でしょう。吉田さんのとき（第五次吉田内閣）は、愛知（揆一）通産大臣で、吉田・愛知で「金くれ」って言いに行ったんじゃないかと思いますけど……。

吉野　それで思い出したけれども、吉田・愛知の頃に、愛知さんが来たので、マーシャル・プランのやり方で、「こうやってやらないと駄目ですよ」という話をしたわけです。

伊藤　アメリカに行かれたときのお仕事は？

吉野　政務班長が田中弘人さんで、彼は「俺の下で働け」と、僕に言ったわけだ。それで、僕が政務をやっていたら、そのうちに渡辺武さんが、「お前、ちょくちょく国務省へ出入りしているから、俺のところへ来てブリーフしろ」と。それで、彼の下にもちょっと行ったし、もちろん松村さんとも経済の話をやったわけです。だから、何をやったか分かりませんが、三等書記官から一等書記官まで……。

股野　何でもやっていたんですね。

吉野　何でもやったけれども、どちらかと言えば、政務班でしょうね。田中弘人が上にいましたからね。

伊藤　具体的なお仕事は？

吉野　当時の日本大使館は、それほど大きな仕事はやっていなかったんじゃないですかね。本省の命令で何をやれというように、その都度、訓令が来て、「うまく口添えしてくれ」とかという形でやったわけでしょうね。

渡邉　世帯も、だいぶ小さかったんじゃないですか。

吉野　小さかったですよ。

伊藤　さっきの話で、国務省にしょっちゅう出入りして云々、というのは、どういうことですか。

吉野　渡辺さんみたいに偉くなっちゃうと、小回りが利きませんから、我々が下でピックアップした小さいインフォメーションを聞きたいわけですよ。渡辺さんと、先ほど申した上田という参事官が下にいて、彼等との会議に僕が呼び出されて、ブリーフしたりしていました。

股野　訪問先は東アジア局ですか。

吉野　東アジア局の日本部です。

伊藤　印象的な方はいらっしゃいますか。

吉野　ヘンメンディンガー。

渡邉　法律屋さん。

股野　彼が日本部にいたんですか。

吉野　日本部の経済をやっていた次長か何かで、その上にマックラーキンという課長がいたんです。マックラーキン、ヘンメンディンガー、それから日本にもいたクロンクがいて、それからフレーリーなどがいました。

股野　日本部長はマックラーキンですか。

吉野　マックラーキンです。あるいは、極東部長かも知れません。

股野　当時は、日本だけじゃなかったか……。

吉野　日本部長というのはなかったでしょうね。その後でできたんですね。ですから、極東部長。その上にマーシャル・グリーンがいました。

渡邉　クロンクという人は、その後どうなっちゃったんですかね。

吉野　まだ生きています。ワシントンの郊外にいると思います。

渡邉　ずっと日本関係みたいな仕事ですか。

吉野　いや、後に僕がドイツへ行ったときは、彼はドイツの参事官、大使館次席でいましたし、それから豪州の大使にもなったんです。

渡邉　確か、吉田訪米のときの、向こう側の資料を、彼がまとめているはずです。それで、名前を見たような覚えがあるんです。

股野　吉田訪米は五四年……。

渡邉　五四年の十一月。

股野　その頃は、おられたんですね。

吉野　そう。

股野　皇太子殿下が行かれたときは、まだおられなかったんですか。ちょうど一年ぐらい前ですが……。

吉野　いなかったでしょうね。

伊藤　この三年間で一番大きな出来事というと、どういうことになりますか。

吉野　日米余剰農産物協定（一九五五・五六年）というものを取り扱ったことを憶えています。これも、援助の一つです。

渡邉　パブリック・ロー何とか……。

吉野　そう、PL480です。

渡邉　これを、実際に向こうにいらっしゃる頃に手がけたんですか。

吉野　そうです。そのときは、河野大臣が来たり……。河野大臣は一年に一回ぐらいずつ、来ていたんじゃないですか。

それで思い出すのは、余剰農産物協定で売り捌いた米国の農産物（大豆、トウモロコシなど）の「見返り円」を、河野大臣が愛知用水の建設等で日本の農村に還元しようとしていたことです。米側はPL480で生じた「見返り代金」は、輸入国の農業の発展には一切使ってはならないという立場ですし、また法律にもそう規定されていま

す。この相対立する日米の利害を、何とかして妥協させようというのが、我々の交渉の焦点でした。日本からは河野大臣のほか、農林省の幹部も度々ワシントンを来訪し、米側説得に協力しました。

アメリカ議会がPL480を制定した理由は、言うまでもなく、当時から顕著になった米国の農産物の余剰を、無償でも良いから海外に捌こうという考え方です。これを輸入国の国内販売代金の積み立て（「見返り代金」は、日本銀行の合衆国勘定に積み立てられた）で、受益国の開発に使えば一挙両得という、うまい話です。ところが、輸入国のほうは、農産物の輸入により打撃を受ける農村に、これを還元しなかったら、政府は選挙に敗北するという現実です。愛知用水計画は、その両者を何とか妥協させようという苦心の案でした。結局、日米間の余剰農産物協定は二回ほど更新されて、その後廃止されました。河野大臣は熱心に訪米されましたから、お蔭で我々もPL480の解釈および交渉の専門家になりました。

渡邉　ちょうどMSA交渉あたりがあって、五三年か四年か。それで、今のパブリック・ローか何かが絡んだような記憶があるんですが、そういう安全保障関係は？

吉野　むろん、安全保障関係は背後にありました。しかし、私にとっては、それを本格的に扱ったのはアメリカ局長になってからですね。

渡邉　もっと後ですね。それから、当時、ビキニ事件（一九五四年三月）があったんですが、その辺はどうですか。

吉野　それは事件としては憶えているけれども、具体的な仕事の面では何も憶えていません。奄美大島の返還とかね。

渡邉　五三年十二月ですね。

吉野　あれも、ほとんど日本でやったんですね。結果を知らされたくらいです。

伊藤　すると、「ドカン！」というような大きな出来事は、その三年間にはなかったんですか。

吉野　なかったような気がします。

岸・河野の訪米

渡邉　最初にドイツへ行くときにも、アメリカを経由して行かれたわけですが、何かアメリカは変わったなという感じですか。

吉野　当時は、えらく日本人に親切でしたね（笑）。

伊藤　殴り倒した相手ですからね。

渡邉　弟子みたいなつもりで……。

伊藤　アメリカ三年間（一回目・一九五三年十一月～五六年七月）は、大いに楽しまれたのかな。

吉野　そうです。

二回目（一九六〇年八月～六一年六月）はハーバード大学に行ったときで、貿易問題も「ワン・ダラー・スカーフ」程度のものでしたが、三回目（一九六八年二月～一九七一年一月）は相当圧迫感というか、プレッシャーがありましたね。トレード問題が激しくなっていましたから……。

渡邉　私が読んだ記憶で、やや曖昧ですが、新木大使がおられた頃は、大統領と会うなんて、とんでもない話で、何かかんか苦労して、ようやくダレスに会わせるとか、会わせないとかという話が書いてありま

した。当時の日本大使館の存在は、その程度のものだということで、そうなんだろうなあと……。

吉野　そうです。

股野　当時の東アジア局長は誰ですか。

渡邉　マックラーキンじゃないの？

股野　それは次官補ですか。

吉野　マックラーキンは次官補じゃないです。

股野　だから、もう一人いたんですよね。

吉野　有名な人ですよ。バージニアの地主か何かで、ロバートソンですね。それに会うのが容易なことじゃなかったんです。

渡邉　それに会うのが大変だから、せめてダレスに一回ぐらい会わせろとか、確かそんな話でしたね。

伊藤　また後でいらっしゃったときは、日本の国力が……（笑）。ただ、一回目は、その分だけ気楽ではあるわけですね。懸案も、あまりないでしょうし……。

吉野　そうです。

渡邉　最初は新木さんが大使で、その後、井口貞夫さんがいらっしゃって、そして谷（正之）さんがいらっしゃる。三人の大使がいらっしゃったんですが、人物評はどうですか。

股野　全部、ご一緒でしたか。

吉野　そうです。

股野　ほう、それは、またなかなかの……。

吉野　新木さんは、人が善い好々爺という感じでしたね。怖い感じもなくて……。

渡邉　確か、日銀の出身……。

吉野　そうです。それから井口さんは非常に飄々としておって、この人も、どうと言うことはないですね。物の理解は非常に早いし、話し方も早いけれども……。

渡邉　吉田さんとの関係は、どうなんですか。

吉野　良かったでしょう。それから、吉田さんからの無理難題がかかって来たときには、井口さんを通じて解決するということが、外務省ではよく行われていたんです。吉田さんないしは吉田さんの名前を使って、外務省にいろいろプレッシャーをかけて来ることがあるわけです。人事とかね。そのときは、井口さんを仲介として、説き伏せてもらう。その意味で、井口さんは便利な人でしたね。

股野　井口大使には、使命感を持っておられたような印象はありましたか。

吉野　そういう感じがする人ではないですね。そうかも分かりませんけれども、少なくとも外には、そういうことは表わさないですね。

伊藤　谷さんになると、ぐっと年齢は上がっちゃうんじゃないですか。

吉野　ええ。谷さんはえらく年取った人ですが、谷さんは茫洋としておって、大使館へ来てからは、仕事らしい仕事はしないでしょう。「四天王」とか何とか言われた人の一人でしたよね。

伊藤　重光さんの……。

吉野　重光さんのあれで来ているんだから、あまり仕事もしない。だから、「お前たち、適当にやってくれ」という感じでしたね。

渡邉　ということは、重光外務大臣時代ですね。

吉野　そう。論功行賞で、谷さんを送ったわけです。だけど、論功行賞の「功」の意味が分からない。谷さんは、一体何をやったか。

渡邉　五六年一月に、日ソ交渉が始まっていますね。

吉野　そのアメリカに対する捨石かも分かりません。だけど、仕事らしい仕事は、したことがないですよ。

渡邉　日ソ交渉が進んでいるときに、ワシントンで見ていらっしゃるわけだけれども、何かありましたか。

吉野　我々には何もなかったですね。

伊藤　重光さんと岸さんと河野さんが揃って出かけますね。

吉野　その関係は非常にデリケートというか、犬猿の仲ですから。その当時、谷さんが大使ですね。

渡邉　五五年八月ですからね。

伊藤　重光さんが外務大臣になって、アメリカへ行って、安保改定で……。

渡邉　ダレスとやり合って……。

伊藤　「何を考えているか」と言われて……。

吉野　岸さんと河野さんは、日本の天下を狙っている連中ですからね。重光さんに随行という形で訪米しているけれども、重光さんに対する忠誠心は全然ないわけです。それから、岸さんは人の悪口は言いませんが、河野さんはべらぼうに悪口を言う人で、我々は聞き役に回っているわけです（笑）。

　そういうことがあって、「ははあ、こういうことかねえ」という印象を受けましたよ。岸さんと河野さんの関係も、河野さんが政治資金を稼いで来て出すほうですから、そういう意味では岸さんは彼にディペンドしていたわけです。ですから、河野さんにとっては、岸さんも重光さんも、「吹けば飛ぶような連中だ。俺が実力を持っているんだ」ということを、我々に対して、いつも誇示していました。

渡邉　五四年の吉田訪米と、五五年の重光外務大臣の訪米と、大きなものがありますが、そういう偉い人たちが行ったときは、大使館で何かやるんでしょう？

吉野　何かやりましたけれど、記憶に残っていませんね。僕は、それだけ下っ端でしたから。おそらく、それは大使ないしは公使、せいぜい参事官ぐらいまでの問題だと思います。彼等にとっては、大きなプレッシャーだったでしょう。それは雰囲気から分かります。だけど、我々は直接には関係ないという感じでいました。

伊藤　日本大使館のパーティーなんかは、どうですか。

吉野　昔の、小さな大使館の一番大きなホールでやるわけですが、それに陪席するぐらいのもので、別にどうと言うことはなかったですね。しかし、きれいな建物ですから、来た人たちはみんな……。

伊藤　「日本大使館のパーティーには行きたい」という感じを持っていたんですか。

吉野　そうだと思います。お寿司が出たり、天ぷらが出たりしますから、評判が良かったですね。

渡邉　そのときは、当然、ご婦人同伴ですね。奥さんは、ワシントン暮らしはどうだったんですか。

吉野　当時の女性はイブニングなど着る機会はなかったですから、みんな着物を着て、草履を履いて出るわけです。

渡邉　まだ、お子さんはいなかったんですか。

吉野　僕の場合は、もう子どもが二人いました。

渡邉　そうすると、学校の問題は？

吉野　上の娘は小学校の一年か二年ですね。

伊藤　向こうの学校に行かせたんですか。

吉野　そうです。

渡邉　そういうのは、ふつう奥さんが仕切るので、お父さんはあまり憶えていらっしゃらない、と（笑）。

伊藤　奥さんたちの人間関係は難しいと言いますね。それは本当なんですか。

吉野　特に感じなかったです。ただ、よく言われるように、「大蔵一家」というのは非常に団結が強いんです。彼等は、そういう訓練を受けているのか、それとも、そういうしきたりがあるのか知らないけれども、お互いに助け合ったりね。それから、もう既にＩＭＦだとかワールド・バンクに出向している人もいただろうし、大使館もありますから、そういう連中は奥さんも含めて、みんな……。非常に良いことだろうと思います。内部の情報網も発達しているわけです。

渡邉　当時の大使館は、既に大蔵、通産、みんな揃っている感じですか。

伊藤　渡辺武さんが公使でいたわけだからね。

吉野　通産は、井上公使。後になって松尾さんが参事官で来ました。

股野　松村さんは？

吉野　松尾さんの前に、松村さんがいたわけです。参事官です。

渡邉　それでは時間になりました。ワシントン時代の話は、また後でお聞きすることが出て来るかも知れません。

今日は、どうもありがとうございました。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー

第4回

[1999年6月21日 14:00～15:55]

〔インタビュアー〕(肩書きはインタビューの時点)

渡邉昭夫(青山学院大学教授)

股野景親(元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員)

佐道明広(政策研究大学院大学助教授)

武田知己(東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員)

(於:国際経済研究所)

日印通商交渉に取り組む

渡邉　第四回目を始めさせていただきます。いつもと同じように、前回のことの確認や、その他のお話から入りたいと思います。

前回は、通産省から外務省へお戻りになって、国際経済局のお仕事をなさり、一課、それから四課のお仕事をなさるんですが、その間にアメリカに二等書記官、一等書記官として行っていらした頃のことを中心にお聞きしました。それで、（その前回の速記録の中で）アメリカやイギリスとの通商航海条約に関して、アメリカが先だったのか、後だったのか確認させてください。

吉野　問題なく、アメリカが先です。まず、米国からやろうじゃないかということになって、我々が交渉の準備を始めたということですね。ここら辺は（速記録を）直しておきました。そうこうしているうちに、アメリカが……。

渡邉　アメリカと日本とが交渉を始めたという意味ですね。分かりました。それから、「準備として、過去において日本が結んだ通商航海条約の『典型』というものをつくった」というのは……。

吉野　それは準備ですよ。

渡邉　過去のものを基にして「典型」というのをつくってみた、という意味ですね。分かりました。それでは先へ行かせていただいて、一九五六年の七月に経済局の第四課長におなりになって、その後、スターリング地域課長になられたというのは？

吉野　同じですね。経済四課長の名前が変わっただけの話です。

渡邉　そうですか。そして、経済局外務参事官も兼ねられて、やがてアメリカに一等書記官（一九六〇年八月）としてお出になり――これは割と短いですね。翌年の六月には、ドイツのほうにお回りになる。

吉野　この一年間というのは、ハーバード大学へ僕が留学したときに、単なる外務省の……。

渡邉　資格は、それでよろしいわけですね。そうすると、経済第四課長時代のお話で、この前、確か豪州の話がありましたね。あれは、そのときのことですか。

吉野　ええ、そうです。豪州、次いで同じような協定をニュージーランドともつくりました。インドもありますね。日印通商交渉です。

渡邉　日印交渉もあった？

吉野　インドに、最初の円借款を与えたわけです。

渡邉　経済協力局というのは、まだなかった？

吉野　なかったわけですね。

渡邉　では、この局で、いわゆる援助絡みのこともやってらっしゃったわけですか。

吉野　援助のこともやりました。

渡邉　インドと、確かパキスタンとも……。

吉野　パキスタンについては、前回お話ししたかな……。インドについては、四課長時代で、当時初めてインドがスターリング地域でも重要だし、第三勢力としても重要だということで、インドと日本との関係を良くしなきゃいかん、と。それで、まずインドに視察団を出そうじゃないかということになりました。そのときに、小林中さんという開発銀行の総裁であった人を引っ張り出して、僕もその人に付いて、

小林さんの秘書と一緒に四人ぐらいで、インド、セイロン（現スリランカ）を訪問したわけです。そのときに初めて、インドの大臣だとか、次官クラスの連中に会って、「日本とインドとの関係を良くしよう、かつ経済関係を強めよう」ということになっていったわけですね。当時、スズキ（自動車）はまだ出ていませんでしたが、パイロット万年筆をつくる工場がカルカッタあたりにできていたんじゃないかと思います。

話をしているうちに、インドも盛んに日本との関係を密にするために、間接的な表現ではありましたが、「日本から援助してくれ」というような話になってきました。まあ、それで、一体幾らにしたらいいかというような問題があったわけです。それで、そのまま我々はコロンボへ飛びました。コロンボで小林中さんが僕に、「対印援助を本省に稟請してみてはどうかね」と言い出しまして、それでは一体幾らぐらいに金額を決めたらいいかということになったのです。それは、日本の賠償以外の、初めての外国に対する円借款だったわけです。しかし、その金額を一体幾らにするか、我々は何も標準がないわけです。ただ、インドという国は誇り高き国であるし、彼等は、そぶりにも「日本に助けてくれ」というような形の言及はしなかった。しかし、金が欲しいに違いないということで、いろいろと一晩考えました。

小林さんは聡明な方で、「幾らぐらいやったらいいかね」と、僕等に訊くんですよね。我々のほうも、当時はまだ援助の経験もないですから、見当も付かないわけです。それで、僕は一晩悩んだんですが、結局五千万ドルだったですかね。輸出入銀行の第一回の円借款ということで、その額を決めました。本省に、「こういう形で南西アジアとの関係を切り開くために、この際、日本が真先に対印円借款を供与すべきだ。ついては、これこれ……」と言ってね。おそらく五千万ドルだったと思うんですが、相当大きな金です。今まで聞いたこともないような金額です。しかし、べらぼうに大きい金ではないんです。大蔵省がいますからね。

渡邉　今の話の確認ですが、そもそもインドに対して円借款を……というのは、どの辺から出た話なんですか。

吉野　僕等の印象では、インド側には「日本に助けてもらいたい、援助してくれ」という気持ちはありました。しかし、彼等のほうから、「ついては円借款をくれ」とか、「金を貸してくれ」という話は持ち出して来ませんでした。大蔵大臣にも会ったし、ネルーという大蔵次官にも会ったんです。ネルー首相の甥か何かですけどね。

当時、ブリティッシュ・シヴィル・サービスの資格を取った男が三人ぐらいしかいなかった。そのうちの一人が、そのネルーなんです。ネルーと話をして、別に彼等は物欲しいような顔はしないんです。けれども、日印関係を密接にするためには、我々の間で何か取っ掛りを付けなければならない。円借款でもやったらいいんじゃないかという話になりましてね。

渡邉　前後を憶えてないんですが、偉いネルー（首相）さんが日本に来ますよね（一九五七年十月）。そのときの話ですか。

吉野　いや、僕等がインドに行った後に、偉いネルーが来ました。

渡邉　ああ、その後にね。

吉野　来る前ですね。その偉いネルーが来る半年ぐらい前じゃなかったですかね。

渡邉　ある意味で、ネルー来日に備えての準備みたいな感じなんですか。

吉野　ええ、そういう形になりました。しかし、別にそういう準備の意図で行ったわけじゃなくて……。

渡邉　こちらから行ったということですか。

吉野　こちらから行ったんです。

渡邉　そのときは、吉野さんもいらっしゃったわけですか。

吉野　そのときに、僕は担当課長として小林さんに付いて行ったわけです。

渡邉　先ほどの話ですね。

吉野　それから、小林さんの秘書が二人ね。それから、もう一人。今、思い出したんですが、アジア局でインド関係をやっていた人で、もう亡くなってしまったんですが、小林春尚という事務官がいましたね。

渡邉　外務省の？

吉野　ええ。

股野　小林も何人かいますが、亡くなった小林春尚さんですね。

吉野　亡くなった人です。僕なんかより二年か三年下の人です。その人が一緒に来ました。それで、小林君といろいろ相談して、五千万ドルだったですかね。第一回のインド借款ということで、本省に稟請したんです。それから、インド借款を毎年やるようになりました。それで、日本の国内でも、インド借款というのは非常に評判がいいんです。日本輸出入銀行が大型円借款の突破口をつくったんですから。しかも、インドはちゃんと利子を払うわけですから。それから、三十年以上経った後には、元本も払ってくるわけですからね。

それで、結果的には、大蔵省にも非常に良かったのは、輸出入銀行が初めて大きな仕事ができるようになって、しかも相手が最貧国みたいに、「金を繰延べしてくれ」とか、「リスケ（リスケジューリング）をしてくれ」とかいうことは言わないで、ちゃんと支払いをしてきますからね。だから、今、輸銀の大きな援助の柱となっているんですよ。まず、それを、そのときにやったわけです。

渡邉　しつこいようですけど、五千万ドルにしろ何にしろ、その額というのは、その出先で、お決めになったわけですか。

吉野　コロンボで決めました。コロンボへ行きまして、インドを視察したことについては、本省に報告をしなければけない。大体、小林さんを引っ張り出したのは、我々の側に経済的な面で積極外交をやろうという下心があったからです。当時、大蔵省からは金を絞られているし、しかし「外務省の対外経済外交は、受身になってはいかん」という気持ちがありまして、「こっちから積極的に打開していこう」ということで、インドに小林さんみたいな人を引っ張り出した。ちょうどそのときに、総理大臣が岸さんなんです。岸さんと小林さんとの関係は、非常に良かったわけですね。ですから、「岸・小林のラインで、ひとつ日本の外交を動かしていこう」という意図があったんですね。

渡邉　小林中さんをそこへ担ぎ出そうという戦略は、どこで立てたんですか。

吉野　それは、おそらく岸さん自身ではないですか。小林中さんに付いて回るまでは、僕は全く彼を知りませんでした。牛場さんが局長で、「小林中さんがいいんじゃないか」ということで、彼に言われて僕は小林さんに会いに行ったんです。そしたら彼は、「喜んで引き受ける」ということで、段取りは決まったわけです。

股野　これは何年ですか。五七年ですか。

吉野　どこかに書いてないですか。対印円借款、第一回円借款……。

渡邉　確か五八年。ずいぶん早かったんですよね。

吉野　ええ。割合早い時期だったと思います。

股野　ネルーが五七年の秋に来ました。

吉野　それならば、その半年前です。

渡邉　当時コロンボ・プランというのがございましたが、これとは関係ないんですか。

吉野　それとは関係ないんです。しかし、コロンボ・プランも、その頃から話があって、だんだんと実っていったわけですけれど……。コロンボ・プランは、今度はコロンボを中心として、むしろベトナムとかラオスとか、あそこら辺のインドシナ半島の開発から始まったようです。

渡邉　日本が五四年に、そのコロンボ・プランに加入するんですが……。

吉野　何年に？

渡邉　五四年なんですが、五三年にアプライしたときは「駄目だ」と断られて、五四年頃になると、カナダとかオーストラリアが日本も入れようというふうに変わって、入ったのが十月かな。いま「国際協力の日」となっているのは、コロンボ・プランに加入したのを記念してというふうに聞いているんですけれども、コロンボ・プランには、あまり関係してないんですか。

吉野　コロンボ・プランとも関連する仕事も、やがて出て来ました。それは、僕が六四年十二月に経済協力局に移った後ですね。

渡邉　もっと後ですね。

吉野　移った後に、例のラオスにナムグム・ダムというダムをつくろうということで、日本が積極的にコロンボ・プランに参加しました。その当時は、もうベトナム戦争が始まっていまして、アメリカが日本を、何とかして経済的に巻き込んで行こうという戦略になってきた頃で、それは経済協力局時代の話です。

渡邉　そうですね。それは、また改めてお話を聞くことにして、このインドへの最初の借款、これはなかなか大事な話です。

股野　マナスルへの登頂というのが、戦後日本の一つのニュースとなったのが五六年です。ちょうど小林さんが行かれたときで、何か意識の上で関連はありますか。

吉野　ちょっと、思い出せないですけどね。

股野　あちらの方面に、日本の関心が向いた。

吉野　それは確かに、ようやく日本の外交意識にインドが出て来た頃です。日本が単に賠償のみならず、もっと遠くまで見るようになってきた時期ですね。

渡邉　五五年四月に、例のバンドン会議というのがあって、ネルーとか、あのときはチトーも来たのかな。

吉野　チトーも来たんじゃないですかね。

渡邉　アジア・アフリカ会議なら、チトーは関係ないか。あと、スカルノと周恩来という時代です。

吉野　あの頃、岡田晃君がバンドンに行ったのかな。彼は、バンドンから会議の話を僕にしてくれたんですけど、あれは周恩来との関係でしょうかね。

渡邉　バンドンへね。彼は、何で行ったのかな。高碕（達之助）さんに付いて行ったんじゃないですか。

吉野　ああ、高碕さんに付いて行ったのか。そうでしょうね。

渡邉　それで、帰って来て、吉田さんに報告をして褒められたということが、彼の回想録に書いてあります。

吉野　ああ、そうですか。

渡邉　バンドン会議の頃は、吉野さんはまだアメリカにいらっしゃるんですよね。いまおっしゃったように、当時インドは非常に親日的でした。

吉野　そうそう。それから、彼等も日本の投資を歓迎していました。ただ、ネルーのソーシャリズムというか、彼一流のインド的社会主義がありますから、こちらがいろんなことを言っても、官僚が統制していますからね。日本人も儲かるし、かつそれほど向こうが重視してない、例えばパイロット（万年筆）の工場みたいなものは、簡単に入れるんです。しかし、重工業みたいなものになりますと、自動車はもちろんのことですが――当時の日本は、自動車の工場を海外につくることは考えなかった――例えば工作機械工場とかになりますと、機材の持込みだとか、場所の選択とか、そういうことについて官僚のコントロールが強いんですよね。

それで日本人は、インドは人口も多いし、割合に文化も高いから、大きな市場になり得るということで、大きな期待を持って行くんですが、みんな嫌気がさしちゃうんです。機材の持込みだとか、送金の手続きだとか、そういうものについて官庁の規制が強い。上のほうの、ネルー大蔵次官あたりのクラスまで行きますと、話は分かります。「ああ、いいよ、それはもう自由だ」と。ところが、下の、港を管理している役人とか税関吏になると、えらく統制好きなんですね。そこで、「ワイロでも持ってくれば、通してやるよ」ということになるでしょうけど、日本人はそういうことはあまり好まないですから（笑）。当初は、口で言うほど、インドとはうまくいかなかったです。

渡邉　逆に、まだ当時、インドの鉄鉱石というのは、割と日本が買っていた。

吉野　鉄鉱石、石炭ですね。石炭も買っていたんですよ。それで、それに関連する港の修復だとか、波止場をつくるとか、そういうのについては、相当日本の商社も、それなりに投資をしていたんです。地理的に割合に近いですからね。むしろ豪州あたりよりも、先に鉄鉱石の輸入が……。これは終戦後、ＳＣＡＰの時代から始まったわけです。

ハーバード大学に留学

渡邉　経済局の第四課長時代に、スターリング地域課になったというのは、他の課も名前が変わったんですか。

吉野　一課、二課、三課じゃ、外から来る人は分からんから、実態を表わせということで、国際機関課とか東西通商課とかアメリカ課とかになって、それで四課はスターリング地域課ということにしたんですけどね。

渡邉　これが五八年五月で、五九年八月からは外務参事官も兼ねていらっしゃる。その間に、何か他にどんなことがあったんでしょうか。

吉野　一般的には、ちょうど日本の貿易経済が拡大していくときですから、仕事はたくさんあったんです。それから、気持ちも、みんな非常にポジティブでね。自分から拡大していこうという意図が、みんな外務省なりに、殊に経済局全体に横溢していた頃です。そうこうしているうちに、第一回のハーバード大学への留学ということで、加藤（匡夫）という、僕の前任者の参事官がハーバード大学に一年行きま

して、その後、今度は僕が行くことになったわけです。別に、僕は希望していたわけでもないんですが、いきなり人事課長に呼び出されて、「お前、どうだ」という話になりまして、それで行ったわけです。そのために、アメリカ駐在を命ぜられたわけですね。

渡邉　これは六〇年の八月ということになっているんですけど、安保騒動で大騒ぎした、そのすぐ後という時期ですね。

吉野　そう。その頃は、新聞紙上は騒然としていた時代です。殊に、樺何某という女学生が……。

渡邉　樺美智子さん。

吉野　美智子さんが亡くなるというような事件も起きましたね。元々、岸さんが、「安保条約を改定したい」と言い出して、それにアメリカが応じて新しい協定を結んだわけです。これについては、私は後にアメリカ局長になってから関係してきますが、当時はあまり興味はありませんでした。ただ、騒然とした世の中で、第三者として、「なぜ安保条約を、いま改定しなきゃいかんのか」と。もちろん、理屈があるわけですが……。日本は、今度は自立して、自分でアメリカと協力して、アメリカの軍隊を日本に置かせる、と。旧協定は占領の続きを、ただ肯定しているだけだということですから、理屈は分かるんです。しかし、これだけ社会的不安を巻き起こして、大騒動を起こして、そして右か左かというような形で、左翼の運動を惹き起こした。せっかく世の中が平和で、これから経済を拡大していくことに集中すべきなのに、障害になるんじゃないかというような気持ちがあったわけです。長い目で見れば、安保条約は改定せざるを得ないし、すべきだったんでしょうけど、そういう気持ちが当時の僕等にはありました。

ところが、外務省全体は、条約局長はもちろんのこと、局長クラスの方々は、樺某が亡くなったというようなことにはあまり気を配らずに、「ともかく邁進しろ」ということでした。ましてや、「アイゼンハワーの日本訪問は政府間の約束事であるから、これもちゃんと行ってもらうように準備しよう」というのが、外務省の支配的な意見でした。けれども、私は外務省の課長らしくはないんですが、一般庶民としての気持ちで、なぜ今時になって、岸さんが安保改定を言い出したのか、あまりに政治的じゃないかという気持ちでいたんですね。結果的には、大したことなく終わったわけですけどね。

渡邉　今、ちょうどいいお話が出たので、ちょっと逸れるかも知れないんですが……。その問題によりけり、時によりけりでしょうが、例えば安保の改定が問題になっている時期に、外務省として、こういう問題は、どのようにして意見をまとめるんですか。例えば、局長会議とかがあって、そこにはどういう人が参加して、どういう形になるのでしょうか。

吉野　その頃は、僕はあまり意識していなかったけれど、もちろんそれは政治的な判断です。アメリカ局には、「今の協定（旧協定）は不平等であり、日本は占領時代のそのままを踏襲してきているのだから、自主的に、もっとアメリカと対等にコンサルテーションもするし、場合によっては、理論的には『NO』とも言えるような形の協定にすべきだ」という意見は、ずっとあったわけです。そのための草案づくりというようなものは、やっていたわけです。そこへ岸総理が……。いえ、誰かが知恵を付けたんでしょうね。それで、「それはいい考えだ。そうしないか」と言って、おそらく政治的な上層部の判断だったんでしょう。岸さんは、いろんなことを言われるけれども、ともかく最後まで、その意見を通した人です。だから、そのために、彼は総理を辞

職せざるを得ないことになったんです。だけども、やり通したということでしょうね。もちろん、その前に外務省としても、局長会議その他で、形式的な決定はしているでしょうが……。

渡邉　そういうふうに、かなり日米関係において、世論のレベル、あるいは政治のレベルで、嵐のようなものがあった。その直後にハーバードへ行かれて、どんな感じなんでしょうか。

吉野　それで、ハーバードには行きましたが……。アイゼンハワーの訪日を断ったのは、その前後でしたかね。いつだった？

渡邉　そのときです。六月です。

吉野　それで、まだその余韻が残っていました。しかし、アメリカ側も理解をして、少なくとも僕等の付き合うハーバードの連中は理解していたらしくて、それほど、この問題で日米関係がおかしくなったという話はなかったですね。

渡邉　ハーバードでは、どういう方とお付き合いがあったんですか。どこに、いらっしゃったんですか。

吉野　ハーバード大学の中に、センター・フォー・インターナショナル・アフェアーズという、研究所みたいなセンターがあるわけです。先ほど申したように、僕等の一、二年前から、その制度ができたんですが、世界の十ヵ国ぐらいの、主として外務省関係の若手をアメリカの大学に一年留学させて、将来の親米派をつくろうということだったんでしょうね。それで、僕等が行ったら、確かに新しい学問、日本では今までやっていないような学問がたくさんあるんです。例えば、対外援助というものですね。トランスファー・オブ・リソーシズ、そういう言葉は、今まで聞いたことなかったです。そういう開発援助、あるいは開発経済というものを、まず大学で教えているということが分かった。それから、もう一つは、核戦争をどうやって勝ち抜き、生き残っていくか、ないしは、どうやってこれを防ぐかというような新しい学問が出て来たわけです。いわゆるArms Controlです。その他、いろいろあったんでしょうけれども、この二つが日本の大学でも習わないし、我々の仕事にも、まだ出て来ないものだったわけです。

それで、そのうちの核戦争をどうやって防止し、かつそれによって国威を拡大するかというほうには、キッシンジャーも講義に来るわけです。彼は当時、ハーバードの助教授か何かをやっていたと思う。トム・コリンズという、「ゲームの理論」で有名だった先生がセンターの主任教授でした。トム・コリンズとキッシンジャーとでは、意見がちょっと違うところがありますけど、キッシンジャーの講義は非常に面白かったですね。それから、キッシンジャーは大学でも講義していたんですが、大きな講堂に溢れるくらい、座席がないくらいに学生が集まって、非常にポピュラーなものでした。

渡邉　当時から、ああいうガラガラ声だったんですか（笑）。

吉野　バス（低音）で、ちょっと聴き取れない面もありましたが、ユーモアがあり、内容も面白い講義でした。彼を自宅へ招いて、すき焼きを食わせたことがあります。その頃、彼は前の奥さんでしてね（笑）。彼は、いつもメルセデスに乗って来るんです。大体、ハーバードの校内へ車で来る人は、フォルクス・ワーゲンとか、案外と小さい車なんですよ。彼は教授らしからぬと言うか、あるいは教授らしいと言うか（笑）。だから、彼はメルセデスで有名になっちゃったんです。

渡邉　そうですか。若い頃から……（笑）。

吉野　若い頃から、彼は相当鼻っ柱がね。しかし、それなりに非常に

ユーモアのある面白い先生だったんですよ。

渡邉　開発経済学のほうは？

吉野　開発経済学のほうは、有名なメイスンという教授がいました。これは、もう老大家ですね。それから、その下にリンカン・ゴードンとか、二人か三人、学者がいました。名前は、みんな忘れちゃった。経済開発は長い目で見て、今日の世界の繁栄の基礎になったのかどうか。依然として、借金に苦しむ最貧国がある。なぜ、その状況を直せなかったのかよく分かりませんが、要するに開発経済学という部門ができたわけですね。

渡邉　その研究所に、各国の外交官や将来有望な人たちを呼んで研修させる際、センターの世話役みたいな先生方は、いましたか。

吉野　ええ、いました。ともかく、まずその先生が各国の候補者の「首実検」に来るわけです。会って、この人は適当かどうかということを見るわけです。

渡邉　東京まで見える？

吉野　ええ、東京まで来るわけです。結局、外務省なら外務省が推薦するんですから、「蹴る」ことは政治的に難しいと思いますが、常識外れとか、全然語学が分からんというのは、ちょっと手間がかかりますからね。我々のときは、Joe Sax という、助手か助教授クラスの人が来ました。彼は後に世銀に行きまして、それから一時国務省に勤めて、その後早くに亡くなりました。その後に――僕がいるうちの一年間ですが、ブラウンという人が来て、彼もなかなかいい人だったんです。

問題は、各国の人選です。僕のいるときに、初めて韓国人が入りました。丁一権という、後に総理大臣になった人です。彼は朝鮮戦争のときに、南側の軍の総司令官をやった人です。

渡邉　軍人さんだった。

吉野　北出身の軍人さんで、しかし日本の士官学校も出ていますから、日本語もペラペラで、僕も親しくした人です。そのときに、初めて韓国が入りました。最初の二回は、韓国人は入らなかった。僕のときから入ったわけですが、今は、もうずっと入っていると思います。そういうような人選なんですが、アメリカからは国務省の人が一人と、陸・海・空の三軍から一人ずつ出て、四人です。それから、僕のときは英国人が一人、フランス人はいなかったですね。

渡邉　ドイツは？

吉野　ドイツも一人、これは後に英国大使になって、外務次官もした人です。それから……。いまちょっと印象に残っていないから、忘れちゃったんですけどね。

渡邉　オーストラリアとか、カナダとか、そういうところは？

吉野　カナダは一人いました。これも外務省の人ですね。ともかくアジア系統は、僕のときは韓国と日本、それからインド人がいました。ああ、それからインドネシア人もいた。

渡邉　そのあたりの人たちとは、その後もお付き合いがあったんですか。

吉野　その後も、生きている人とは付き合っていますけどね。それから、当時のセンター・フォー・インターナショナル・アフェアーズの所長が、ブーイー（Bowie）という人なんです。彼は国務省にいたこともあるし、当時は相当アメリカの外交政策に関係した人です。彼はキッシンジャーと仲は良くなかったんですが、そういうような人がいました。それから、アメリカの国務省からはクロンクが来ていました。

彼は占領中日本にいて、農業関係の仕事をしていましたから、元々農林省の出身の人でしょうね。帰国後は国務省に採用されて、僕等と一緒に勉強した後、僕がドイツの参事官になりましたら、彼も在独参事官で来ました。それからアメリカに戻って、彼は日本課長になったわけですから、相当日本関係の人がハーバードのセンターにも関係していましたね。

渡邉　ここに十ヵ月ぐらいいらっしゃって……。

吉野　まあ、一年というわけですけれども、結局、夏休みが長いですから、十ヵ月ぐらいしかいなかったですね。

渡邉　そこから、直接ドイツのほうへいらっしゃったんですか。

吉野　それから、直接ドイツへ行ったわけです。

渡邉　それで、ドイツに一九六一年から……。

吉野　ドイツへ行く前に、六〇年の十一月に、ケネディが大統領に選ばれたわけです。それで、ケネディが選ばれますと、ハーバード大学では、教授がみんな浮き足立つわけですよ（笑）。なぜかと言うと、ケネディは、そのときはジョージ・バンディも含めて、教授を相当引っこ抜いて、自分の補佐官等にするわけです。その中の一人、ライシャワーが日本大使に任命されることになったのですが、当時、もうそれが噂になっていました。それで、ライシャワーが――彼は戦前、日本にいたんですけど、戦後は占領中に日本に来ていたかどうか知りませんが、「日本については、一体どうしたらいいか」と、僕にいろいろ意見を聞きに来ました。

渡邉　アメリカには、ちょうど大統領選挙戦の真っ最中に行かれたわけですね。面白い時期だったんですね。

吉野　そうです。それで、ライシャワーの家に再三呼ばれまして、日本の状況を話したりしたことを憶えています。彼はその後、ハルさんと共に、日本大使として赴任したわけです。だから、あの頃のハーバードというのは、非常に活気づいていたわけです。そのときにキッシンジャーは共和党ですから、彼はロックフェラーという、当時ニューヨーク州知事の……。

股野　ネルソン・ロックフェラー。

吉野　ネルソン・ロックフェラーのアドバイザーとして、大学の助教授をやりながら、しょっちゅうニューヨークのロックフェラーのところに講義に行ったわけですね。

股野　ロックフェラーは、一応、大統領志願者の一人ですね。プレジデンシャル・ホープフルズですね。ニューヨーク州の知事でしたから。だから、ニクソン政権の発足まで、彼は待ったわけですね。

渡邉　キッシンジャーはね。

股野　ハーバードの教授陣が浮き足立つというのは、面白いですね。

渡邉　特に、ケネディのときはね。

吉野　それで、ジョージ・バンディだとか、そういうのがいろいろ来て、後になって、いろいろ問題が起きてくるわけですけどね（笑）。

渡邉　ケネディ・マシーンと言って（笑）。

吉野　そういうのを見ているのは、第三者としては面白い経験だったですよね。

渡邉　さっきの話に戻るんですが、その頃、ライシャワーさんとお会いになって、日米安保騒動とか、そういうのはどういう感覚でお話しされたんですか。

吉野　安保騒動の後ですから、ライシャワーも対日関係は相当慎重にやらなきゃいかんという気持ちで、いろいろ訊いて来たんだろうと思

います。しかし、あまり安保条約の後遺症なんていうものはなかったですから、僕は特に、それに重点を置いて何かしろというような話はできなかったです。

当時、僕はハーバードにいる間の締め括りとして、何か論文を書かなきゃいかんということでした。それで、僕の主任（Joe Sax）は、「日本は、これから大いに対外援助をやるんだから、トランスファー・オブ・リソーシズということで何か書いたらどうか」と言うわけです。でも、僕は知識も自信もないから、違う題にしようと頑張って、とうとう「日本の社会党は、なぜ、だんだん勢力を失っていくか」というようなことを書きたいと説得しました。結局、大した論文じゃないですけど、そんなようなものを書きました。そのときに、安保騒動のことを、ちょっと入れたんです。当時の僕等の印象には、例の社会党が中心となった内閣のことがあった。岸さんの前の……。

渡邉　ああ、片山内閣ですね。

吉野　片山内閣の印象が、かなり頭にありました。それが今度は、全然もう……。片山内閣の官房長官は、誰だったですかね。

渡邉　西尾末広。

吉野　西尾なんかも巻き込んで、端から見れば、相当活躍した内閣だったんです。だから、それがどうして衰退していくのかということが頭にあったものですから、その辺も書いたんだろうと思います。

股野　六〇年当時の、安保騒動の頃のアメリカ局長は、どなたでしたか。

吉野　アメリカ局長はね、森（治樹）さんかな。

股野　森さんか、千葉（皓）さんぐらいですか。

吉野　ああ、千葉さんかな。

渡邉　千葉さんは、もうそんな地位ですか。

吉野　千葉さんか……。アメリカ局長は、あまり強くなかったんですね。

股野　ああ、そうですか。そうすると、当時は条約局長ですか。

吉野　条約局長は下田（武三）さんかね。それとも、高橋通敏か。

渡邉　高橋さんかも知れないな。

吉野　それで、いろいろ問題があったんですよ。

股野　高橋通敏条約局長ですね。

吉野　だから、高橋通敏はタカ派じゃないから、答弁はうまくいかなかったわけですね。

渡邉　アメリカ局長は、誰だったかな。

武田　アメリカ局長は森治樹氏。

股野　当時は、むしろ安保改定だから、活躍したのは条約局ですか。

吉野　それで、牛場さんなんかが躍起になって「何だ、もう少ししっかりしろ」とか何とか言ったわけです。僕等は、むしろ局長の下にいながら、批判的だったですよね。安保条約改定を、こんなに大騒動しながらやるのかなと思ってね。

ドイツ時代——米ソの対立を見る

渡邉　それでは、ドイツ時代（一九六一年六月～六四年十二月）の話をしましょうか。

吉野　ドイツへ行ってからは、まず第一に、間もなくベルリンのウォ

ールができたわけです。これは、非常にショックでした。その前まで、もちろん東側と西側諸国との間の占領地区というのはあって、住民は原則として、そう簡単には動けなくはなっていたんです。しかし、ウォールはないですから、東のほうから西のほうへ移る人口は、どんどん増えていくわけですね。それを止めようというのが、ソ連側の意図だということで、壁をつくり出したわけです。そしたら、もうパニックみたいなものが起きちゃってね。それ以前に、アメリカの空輸作戦がありましたね。終戦後、間もなく起きた……。

渡邉　空輸ですか。

吉野　空輸、あれほどは酷くはなかったけど、連合国側も含めて、ドイツにとっては相当大きなショックであったわけです。ところが、ボンにいますと、それほど強く感じなかった。ドイツ人が感じ、あるいは連合軍側が感じたような、大きなショックはなかったわけです。なぜ、なかったかと言いますと、それは我々自身が世界政治に対して、センシティブでなかったということが、根本的な問題だろうと思います。日本人は、いわゆる経済大国になろうという、経済だけが一番大事な我々の任務だという、いわゆる経済外交の観念から、我々の仕事もそっちのほうに集中していた。もちろん、本省に対しては政治情勢という形で報告はしましたが、僕の印象では、その頃のドイツ人が感じた危機感というものは、残念ながら我々には、率直に言って薄かったですね。

渡邉　このときは、在独大使館の顔ぶれはどういう方々だったんでしょうか。

吉野　成田（勝四郎）大使が……。

渡邉　成田さんが大使。

吉野　僕が参事官で、二番目です。それで当時は、いわゆるドイツ・スクールの人が相当いました。後の木村大使とかね。

股野　木村敬三さんですね。

吉野　それから、亡くなった……。

股野　小野寺君ですか。

吉野　小野寺君とか。そういう人たちがいましたね。

渡邉　ああ、小野寺龍二さん（平成五年七月、イタリアで登山中に遭難死。当時、駐オーストリア大使）。

吉野　今のドイツ大使は？

股野　渋谷（治彦）君の後だから、久米（邦貞）君。

吉野　久米君とかね。そういう人たちがいました。しかし、彼等の間でも、それほど深刻じゃなかったんじゃないかと思いますね。夏休みはイタリア、スペイン、冬はスキーにも行くというようなわけで、まあ一種の平和ムードです。もちろん、東西の対立は激しかったわけですから、それだけに心配はあったわけですが……。

渡邉　日本が深く関わったような難しい問題はなかった？

吉野　そうです。それから、その明くる年ですかね。今度はキューバ危機が起きました。

渡邉　キューバですね。

吉野　やはり夏です。五月か六月頃？

股野　六二年か。六三年はケネディ暗殺ですね。

渡邉　キューバ危機は、六二年の十月頃ですね。

吉野　まずベルリンに境界線、ウォールができて、それから半年ぐらい経った頃でしょうかね。半年も経たないかも知れません。今度はキューバ危機が起きたわけです。これもやはり一触即発の、相当の危機

を孕んでいました。当時、我々はニュースをフォローしていました。いつソ連の軍艦がハバナに入るのか、入らないのか……。というのは、そのキューバの港に入って、ミサイルを降ろすかどうかということが、非常に問題になったわけです。

いずれにしても、米ソの戦いが一触即発の時代にドイツにいたんですけれども、そういう危機にも拘わらず、割合に我々は感じなかったですね。だから、それだけ音痴になったんでしょうね。残念ながら、その二つの大きな危機は、僕にはそれほど強く感じられなかったということですね。

渡邉　そして、ケネディ暗殺のニュースも……。

吉野　ケネディ暗殺のときは、暗殺の訃報を聞いて、若い女性が泣いているのをたくさん見ました。その年か、前の年かにケネディがベルリンへ来て、「アイ・アム・ベルリン人」(Ich bin ein Berliner.) とか言った。それで、すっかりドイツ人はアメリカに頼っていれば、我々の国は安泰だ、あるいはアメリカに頼らざるを得ないという気持ちが強かったわけです。そのケネディがアメリカで、訳の分からない状況の下に殺された。非常に大きなショックらしかったですね。だから、泣く人もいたということです。それだけドイツ人は当時、ソ連の脅威に対しては、アメリカに頼らざるを得ないという気持ちが強かったんでしょうね。ところが、それだけの危機感は日本には、東南アジアにはなかった。まだ当時は、中国は文革の前か何かでしょうからね。

渡邉　私自身のことを話しますと、ケネディ暗殺のニュースを聞いたのは、キャンベラのオーストラリアン・ナショナル・ユニバーシティに留学中のことでした。大きな食堂ホールで食事をしていましたら、テーブルの向こう側にアメリカ人の夫妻が座っていました。そのとき、ニュースが飛び込んで来ました。彼女は、そこで泣きました。私は、いまお話を聞いて、それを思い出した。

吉野　アメリカ人だからね。

渡邉　まあ、アメリカ人だから、泣いても無理はないのかも知れないけど、僕はびっくりしました。

吉野　いや、そうですか。やっぱりね。

渡邉　そうすると、ドイツに足掛け三年ほどいらっしゃって、六四年にオリンピック後の東京にお戻りになるということですね。

話がまた戻りますが、思い出したので済みません。アメリカに行かれる前の経済局時代というのが、先ほどのお話のように、岸内閣の時期でございますよね。それで、さっき岸さんとインドのネルーのお話が出たと思いますが、岸さんとインドネシアのスカルノの関係というのも大事で、当時インドネシアへの賠償が問題になりますね。その辺は、お仕事上の関わりはなかったんですか。

吉野　仕事上は、直接関係ありません。これは、アジア局がやったんですね。ただ、岸さんの頃から、そろそろ東南アジア経営の思想が出て来たんですね。岸さんがベトナム訪問に行ったことがありますね。

渡邉　二度ほど、東南アジアを訪問なさいます。

吉野　そのときに、私も一緒に行ったことを憶えています。それで、当時のベトナムの何とかというチャキチャキした軍人上がりの派手な人……。

股野　五七年ですか。ずいぶん昔ですね。

渡邉　ゴー＝ディン・ジエムでもないし……。

吉野　ゴー＝ディン・ジエムの死後に出て来た若い将官ですかね。彼と会って、一日しかいなかった。岸さんはフィリピンも訪問し、それ

で、ベトナムへ行ったのかな。そろそろ、そういう日本の積極外交が始まったわけです。それから後、三木（武夫）さんになりました。三木さんのときは、東南アジア開発というのか、それが相当具体的な話になって……。

渡邉　それは、もうかなり後ですね。

股野　だいぶ後ですよ。

渡邉　岸さんの頃に、東南アジア開発機構だったかな。

吉野　いわゆるコロンボ・プランですか。

渡邉　いや、日本が言い出した……。

股野　アジア開発基金構想。

渡邉　その開発基金というのが、岸さんの時代に構想として出ますね。これはあまりお仕事上は……。

吉野　ただ、後の東南アジア……。これは三木さんが外務大臣（一九六六年十二月～六八年十一月）で、あのときの総理は、誰だったですかね。

股野　佐藤（栄作）さんです。

吉野　ああ、佐藤さんだな。佐藤さんのときに、我々は東南アジア開発閣僚会議（一九六六年四月、椎名悦三郎外務大臣）というものを始めたわけです。

渡邉　話はまた元に戻りますが、ドイツ時代がそういうことで……。

股野　ドイツ時代の終わり頃に、アデナウアーから、エアハルトに替わる。これは、どうでございました？

吉野　アデナウアーは、もちろん老練な政治家で、経験豊かで、それからユーモアもあるし、駆け引きもうまい。今度はエアハルトになりますと、彼の印象はあまりに経済大臣としての……。彼は、もちろん成功した人だからね。僕は彼が経済大臣の頃、外務省に移ってから間もなく、通産省におられた牛場さんと一緒に日独協定というものを結びに行きました。その話はしましたか。

渡邉　いえ。

股野　日独協定……。

吉野　日独貿易協定かな。まだ日本のほうは独立をして間もない、よちよち歩きの頃でしょう。ところがドイツでは、もうエアハルトが五七年に通貨改革をして半年ぐらい経った後で、ドイツの経済がえらく殷賑を極めてきた頃です。「自由貿易、自由市場」というのを言ってね。それで、エアハルトは非常に鼻高々で、経済大臣として、ドイツの市場経済を牛耳るというのはおかしいんですが、その主役者としてやっていた頃です。それの下にいる経済省と我々とが、いわゆる協定を結ぼうとしたわけです。

　その協定は、通貨協定と貿易協定の二つあるわけです。通貨協定については、両方とも当時は、本来ならインコンバーティブルな通貨を土台としているんですが、ドイツの通貨は市場経済が始まってから、実際上はコンバーティブルになっちゃったわけです。通貨改革があったのは、一九五七年ですかね。しかし、日本の円は、まだインコンバーティブルです。

　それで、貿易協定のときに、既にドイツ側は「市場経済で、開放経済だ」と称しながらも、日本の品物について二つ注文をつけたわけです。一つは、日本の陶磁器です。「陶器は、何とか日本のほうで規制してくれないか」というわけです。というのは、ドイツはまだそういう零細な陶器業者が残っていて、殊に「東から逃げてきた連中がまだやっているから、それを政治的に何とかしてもらえないか」というこ

とです。それから、繊維があったかどうか、僕は憶えていないんですが、いずれにせよ、「後は、もう自由だ」と言うわけですよ。日本は、みんな自由じゃないわけです。だけど、そのときに、エアハルトに初めて会いまして、「これは偉い大臣だな」と思いました。日本も、こういう自由市場思想を基本とした経済になれば、日本の経済はもっと早く強くなるだろうというような気がしました。

ところが、日本はＳＣＡＰのときと同様、通貨のほうは為替コントロールをしていましたし、貿易も、輸入は一つずつクォータを決めて許可していた頃ですからね。その頃のエアハルトを知っている僕は、総理大臣がアデナウアーからエアハルトに替わったとき、「あの人は経済は専門ではあるけれども、政治はアデナウアーみたいにうまくやれるのかな」と思っていました。彼は二年ぐらい、どうやらやってのけたわけです。そういう印象です。

渡邉　当時は、ＥＣというか、ヨーロッパの経済協力が動き出している頃ですが、その辺はどういう感じですか。

吉野　戦後のヨーロッパはマーシャル・プランから始まって、ローマ条約ができて……ということですけれども、それはあまり、その頃は意識しなかったです。というのは、ドイツのみが僕等の目では相当栄えつつある国で、他の国はまだそれほど行っていない。殊にイギリスあたりは、二度にわたるポンドの切下げの後、まだそれほど復興しているとは思わなかったです。

渡邉　そうですか。池田（勇人）さんが訪問したのは、その頃ですね。

吉野　ええ、池田さんが来ました。その前に、吉田さんも来ました。

渡邉　総理大臣として、池田さんがヨーロッパに行かれたはずです。

吉野　そのとき（六二年十一月）に、宮沢さんが付いて来たんですね。その頃のボンは日本料理屋もなければ、旨い物もないところなんですが、池田さんが来られたとき、ホテルでステーキか何かを出したんだと思います。ドイツ人にとっては、それはご馳走だったんでしょうが、池田さんは「ドイツ飯は不味いな」と言われました（笑）。

池田さんの滞在中に、一番我々が注意しなければいけなかったのは、毎晩、熱いお燗を二本ぐらいホテルへ差し入れることでした。そんなような注意が本省から来ていたと思います（笑）。

渡邉　酒屋の息子だから（笑）。あの頃、池田さんは「日本が、アメリカとヨーロッパに並ぶ三本の柱の一つだ」というようなことを言い出すんです。

吉野　そう。ですから、そのポテンシャルは、ドイツもおそらく見ていたと思いますね。当時のドイツは、ようやく強大な国になりつつあるということで、ご存知の通り、当時、ドイツの人口は日本の半分ですが、日本よりパーキャプタのＧＮＰも、それからその他の経済的指標もずっと上だったんです。貿易も、輸出も輸入も、日本の倍以上だったわけですから。日本は一九六五年になって初めて、対米貿易が「出超」になって、それ以来、為替事情も楽になっていったのですから、六五年ぐらいまでは、まだ日本は耐乏生活をしていたわけです。

「浴衣がけ」の東南アジア外交

渡邉　ちょうど池田さんから佐藤内閣へ、というスウィッチの切り換えの時期に日本にお帰りになって、経済協力局にお戻りになる。経済

協力局というのは、このときにできたのですか。

吉野　その、ちょっと前にできました。西山（昭）さんが局長でしてね。その前に西山さんがドイツへ回って来て、僕に「是非自分の下の参事官で帰ってくれ」と言われましてね。あまり心進まなかったけど、彼の許に行ったわけです。そうしたら、三木さんが、もう既に外務大臣だったですかね。

渡邉　佐藤内閣の最初の外務大臣は椎名悦三郎さんで、三木さんはその後じゃなかったかな。

吉野　僕は、三木さんにはドイツでは一回ぐらい会っているんです。ところが、帰って来て、挨拶しに行ったら、いきなり僕を抱きしめまして、「吉野君、頼むよ」って……（笑）。彼一流のスキンシップですけど、満更悪い気はしませんから（笑）。

渡邉　そういうものですか（笑）。

吉野　それからは、いわゆる東南アジア閣僚会議とか、そういうことをいろいろやり出したわけです。

渡邉　経済協力局は、その頃できて……。

吉野　できて、間もなくでしょう。

渡邉　そして、その参事官になったわけですね。

吉野　初代局長が西山さん。僕は経済協力局で、西山、広田（稙）、上田（常光）と、三人の局長に参事官として務めました。そういうことを言ってはあれだけど、西山さんは相当活発な人ですが、広田さんと上田さんは、ほとんどあまり仕事らしい仕事をしてなかったんじゃないかと思います。だから、幸いに僕は相当参事官として……（笑）。

渡邉　腕を奮うことができた（笑）。

吉野　そこで、閣僚会議なんてものを言い出したわけです。言い出したのは……。

渡邉　閣僚会議と言いますと、さっきの東南アジアに関しての開発閣僚会議ですね。

吉野　しかし、そのときは事務官でも非常に優秀な人がいまして、いずれも故人ですが、御巫（清尚）とか西山さん、そういう人たちがいまして、大いにサポートしてくれたわけです。だから、うまくいったんですがね。その間に、まず日韓基本条約の交渉が行われていました。

渡邉　基本条約は六五年六月でしょう。

吉野　日韓基本条約の中にも、やはり賠償というのか、援助賠償みたいなものが入っているわけですよね。その協定は、もっぱら西山さんが牛場さんと一緒になって、徹夜を何回もしてやってくれたわけです。だから僕は、その点では傍から聞いていて、口を出さなかったんですが、そうこうしているうちに、今度は東南アジアの国々と、「浴衣がけの交際をしようじゃないか」ということを、三木さんが言い出したわけです。三木さんが言い出したのか、椎名さんが言い出したのか、我々がそういう知恵を付けたのか、ちょっと忘れました。

　そこで、「まず第一に閣僚会議を開こう。そして第一回は、日本へ招待しよう」と言った。ところが、それに対して、僕の局長の西山さんは、「吉野君、そんな危ないことをやっちゃいけないよ」と言って、相当批判的だった。いま考えると、局長の言うこともよく分かります。ちゃんとやるなら、成功させなきゃいかん。ところが、三木さんあたりが、えらく張り切っちゃってね。それから、あの頃、通産省の大臣は、どなただったですかな。通産大臣も、そんなに悪くなかったんですよね。

渡邉　今のは六四年ですか。では、第一次佐藤内閣ですね。

武田　最初の通産大臣は桜内（義雄）さん、そのあとが三木（武夫）さんです。

吉野　ああ、そうか、当時、三木さんは通産大臣だったな。失礼……。

渡邉　外務大臣は、椎名（悦三郎）さん。日韓基本条約のときは椎名外務大臣ですね。

吉野　そうそう。ところが、椎名さんは、それほど三木さんみたいに張り切ってはいないんです。ただ、「浴衣がけ」というのを言い出したのは、むしろ椎名さんかも分かりません。要するに、当時みんな、椎名さんも三木さんも、意欲はあったんです。そういう東南アジアに対して、日本はともかく占領の後、自国の経済復興一本槍でしたからね。政治家の中に、これだけ経済も強くなったから、少し東南アジアに対しても、もっと積極外交を展開したらいいんじゃないかという気持ちが、だんだん出て来た頃でしょうね。

渡邉　ぼちぼち賠償も片づく頃ですしね。

吉野　そうそう。そこで、そういう「浴衣がけ」で、東南アジアの連中と一緒になって何かしよう、と。こういう気持ちになってきたんです。それで、その気運があって、準備を始めましたが、問題はそのときにカンボジアが来るかどうかということでした。どうして、カンボジアの参加が問題になったのですかね。もう既に、アメリカが侵略した後ですかね。

股野　いや、そんなことはありません。六五年なら、まだシハヌークの時代です。

吉野　そうすると、ラオスが来ることは問題ないし、ベトナムも来る……。カンボジアが来るかどうか。この会議の成功・不成功は、カンボジアが来るかどうかということが、唯一の決め手でした。それで、ともかく第一回は日本の東京で開こうということでやったんですが、別にこっちは、彼等に大盤振舞いをするということではなくて、ともかく共通の問題を膝を交えて話そうということだったんです。また、それにいろいろ餌を付けては駄目だということでね。

渡邉　そうすると、この会議に関しての主管というのは、外務省で言えば、吉野さんのところの経済協力局ですね。通産省は絡まなかったんですか。

吉野　いや、もちろん課長や部長は関心はあったんですけれども、通産省の上のほうが、どの程度噛んでいたか。僕は、そういう連中とはその頃あまり……。

渡邉　あまり接触はなかった……。

吉野　接触はしなかったです。

渡邉　そうすると、よくある通産省と外務省の綱引きとか、そういう話は、このときにはないわけですね。

吉野　そうです。ただ、三木さん自身は、非常に張り切っていたんですね。

渡邉　大臣のほうはね。

吉野　それで、第一回は無事に済んで、それから毎年続けるということになったわけです。そのうちに、今度はこちらからも出掛けて行くという形になって、三木さんに付いて行く。

渡邉　確か東南アジア農業開発会社というのもあったと思いますが、ご記憶にないですか。

吉野　そうですか。一つは、もちろんコロンボ会議で、これは農業を中心としたものです。農および水で、メコン川流域開発ということでね。

渡邉　このときに、先ほど話に出たコロンボ会議の……。

吉野　そうそう。派生としてね。それはメコン川流域開発という形で、コロンボ会議がこれをフォーカスしていこうということになった。それで、今度は何がいいか、開発計画か何かと言って、いろいろ考えたんですよね。そしたら、民間のコンサルティング会社で、有名な……。

股野　日本工営ですか。

吉野　日本工営の社長は、どなただった？

股野　久保田さん。

吉野　久保田豊さんがメコン川流域開発に関連して、「ラオスにナムグムというところがある、そのダムを日本がつくってやれば、手頃であるし、それが核となるから、それをやったらどうか」と言うのです。それと前後して、アメリカのＡＩＤ（アメリカ国際開発局）のロドリックという男が、僕を訪ねて来ました。彼等の戦略は、日本をベトナム戦争に、少なくとも経済協力の面で間接に巻き込もうということだったんでしょうね。彼が、「経済協力の、いい案件はないか」と言うので、僕は、「ラオスのナムグムにダムをつくるのがいいんじゃないか」という話をしました。そうしたら、彼はえらい乗り気になりまして、「それではアメリカも金を出すから、ひとつ一緒にやろうじゃないか」と言い出したわけです。そう言って、彼は帰ったわけです。

　ところが、大蔵省と接触すると、大蔵省は、「そんなコロンボ・プランか何かに、金は一切出ない」と言うわけですね。それで、非常に困ったわけです。ともかく、ラオスでコロンボ・プランの会議をしようじゃないかということになりました。大蔵省に勝川（欣哉）という男がいたんです。これは割合に人の善い男で、彼自身は非常に協力的なんです。ところが、大蔵本省が強いから、板挟みになって気の毒でした。彼も一緒に、僕は連れて行ったんです。それで、ラオスで会議をしましたら、当時、ラオスの米国大使をしていたサリバンも出て来ました。

股野　ビル・サリバン。

吉野　彼は有能な大使でした。もちろん、本省の命令を受けているんでしょうが、えらく積極的に「やれやれ」と言うわけです。それで、勝川君は非常に困っていました。僕は、「これはいい計画だ」と言って、大いにプレッシャーをかけたんですね。そのときに、アメリカ側がヘリコプターを出してくれたので、上空からナムグムの周辺を視察しました。そうすると、ナムグムというのは富士山みたいな小さな山ですが、その頂上の真ん中に火口湖があって、そこに水が一杯溜まっています。その水を下ろすというのが、発電所の構想なんです。

　何のことはない、パイプを引けばいいんですよね。理想的なダムサイトです。それをやろうじゃないかということで、二千何百万ドルだったですかね。そのうちの半分ぐらいはアメリカが持って、半分ぐらいは日本が持つというような話になって、それで話を進めようということなんですが、同行の勝川欣哉君は大蔵省を代表しているので、なかなか「うん」と言ってくれないのです。結局は、うまくいったんですがね。二千四百万ドルですかね。数字は忘れましたけど、そのうちの半分ぐらいを日本が持った。

　ところが、そのダムに発電所をつくったお蔭で、いまラオスはえらく得をしています。まず第一に、ラオスの収入源というのは、そこから出る電力のほとんどを、タイへ売ったものです。そのくらいでしたから、後になって、更にもう一本パイプを加えて、もっと発電量を大きくするということもやったし、それから、その頃からメコン川流域

の開発というのが発電を中心として広がって行きました。もう名前は忘れたんですが、当時ヘリコプターで上を飛んだ、メコン川の支流や本流の発電も、だんだん出て来たわけです。経済協力時代の金字塔の一つとして、そういうことを憶えていますね。

渡邉　一ヵ月ほど前に、ラオスの人と千鳥ヶ淵のフェヤーモントホテルで会議をやりました。これは教育のほうで、お互いに教科書にどういうことを書いてあるかという会でした。そのときに、今のダムの話をいろいろ聞きまして、「あなたのところは、何が一番の輸出品だ？」「電気だ」「うん？　電気が輸出品だとは？」と言って、説明してもらったのを思い出しました（笑）。大変感慨深いことで、その頃からの話なんですね。

吉野　ところが、そのうちにベトナム戦争が激しくなって、それからカンボジアも戦場になった。もっと後ですがね。キッシンジャーのときですからね。ですが、その前からラオスは、もう既に、かなり共産勢力あるいは左派と右派の争いが始まっていたわけです。例えば、僕がハーバードへ留学した頃、アメリカ陸軍の人で、僕と同じような派遣生が、ちょうどラオスから帰って来て、そこへ来ていたわけです。だから、「ラオスはどうだ？」と僕が訊いたら、「あそこは行ったって、全然訳が分からん。みんな撃ち合いをしているだけだ。右か左か、どっちも分からん。どっちに味方していいか分からん」なんていう話をしてくれたことを憶えています。

　そういうようなところから、だんだんとベトナム戦争が拡大していくわけです。ですから、東南アジアの安定のために、日本を積極的に誘い出そうというのが、大きなアメリカの狙いだったんですね。そのために、「経済協力みたいなものを日本が行うなら、アメリカも半分ぐらい持つよ」と言って、だんだんとやり始めていったわけです。だから、アメリカの積極的な姿勢は、常に表われていたわけです。しかし、ベトナム戦争が激しくなると、今度は日本が、「これは、ちょっとおかしいぞ」というような気持ちになったんでしょうね。

渡邉　私の記憶では、今のお話のあたり、六三年か六四年に、日本とラオスの経済協力協定というのが結ばれますが、それはご記憶にはないですか。

吉野　何か協定が結ばれるということで……。経済協力の借款協定は別として、もう一つ交渉があったような気がしますが、よく憶えておりません。当時、日本からは代理大使が来ていたんです。大使は、まだ着任していませんでした。

渡邉　日本から？

吉野　和田（周作）さんという、僕等より三、四年上の人が後に大使になって赴任しました。

渡邉　もし、そういう協定があるとすると、経済協力局の……。

吉野　いや、協定があるとすれば、それは……。

渡邉　地域局か。

吉野　地域局です。

渡邉　なるほど。

股野　経済協力協定ですか。

渡邉　要するに、賠償に代わるものという形で、いわゆる準賠償的な……。

吉野　それは、ナムグム・ダムとは違います。

渡邉　違うと思いますが……。

吉野　それはあったでしょう。あるいは、つくろうとしているのか知

りませんがね。

渡邉　もっと前かな。

吉野　もっと前かも分かりませんが、その頃ですよ。

渡邉　その辺だと思います。

吉野　その辺です。だけども、まだ大使はいなくて、和田さんが……。後に大使になったかな。

股野　大使になりました。

吉野　そうすると、和田さんの前だな。誰かがいたんです。大使じゃなかったような……。

渡邉　そうすると、もう一回おさらいですが、仮に今の準賠償的な話があったとして、それとは別にナムグム・ダムの話がコロンボ・プランの枠の中であった。そして、それは日本とアメリカの両方がお金を出してやるという形で進んだわけですね。

吉野　そういうことです。他の国もインバイトしたけれども、ほとんど形式的に、ちょっと出したぐらいでしょうね。ほとんど出さなかったと思います。

インドネシア援助と政治

渡邉　今、メコン川に日本の援助で幾つも橋ができて、ダムがあってという話を、先ほどお話しした最近の会議で話題にしました。

そこまでの話で、何かありますか。

股野　東南アジアとの関係では、六五年というのは一つの分水嶺です。私は当時、南東アジア課におりましたから、諸に影響を受けたんです。一つは、六五年にアメリカのベトナムへの直接参戦が始まった。北爆開始ですね。他方、同じ年の九月に「九・三〇」で、スカルノが倒れ始める。この二つの大きな分水嶺があって、それが日本が東南アジアに関係を深めていく、二つの起源だったんです。

渡邉　そうですね。おっしゃる通りですね。

吉野　それで、僕はちょっと思い出したんですが、スカルノが失脚して、ハメンク・ヴォノというのが、一時的にインドネシアの大統領代行のようなことをやったんです。その頃、インドネシアの債務を帳消しというか、「リスケ」しよう、そして新たな援助を上げようという形の会議が始まった。これはアメリカが言い出したのか、日本が言い出したのか知りませんが、おそらくアメリカだろうと思います。日本を巻き込んで、オランダも巻き込んで、始まったわけですよね。僕は、また経済協力の関係で、首席というか、交渉相手の日本代表になったわけです。アメリカから出て来た男は、加藤君と一緒にハーバードへ行ったロバート・バーネットなんですが、国務省の人です。それで、相手はマリックというインドネシアの外務大臣で、これと交渉し始めたわけです。

それで、まずジャカルタでこなしたあと、もう一度ハーグで二回ぐらい交渉を行ったんですが、そのハーグのほうにも二回くらい出張しました。要するに、スカルノの膨大なる借金のリスケでした。当時は、日本は帳消しということはできなかったですから、それに代わる新たなる援助ということで、相当日本が、更にインボルブされていったわけです。ところが、その頃のインドネシアは、スハルト退陣後の、今度の状況みたいには混乱していなかったですね。というのは、ハメン

ク・ヴォノという偉い代行者が、これは本当に貴族みたいな家の人ですが、うまくスカルノ亡き後の政治を抑えてくれたわけです。それから、マリックというのは相当の外交官です。この二人が頑張って、うまくその過渡期、スハルトに至るまでの時代をマネジメントしたわけですね。

渡邉　今のお話は、インドネシア援助国会議みたいなものじゃなくて、今もありますよね。インドネシア援助国会議というのは、日本が……。

吉野　それが、後になって発展したんだろうと思います。初めのときは、まず日本とアメリカとインドネシアという形で始まった。

股野　まず、日米で始めたんですか。

吉野　最初は二国でやったわけです。ジャカルタでね。

渡邉　当時は、斉藤鎮男さんが大使の頃ですか。

股野　後にそれが、いわゆるＩＧＧＩ（インター・ガバメンタル・グループ・コンファレンス・オン・インドネシア）ですかね。

吉野　そういうことですね。

渡邉　六〇年代の後半は、東南アジアが非常に動く時期ですね。

股野　それから、椎名大臣の背後に川島（正次郎）副総裁がおられたんですね。

渡邉　「岸―川島ライン」と言いました。

股野　川島副総裁が、インドネシアを含めて東南アジアに大変熱心だった。それで椎名さんも、ちゃんと、そこはしたんです。

吉野　川島さんのことで思い出したんですが、その一環として、僕は川島さんを団長に、四人ぐらいの代議士――みんな郵政省とか、建設省とかを代表した「族代議士」です――と、エジプトに援助をしようということで出掛けたことがあります。ところが、僕は出掛ける前から、「エジプトは、まだ政治的に不安定なので、開発援助には時期が早過ぎる」という気持ちでいたわけです。ところが、川島さんは熱心で、「何かやってくれ」というわけなんです。それから、随行して来た族議員の方々も、「俺たちが来た以上、何かやらなきゃいかん」と言って、張り切っているわけです。

しかし、僕は「第一に大蔵省説得が難しい」ことを、よく知っていますし、エジプトはスエズ運河を閉鎖（一九六七年六月）した後で、ナセルの時代です。ナセルは相当冒険家だし、これは何とかして、うまくかわすよりほか手がないと悩んでいました。一方、彼等はルクソールとか、いろんなところへ案内してくれて、代表団にとっては満足なんです。それで、いざ協定の話をしようということになりました。そこで、結局、日本が実物を出さずに、彼等を満足させることができるかということで、円借款協定みたいなものを結ぶんです。

そのときに、各案件をやる前に、日本からの輸入に対しては、銀行のＬ／Ｃ（letter of credit）を出さなきゃいかんということを条件にしたわけです。当時は、プリミティブな話ですよね。それで、Ｌ／Ｃとはどういうものかと、いろいろ説明しまして、そういう協定みたいなものができました。ところが、エジプトの銀行は、日本に対してＬ／Ｃを開く金額もなきゃ能力もないわけです。結局、その協定は全く動かないのです。だから、結局、日本は金を出さずに済んだわけですけれども、「けしからん。あれは全然動かないんじゃないか」「お前のほうがＬ／Ｃを出さんじゃないか」というような形で、応酬したことがあります。結果的には、日本は一種のトリックにかけたという形になったかも知れません（笑）。それから、まもなくナセルが潰れちゃったので、それで終わりになりましたが、そういうことを憶えていま

す。

渡邉　今のお話に関連して、経済協力局の時代にＯＤＡとの絡みで、川島さんの例のような話――政治の世界との関係ということで、何か他にございますか。「どこかの国を援助してやってくれ」とかという話は……。

吉野　インドネシア援助というのは、当時から酷いようで……。

渡邉　デビィ夫人。

吉野　デビィ夫人を日本へ連れて来たり。それから、三井物産の……。

股野　木下……。

吉野　木下という政商がいたわけです。そういうのが政界と盛んに連絡を取って、我々のところにもアプローチしてきました。僕等は政治問題だから、「自分からはイニシアティブは取らん」という形で受け流していたんですが、木下が斡旋して、相当何かやったらしいです。そこら辺のことは、僕には分かりません。少なくとも、外務省は直接には関係していない。僕等も、その種のコクテル・パーティーみたいなところへ呼ばれるので、一度くらいは出たことがありますけどね。

渡邉　六五年前後は、いわゆるＯＤＡ関係の機構がいろいろ整備されていく時期だと思います。今のＯＥＣＦとか、ＪＩＣＡの前身だとか。

吉野　それから、手続きなんかもね。その前はまだ、例えば円借款なんかも、小林中さんと我々がうまくでっち上げれば、大蔵省は呑まざるを得ないというような形で、相当自由だったんですけれども……。

渡邉　いいにつけ、悪いにつけ、制度化されているわけですね。

吉野　それで、四省協議とか、そういうのができてきたわけです。

渡邉　そういうものは、現場の経済協力の人たちにはあまり関わりないところでできていくんですか。

吉野　しかし、四省協議みたいなものが定着したのは、僕が外務審議官をやる頃からです。その関係四省の連中を呼んで、話をしたりね。その前から、もうできていたんでしょうけれども、そこら辺で彼等と一緒になって、コンサルトしてやっていこうということです。

渡邉　そういうものを制度化していくというのは、誰が……。やはり金を出す関係で、大蔵省がイニシアティブを取るんですか。

吉野　いや、大蔵省じゃない。やはり外務省にしても、いつも大蔵省から絞られるのは嫌だし、彼等にもっと出さざるを得ない形にしてゆこう、と。例の、ＯＥＣＤのＤＡＣの会議もあるし、日本はＧＮＰの〇・九％とか低い水準であって、いつも国際会議へ出る度に、「もっと対外援助をやれ」と言われるし……。というようなことから、だんだんに、もっとスムーズに制度化していこうという気持ちになっていったわけです。それに各省、特に大蔵省なんか嫌々でしょう。

渡邉　大蔵省のほうは、むしろ嫌々ですか。

吉野　ええ。だんだんと農林省とか通産省なんかは、いろいろ発言もするようになるし――経企庁は、ほとんど自分は何もしないんですが――とにかく対外援助にタッチできるということで、（援助に）賛成するようになっていったわけですね。

渡邉　時間になりましたので、今日は経済協力局でのお仕事が終わったところまでにしましょう。いよいよ六八年から、アメリカ関係が非常に大きくなってきますね。今度は繊維があり、沖縄があり、ニクソン・ショックがあり、石油ショックがあり、エトセトラ……。いろいろ盛沢山なので、次回を楽しみにしております（笑）。

吉野　しかし、最近のことになればなるほど、忘れる（笑）。

股野　ＯＥＣＦができたのは、経協局参事官の時代ですか。

吉野　少し前じゃないかな。

股野　あれの主管が経企庁になるというのは、かなり各省間の調整というか……。

渡邉　綱引きとしては、ね。

股野　大きな出来事でしたね。

吉野　ＯＥＣＦができたのは、その頃でしたか。

渡邉　たぶん六一年だと思います（同年三月設立）。

股野　あれができて、四省庁会議というパターンが一つできたんですね。

渡邉　それでは、今日はそこまでで……。どうもありがとうございました。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー

第5回

[1999年7月26日 14:00～16:00]

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

渡邉昭夫（青山学院大学教授）

股野景親（元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員）

（於：国際経済研究所）

アメリカ公使として

渡邉　今日は、アメリカ時代のお話が中心になるかと思いますが、例によって前回少し聞き漏らしたことだとか、私の記憶違いで質問が間違っていたところがありますので、それから始めたいと思います。

前回、「六三年か六四年に、日本とラオスの経済協力協定が結ばれた」と、私が質問していますが、実はそうではなくて、日本とラオスの経済協力協定は一九五八年の十月十五日なんですね。それで、その次の年、五九年の三月にカンボジアと同じような経済協力協定が結ばれ、同じ五九年の五月十三日に南ベトナムとも結んだ。こちらは賠償協定というふうに、外務省のほうでもお呼びになっているようですが、前者二つ――ラオス、カンボジアは、我がほうから見ると賠償ではなくて、準賠償の経済協力協定という名前になっているそうです。

ということで、五八～五九年にかけて、インドシナ三国――ラオス、カンボジア、ベトナムと話がまとまる。ちょうどその頃に、経済局のほうの仕事をなさっておられた。ラオスのことは、この前お聞きしましたが、カンボジア、ベトナムに関して、何かお考えになったことがございますか。

吉野　あまりないですね。

渡邉　そうすると、たまたまラオスのことで？

吉野　これは、むしろメコンリバー開発と関連してのものですね。ということは、アメリカが日本に、「少しインドシナ半島に、経済協力で力を入れてくれ」ということで、「アメリカも金を出すから、日本も金を出して一緒にやろうじゃないか」という話なんです。結局、ベトナム戦争の背後からの援助、サポートということなんでしょうがね。しかし、我がほうは純然たる……。

渡邉　そうすると、日本の賠償絡みの話とは直接関係のない形で、お仕事をなさったということですね。

吉野　ええ。

渡邉　たまたま、後に田中（角栄）通産大臣の秘書官になった小長啓一さんへのインタビューを読んでいたら、小長さんは吉野大使よりずっと若い方なんですが、ちょうど同じ頃に通産省の通商政策局の協力第一課の仕事をなさっていて、その頃にインドの円借款のことに関わったと書かれていたので、何か……。

吉野　僕は、第一回の「円借」を始めたわけですよね。それは、この前申したように、岸さんとの関係で小林中さんを引っ張り出して、彼を連れて行って、それでインド借款をやらせた。本省に稟請して、五千万ドルだと思いましたが――円借款ですから、円で処理されています――それを始めさせたわけです。ですから、僕等は、その頃はあまり意識していなかったんですが、おそらく岸さんとか、財界の上のほうには、アジア外交を積極的にやっていこうというような気持ちが出て来たんじゃないかと思います。しかし、具体的に進めていたのは、我々であるわけですよ。その後、円借款は何回も、毎年更新されていったわけですから、小長さんの話は、その間にいろいろ起きたことだと思います。

渡邉　吉野さんの場合は、それを立ち上げるときの話としてお話しされたということですね。分かりました。どうもありがとうございまし

た。

股野　経済協力局の時代に、この地域とご縁ができたんですね。

吉野　三木さんとか椎名さんの時代に、今度は東南アジア開発閣僚会議というものを始めました。もっと意識して、日本は経済的に協力して、開発を進めていこうという気持ちになってきたわけですよね。

渡邉　その辺は前回、一通りお聞きしましたので、取り敢えず先にいかせていただきます。一九六八年の二月に、アメリカに公使としていらっしゃるということになります。ちょうどその頃は、下田大使の時代ですが、ご赴任なさった頃のワシントンの雰囲気、あるいは大使館の雰囲気などから、まず思い出していただきましょうか。

吉野　これは、記録に残さなくても結構なんですが、下田さんが大使に任命されたとき（一九六七年六月）に、彼から僕のところへ電話がかかってきて、「吉野君、是非一緒に行ってくれよ」と言われたわけです。実は僕は、経済協力局の二年か二年半ぐらいの期間に、三人の局長のお世話をして、もうそろそろ違う職に就きたいと思っていました。ただ、ワシントンの公使というのは、あまりアトラクティブではなかったんです（笑）。しかし、「是非」と言われるものですからね。僕は、下田さんは間接的には知っていたんだけれども、別に親しくもなく、「請われるなら行きましょう」ということで出掛けたわけです。

その頃のワシントンというのは、まず第一にベトナム戦争がそろそろ硬直状況に入ってきていました。ちょうど僕が着いた日か、その明くる日か、ワシントンで初めて黒人の暴動に火がついたんです。その前も、各地で小さなライオットは起きていましたが、ワシントンのど真ん中で、黒人がショー・ウィンドーを割ったり、店に火を付けたりといった暴動が起きたのには、僕も大きなショックを受けました。そういうような状況になってきたわけです。それで、その背後にはベトナム戦争という問題があったし――そこら辺の関連については忘れました――確かキングという有名な黒人の牧師が亡くなったんですね。

渡邉　暗殺（一九六八年四月四日）ですね。

吉野　暗殺されたんです。そういうようなことが前後して起きて、非常に雰囲気が悪くなってきた。それから、アメリカはベトナム戦争の始まった頃は、その費用はせいぜいＧＤＰの三％ぐらいで、「ベトナム戦争を続けても、経済は全然困らない」と言っていたんです。しかし、その出費が重なってきて、相当インフレ気味になってきた。ドルも弱くなってきて、要するに戦争を長く続けることは、心理的にも経済的にも良くないというようなことが、だんだんと一般に言われるような時代になってきたわけです。そういうところへ、僕は赴任して行ったのです。

しかし、当時のアメリカはインフレ気味ですから、日本品がどんどん売れるのです。一番大きな問題は繊維問題でしたが、これは相当前からあった。それが、だんだんと騒がしくなってきた。南部の繊維業者がアジテイトして、ＵＳＴＲだとか商務省あたりが動き出した。それから、ミルズ米下院予算（Ways and Means）委員長あたりが、繊維に関しては特に関心が深かったというようなこともあった。要するに、騒がしい世の中になっていったんです。

実際には、僕は（六八年の）三月の末に赴任したと思いますが、ワシントンは、もう夏みたいな暑さでした。いま言ったように暴動や焼き討ちが起きて、それを鎮める一つの手段として――手段かどうか知りませんが――ジョンソン大統領は、「ともかく俺は、再選には出ない。任期一杯務めて辞める」ということを声明したわけです。そうい

う声明を出して、間接的には、ベトナム戦争もできるなら終結したいということを、彼は仄めかしたんでしょうね。

渡邉　「北爆の停止」というのも、彼の話にありますね。

吉野　しかし、アメリカは相当の軍隊をベトナムへコミットしていましたから、制圧するか、あるいはリーズナブルなタームズで停戦しなければいかんということで、いろいろ努力をしていたわけです。そこら辺のアメリカの苦悩ぶりは、僕等はワシントンにいて、よく分かっていたんです。ところが、トンキン湾事件（一九六四年八月）が起きたりして、アメリカはますますアグレッシブにやっている、先方をプロヴォークしているというように、日本も受け取ったし、世界中も受け取ったんじゃないかと思います。しかし、もう戦争はやめざるを得ないという状況であったわけです。

渡邉　日本大使館のほうの体制は、どういうふうになっていましたか？

吉野　下田大使の下に、僕が全権公使、後は……。

渡邉　公使というのは、お一人ですか。

吉野　いや、少なくとも名称「公使」というのが二、三人いたわけです。それは、大蔵省の「公使」と通産省の「公使」で、他に「公使」はいたかな？

股野　「公使」としては、通産と大蔵ですね。後は参事官になるわけですね。

吉野　僕の他に、「公使」が二人いたわけです。

渡邉　そうすると、そのときの吉野公使の主たる任務というか、業務分担というのはどうなりますか。

吉野　形式的には、全てのことを統括するということなんですが、僕は大体、そういう役目には向いてなくて、人の統括ができない。下田さんは、「お前に経済を任せるから、やってくれ」と言ったわけです。そのために彼は、「一緒に来てくれ」と言われたわけですからね。当時、もう繊維交渉は始まっていたし、テレビとか鉄鋼とか、その他ダンピング・ケースも起きていたし、全般として、そういう経済問題を一応やったわけです。

　話は飛びますけど、先ほど言ったようにジョンソンが、「俺は、再選には立候補しないぞ」と言ったので、今度は選挙が始まるわけです。大統領選挙が始まって、ニクソンが大統領に選ばれるわけですね（一九六八年十一月）。その前のケネディと戦ったときは、ニクソンは破れて、彼はもう出て来ないかと思っていたら、また出て来たわけですよ（笑）。あれは本当に、「ハアー、凄いな」と思ったですね。

　しかし、ともかく彼は大統領に選ばれた。そうしたら、後にニューヨーク連銀の総裁になったソロモンという、その前までは国務省の次官補をしていた、僕の交渉相手が僕を昼飯に呼んで、「私は、ニクソンになったので辞める――政権が民主党から共和党に替わる――が、お前に言い残していきたいことが一つある。我々は、日本との繊維交渉では、ことに議会方面からのプレッシャーが強いので、一所懸命やったけれども、相当手心を加えていたんだ。ところが、ニクソンは選ばれる前に、南部の繊維業界の連中に、『俺が大統領になったら、対日規制をする』ということを約束している。だから、今後アメリカとの交渉は相当厳しくなるだろう。それを覚悟していたほうがよい。今までのように甘くはないということを、お前に言っておくから」と言ってくれたんです。彼は、あまり掴みどころのない、しかし後になってニューヨーク連銀の長になったくらいですから、なかなかの敏腕家

です。彼は親日的なのか、反日的なのか分からなかったんですが、最後にそういうことを言ってくれたわけですから、まあ親日的ではあったんでしょうね（笑）。

日米繊維協定と沖縄問題

渡邉　日本で言うと、この頃は佐藤総理大臣で、向こうはジョンソンからニクソンに替わる。六八年から六九年というのは、佐藤さんから見ると、いわゆる沖縄返還の話が一番大事で、ちょうど吉野さんが向こうに行かれたすぐ後に、取り敢えず小笠原の返還協定が結ばれるという政治問題が一方にあって、もう一方で繊維を始めとした経済問題が出て来るという時期です。その政治のほうには、特にご関係はないんですか。

吉野　政治のほうは、あまりワシントンでは問題ではなかったし、大部分は東京でネゴシエイトされていましたから、それほどやるべきことはなかったんです。ただ、だんだんと、その頃から核の問題というか、結局、沖縄問題が出て来たんです。

渡邉　核問題というのは、「核抜き」の話ですか。

吉野　「核抜き」の話。コンサルテーションとか、そういうことをね。これは「新安保」との関連でしょうけどね。

渡邉　この辺は、大使として下田さんがだいぶご苦労なさったと思いますが、何かそばにいらっしゃって感じましたか。

吉野　それから、東郷（文彦）さんが時々、東京から出て来ました。

渡邉　彼は、北米局長ですか。

吉野　局長です。それで、僕は「付いて行け」と言われて、彼と一緒に交渉というのか、陪席して、先方と渡り合ったようなことはありました。しかし、彼も根は非常にタカ派ですから。

渡邉　彼というのは、東郷さんですか。

吉野　ええ、東郷さん。だから、別にどうってことはなかったですね。

渡邉　そうすると、ニクソンが当選してから、今の話のように、俄然、繊維問題が前面に出て来るわけですね。それまでは、ワシントンに行かれてからニクソン政権がスタートするまでの何ヵ月間は、特に具体的に難しい問題があったというわけでもないんですか。

吉野　難しい問題は、なかったですね。いわゆるダンピング税がかかるとか、そういう問題はしょっちゅうありましたよ。しかし、特に政治問題で私の印象に残るものは、それ以外にはなかったですね。そのうちにニクソンが出て来て、それから今度は田中角栄とか、その他の閣僚を連れて、佐藤総理がニクソンを訪問するわけですね。そのときに、例のカリフォルニアのニクソンの別荘みたいなところに……。

股野　サンクレメンテですか。

吉野　サンクレメンテ。

渡邉　サンクレメンテは、もうちょっと後じゃないですか。サンクレメンテは七二年の一月でしょう。

吉野　ああ、そうですか。それじゃあ、僕が帰って来てからですね。僕はアメリカ局長として行ったわけですね。失礼しました。サンクレメンテの話は、アメリカ局長時代の話です。

股野　アメリカ局長もなさったから、お仕事が連続しているんですね。

渡邉　取り敢えず、ワシントンの話をしましょう。そうすると、六九

年の一月にニクソン政権がスタートして、繊維問題が難しくなってくるんですね。繊維問題は長い物語になると思いますが、どういうふうに公使として関わられたんでしょうか。

吉野　ええ、長い長い……。今度は、ソロモンの言った通り、だんだんと先方の態度が強くなってきた。僕の交渉相手はトリザイスという日本でも有名な人ですが、僕は彼が在京米大使館の参事官をやっていた頃からよく知っていて、物はよく分かるけど、非常にやさしい人なんです。だから、（交渉のとき）日本の立場もよく分かるし、自分たちの言っていることが理不尽だと思っていても、上から「早くやれ、もっと強くしろ」というプレッシャーがかかってくるので、彼の立場は非常に難しかったんです。それでも何とかして、日本側の要望にも沿い、かつアメリカ側も満足できるような案をつくろうということで、一所懸命、双方で努力したわけですよね。その間に何回も案をつくりまして、本省に言って――本省というのは、もちろん通産の繊維局ですね。繊維局の承認を得て、「これなら、いずれもぎりぎりの線だ」というようなことを言いながら、だんだん形ができてきたわけです。ところが、米側の交渉の督戦隊みたいなものが、キッシンジャーだったわけです。その前は、ロジャースだったんです。

渡邉　国務長官はロジャースですね。

吉野　キッシンジャーは、何でしたか。

渡邉　キッシンジャーは大統領補佐官です。

吉野　補佐官として出て来た。ロジャースはそんなに強いほうじゃなかったんですけども、キッシンジャーが督戦隊として出て来て、僕とトリザイスが交渉する際に、横に座っていて、「俺は、繊維のことは一切分からないんだ。しかし、上のほうから『早くやれ、強くやれ』と言われておるから――嫌々だとは言いませんでしたが――ここへ座っているんだ。だから、早くやってくれよ」と言う（笑）。だから、トリザイスのほうは、非常に辛かったわけですね。

渡邉　やりにくいですね。お目付が、そばに座っているわけですか（笑）。

吉野　そうなんですよ。しかし、そういうようなことが二、三回ありまして、何回も協定をつくり直すんです。ところが、そのうちに、だんだんおかしなことが出て来たんです。それは、日本が、「これはぎりぎりの線だ」と言って、アメリカのトリザイスも、「では仕方ない。これで結末をつけましょう」と言って、まとまったと思ったら、翌日になるとアメリカ側の主張がガラッと変わって、違う案が出て来るわけです。それで、トリザイスは僕に、「実は、これは佐藤さんが日本の忍者みたいな人を通じて、『これでいいよ』というようなことを言って出して来た案だから、日本側の事務当局は揉めるだろうと思うけれども、米政府側も態度を変えざるを得ないんだ」と。はっきり言わないけれど、そういうような形で僕に言うわけですよね。そういうことが二、三回ありました。

　僕も、その忍者なる人物には、後になって二、三回会ったんですが、佐藤さんはその人物を二人ばかり、ワシントンへしょっちゅう派遣していたわけです。しかし、その連中は、ワシントンの大使館へは寄り付かない。名前を言っていいかどうか知らないが、一人は高瀬保という京都産業大学の教授です。後になって、偶然にパーティーか何かで会って、初めて顔を知ったんですけどね（笑）。それから、もう一人は、おそらく繊維とはあまり関係ないと思いますけれども、亡くなられた人で、僕はこの人とは面識もあった。安全保障をやっている学者

で、病気になって越中のほうへ帰られた人です。

渡邉　若泉敬。

吉野　若泉さんなんです。この二人が特使と称して、ワシントンへ来るわけです。これは、佐藤さんの悪いところなんですよね。後でお話しする機会があると思いますが、佐藤さんは沖縄協定をまとめたという意味で、僕を評価していたのか――彼は、そのお蔭で後にノーベル平和賞をもらったからか――僕がドイツ（大使）から帰って来て挨拶に行ったら、彼は「上がれ、上がれ」と言って、自宅へ上げて、奥さんまで出て来て、「吉野さん、お帰りなさい」と言ってね。その頃は、もう総理を辞めていたんです。元総理に、そんなにありがたがられたことはないんです。僕は、彼のノーベル賞に貢献した覚えは何もないけれども、まあ、そのくらいの人だったんですがね。

だけども、その人の悪い癖というのか、外務省以外の情報源を自分で持っているわけです。ちょうど、「私設ＣＩＡ」みたいなものですね。それが、本国から新しい案を持って来るわけです。その案は、本来ならば、日本政府が「ＯＫ」のはずなんです。だから、向こうは、それをそのまま我がほうへ突き出すわけです。ところが、それは通産省を通していないのです。だから、我がほうが、またこれを本省へ送り返して稟請すると、通産のほうがまだ駄目なんですよ（笑）。つまり、佐藤さんがちゃんと責任を持って、「通産が折れたんだから、お前折れろ」と言うのなら分かるんですけど、高瀬某が持ってくる案というのは、トリザイスにとっても、我々にとっても、どうにもならないわけです。しかし、アメリカ側は、トリザイス以外にスタンスだとか、その他の繊維関係の政治家が見ているわけですから、「これで日本が折れないのはおかしいじゃないか」という形なんです。そういうことが二、三回ありました。そのうちに、トリザイスも、「我々が決めたものを、また覆す奴が来た」という話を僕等にするわけです（笑）。それで、非常に梃子摺った。

そうこうしているうちに、僕に（七〇年の）九月頃、帰朝命令が出たんです。帰朝命令が出ても、牛場さんが、「ともかく後任者が来るまでは……」と。あれは、どうして後任者が来なかったのかな。後任者は大河原（良雄）君だろうね。大河原君は、東郷さんが何かで出張中なのか、アメリカ局参事官を離れられない……。

股野　アメリカ局の次席ですよね。

吉野　次席をやっているから、まだ赴任できないというわけです。だから、僕に、「十二月の末日まで残ってくれ。この繊維協定をまとめてくれ」と言うわけです。僕は、もう帰朝命令が出たから、家を解約して、家族を帰してしまった。そしたら、牛場さんが、「お前、家もないし、家族もいないんだから、大使館へ来い」と言って、ひと月かふた月、大使公邸の三階か何かに泊まりました。僕は、他人の家に居候しなきゃいかんし、やることは繊維協定しかないし、非常に不愉快なというか、ゴルフにも行けない（笑）。

股野　居心地が、あまり良くなかった（笑）。

吉野　牛場さんと行く以外は、ゴルフにも行けない。時間はあったんですが……。その間に、だんだんと繊維協定が最終段階に近付いて来たにも拘わらず、これがいつまで経ってもまとまらないわけです。それは、そういう変なものが時折入って来るということと、それからだんだんと悪化してきまして、今度は日本の繊維業界の連中がワシントンへ押し掛けて来る。当時は、二回か三回、内閣の改造がありまして、宮沢（喜一）さんが通産大臣（一九七〇年一月）になった。僕等は、

宮沢さんならうまくいくだろうと思った。そして、宮沢さんが今度はワシントンへ交渉に来たわけです。そうしたら、その繊維業界の連中も一緒に付いて来て、反対したのかな。まあ、ともかく、まとめ切らなかった。

それから、十月頃になってから、今度は田中角栄（一九七一年七月通産大臣）が出て来て、「えい、やあ」と言って決めたわけです。その頃、僕はもう日本に帰って来ていて、繊維問題は幾らやっても駄目だったので、今度は沖縄返還問題に入っていたわけです。しかし、ワシントンにいる間――特に、まだ僕が家にいた頃は、昼間、交渉して電報を打つでしょう。そうすると、夜になると、僕のところへ本省や業者から電話がかかってくるわけです。夜中に起こされるわけです。東京からは宮崎なんとかさんも……。

渡邉　宮崎輝。

吉野　彼が、「吉野さん、折れちゃ駄目だよ」とか、いろいろなことを言って来るわけですよ。それで、それやこれやで、本当にその夏は電話で悩まされたわけです。

渡邉　これは、七〇年の夏ですか。

吉野　七〇年の夏ですかね。それで、秋になってもまとまらずに、十二月末に帰って来てから、宮沢さんが辞められて、田中角栄になってまとめたということですね。

渡邉　宮沢さんの前は、確か大平正芳さんが通産大臣で、そして宮沢さんになって、それでも駄目で、最後に田中さんという順番ですね。

吉野　そうです。だから、大平さんのときにも、そういうことがあったわけですよね。

渡邉　七〇年の九月に、大使が牛場さんに替わるんですね。

吉野　そう。それで、僕はもう七月に発令になっていたから、夏休みは少し楽になると思っていたんです。そしたら、下田さんが発ってから一週間後ぐらいに、もう牛場さんがワシントンへ張り切って着任するわけです（笑）。

渡邉　牛場さんがね。本来は、牛場さんと入れ替わりぐらいで、吉野さんは東京へ帰るはずだったのが、そのまま止め置かれたというわけですか。

吉野　そうです。十二月の末日までいて、三十一日の日にハワイに泊まっていたら、爆竹がなって「ああ、これは、もう新しい年になったな」と思った（笑）。それで、一月一日か何かに、えらく空いた飛行機に乗って帰って来ました。それを憶えています。そういうことで、ワシントン時代というのは、ほとんど繊維、繊維で忙しかったですね。

渡邉　悩まされたんですね。七〇年の後半は、その意味で吉野さんとしては中途半端な時期だったと思います。しかし、その間に佐藤・ニクソン会談があります。これには関わりはなかったですか。

吉野　ワシントンでやれば、僕はもちろん出ていましたよ。だから、それはおそらく沖縄の「核抜き（返還）」の話でしょうね。核抜きは、もう相当前から決まっていた問題だ。

股野　六九年の段階で済んでいるんですね。

吉野　ああ、そうだ。僕が帰って来たのは、七〇年の暮れですから。

渡邉　六九年の十一月に、佐藤・ニクソン会談があった。

股野　それが、いわゆる「核抜き」の話です。それで、七〇年は国連の二十五周年になりますか。それの何か記念の会合があって、ホワイトハウスで、記念の大晩餐会があったんです。それのために、また佐藤さんは来たんです。そのときに、大統領との会談（一九七〇年十

月）をしたんですね。だから、その頃は繊維がむしろ……。

渡邉　繊維が表面に出ているわけですね。

股野　七〇年の十月はね。

吉野　それで、沖縄と繊維が「交換」だったという話になる。

渡邉　絡んだという……。

股野　もう今度は、繊維だったんです。

吉野　おそらく佐藤さんは、「ともかく繊維は、まとめるからね」というぐらいのことは言っていたんですよね（笑）。だけども、彼が来た後も、まとまらないわけです。佐藤さんには、まとめる意志は十分あったけれども、やはり官僚がいて、業界があって、それをあからさまに抑え付けることはできないわけです。だから、無理な話です。だから、政治というのは難しいんです。それで、宮沢さんに「頼むぞ」と言ってやったら、宮沢さんも駄目だった。

渡邉　話を戻してよろしければ、六九年にニクソン政権がスタートして、その夏に、いわゆるニクソン・ドクトリンというのが出ることになりますが、公使としては何かご感触がありましたか。

吉野　ニクソン・ドクトリンというのは何回も聞いたんですけど、僕の印象では、これはニクソンが、「アメリカは兵隊を減らす」ということを言ったんじゃなかったでしょうか。

渡邉　そうですね。アジアから。

吉野　ところが、その頃は、ベトナム戦争もあったし、我々にはそれほど危機感なんかなかったですね。だから、少なくとも、それほど印象に残っていません。

渡邉　それから、ちょうどその同じ頃の夏に、第七回の日米貿易経済合同委員会があった。これは、ずっとシリーズでやっていて、日本でやって、アメリカでやってというように交代でやったと思います。第七回の会議はどっちでやったのか、私はいま覚えていませんが、各大臣がみんな集まって、「ワアッ」とやる……。第一回は、確か箱根で――池田内閣のとき（一九六一年十一月）に始まって、それからずっと、毎年やっているんですね。これは、お仕事柄からすると、かなり関係がありそうなんですが……。

吉野　何月だったですか。

渡邉　七月二十九日になっていますね。

股野　六八年にお着きになっているから、その翌年ですね。

渡邉　これは、ひょっとしたら日本でやったのかな。

股野　日本でしょう。私も、ちょうどこの頃にワシントンにいたんですよ。いれば、お手伝いをしていたでしょうからね。

渡邉　大臣がみんな、ぞろぞろ来るわけですからね。

股野　だから、これは日本でしょう。七一年（九月、第八回）に、またあったんですよ。これは、アメリカのウィリアムズバーグ訪問後、ワシントンで行われました。

渡邉　七一年がね。では、必ずしも毎年やっているわけじゃなくて、二年ぐらい飛んだのかも知れませんね。

股野　七〇年の記憶がないですね。

渡邉　分かりました。一九六九年は、たぶん東京でやったんでしょう（同年七月、第七回）。

吉野　その間、何年か忘れましたが、中曽根防衛庁長官が訪米されたんです。それは防衛庁長官になってから間もなく、おそらく挨拶に来たんじゃないかと思います。それで、僕等は彼が来ることについて、非常に身構えるというか、困ったなと思ったことがあったんです。と

いうのは、その頃、中曽根さんは国内では、「日本は核を持たないといかん」ということを盛んに言っていたわけです。ところが、アメリカの雰囲気ももちろんだけど、日本の雰囲気も、「とにかく核を持つなんてとんでもない」という話なんです。そこで、「お前、何とか中曽根さんを説得しろ。彼が国防省へ行って、『日本は核を持つ、だから協力してくれ』なんて言ったり、あるいは声明でも出したりしたら、大変なことになる」というわけです。

そこで、僕は彼が来ましたら、真っ先に会いに行った。「中曽根先生、核なんてことは、今はもう時代遅れですよ。そんなことを言い出したら、アメリカもそっぽ向くし、世論も良くないから、核だけは言わないでください」ということを、はっきり言いました。そしたら、中曽根さんは、お気持ちは良くなかったんでしょうけれども、反駁しなかったんですね。「俺は言うよ」とか、「なぜ悪い」とかはね。彼も利口ですから……。そして、彼はペンタゴンとの会議でも――国防大臣はレアードでしたか――核武装の問題は一切言わなかったんです。それで、「彼は、口ではああいうことをいろいろ言っているけれども、案外リーズナブルだな」と思いました。後になって、今度はウィリアムズバーグに来て、このとき彼は、もう総理大臣になっていましたね。

渡邉　サミット（一九八三年五月）のときですね。

吉野　そうそう、「不沈の空母」なんてことを言って（笑）、相当張り切ったわけですけどもね。しかし、核に関する限りは、彼はそれ以来ずっと言わなくなっちゃったんですね（「不沈の空母」発言は、一九八三年一月の訪米時）。

渡邉　中曽根防衛庁長官が訪米すると、それは吉野公使が対応するんですね。

吉野　おそらく一緒に付いて行ったりするのは、僕がやったんでしょうね。下田さんがいたとすれば、下田さんが当然いろいろなことをしているだろうと思います。だけど、下田さんも「核論者」ですから、二人が一緒になって「おう」「おう」なんて言って、相呼応したらそれまでで、僕も収めようはなかったんです。僕は真っ先に飛行場かどこか忘れましたが、釘を刺しちゃったんです。「もし、これを言い出したら、今は総好かんを食いますから、ひとつ控えてください」と言ってね。

股野　六九年ですか。

渡邉　七〇年でしょう。七〇年の一月に第三次佐藤内閣になって、中曽根防衛庁長官じゃないでしょうか（一九七〇年九月、訪米）。

股野　しかし、六九年の十一月に、もう核抜きの沖縄返還が共同声明に出ているんですからね。中曽根さんが……。

吉野　だけど、日本が核を持つというのは、沖縄返還と関係ないわけです。

股野　ああ、そちらのほうですか。では、沖縄と直接関係なく……。

渡邉　「日本が防衛のためなら核を持つということは、必ずしも憲法違反ではない」というような、そういう種類の答弁は時々やっていますので……。

吉野　そういう種類の話でしょうね。

渡邉　ワシントンでの公使時代というのは、やはり繊維問題というのが中心ですか。

吉野　繊維問題に明け暮れしたということですね。しかも、ある意味では、それは不毛であったということです。そうこうしているうちに、日本の自動車が入って来たんですけど、これはまだ大したことはなか

ったです。

渡邉　そうですね。鉄鋼とか、テレビとか……。

吉野　それから、エレクトロニクスその他が、どんどんアメリカの市場に溢れてきて、繊維なんて問題は、本当はアメリカの産業にとって大したことはなかったんだけど、向こうは政治問題として大きくしたわけです。

渡邉　先ほどおっしゃった、いわゆる佐藤総理大臣の密使というのは、後になってからは知られているんですね。当時、お仕事なさっていて、もちろん直接お会いにはならなかったというお話ですが、そういう人が動いているということは、耳に入ってらっしゃったんですか。

吉野　いや、それも初めは分からなかったんですよ。米側が、「昨日、こういう訓令が東京から来ているはずだから」と言うんだけど、僕等のところには、そんな訓令なんか来ないわけですよね。それで、「佐藤さんから、ワシントンに直接来たんだ」というような話でね。「おかしいね。昨日、トリザイスと話を決めて、それを稟請したばかりじゃないか」というようなわけですからね。そういうことが二、三回あって、そのうちに牛場さんが僕に、「どうも密使が動いているんじゃないか」という話をし出して、「はあ、なるほど。そういやあ、そうかな」というような形で、だんだんと判明してきたんです。

国会答弁に奔走——機密漏洩事件

渡邉　七〇年の夏頃に、既に帰朝の発令は出ていたということなんですか。ということは、牛場さんが（大使に）発令になってから、間もなくでしょうね。それで、帰国するまで三ヵ月か四ヵ月かかったわけですね。四ヵ月近く大使館住まいをなさって、翌七一年になってから、東京へお戻りになった、と。それで、アメリカ局長でございますね。局長としては、どういうお仕事だったんでしょうか。

吉野　アメリカ局長のときは、これもまた相手はアメリカですから、安全保障の問題でしょうけれども、そのために国会の答弁なんかしました。今度は沖縄協定の、まだ残っている二、三の細目を決めて、同時に、それを国会を通すという、この二つが大きな役目だったんです。それで、毎日のように国会で答弁に立った。それから片方で、当時スナイダーというアメリカの公使——彼は有能な公使で、その上にマイヤーという大使がいたんですが、これは大使としてはあまり有能ではなくて、マイヤーは全てスナイダーに任せていたわけです。それで、スナイダーと僕とが、いろいろ細目とか問題とかを決めていたわけです。

一番大きな問題をお話ししますと、その頃、沖縄は無償で返されるということで、我々もそう信じていたし、佐藤さんもそういう宣伝をしていたわけです。ところが、ある日というのか、アメリカは先ほど申したように、懐が不如意になってきた。それから、沖縄を返すについて、ことに全面的に返すについては、アメリカが沖縄に設けたいろいろな施設——それは必ずしも軍事施設じゃなくて——軍事施設は基地があるから、そのまま残るんでしょうが——米国政府の政策追求のために設けた必要な施設ですが、それを第三国へ持って行かなければならない、あるいは撤去しなければならない。我がほうは、「きれいにして返せ」ということですからね。それで、「基地以外では主権行

為は一切行わない」ということになるのです。今までアメリカは、沖縄を自分の占領下に置いていたわけですから、それは当然の話ですね。

そこで、どんなものがあるかと言うと、一番大きなのは、ＶＯＡ――ボイス・オブ・アメリカです。沖縄に放送局を設けて、世界中に電波を発信ないし中継ぎしていたわけです。もちろん、一番大きな目的は、対中共宣伝ですよね。あるいは、対中共傍受かも知れませんが、そのＶＯＡの鉄塔があるし、ステーションもある。その他、いろいろな施設があったんですよね。これは後になって分かったんですが、アメリカの対中防諜機関みたいなものもあったわけです。それで、これは先方が「極秘だ」と言って、僕だけにスナイダーが言うわけですけど、中国の軍隊の動きを沖縄で傍受していたわけですよ。彼が言うには、「中国軍が動くときには、その靴音まで、ここで聞こえるんだ」と（笑）。

股野　スナイダー流の言い方ですね。

吉野　そういう傍受機関があったわけだ。それを含めて、あらゆるものがあったわけですね。それを、今度はどっかへ移さなきゃいかん。例えば、フィリピンがいいんじゃないかとか、いろいろサジェストしたんです。我々は他国のことですから、「どこでもいいが、日本だけは困る」と主張しました。問題は、施設を移転するための費用とか、その他いろいろ費用がかかるわけです。それで、アメリカのトレジャリーは、「もう金は一切出さんから、日本が出せ」ということなんですね。

ところが、日本は「沖縄は無償で返ってくる」ということを世間に言い放していますから、金を出すわけにはいかない。それで、今まで頑張っていたわけです。そうこうしているうちに、ある日のこと、大蔵省とアメリカ大使館との間だったか、ともかく日本側とアメリカ側とが協議して、「これだけの金が要るんだ」と。正確な額は忘れましたが、それは沖縄協定に書いてあります。一億何千万ドルだったか、そういうツケが回って来たわけです。そこで、はたと困った。一体、どうやって、そんなものを協定に盛り込むか。もちろん、国会を通さなかったら、金は出せませんからね。非常に困ったわけです。その間、アメリカといろいろ交渉していた経緯があります。

ところが、その交渉の内容が全部……。日本側のワシントン大使館に対する報告電報――ワシントンには、別に訓令を仰ぐわけじゃないけれど、記録の代わりに、せっせと電報を書いてくれる人がいた――のようなものが、外部に流れていたわけですね。外務省から在ワシントン大使館宛の電報です。それで、そういう一連の電報が、一部の国会議員さんのところに行っていたわけです。それで、ある日、七二年の三月頃でしたかね。毎日のように僕は国会答弁をしていたんですが、横路という、後の北海道知事になられた議員から……。

渡邉　横路孝弘。

吉野　横路議員が、「こういうことを、日本政府は陰でこそこそやっておって……」と。彼がどういう質問をしたか、詳しくは憶えていませんが、大意はそういうことだと思います。もちろん、国会の速記録に全部書いてあります。「お前は、『一切、そういうことはありません。沖縄は無償で返ります』と言っていたが、これはどういうことだ」と、僕に質問するわけです。それは、三月頃の話です。その前の年の十一月か十二月頃の質問には、僕と条約局長が交互に立って、「一切無償でやりますから、そういう裏取引は全くありません」というようなことを、はっきり言っていたわけです。ところが、そのときに横路氏は

僕等に、「いや、そのうちに証拠を見せますから」と言っていて、それで三月頃になって、爆弾的にまた出て来たわけです。

これは、おそらく倒閣なんかと関係があったんでしょうね。そこで、そのときも私は立って、「そんな電報はあるはずないし、そんなことは大体、交渉していない」と言ったわけです。そしたら、横路は僕の前で、その漏れていた電報文を、ずっと読み上げるわけです。「こういうことが、ちゃんと書いてあるじゃないか」と言う。だから、僕は、「先生の持っている電報は本当の電報か、嘘の電報か分からない。ひとつ我々の書いた電報と照合しましょう」と言ったわけです。そしたら、「よろしい。それじゃ、今日の午後三時から、議会内事務所で照合しましょう」という話になった。それで、僕は急いで本省へ帰って来て、「本省で打った」と称する電報を見ました。そしたら、僕のサインがない。これは僕が忙しいから、「電報は誰か見て、上へ回してくれ」と言っていたに違いないんですが、僕のサインがない。しかし、ともかく起案者と課長ぐらいのサインがある。後は、「了」「了」と書いてある電報案なんですね。なるほど、横路の読んだ電報は、本当に外務省から漏れたものらしいと思いながら――それを僕は否定したわけです――国会へ行ったわけです。そしたら、横路さんと、与党の代表としては二階堂（進）さんと竹下（登）さんがいました。

二階堂さんが議運の委員長ですね。竹下さんが副委員長か何か知りませんが（当時、議運の理事）、それと横路と三人です。私のほうから、「まず先生、電報を見せてください」と言ったわけです。「見せない。お前のほうを先に出せ」と、先方は言う（笑）。「だって先生、おかしいじゃないですか。先生は、ちゃんと私のほうと照合すると言うのだから、先生のほうから出してください」と。彼は、渋々出した。出したけれども、第一枚目は控えているんですよね。二枚目が出たんです。一枚目は配布先とかタイトルとか、いろいろなことが書いてあって、ほとんど一行ぐらいしか書くところがないんです。僕は、「いや、それは駄目です。一枚目も出してください」と言い張った。先方も躊躇していたんです。彼も、「何かおかしい」ということは分かっていたんです。押し問答の末、とうとう一枚目を見せました。僕は途端に、「あっ、これは次官も局長も、それから外務審議官のサインもないじゃないですか」と言ったわけです。

股野　サインのないところのページを、向こうは持っていたんですか。

吉野　そうそう。それで、おかしいじゃないか、と。先方は、「そんなものはどうでもいいから、内容をチェックしろ」と言い出したんです（笑）。もちろん、内容は外務省原案の通りであるのは、当たり前の話ですよね。だって、その頃、ようやくファックスが頻繁に使えるようになったわけですからね。そこで僕は、「サインのないやつですから、真正とは認められません」とか何とか言いながら、別れて帰って来ました。

そうしたら、その数時間後、人事課長から電話がかかってきて、「安川（壮）審議官の秘書をやっておる蓮見（喜久子）女史が、『私は辞職します。本件について、責任を取らせてください』ということを、人事課長に言って来た」と言うんです。人事課長は、誰だったかね。

股野　松永（信雄）さん。

吉野　松永君か、それとも……。まあ、いいや、それは誰でもいい。そこで、全てが解決したんです。しかし、その前には、つまり横路さんがいろいろ質問したときには、僕は局員全部に集まってもらって、「どうも、我々の書いた電報が外へ出ているらしい。この中の誰かが、

まさか、あなた方の誰かがやったということを疑うわけではないけれども、皆さん気を付けてください」という訓示みたいなことをやっていたわけです。それで、「ともかく調べてくれ」と言って、その間に二、三日経過したと思いますが、調べる方法もないし、「困ったな」と思っていたら、そういう形で外務省内からちゃんと「自白」というのか、申し出があったわけです。

僕は、蓮見さんという人を、その前までは知らなかったんです。ところが、ひと月ぐらい前から、廊下で会うと、僕に声をかけるわけです。愛想がいいんです。「ああ、愛想のいい秘書がいるな」と思っていたんですよね。それが安川さんの秘書だと分かったのは、後になってからなんです。その頃、毎日新聞に西山（太吉）という政治記者がいたわけです。あまり僕のところへは出入りしなかったけれども、出入りすると、いろいろ辛辣なことを言うので、なかなかよくできる政治記者だなと思っていたんですが……。また、話も面白いから、彼と二、三回、天ぷらぐらい食ったことは覚えています。その西山記者に情を通じて、彼女が流していたわけです。

僕は、横路さんに会いに行く前に、二階堂さんと竹下さんに、「困ったことが起きました」と言って、相談に行っていたんです。「吉野君、君は本当に世間知らずだね。外務省の電報なんぞは、前からこんなに来ているよ」と、彼等は言うわけです（笑）。それで、「まさか」と思ったんだけど、同じ手口でずっと流れていたわけです。西山記者を通じて流れていたんだけど、それは西山さんが横路に渡したのか、それとも竹下その他に渡したのが、横路に行ったのか……。あの頃、倒閣の動きがあったんですよ。当時は佐藤内閣でしたかね。だから、田中派あたりかも知れませんね。そういう政治問題が絡まっていたことは間違いないと思いますが、いずれにしろ横路さんがそういうことをやり出した。

この問題の反省として、僕がいつも考えているのは、「沖縄を返せ」というときに、佐藤さんが、「無償で返って来る。こんないいことはない」という説明をしたことが、まず悪かったと思うんです。「無償で返す」と言っても、あの当時のアメリカですから、金には困っているわけです。それから、いろいろな施設があるんだから。そんなものは、今の金にすれば何でもないわけですから、みんな日本が立て替えて、「どこかにつくって上げます。その金はみんな協定にぶちこんで、国会に承認させます」というような話だったら、話はそうこじれるわけでもなかったんです。だから、あまりにもきれいごとをやろうとしたことが、根本問題だと思います。

やはり基地の返還問題というようなものは、両方とも、この際とばかりに最大限のバーゲンをして、ことにあの当時のアメリカの状況としては、そういう気持ちになったのは、当たり前だと思いますね。日本の対米輸出がうんと増えて、ダンピング税がかかるようなときに、沖縄だけがきれいに返るということは、あまり想像できません。しかし、それでもきれいに返ってくればいいんだけど、基地は続いたままであり、依然として日本の安全保障の問題があそこにあるわけですから、話はまた、そんなにきれいであるはずはないんです。そういう事件があったんですね。

渡邉　七一年の一月に局長の職にお就きになって、ちょうど七一年の十二月……。

吉野　一年間ですね。

渡邉　確か十二月三十日かなんかに、沖縄関連の法案が国会でパスす

るという、ぎりぎりだったように、私は記憶しているんです。そうすると、丸一年間、局長としては、沖縄関連協定のお仕事をなさったということになりますね。それから、ちょうど年の真ん中に、二つのニクソン・ショックというのが来るんですね。七月に訪中の発表、それから八月にドル……。

吉野　ドル・ショック。

渡邉　これは局長としては、どういうふうな……。

吉野　二つとも、アメリカ局長としては、「お前、知らなかったのはおかしいじゃないか」ということになるんですけれども、幸いかどうか知りませんが、ほとんど、それは問題にならなかったのです。しかし、それとの関連で思い出すのは、朝海（浩一郎）さんが、「頭越しで日本はアメリカにやられることがあるけれども、そのときになってびっくりするなよ」ということを、昔から言っていたわけですね。それで、そういう形で、つまりアメリカが中国を日本の頭越しに訪問したり、承認したりすることが行われたわけです。だから、まさに、これは朝海さんが我々にいつも忠告したことが起きたということです。

もう一方のドルのほうは、対米投資の引き上げに課徴金をかけるわけですか（金・ドル交換の一時停止、一〇％の輸入課徴金の暫定的実施等の八項目の経済非常措置）。これはアメリカのほうは不如意であって、七二年末には更にドルが切り下げになってしまうわけですね。つまり、アメリカの経済が悪くなってきたわけですが、両方とも僕は自分の責任じゃないような顔をしていた。しかし、誰も僕のところへ、「アメリカ局長は知らないじゃないか」と言って来なかったですよ（笑）。国会でもね（笑）。それは、日本の総理大臣も知らなかったわけですから、だから、「けしからん」とは言われなかった（笑）。

渡邉　佐藤さんが、ずいぶん世の中から非難された。その後始末のほうは、どうですか。つまり、中国のほうは、例の国連の承認の問題で、台湾をどうする、こうするというようなことが、秋にかけて問題になりますが……。

吉野　それで、思い出したのは、僕がワシントンにいた時期は、まだ中国をアメリカが認めていない頃ですし、国交もなかったですね。台湾の大使館というか、中国大使の公邸に呼ばれたことがあります。一人か二人、たくさんの人じゃありません。ワシントンの市内に公邸があったんですが、印象としては庭がゴルフ場みたいに広かった。「全くいいところに住んでいるな」と思ったんです。それで、「この台湾の公邸がいつの日か、中国政府の所有に変わることがあるのかな」というようなことを、飯を食いながら思っていたことがあります。しかし、その頃は台湾大使も、それから僕等も天下泰平だったんです。

渡邉　八月頃の話ですね。

吉野　十五日だ。

渡邉　いや、それはドル・ショックのほうだった。

吉野　七月十五日。

渡邉　七月十五日が中国訪問です。

吉野　そのニュースは、アメリカ局長には、もちろん入って来なかったです。キッシンジャーとニクソンが、でっち上げた発表ですよね。あの頃、しかし在外の人も気が付かなくて、ただ曽野（明）大使か誰かが、これも後の話でしょうが、飛行機がパキスタン経由で入ったんだ、と。そういうようなことを、後になって言っていましたが……。

渡邉　例の「ピンポン外交」は、この年でしたかね。

股野　そうです。そのもうちょっと前ぐらいですね。

渡邉　「ピンポン外交」は七一年（四月）に入ってからですよね。それで、ぼちぼち、今までとは違うことが起こっているということがあったんです。

吉野　そうそう。「ピンポン外交」なんかは、それですよね。

渡邉　でも、やはり「まさか」という感じだったんでしょうかね。「いつの日か、起きてみたら、アメリカと中国が手を結んでいるよ」というような話は、我々の耳にも入ってなくはないんですが、朝海さんはどういうときに、そういうことをおっしゃったんですか。

吉野　おそらく彼の意図は……。日本は、米国にとって、自分が一番大事な国だと思っている。従って、日本に相談せず、日本の外交政策に反するようなことをするはずがないと思い込んでいる。ことに中国との関係において、米国がそんなことをやるはずがないと、日本は考えている。しかし、それほど日本は重く見られていないのだよ、と。

渡邉　それは、いつ頃おっしゃっていた？

吉野　それは、もう相当前ですね。だから、朝海大使が米国大使（一九五七年五月～六三年四月）であった頃から……。

渡邉　大使時代から、もうそういうことを考えていた。

股野　大使時代ですよ。我々が最初にワシントンにいた頃、朝海大使の時代に、それをよく言われましたね。――自分の一番の懸念は、国務長官に、「ちょっと来て欲しい」と言われて、呼ばれて行ったら、「アメリカ政府は、中華人民共和国を承認することに決めました。サンキュウ・アンド・グッバイ」と言われることだ、と。最後は英語で終わるんです（笑）。

渡邉　それは、外務省の中では衆知のことですか。

股野　いつも、我々が言われている言葉でした。

吉野　それで、朝海さんは客観的に、ことに当時の日本の位置をよく知っていたし、客観的に見ていた。それから日本側は、中国というのは日本と一衣帯水の国で、利害関係が一番深いと思っている。その利害関係の深い日本に相談せずに、「中国承認なんていうのは、けしからん」という気持ちであったわけです。だから、本当に相談したら、日本は「駄目だ。待ってくれ」とか、何か言うに違いない。キッシンジャーのことだから、そんなことを考えていたかどうか知らないけど、取り敢えず、パッとやっちゃったわけだ（笑）。

渡邉　そうすると、その意味では、朝海さんが言っていた通りだったというふうに、外務省のその筋の人は思ったわけですな（笑）。

吉野　残念ながらね（笑）。

渡邉　そうですか。では、多少そういうのが外にも漏れてきて、そういう話があるなということは、我々も聞いていました。

　お金のほうは、もちろん一番慌てるのは大蔵省なんですが、「外為市場を閉じるの、開けるの」と大騒ぎをして……というのが続くんですね。その辺は、それこそ外務省としては、「俺の話じゃない」という感じですか。

吉野　それは、そうです。そういう雰囲気です。あれは、資本取引に対する制限だったですかね。「何か、そろそろドルが怪しくなってきたから、アメリカが何をやっても仕方ないね」という、そこら辺の気持ちはありました。ドルが弱くなってきてね。だけど、そういう形で、これも大蔵省に相談せずに、あるいは関係国に相談せずに、いきなりかけてきたわけだから、キッシンジャー流の、「まずやっちまえ、説明は後にしよう」ということだろうと思います。

渡邉　どっちもそうですけど、アメリカの中でも誰も知らないことで

すからね（笑）。

吉野　そう。

渡邉　そういう意味では、七一年の、北米局長としての一年間は大変な年であったということになりますね。

吉野　それから、もう一つ。先ほどの沖縄に関わる資金の問題は、我々から言えば、「けしからん」とは思うけれども、それはアメリカ大使館が柏木財務官とか、その他の国際金融局の事務方と、我々の知らぬ間にひそひそと計算をして、数字を積み上げていたんです。最後になって、大蔵省のほうから、「これだけになるよ」と言って来たわけです。「そんなものは知らんよ。お前のほうでこそこそやっていたのだから、協定に書くわけにはいかん」と、我々は頑張っていたのです。それで、そのうちに、最終的には交渉の中に入って来て、その交渉の内容を電報にしたところが、それが漏れたということですね。

渡邉　つまり、お金の話は、財務省と大蔵省がやったわけですよね。向こうの国務省の意を受けて……。

吉野　それは財務省ですけれども、財務省が在京日本大使館を通じて、柏木君とやったんじゃないかと思います。

渡邉　柏木というのは、柏木雄介ですね。

吉野　柏木君とは限らずに、大蔵省と……。それで、その出先は在京大使館じゃないかと、僕は思います。だけど、在京大使館は、僕等には初めは金の話をしなかったわけです。ところが、後になって、柏木との話が出て来て、我々に「ツケ」を見せてくれた。それで、我々は、ひた隠しに隠そうという形になったわけですね。

渡邉　確か、私が読んだものでは――このあたりは、少し記憶が曖昧なんですが――向こうは国務省と財務省でそんな話をやっていて、「外務省の話も聞きたい」と言ったら、大蔵省が断った。「大蔵省だけで、これをやる」と頑張ったのは、こちら側の大蔵省のほうらしいですね。

吉野　大蔵省は、自分でそういう嫌な仕事を引き受けたんです。そういう形で出発していたんでしょう。だけど、最後に、どうしても協定を結ばないといかんということでね。

渡邉　あれは何と言ったかな。国務省でお金を担当していた人がいるんですよ。バーネットじゃなくて、何だったかな。

吉野　その後も二、三年間やっていた男ですよ。よく日本へ来ていた男だけど、名前を忘れました。……ゼーリックだったかな（ロバート・ゼーリック現・通商代表）。

サンクレメンテの争い――ポスト佐藤

渡邉　七一年のお話で、何か落としたことはありますか。

吉野　これは本当はあまりしたくはないんだけど、思い出したから……。

一つ問題が起きたんです。問題というのは、愛知さんを佐藤総理が呼んで――僕も一緒に呼ばれた――官邸の総理の部屋で、佐藤さんが愛知さんをべらぼうに大きな声で面罵するわけです。

渡邉　外務大臣の愛知揆一さん。

吉野　後になって分かったのは、愛知さんは田中派であって、佐藤さんはどちらかと言えば、沖縄協定の締結を自分の手柄にしたいと思っていたのでしょう。それに、ともかく田中さんとか、福田さんとか、

みんな自分の後継者がいるわけですよね。その連中に自分のペースで政権を譲りたいと思っていますから、下からいろいろ工作されちゃ困ると思っていたんでしょうね。その一環なんですが、沖縄返還協定の一部で、何でもないけど、一つの手柄になるような小さなことを、愛知さんが新聞記者に対して発表したんです。その前に、僕も愛知さんに、「大臣、これはもう発表していいですよ」と言ったわけです。愛知さんも、このときとばかり、「ああ、そうだ」と言って、新聞発表をしたわけです。

そうしたら、佐藤さんが愛知さんに、「君、こんなものを私に相談せずに、なぜ発表したんだ」と言って、えらく怒るんです。そのときに僕はそばにいて、半分は責任があるし、それから多少年は違うけど、どうしてこんなに自分の閣僚に対して、佐藤さんが怒るのか分からなかったです。けれども、その頃から、もう佐藤さんは相当に田中派あたりの、いろいろの策動か何かを……。（彼は）派閥として考えているわけですよね。それで、佐藤さんは愛知さんを怒ったんでしょうね。僕は、愛知さんは非常にできる人ですから、閣内はうまくいっているなと思っていたんです。ところが、案外そうではないという、日本の政治の内情を、そのとき見たんです。

渡邉　それで思い出しましたけど、佐藤内閣もこの頃になりますと、改造（一九七一年七月）をやって、通産大臣が先ほどの田中さんで、福田さんが外務大臣ですね。いわゆる沖縄国会で、福田さんが説明するときに、ページを間違えて飛ばしたという話がありますが、これは外務省としても関わりがあるんじゃないですか（笑）。

吉野　そうなんですよ。あれは一ページ飛ばして読んだんですよね。

渡邉　何か綴じるのを間違っていて、気が付かないで……。

吉野　おそらく事務的なミスでしょうね。

渡邉　お叱りは、こちらには来なかったですか。

吉野　来なかったです。しかし、僕等は非常に恥じたですよ、「これは、済まないことをしたな」と思ってね。だけど、ああいうのは無理なんだね。大臣の演説なんかを、いちいち自分でチェックして読み直すなんていうことはないですから。大体、演説を書くのは、誰か事務方の人が書くわけですからね。しかし、あれも考えてみれば、局長の責任でしょうね。福田さんは、僕には何も言わなかったけどね（笑）。しかし、間違えて読んだとき、僕は国会で陪席していたんですよ。

渡邉　そうですね。局長でいらっしゃったから。

吉野　だから、「おかしいな」と思ったんですけど、読んでいたので、「どうして、そんなことになったのかな」なんて……。いやあ、今から考えると、本当に汗顔の至りですね。

渡邉　野党のほうは、何かケチを付けようと思って、いろいろ虎視眈々と狙っているんだから、「これは、いいことだ」と、引き延ばしでやるわけなんですが……（笑）。内容的には、どうってことないと言えば、どうってことないんでしょうがね。

股野　私が聞いたところでは、あの話は事務的な外務省の方が関与していたんではなくて、福田さんのところは、ご家族で支えていた。それで、ご家族で綴じたと聞いています。

吉野　そうだ。前の晩か何かにね。

渡邉　ご家族って、文字通りのご家族？

股野　本当のご家族。

渡邉　福田ファミリーという意味じゃなくてね。

股野　本当に福田家の家族。

吉野　今、代議士になっている人もいた。それじゃあ、こっちに対して文句を言わないわけだな。

渡邉　綴じるときにうっかりして、間違えて（一ページ）落とした。

股野　だから、福田さんとしては、事務方を怒ることができなかったという話がありました。ああいうときは、吉田さんが昔、サンフランシスコ条約を締結するときに、「国際的には、ちょっとおかしい」と言われたけれど、やはり巻紙のほうが……。

渡邉　トイレット・ペーパーのようなら、これは間違いはない（笑）。

吉野　それは間違いない。巻紙が一番いいね（笑）。

股野　綴じると、そういうことが起きるから、吉田さんも巻紙は間違いない、と。

渡邉　そういうレッスンだったんですか。それは知らなかった。

吉野　勧進帳じゃないけど、巻紙はいいね（笑）。

股野　局長にお咎めがなかったとすれば、今の話は事実なんでしょうね。

吉野　それはおそらく、最後まで大臣として手を入れたんでしょうね。それで、その後でタイプか何かで打って、綴じるときに間違えた。そのくらい、事務方の手を離れていたわけです。

股野　その最後の晩は、事務方の手を離れていたんですね。

吉野　それは無理ない。

渡邉　材料をつくる段階では、もちろん別の人がやっているけれども……。

股野　スピーチは、全部きちっとでき上がっていたんですが、最後に、明日議場に持って行くものを、夜、福田家で作業した。

渡邉　そういうことって、あるんですか。

佐道　持って行く最後のところまで、お役所が関与するんじゃないですか。

股野　いや、しますよ。だけど、再度、もう一遍お宅で点検したわけでしょう。小和田（恒）秘書官ですからね。

吉野　ああ、そうだ、小和田君だ。

股野　あの完璧主義者の小和田さんが、それをやるはずはない。事務的にはきちっと持って行って、前の晩に……という話です。

渡邉　その意味では、福田家として念を入れ過ぎたわけだ。

　それから、天皇陛下の外遊（一九七一年九月二十七日～十月十四日）の話は、この時期ですね。福田大臣は同行されますね。

吉野　そうです。その頃、僕はもちろんアメリカ局長ですから、ヨーロッパのどこも関係なかったんですが、出張してパリで福田さんにお会いしたんです。なぜ、福田さんにパリでお会いしたか分からないんですが、ＯＥＣＤか何かの会議があったのかな。しかし、アメリカ局長だから、ＯＥＣＤじゃないですね。では、何か「最後の打ち合わせをするから来いよ」ということであったかも分かりませんが、ともかく福田さんにお会いした。それは、もう短時間です。

渡邉　ヨーロッパで？

吉野　ヨーロッパのパリで。コンコルド広場のホテル・クリヨンに泊まっておられて、僕もそこで一泊し、ちょっとお話をしました。それで、彼はまた天皇陛下に随行されて回られたんですがね。

渡邉　そのときですか。アメリカのアンカレッジに立ち寄って、ニクソンと天皇陛下がお会いになって、ヨーロッパへ回った。

股野　その通りです。最初の陛下のご訪欧だったんですね。ご訪欧だったんですが、その途次に「アラスカ会見」があるということですね。

吉野　アラスカで、どなたが会ったの？
股野　ニクソンがアラスカに飛んだんです。
吉野　ニクソンは、何で飛んだんですかね。
股野　それは、陛下に……。
吉野　ああ、陛下に会うためにね。
渡邉　陛下の飛行機がアラスカへ寄って、そのときですね。
股野　そのときに、わざわざニクソンが会見に行かれたんですね。
渡邉　そして年が明けて、七二年の早々（一月）に、先ほどお話に出たサンクレメンテの会談があって、沖縄協定の実施を五月にするとか何とかするという日程の、最後の詰めがあるんですね。
吉野　サンクレメンテでは、核抜き返還だとか、繊維との交換はないんだというようなことを、最終的にコンファームするつもりであったわけです。そのときに田中通産大臣、それから福田外務大臣が付いて行ったわけですね。それから、もう一人ぐらいいたな。誰だろう？そういうような人たちと一緒に、僕は飛行機で行ったわけです。
渡邉　サンクレメンテへ一緒に行かれたわけですか。
吉野　ええ、サンクレメンテへ行ったわけです。そのときの飛行機の雰囲気は……。僕は、その頃、全然政治に興味がなかったですね。しかし、そろそろ佐藤さんの後継者ということで、田中さんとか福田さんとか、三木さんはいたかな。大平さんですか。
渡邉　いや、いないです。
吉野　田中さんと福田さんは、ともかく一緒に行ったわけです。それで、そういう雰囲気が漂っていたようです。それから、サンクレメンテというのは、カリフォルニアの広いゴルフ場みたいなところにあるニクソンの……。そんなに立派な家じゃなかったけど……。
渡邉　ニクソンの別邸みたいなものですか。
吉野　別邸みたいなものであって、そこでコーヒーか何か飲んだような気がします。何を飲んだか、食ったか覚えていません。それで、沖縄協定はできたんですかね？
渡邉　ええ、それで沖縄協定の調印式の日取りが五月十五日ということが決まったわけですよね。
吉野　そういうことですね。サンクレメンテにはロスから行ったのかな、サンフランシスコから行ったのかな。自動車で、相当離れていた。
股野　ロスのほうが近いじゃないでしょうか。
吉野　行ったことを覚えています。サンディエゴ？
渡邉　サンディエゴじゃないです。『佐藤栄作日記』（第五巻）に出て来るんです。「ニューポーターからサンクレメンテに行った」という話が出て来ます。
吉野　我々は、近くの小さなモーテルか何かに泊まったような気がします。もう本当に覚えていません。
渡邉　サンクレメンテの会談というのは、かなり急に決まったみたいな感じもするんですが、どういう経緯で、誰が言い出して、佐藤・ニクソン会談ということになったか、何かご記憶がありますか？
吉野　おそらくニクソンが、わざわざサンクレメンテまで呼んだというのは、向こう側にも魚心水心で、あれがあったんでしょうね。
渡邉　私は、むしろ向こう側から言って来たと思います。
吉野　そうでしょうね。彼はカリフォルニアが好きだし、次の選挙というのもあったんですかね。
渡邉　七二年二月に、ニクソンが北京に行くわけですよね。その前に、西側の首脳――カナダの首相に会ったり、フランスの誰某に会ったり

ということをやっていた。その一連の関係で、日本の総理大臣にも北京に行く前に会って、話を固めておきたい、と。そういう説明を読んだことはあります。

吉野　なるほど。それはありますね。しかし、日本の場合は沖縄のほうが重要ですから、佐藤さんはそれで……。

渡邉　ただ、外務大臣が行くのは分かるけど、何で通産大臣が行くかというので、先ほどからのお話の「ポスト佐藤」のことで、田中・福田の両方を連れて行って、旅先で何か調整をして、福田にバトンタッチしようというのが、佐藤さんの計算ではないか、と。そういうふうな観測がありました。

吉野　そういう計算があったんです。我々は、そういうように信じておったわけです。ところが、田中さんが付いて来た。しかし、僕等は何も分かりませんでしたからね。ただ、田中さんが僕に対して、馬鹿に愛想がいいんですよ。飛行機の中で立ち上がると、「おい！」なんて言って手を上げてね。それまで僕は、田中さんと会って話をしたことはあまりない。

　ところが、それから後の話ですけど、僕はＯＥＣＤの大使に間もなく任命されたわけです（一九七二年七月）。それは一種の罰でしょうけどね。つまり、僕はアメリカ局長を辞めさせられた。結局、外務省の漏洩事件その他で責任を取って、「お前、海外に行ったほうがいいだろう」と言われて、ＯＥＣＤの大使に任命された。そのとき僕は、田中さんのところに挨拶に行ったわけです。僕は初めてそこで、田中さんと対で話をしました。彼は、えらくご機嫌が良かったんですね。もう総理大臣になっていましたね。何月ですかね。

渡邉　七二年七月七日が田中内閣成立ですから、ＯＥＣＤに行かれたのは？

吉野　八月の終わりですかね。

佐道　任命は七月。

股野　任命されてから赴任まで、時間がありますからね。

渡邉　田中総理になってから、ご挨拶に行って、パリに行かれた。

吉野　これはもう余談ですけど、僕はただ挨拶に来たつもりでいたら、田中さんが、「ああ、吉野君、よく来てくれたね」とか言って、大体、僕の名前をよく覚えているわけです。「お前、馬の年だったね。俺も馬の年だよ」と（笑）。同年なんですね。そのとき初めて、僕は知ったんです。どうして、こんなに調子がいいのか。しかし、そう言われると、悪くないですよね。それで、帰って来たんですが、それ以来、僕は田中大臣にすっかり惚れてしまったわけですね。ああ、活発な、いい総理になったな、と。

渡邉　サンクレメンテのことを、もうちょっと……。サンクレメンテで、何かあったんではないかという説がいろいろあります。つまり、田中さんが総理になるまでの話で、いろいろ書かれているものがあるんですが、どこまでが際物で、どこまでが本当か見極めがなかなかつきにくいんです。一体、サンクレメンテで何が起こったのか。例えば、正式の会議が終わった後、レセプションがございますね。そのときに、何かがあったという話もあるんですね。何か「オヤッ？」と思ったご記憶はございますか？

吉野　いや、全然ないですけど……。全然感じなかった。しかし、いま考えると、佐藤さんが福田さんに何か因果を含めたのかも分かりません。一説には、田中さんが金で佐藤さんを買収したとかという話もありましたね。

渡邉　こういう話がある。最後のレセプションのときに、ニクソンの座る席があり、当然、佐藤総理が隣なんですが、その他はアルファベット順にずっと並んでいて、ニクソンの隣に佐藤がいて、反対側の隣にも佐藤が来た。これは、自民党の新聞係みたいな佐藤文生です。佐藤文生は、大いに感激した。ところが、その席に田中が来て座っちゃったという話なんです。それは、佐藤文生が言ったという話で、突然起こったようなことながら、実はあらかじめ計算されたことなんだ、と。そこで、福田さんもその席にはいるんですけれども、福田の影が薄くなって、田中とニクソンと佐藤総理が正面にいる。そういう写真が撮られて、ワシントンポストだったか、ニューヨークタイムズだったか何かに、ポンと出るという話になってくるんです（笑）。例えば、そういう話ですね。

吉野　それは面白い話ですね。僕等は全くイノセントですから、分からなかったけれども、おそらくその頃、激しい「佐藤後継者選び」が始まっているんですね。僕等は、当然、福田さんがなるだろう、と。僕等は、もう欲目で福田さんを支持していたわけです。佐藤さんは福田さんに政権を渡すんだというようなことを、テイク・フォー・グランテッドだったんです。しかし、田中さんになったから、びっくりしたんです。

渡邉　これも、やや政治絡みの話ですが、敢えてお話しすると、実は七一年十月に、最後の沖縄返還協定の関連の法案を詰めるという沖縄国会が始まった。そのときに、保利茂が幹事長なんです。保利さんは、どこで、どういうふうなタイミングで、佐藤さんに退いていただこうか、と。保利さんも当然、福田にバトンタッチさせたいんですね。それで、その時点では、実はサンクレメンテという話はなかった。いや、あったことはあったんだけども、沖縄国会が始まってすぐのときに、保利茂幹事長と佐藤首相の間で話をして、「沖縄国会が済んだら、早いところで、あなた、政局のけりをつけるということでどうだ」と言ったら、「分かった」と。当然、佐藤さんはそういうふうにすると、保利は思っていた。

　ところが、サンクレメンテという話があって、そこで何が起こったか知らないけれども、サンクレメンテから帰って来たら、「話が違う」ということになって、保利幹事長はびっくりする。保利さんとしては、「沖縄は、実質片付いた。佐藤さん、五月十五日に返還協定のセレモニーがありますが、そのセレモニーの主人公が誰になるにせよ、それは後継者にやらせて、あなたはここで退きなさい」という計算だった。それが、そうはいかなくなったという話なんです。そういう話のなかに、今のサンクレメンテが入ってくるんですね（笑）。

吉野　そういう雰囲気のサンクレメンテだったんですね。異様なものを感じてはいたんだけど、政治音痴ですから、訳が分からなかった。その頃、もう少し政治に興味を持っていれば、僕はおそらく観察しておったんですが、テクニカルなことを一所懸命やっていましたからね。……なるほどね。しかし、確かに異様な雰囲気だったですね。

パリへ——OECD大使

渡邉　ここは、政治的には大変微妙な時期だと思います。結果的には、佐藤さんがそのまま残って、五月十五日の沖縄返還協定のセレモニー

をやって、その辺から次の自民党の総裁選挙というふうに雪崩れ込んでいく。これは政治の話ですが、お仕事のほうに話を戻しましょう。

そうすると、七二年の初めにサンクレメンテに行かれて、その六月にアメリカ局長をお辞めになって、ＯＥＣＤという話になるわけですね。これは先ほどおっしゃったように、意味としては北米局長時代のお咎めということもあったわけなんですか。

吉野　そうそう。おそらく、そうだろうと思います。

渡邉　ＯＥＣＤのポストというのは？

吉野　局長を、とにかく辞めさせられたわけですから……。自分から辞めたわけですけど、そういうことでしょうね。

渡邉　ＯＥＣＤ大使でしょう？

吉野　大使ではあるんです。そのときに、これは本当に記録する必要はないんですけど、福田さんが、「お前、辞めた後、どこがいいか。どこでもいいよ。俺がやってやる」というような話だったんです。

渡邉　まだ外務大臣としての福田さんですね。

吉野　僕の前任者が鶴見（清彦）君だったんです。ところが、彼が病気か何かで、ＯＥＣＤの大使を辞めて、その後ジュネーブの大使（国際機関日本政府代表部）になったわけですよね。だから、私は、「ではＯＥＣＤの大使にしてください」と言ったわけです。そしたら、「俺はカナダの大使に、お前を考えているんだ。どうしてカナダは嫌か？」と言うわけです。僕は、「聞くところによると、西山（昭）さんがカナダ大使になるという話です。西山大使は、かつて私の上司の局長（経済協力局長）だった人だから、西山大使を出し抜くわけにはいきません」という話をしました。そしたら福田さんは、えらく納得しないような様子だったですよ。「ＯＥＣＤなんて、つまらんよ」とか何とか言ってね。そういう話があったんです。だけど、僕には西山大使を排除して、カナダ大使になるなんてことは、ちょっと考えられないから、「嫌だ」と……。僕は、ＯＥＣＤを望んでいたんです。そういうことがありました。

股野　外務省流に言うと、沖縄返還協定の交渉をされて、まとめられて、かつ沖縄返還の実現があった。アメリカ局長としては十二分に仕事をされて、「ここで、ひとつの交替もよかろう」という時期だったんでしょう。ですから、お咎めなんて、全くとんでもない話です。お咎めがあったと言うのは、時間的に平仄が合いません。

吉野　でも、お咎めはその年ですよ。西山事件が起きたのは？

股野　ああ、七二年でしたか。

吉野　三月か何かです。つまり、沖縄協定が最後に結ばれる直前で、そういう問題が起きて来る。僕は、国会に対して嘘を言ったということになる。それから、そんなことを言うとあれですが、刑事局あたりで、西山さんを……。

股野　西山記者を取り調べた。

吉野　それまでは、新聞論調というのは全部、「外務省は、けしからん」という論調でした。ところが、西山さんの蓮見事件が暴露されてから、新聞がガラッと変わっちゃったわけですよね（笑）。それで僕も、その意味では助かったわけです。つまり、今まで国会の答弁では否定していたわけですから、「嘘を言ったということについては、けしからん」ということですが、しかし、結局、西山記者が刑事事件にかかったわけです。そしたら、僕のところへ刑事局から、「証言してくれ」と喚び出しが来るわけです。二回ばかり聴取があって、刑事ですか、そういう人に二回ばかり会った。外務省では、この問題を「機密漏洩」

と言っていたので、「君、これは国家機密ですか」という話から始まって、今だったら僕等の議論は通らないです。

だけど、刑事の尋問に対しては、「外務省では、交渉中のことは一切機密なんです。相手の国に対する信用の問題があって、もし、これを公表するようなことがあれば、相手と交渉できなくなる。従って、これはあくまでも機密です。従って、国会に対しても否定する、嘘を言うんだ」という返事をしました。ただ、刑事のほうも、同じ頃に、僕等と同じように刑事法を勉強した連中ですから、常識的にそう思っていたんでしょう。丁重に、僕を聴取しましたよ。そういうことが、二回ばかりあったですね。しかし、それ以上、僕を追及しなかったわけです。今だったら、おそらく国会に対して嘘を言ったということになるんでしょうかね。僕等は、えらい剣幕で否定したわけですからね。ことに（七一年の）十二月頃に、最初に横路さんが質問したときはね。「そんなことは一切ありません」と言って否定したわけですから、相当国会に対しては嘘を言った。

股野　「外務省は、交渉過程の問題を、外交の相手方との信義の関係で、外には出さないという原則を貫きました」と。そういう立場を取られたわけですね。そのときは、とにかくそれで通った、と。これは、議論はあるでしょうが、そういう議論は今だって成り立ちます。

吉野　今だって、そこら辺は成り立ちます。

股野　ただ、相手が国会であったということですね。

吉野　強く否定し過ぎちゃったんですね。その辺を、うまくごまかして、「交渉内容だから話せません」とか何とか言っていればいいんだけどね。「そんなことは一切ありません」と否定した。そこら辺が、ちょっと疑問です。そういうこともあったんです。

渡邉　しかし、いずれにしてもＯＥＣＤに行かれた。パリは優雅な場所じゃないですか（笑）。

股野　福田さんが、「どこでもいい」と。これが、お咎めであるはずはない（笑）。

渡邉　ということで、次回はパリから始めましょう。

どうもありがとうございました。

吉野　こちらこそ、どうもありがとうございました。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー

第6回

[1999年8月23日14:00～16:00]

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

渡邉昭夫（青山学院大学教授）

股野景親（元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員）

佐道明広（政策研究大学院大学助教授）

武田知己（東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員）

（於：国際経済研究所）

ＯＥＣＤの人事工作

渡邉　今日は、ＯＥＣＤに行かれてからのお話を中心にお聞きしたいと思います。直接、お仕事に関係ないかも知れませんが、七〇年、七一年というのは環境問題が出て来て、七〇年は「公害元年」と言われた。七一年には日米公害閣僚会議が開かれるという時代ですが、お仕事柄、何かこういうことに関わったことはありますか。

吉野　その頃は、まだ我々の意識がそれほど強くなかったものですから、僕もあまり関心がなかったんです。公害問題が我々の意識に入ってきたのは、むしろＯＥＣＤにおいてですね。なぜかと言うと、ＯＥＣＤに行って間もなく、例のオイル・ショックが始まったんです。そして一時、世界全体がインフレ兼不景気みたいなものになったわけですね。

それで、日本としては省エネ技術を開発して、石油使用を減らしていこう、と。これは、日本にとっては非常にいい話なんですね。それから、ローマ・クラブというのができまして（一九六八年）、シューマッハが、「スモール・イズ・ビューティフル」ということを言い出したんです。僕等は、シューマッハなんかと一緒にパネルに呼ばれて、話をさせられたんですが、その頃から環境問題が強くなりつつあったわけです。ところが、日本は、まだ鉄鋼その他の「重厚長大」にすがりついている時代ですから、突然オイル・ショックがやって来ても、転換が簡単にできなかったのです。我々の意識は、環境問題もさることながら、産業の構造転換をどうしていくかということについて、はっきりしていない点があって、僕自身は環境保護にひたむきに走り出すわけにいかないような気がしていました。

当時、シューマッハの母国であるオランダなど小国は、いち早く環境問題に飛びついたのですが、フランスなんかは、むしろ逆なんです。フランスは当時、「たれ流し」の国でして、自動車の排気規制もできないし、やらない。お隣のドイツは、「フランスの排気ガスで困る」と言いながらも、不景気ということもあって、心情的に、あるいは思想的には環境問題に関心は持っているけれども、ヨーロッパ全体としては、まだそこまでは行っていないという捉え方なんですね。環境問題について一番厳しかったのは、フランスなんかの排気が流れていく北のほうの国々――スウェーデンやフィンランド、デンマークなどの北欧でした。

そういう意味で、ちょうどオイル・ショックと重なったり、それに伴い日本の産業も、だんだんに変革が行われていくという最中でしたから、環境問題について、それほど日本は熱心ではなかったですね。むしろ、その当時の一番大きな問題は、「日本没落論」というか……。ちょうど、オイル・ショックが十一月か十二月でしょう。

渡邉　七三年の十月。

吉野　当時のヨーロッパでは、「今まで日本経済は安いオイルに支えられて猛威を奮っていたが、そのオイルが三倍、四倍になるような状況になって、日本経済は没落するんじゃないか」という心配すら出て来たわけです。心配、および彼等にとっては、安堵ですね（笑）。我々も、「重厚長大」の日本経済で、どうやってオイル・ショックに耐えていくか、非常に心配したんです。自然の資源がない日本は、も

っぱら鉄鉱石、石炭、その他を外国から輸入し、ただそれを加工して、製品を安く売っているわけですからね。

ところが、年が明けて三月か四月頃になると、日本経済は生き残ったばかりか、ますます強くなるという風潮に変わっていったわけです。その一番大きな原因は、日本は省エネ産業を興し始めたわけです。これもまた、単に国内だけじゃなくて、技術も含めて外国へ輸出していったものですから、日本は非常にうまくやったわけですね。つまり、禍を転じて福にした。その間、ヨーロッパは、「オイルが高いの、何の」と言っていたけれども、あまり目ぼしいことはできなかったという印象ですね。

渡邉　お話を先に進める前に、ちょっと確認ですが、七二年の八月にＯＥＣＤの大使としてパリに行かれますね。それで、七五年二月に外務審議官ですから、この二年くらいがパリ時代ですね。

吉野　そうです。

渡邉　今のお話との関連で言うと、ちょうどその頃、日本版のマスキー法が出て来ましたが、ＥＵのほうでは、「形を変えた（自動車の）輸入制限だ」と言って、かなり声高に、それを批判するということがあったように思うんですが……。

吉野　その通りなんです。日本も、最初のうちは「輸入制限だ」とかと言って、アメリカに陳情しては、何とかしてマスキー法を緩和させようとしていたんです。しかし、六ヵ月ぐらい経つと、マスキー法を通るような新しい技術ができたわけです。白金か何かを触媒として、もう一回排気ガスを燃やすという技術をつくり出して、マスキー法でも大丈夫だというところまで来たわけです。ところが、ヨーロッパのほうはそこまで行かなくて、先ほど申しましたように、ヨーロッパ全体はまだ排気ガスの「たれ流し」をやっていたわけです。そのことが、ヨーロッパでは、非常に深刻な環境問題へと発展していったんです。

渡邉　かなり具体的な話になりましたが、そもそもＯＥＣＤの大使というのは、どういうお仕事ですか。

吉野　ＯＥＣＤの大使は、初代が森治樹さんで、二代目が鶴見（清彦）さん、そして三代目が、僕かな。

股野　加藤匡夫という時代がありますね。

吉野　ああ、森さんの後が加藤さんで、その後が鶴見さんだ。これは割合短く、その後に僕が行ったわけです。

最初に、彼等が日本を引き入れたのは、ＤＡＣというか、途上国援助で日本に一肌脱がせようというわけでしょう。そういう話で、もっぱら日本を利用しようということと、一方においては、日本には造船とか鉄鋼とか、彼等の既存産業を脅かすようなものがあるから、ＯＥＣＤのスタンダードに従わせよう、と。そういう動機もあった。一方、我々としては、ＯＥＣＤのメンバーになったということで、一種のプレスティージみたいなものを感じたわけです。そのお蔭で、日本も、だんだんと西欧的な産業構造に変えていくことになったわけです。

そういう初期および中間段階が僕等の時代であって、平原（毅）君君とか宮崎（弘道）君の時代になってくると、日本も経済的に確立してくるし、彼等も日本に対して、ＯＥＣＤ内の活動に相応した地位を与えようということになったのです。だから、僕は初期の段階の最後ですから、大して役割はなかった。ただ、例えばＯＥＣＤの科学技術工業局長に大島恵一さんを入れるとか……。

渡邉　ＯＥＣＤの局長に？

吉野　そうです。それから、経済局の次長に日銀の人を連れて来ると

かということで、ＯＥＣＤにおける日本人の活動範囲を広げていくような工作をしていたわけです。

ＯＥＣＤの理事会は、当時、二十四ヵ国の代表が集まって、全体の運営および政策を討議するわけですが、その下準備をするエグゼクティブ・コミッティーというものがあります。日本は、エグゼクティブ・コミッティーには入っていたんです。僕も出ていましたが、エグゼクティブ・コミッティーのチェアマンなどにはなれなかったわけです。ところが、僕の次の大使、平原君はそのチェアマンになった。というのは、ＯＥＣＤができたときから、ずっと（エグゼクティブ・コミッティーを）牛耳っていた有能なチェアマンで、ベルギーのオクランという代表が亡くなったんです。それで、チェアマンを互選しようという形になってきて、日本の代表も入るようになったということです。しかし、それは画期的な、ＯＥＣＤにおける日本の地位が向上していく道程ですね。

ですから、僕が入ったときは、まだ日本は「入れてもらって、ありがたい」という感じであり、アメリカその他には、「日本を入れることによって、対外援助を増額させよう」とか、「日本の造船、鉄鋼、その他諸々の産業を、国際的に規制していこう」という意図があったわけです。そういうことがあったものですから、いろいろ問題が発展していったんですが、その間に石油ショックが起きて、世界の経済が変わって来たということですね。それから、先ほど言った環境問題が出て来たということです。

渡邉　ＯＥＣＤのような国際機関は、なかなか分かりにくいものですから、機構的なことをお訊きしたいと思います。今、「二十四ヵ国」とおっしゃいましたね。理事会というのは、閣僚が出て行くわけですか。

吉野　普通は、我々大使がメンバーなんです。

渡邉　その二十四ヵ国の大使は、みんなパリにいるんですか。

吉野　いるんです。

渡邉　ヨーロッパみたいに、近いところの国でも？

吉野　デンマークやオランダは、その都度、本国からやって来ることもあります。しかし、日本やアメリカは常駐しているんです。そのほか、年に一回ぐらい閣僚会議があるわけです。

渡邉　それは通産大臣ですか、外務大臣ですか。

吉野　それは……。ともかく、日本は一人じゃないんです。問題の性質にもよりますが、外務大臣も通産大臣も、また大蔵大臣も経企庁長官も来るんです。経企庁長官が正式な代表なんでしょうね。しかし議題によっては、例えば鉄鋼みたいなものは通産大臣、通貨問題のときは大蔵大臣ということになるわけです。

渡邉　それが閣僚会議で、年に一回ぐらい、パリでやるわけですね。

吉野　そうです。そのうちに、例のサミットへ繋がっていくわけです。

渡邉　そのお話は、後でお聞きします。

吉野　サミットができた後になると、閣僚会議――殊に夏の閣僚会議は、サミットの準備段階として、そのひと月ぐらい前にやるわけです。というのは、ヴァンレネップという、当時の事務局長が非常に野心家で、「今度サミットができたから、何かコネクションを付けよう」という形で、お膳立てをしたわけです。

ＯＥＣＤというのは、一方においてはヨーロッパ・ユニオンの前身であると言われ、マーシャル・プラン以来出て来たＥＥＣに、世界的なコネクションをもっと付けようという形で、彼等は考えていたわけ

です。アメリカもそれに乗り気になって、「やれ、やれ」ということになりましたが、アメリカというのは、いつも戦略的に物を考えるわけで、ＯＥＣＤが使えると思うと、ＯＥＣＤを重要視するわけです。ＥＣが使えると思えば、ＥＣを重視する。ＧＡＴＴが使えると思えば、ＧＡＴＴを重視する。つまり、その都度、対外経済政策の重点を変更ないし選択する自由を持っているわけです。

ところが、ＯＥＣＤにいる連中は、なるべく自分のほうで主導権を握ろうと思うから、余計な仕事までも取ってこようという形になって来るわけです。しかし、アメリカ大統領の周辺では、「今度はＯＥＣＤでは都合が悪いから、ＥＣを使おうじゃないか」とか、「ＧＡＴＴを使おうじゃないか」とか、その都度変わるわけです。そういう形で、国際機関が利用されていたわけです。もっとも、ＯＥＣＤというのは真面目な機関で、ＥＣの他に全ヨーロッパおよびアメリカ、日本、カナダ、豪州が入っている……。

渡邉　ニュージーランドは入っていましたか。

吉野　後になって入って来たんですね。僕が行ったときは、豪州だけでした。

渡邉　エグゼクティブ・コミッティーというのは、大使がメンバーなんですか。

吉野　ええ。

渡邉　それは、かなり頻繁に行われた？

吉野　週に一回か月に一回か、そのぐらいやったんです。それで、だんだんに問題を積み上げていって、理事会を開く。理事会は月に一回だと思います。ですから、エグゼクティブ・コミッティーは、その一週間前には……。

渡邉　理事会のメンバーは、各国の大使クラスの人ですね。

吉野　代表ですね。それは大使クラスの人です。

渡邉　ヨーロッパ勢があっちにいて、こっちに日本とアメリカが手を繋いで……という形になることが多いですか。

吉野　もちろん、大部分は（日本は）アメリカと一緒にやる形になるし、アメリカを利用しなきゃいかんということでしたが、その頃になると、相当複雑になって来まして、ヨーロッパ勢は大体一致していましたけれども、時にはイギリス対ヨーロッパという形の問題が出て来たりしました。

渡邉　まだイギリスは、ＥＣに入っていない？

吉野　ＥＣに入った後でしょうね。というのは、僕等がいる頃に、ＯＥＣＤの中でも、ヨーロッパ勢は同じことを言ったり、あるいは一人が発言したりするという方式に、だんだん変わって来たわけです。ところが、そういうことになっても、時には異を唱える国が出て来たこともありました。

渡邉　因みに、公用言語は？

吉野　英語とフランス語です。

股野　全てのドキュメンツは英・仏語の両方でつくるとか……。

渡邉　ずいぶんフランスを立てているんですね。

吉野　本部が、フランスにあるしね。問題は、イタリアという国です。当たり前の話ですが、中には非常に有能な人がいるんです。しかし、イタリアはＯＥＣＤにおいては、もっぱら自国民のために、事務局内の部署を増やそうということが、大きな仕事なんですね。当時、日本は、もう二番目の、ＯＥＣＤ予算の貢献国だったんです。お金の面で……。しかし、局長クラスの人が一人も事務局にいなかった。大島さ

んが科学技術工業局長になったんですが、それまで事務局内には、局長クラスの高い地位に日本人はいなかったのです。ところが、イタリア人は、二人ぐらい局長で入っている。だから、イタリアを追い出して日本人を入れようということで、僕はその辺の工作をやったり、イタリアに対して話をしたり……。時には会場で、総退席はしなかったけれども、日本の代表がボイコットをするような対応をした。つまり、局長の人選の問題で、日本の候補者を入れようとした。

渡邉　これは、事務局ですね。

吉野　そうです。

渡邉　幾つかの局があって、官僚機構的な形を取っているわけですね。

吉野　そうです。

渡邉　大島さんが局長になる場合、資格は日本の代表じゃなくて、ＯＥＣＤのお役人ですね。

吉野　そうです。

渡邉　それ以外に、日本の代表部は大使を頭にして、何人かのスタッフがいるという形になるわけですか。

吉野　そうです。そのほかＯＥＣＤの事務局の、下のほうには大蔵省とか日銀の人が、一人か二人入っていたわけです。これも、また入れるのがなかなか難しいんだけど、向こうも経済援助とか何かがあって、だんだんに入れるようになってきたわけです。問題は、局長クラスの連中を増やそうということだったんです。

渡邉　因みに、局は幾つぐらいあるんですか。

吉野　四つか五つあったような気がします。忘れましたけどね。それから次官補というか、事務局長代理、つまり事務局長のアシスタントが二人ぐらい、あるいは三人いたかも知れません。フランスの人が一人と、もう一人は誰だったか。とにかく、二人ぐらいいるんです。その地位も、日本は狙っていたわけです。後になって、日本人も入りました。

股野　日本の次長になったのは谷口（誠）さんですね。

吉野　谷口さんの前に次長で……、フランス人を奥さんに持っている大使が一人いたんです。

股野　小林智彦さんですね。

吉野　ああ、小林さん。

股野　小林さんは当時、局長クラスじゃなかったですか（特別顧問）。

吉野　彼は、局は持っていなかった。そのとき一人増やしたのか、あるいはイタリア人を下ろして入れたのか、何かそういうことをしたんですよ。

渡邉　事務長が一人いて、複数の次長がいるんですね。

吉野　ええ。

渡邉　この任命は、誰がするわけですか。

吉野　理事会がやるんです。しかし、その前に下工作をして、みんなの同意やサポートを得ておくわけです。

渡邉　妙な話ですけれども、そのときの事務局員の給料は、どこが出すんですか。

吉野　国連と同じで、ＯＥＣＤが出すわけです。

渡邉　分担金を出して……。

吉野　その予算会議というのがあるわけです。予算理事会がね。そこで日本は、「日本は二番目のコントリビューターであるけれども、ＯＥＣＤの事務局員が少な過ぎる。局長のポストを、一つ要請する」と頑張るわけです（笑）。

渡邉　この分担金は国連方式ですか。過去何年かのＧＮＰを基礎にして出すとか。

吉野　そうです。

造船問題からオイル問題まで

渡邉　先ほどの話に戻ってよろしければ、あの時期の「外交青書」を読みますと、ＯＥＣＤのところに、必ず環境の話がある。もう一つは、日米会議で環境問題がある。並行しているのは知っていましたが、ＯＥＣＤの議論では、環境問題というのはどういう感じだったんですか。

吉野　一番大きな問題は、自動車の排気ガスの規制問題ですね。もう日本は規制できる状況にあったけれども、フランスがいつも反対して、ドイツは態度をはっきりさせないわけです。スウェーデン、ノルウェー、デンマークの連中は、規制派なんです。殊に北欧では、大陸から流れてくる排気ガスで困っていたし、英国も問題ではあったんですが、割合にフランスが頑張っていたものですから、排気ガスの規制は通らなかったですね。

渡邉　その他、ＯＥＣＤの場で、難しい問題と言うと？

吉野　最初は、日本の造船問題です。日本の造船業は非常に強いものですから、ブレーメン、ハンブルク等のドイツの造船業はやられてしまうし、ヨーロッパは日本に「輸出を規制してくれ」と言うわけです。

渡邉　七〇年代は、日本の造船がまだ元気なときですか。

吉野　元気です。結局、三年ぐらいかかって、日本が「うん」と言う形で規制するようになったわけです。それで、日本が規制するようになってから、ヨーロッパの造船業が少し良くなってきたんですが、今度は韓国が出て来るんです。それは、僕のＯＥＣＤ時代の後ですけれども……。それで結局、韓国もＯＥＣＤに入れざるを得ないような形で、だんだんと事態が発展していくわけです。韓国は韓国のほうで、プレスティージとして、西欧の仲間に入りたいということがあったものですから、「ＯＥＣＤに入れてくれ」と言った。日本も、機会がある度に、「韓国を入れろ」と言っていたのですが、なかなか実現しなかったわけです。

渡邉　韓国が入ったのは、割と最近ですね（一九九六年十一月）。

吉野　そうです。問題は、その前にトルコがＯＥＣＤに入っていたわけです。

渡邉　ギリシャも……。

吉野　ギリシャも入っていました。ヨーロッパの国は、もちろん入っていますが、トルコだけは、ある意味ではヨーロッパではない。当時、それほどユーロ・ユニオンという観念はなかったのですが、ＯＥＣＤのメンバーにとっては、「少なくとも経済的には、トルコは入れるべきじゃないか」というコンセンサスがあったんです。要するに、トルコから労働者がたくさん入っていますから、ヨーロッパにとっては大きな問題ではあるんですね。トルコの大使なんかは、よく僕のところへ、「ともかく、他の国々の追及が激しいから助けてくれ」とか、「トルコ支持の発言をしてくれ」とか頼みに来ました。

渡邉　外国人労働者の問題が、そういうところで……。

吉野　労働問題一般としては外国人労働者が論じられたけれども、ＯＥＣＤで規制するとか何とかという話にはならなかったですね。それ

は、むしろECの問題であったんです。

渡邉　なるほどね。

吉野　ですから、OECDは一つのコンセンサスづくりや何かに貢献していたわけです。

股野　さっきの造船の話で、当時のイギリスの造船業はどのくらいでしたか。

吉野　イギリスからは、あまり話を聞かなかったですね。一番困ると言っていたのが、ブレーメンとかハンブルク――ドイツですね。

股野　イギリスは、造船業の盛りは過ぎていたんですね。

吉野　むしろ日本あたりに安くつくらせて、（自分たちは）運営したほうがいいということですね。まさに日本は「重厚長大」で、安いスーパー・タンカーをギリシャその他に売って、ギリシャや英国の船会社は、日本の造船業が儲ける数倍ないしは数十倍の利益を得ていた。だから日本は、言わば彼等に搾取されているわけです。今度の金融危機と同じですが、日本人がもっと利口だったら、金融を扱うことを学ぶべきだったですね。それをもっぱら貯金して、外国人に使わせて、彼等のほうが数倍も儲かって、そのうちの一部を利子として受け取っているという形と同じですよ。金融はソフトですけれども、当時から「日本を利用すべし」というのが、本当の彼等の腹の中なんですな。

渡邉　ということは、日本に船をつくらせて、それを買ったギリシャが海運業で儲けるという話ですね。

吉野　そうです。英国やアメリカの資本家も、同様です。日本が安いタンカーを能率的に早くつくってくれれば、ますますいいというのが大部分の話なんです。

渡邉　しかし、ドイツの造船業は、まだ頑張っていたわけですか。

吉野　そうです。それが直接、失業問題に……。自分の国に造船業があるところは、ドイツの他にポーランドもあります。ポーランドはまだOECDに入っていなかったですけれども、そういう状況ですね。

渡邉　自動車の自主規制という話はよく聞くんですが、造船業については、どういう手が打たれたんですか。

吉野　最終的な決定は、一種の自主規制です。安く売らないし、たくさん売らないということですね。

渡邉　それは日・EUの間でですか。

吉野　OECD対日本という形で議論していたわけです。

渡邉　それは、あまり知られていないですね。

吉野　紳士協定ですね。

渡邉　因みに、OECDの、そういう決定なり議事録なりは、普通に出ているんですか。

吉野　出ているはずです。

渡邉　それで、七二年から三年、四年とパリにいらっしゃるんですね。

吉野　その間にもう一つ、G3、G5、つまり金融とか通貨についての決定ないしは合意も、OECDの事務局が仲介となって行ったわけです。しかし、これは大蔵省の秘密主義で、重要な決定であれば、我々代表にも後から知らせが来るけれども、大蔵省が単独でOECDを使って合意していたわけです。あるいは、通貨管理をしていたわけです。つまり、あの頃はオイル・ショックが起きたり、オイル・マネーのリサイクルとか、石油の価格がべらぼうに高くなったことによって、世界経済が混乱していったわけですね。それに対して、なるべく事前に協議して、通貨面の変動ないしは歪曲を避けようということですが、そのうちにだんだんとG2とかG7、G11という形で行われ

ていったわけです。

渡邉　Ｇ３とか日米独、あれは大蔵大臣と中央銀行総裁ですが、それはＯＥＣＤの枠じゃなくて？

吉野　ＯＥＣＤの枠の中でもあったわけです。本当はＧ７あるいはＧ３が独立して会議を開くんですが、そうじゃなくて準備工作として、ＯＥＣＤの場を借りて、定期的にＯＥＣＤの代表の一部の連中が会っていたわけです。

渡邉　通貨、金融の専門家が、ＯＥＣＤの枠の中でコンタクトした、ということですね。

吉野　そう。事務局長は元大蔵大臣をやった男ですから、ある程度ブリーフィングされていますけれども、本質的にはあまり発言権はないわけです。結局、アメリカ、日本、ドイツ、英国、その辺の連中が牛耳っていたわけです。そういうのも、ＯＥＣＤの別枠としてはあったわけです。

　それで、もう一つ思い出したんだけれども、世界経済がそういう状態でしたから、世界経済の見通しを出すという仕事もあるわけです。今も、ＯＥＣＤの経済見通しが出ていますけれどもね。その経済見通しの基にするために、世界経済の展望を理事会で論じるわけです。それは、まず事務局の経済局長――当時は英国人のマリスで、後に彼はワシントンのＩＩＥ（国際経済研究所）に行きました――が、見通しを述べるんですね。それに対して、各代表がいろいろコメントするわけです。そのときは、もう日本は正々堂々とコメントすることができたわけです。僕なんかも、いろいろ発言しました。日本の経済は相当大きいわけですから、発言せざるを得なかったわけです。

渡邉　この頃は、まだニクソン時代かな。

吉野　ニクソン時代です。

渡邉　そうですね。ニクソン、キッシンジャーの時代で、キッシンジャーがトライラテラル（三極主義）ということを言い出したのは、この時期ではなかったですか。

吉野　それは、キッシンジャーの持論ではあるんです。その前に石油ショックがオイル・マネーのリサイクルという形で、だんだんに緩和されていって、世界経済の見通しも、少し良くなってきた頃のことです。殊にオイルの問題では、ＯＰＥＣないしはＯＡＰＥＣという、アメリカが牛耳ることができない一つの勢力が出て来たわけです。これに対して、どう対処するかということで、キッシンジャーとフランスが形式的には一緒になって、ＯＥＣＤを中心としてオイル対策、それから石油備蓄協定をつくろうということになったんです。

　それで、ＯＥＣＤにも、元々エネルギー局というのがありましたから、それが中心となって新しい機構をつくろうということになったわけです。これはキッシンジャーのアイデアでもあったわけで、キッシンジャーがパリへ出て来た。フランスにはジョベールという、奥さんはアメリカ人だけれども、徹底したフランス国粋主義者の外務大臣がいたんです。それがヨーロッパを代表して、もちろん日本は一番大きなオイルの消費国ですから、我々も出て、オイル・アグリーメントというのか、石油備蓄アグリーメントというものをつくったわけです。そして、オイル・ショックに対応するには、どうしたらいいかということで、輸入量の五％なら五％を国家が備蓄するという話になって、その条約案をつくりました。その条約の下に、ＯＥＣＤとは別に、今度はＩＥＡ（インターナショナル・エナジー・エージェンシー）をつくったわけです。

渡邉　では、ＩＥＡは元々ＯＥＣＤの枠内でできて、その後、独立した組織になる、と。

吉野　ＯＥＣＤが産婆役になったわけです。そのときに、キッシンジャーと、いつもそれに楯突いていたジョベールが、会議場でも激しく論争していました。日本は、「これは面白いなあ」と思って見ている。だけど、非常に画期的な……。そのチェアマンをやったのがベルギーのダヴィニヨン伯で、彼が一所懸命になって条約文をつくったわけです。

渡邉　新しくできた組織が、仮にＩＥＡだとすると、これはパリに置かれているわけですか。

吉野　パリにできたんです。初めはＯＥＣＤの事務局と同じところにあったんです。今もあるかも分かりませんけど、その後、石油問題はこういう形になっちゃったから、だんだん影が薄くなってしまったし、石油の備蓄も、今はあまり言わなくなった。

渡邉　まだ、生きているわけですね。

吉野　それで、ＯＰＥＣがだんだん歯を抜かれていったわけですね。

渡邉　話は、がらっと変わりますが、パリには大使が二人いることになりますね。

吉野　そうです。

渡邉　そのお二人の大使は、どういう関係になるんですか。

吉野　片方はフランスの大使ですから、れっきとした大使で、ＯＥＣＤのほうは、どちらかと言うと事務屋みたいな感じで、僕だとか鶴見君とか経済畑の人が多かったです。けれども、別にどうと言うことはなかったですよ。ただ、非常に面白いのは、日本から大臣ないし総理が来ても、僕なんかは、「それはフランス大使に任せておけ。俺は飛行場に出迎えには行かないよ」と（笑）。まあ、それはいいんですが、僕の場合には幸い、中山さんの頃だから……。

渡邉　中山賀博さんが大使だったんですか。

吉野　そう。ですから、なるべく彼に任せておいたんです。ところが、「何だ、ＯＥＣＤの大使が迎えに来てないじゃないか」と言う政治家もいました（笑）。

渡邉　これは余談ですが、去年パリに行ったときに野上（義二）さんに会って話したら、「ちょうど少し前に、韓国がＯＥＣＤのメンバーになった」と。それで、どういうセットアップをするかと、日本をモデルにしていろいろやったんだけど、その後に韓国経済がガチャッとなったもんだから、リストラでアップアップで大変だ、と。「どこを、どう整理すればいいかという話を、今やっているよ」という話を聞きました（笑）。

吉野　日本はオイル・ショックで再び立ち上がれないだろうと、彼等は喝采していたけれども、逆に日本が強くなっちゃったから……。そういう話と同じです。

サミットの準備に追われて

渡邉　七五年二月から、七七年十二月にドイツに赴任されるまでの三年近くを、東京で外務審議官として過ごされたわけですが、外務審議官というのは、次官の次に何人かいらっしゃるんですか？

吉野　主として、経済担当と政治担当ということで、二人。

渡邉　当然、経済担当の外務審議官ですね。

吉野　そうです。

渡邉　このとき一番大きい問題は、ランブイエでのサミット（一九七五年十一月）じゃないかと思いますが……。

吉野　ランブイエから始まり、翌年からG7になるサミットですね。

渡邉　これは三木内閣の時代だと思いますが、そのあたりをちょっとお話しいただけますか。

吉野　先ほど言ったインターナショナル・エナジー・エージェンシーとだんだん似てきて、世界の主要国が集まって国際会議を開いて、「世界をマネジしていかなきゃいかん」という思想が出て来たわけです。ところが、少なくとも政治問題については、ヨーロッパとアメリカとはやっていたわけです。殊にランブイエと前後して、グァダループ（仏領）で、そういう会議が行われたわけです。

そのときは、日本はインバイトされなかったんです。むしろインバイトされなくて、ありがたがったわけです。というのは、日本は憲法もあるし、それほど軍備をしているわけではないし、兵隊が強いわけでもない。政治問題などで、ソ連に対して、「こうしてくれ、ああしてくれ」なんて言いたくないわけですから、グァダループにインバイトされなかったのは、当たり前の話だと思っていたわけです。ところが、今度は経済問題を主にして、ランブイエでサミットをやろうということで、「日本も出てくれ」ということになったわけです。そのとき、三木首相なんかは、「政治問題は論じないだろうね」と、僕に念を押したくらいです。日本が入って来ることについては、フランスなんかに非常にジェラシーがありましたからね。「今度は、経済問題だけで会議をやろう」という形で始まったわけです。その間、僕は第一回のランブイエに随行して、第二回目はロンドンかな。

股野　サンファン（プエルトリコ、七六年六月）でしょう。

吉野　あっ、サンファンです。フォード大統領のときですね。第三回がロンドンです。この三回とも経済問題だけで、政治問題はやらんという形で随行し、かつその前の準備をしたわけです。第四回目はドイツで、僕もドイツ大使をやっていたからということで、準備の一端を担ったのです。その四回目ぐらいまでは、各国とも意図的に政治問題は全然喋らなかったわけです。また、その頃は、経済問題について議論しなければならないことがたくさんあったわけです。

第一回のランブイエは、アメリカのドルに対するヨーロッパの通貨および日本の円の問題ですね。しかし日本人は、まだそれほど問題意識を持っていなかったんですが、ヨーロッパ人はドルに対するヨーロッパの通貨の乱高下によって、自分たちの経済関係が不安定な状況になることを非常に気にしていました。あるときは安過ぎたり、あるときは高過ぎたりして……。そういうわけで、経済会議を開こうということで、ランブイエをやり始めたわけです。

三木さんは、初めての会議に日本代表として、しかも六ヵ国の一つとして選ばれたわけですから、非常に張り切って出かけたわけです。しかし、ほとんど発言しないのです。また、我々も十分にブリーフィングをしたり、「こういうふうに発言してください」ということも言わなかったわけです。僕と牛場さんが付いて行ったのですが、いま振り返ってみると、特に何もなかった。政治的には、日本が初めて六ヵ国の一つとして選ばれたということが重要視されたわけです。当時、写真を撮る場合にも、三木さんは真ん中に行くとか、アメリカ代表のすぐ横に座るとか、全くしなかったわけですよ。一番隅のほうにおら

れました。ヨーロッパ人は、アメリカ代表の横に陣取っちゃうわけですからね。それはそれで、彼等は、それぞれ自国に対する宣伝ですからね。ところが、三木さんは、そういうことを自国に対して宣伝する必要もない。ランブイエは、そういうことですね。

そして、ランブイエの後になりますと、今度は、いわゆるシェルパという制度がだんだん出て来たわけです。当時、シェルパとは言わなかった。

渡邉　まだ、なかったんですね。

吉野　当時は、パーソナル・リプレゼンタティブと言っていました。首相のパーソナルなリプレゼンタティブという形で、前準備の段階で議題を練ったり、発言ないしは問題点を指摘する。それから、どのように会議を持っていくかということを、各国の同僚とお膳立てするわけです。一回目、二回目ぐらいは、大体その通りに首相は動くわけです。ことほど左様に、客観的に見れば、単なるお祭りみたいな形になったわけです。ただ、会うことに意味があるという形であったわけです。

そのうちに首脳たちのほうが、「シェルパないしパーソナル・リプレゼンタティブのお膳立て通りに、発言ないしは会議を運営するのはおかしい」ということを言い出した。「我々が国際経済を牛耳っていくんだから、我々が勝手にやり、場合によってはパーソナル・リプレゼンタティブを排除して、テータテート（tête-à-tête）をしたっていいじゃないか」という思想になっていったわけです。しかし、そこへ行くまでの過程においては、相当、パーソナル・リプレゼンタティブがお膳立てをすることにおいて力があったわけです。パーソナル・リプレゼンタティブの中にも非常に個性の強い、後になってブンデスバンク（ドイツ中央銀行）の総裁になった男で、シュミットの懐刀みたいなペールがいたりしたわけです。……サンファンは、誰が行ったのかな。

渡邉　三木さんじゃないですか。

吉野　三木さんなんかは、「吉野君、何を言うかねえ」なんて言うわけです。こっちが、お膳立てしなきゃいかんわけです。ですから、それほど強い要求はなかったんです。

渡邉　最初のランブイエのときは、そういう事前の準備なしにやったんですか。

吉野　そういうことです。ただ、付いて行っただけです。新聞記者も百人ぐらい行ったのですが……。

渡邉　サンファンのときぐらいから、いま言った、後にシェルパと言われる人たちが、事前に準備したりするようになるんですね。

吉野　シェルパも各省に諮って、問題提言や何かを洗って、だんだん準備していったわけです。それから、各省の大臣も付いて行くし、各省の担当局長も付いて行くようになりました。だからサンファンなんかは――会場も、サンファンから離れた島の中にあるのです。そこにまた大きなリゾートホテルがあって、大部分の部屋を日本人が占拠して、事前に、または事後に相談したりしたわけです。

渡邉　第二回のサンファンの準備は、吉野さんが主にやられたわけですか。

吉野　そうです。その頃からパーソナル・リプレゼンタティブと言われたわけです。そして、各国のパーソナル・リプレゼンタティブとのコンタクトもできて来て、事前に一回か二回会うわけです。日本ではほとんど会わなかったけれども、ロンドンやワシントンなどで会って、

「この次はどうするか」とか打ち合わせをするのです。
それで思い出すんですが、サンファンのときに、あまり大きな問題がなかったというのは、その前にニクソンが辞めたわけです。副大統領のフォードが大統領になって……。

渡邉 失礼ですけれども、ランブイエのときは、もう既にフォードでしょう（一九七四年八月、フォード大統領就任）？

吉野 そうだったですか。

股野 そうです。

吉野 そうでしたね。なぜ、フォードを忘れたのかな……。

渡邉 今度はホストですからね。

吉野 サンファンでは、彼が非常に張り切って、ヘリコプターから降りて来たからね。ランブイエのときは気が付きませんでした。失礼しました。
本来なら、アメリカはそういうところで大いに牛耳っているはずだけれども、ジスカールがランブイエを牛耳っていたわけですね。

渡邉 話は、やや逸れるかも知れませんが、七五年の二月に外務審議官になられて、ランブイエは、その年の十一月ですか。

吉野 十一月です。

渡邉 ヘルシンキ（欧州安保・協力首脳会議）が七五年ですが、ヨーロッパから見ると、かなり大きな動きですね（八月一日、ヘルシンキ宣言）。お仕事柄、それはあまり……。

吉野 あまり気が付かなかったですね。政治問題でもあるわけですからね。それからもう一つ、ロンドンが第三回ですね。

渡邉 七七年五月ですね。

吉野 これは、相当画期的な問題が出て来たわけです。

渡邉 既に、ドイツ大使になられてからですか。

吉野 その前です。福田さんが総理として行ったわけですが、僕等がヒースロウへ到着したとき、英国の蔵相が出迎えてくれたわけです。

渡邉 向こうの首相は誰でしたか。

股野 キャラハンでした。まだ労働党の時代ですからね。

渡邉 大蔵大臣は、誰だろうな。

吉野 それで、向こうが歓迎の辞を述べたわけです、イギリスの空港で。そうしたら、福田さんが、それに応えて演説したんです。それは、我々は用意していないから、日本語でしょうね。それを、誰かが通訳したんでしょうが、「今、世界経済は不況に陥るかも分からない危機に直面している。私は何年か前に財務官をやって、ここロンドンに駐在したことがあるが、その頃は世界的な経済恐慌があったので、不景気の状況をよく知っている。だから、大恐慌は絶対避けなければいけない。そのためには、七ヵ国が協力してやっていかなきゃいかん」と。そういう演説をしたんです。

渡邉 飛行場ですか。

吉野 飛行場で、歓迎の辞に対する応えですね。そうしたら、相当インパクトがあったんですよ。それで、福田さんは、自分を相当印象付けたわけです。
ところが、そのころ一番大きな問題は……。その頃からカーターが出て来たわけです（一九七七年一月、大統領就任）。カーターは、ご存知の通り、原子力潜水艦の専門家の何とかという少将の影響が強かった。

股野 リコーバーでしたか。

吉野 リコーバーです。彼のインフルエンスが非常に強くて、カータ

ーは核燃料の平和利用に対して、非常に警戒的だったわけです。日本は石油ショックの後でもあり、核の平和利用に邁進していかなければいけない時代に入りつつあったわけです。ところが、核エネルギーは危険だ、と。ましてや一回使った核燃料を、もう一度使うために再処理することは、非常に危険が伴うからやめよう、と。そういう提案が、アメリカを中心として出て来たわけです。それで、この主張を防がなきゃいかんということで、日本もイギリスもフランスもドイツも、カーターの新政策に非常に危機感を感じていたわけです。

その前の三月頃、カーターが大統領になって間もなく……。

渡邉　福田さんがワシントンに行かれた。

吉野　僕がワシントンへ行ったとき、シュレジンジャーがエネルギー大臣だったんですよ。シュレジンジャーに会いに行って、「カーターおよびリコーバーの思想は、我々にとっては非常に困ることなんだ。せっかくエネルギーを大事にしようということで、核燃料のリサイクルを始めようとしているときに、カーターの思想がプリベイルしていくと、我々および世界の経済にとって非常に悪いことだから、何とかしてくれ」ということを直訴したわけです。ところが、シュレジンジャーは、「いやあ、カーターは、ちょっと度が過ぎるかも知れないけれど、日本は当分の間、一回使った核燃料はプールにでも入れて置いて、少し待っていたらどうか。それほどシリアスに考える必要はないよ」と言うんです。そうこうしているうちに、「核再利用はやめたほうがいい」という形の、アメリカの提案がサミットに出て来ることになったわけです。

我々としては、何とかしてそれをやめさせようということですが、的確な対応策がないわけです。忘れちゃったけれども、ちょうどその頃、「ある方法で処理をすれば、うまくいくんだ」という話が出て来たんですが、それはまだしっかりした思想になっていなかったんです。それで、核問題は最後まで非常に揉めたんです。片やカーター、片やその他の国々という形でね。殊にフランスや英国は大々的に核の再処理工場をつくって、将来、日本にも売り込もうとしていたときですからね。

渡邉　七七年の三月にワシントンへ行かれて、シュレジンジャーとお会いになったというのは、その後に福田・カーター首脳会談があるんですが、その事前の準備でいらっしゃったんでしょうか。

吉野　覚えていませんが、カーター政権発足直後です。

渡邉　このときに、福田・カーターの間で原子力平和利用の話が問題になるんですね。それで東海村の話があって、内容は覚えていませんが、幾つか問題が出されて、その後、今のロンドンの話になるんですね。

吉野　そういうことなんですが、ロンドンにおいては、カーターはロンドンっ子の間で、表面上はえらく歓迎されたわけです。なぜかと言うと、ニクソンのイメージがあって、とうとうカーターという新しい大統領が選ばれた。しかも、比較的若くて、少なくとも顔は……（笑）。それで、ロンドン市内はカーター歓迎で沸いているわけです。カーターが自動車で行くと、「ワーッ」と民衆が歓迎するような状況でした。ところが、日本にとっても諸外国にとっても、カーターの難問は非常に困ったわけです。しかし、何とかして議事録においても、結論を出さなきゃならない。先送りをしているうちに、我々は何か対策を考えようということで終わったわけです。

渡邉　七七年のロンドンと言うと、股野さんも向こうにおられた

（笑）。

股野　渡邉さんもロンドン（チャタム・ハウス）におられた。私は、福田さんの身の回りのお世話をしました。官房副長官の記者会見とか。

渡邉　ドイツ大使として七七年六月にいらっしゃるわけですから、今のは、その直前ですね。五月がロンドンですから……。

吉野　そのぐらいですね。

渡邉　ロンドンには付いていらっしゃったんですか。

吉野　付いて行きました。それで、我々が用意していなかった演説をしたわけですよ。

渡邉　その飛行場でね。

吉野　福田さんは、「ここでひとつ、ぶってやろう」と考えていたんでしょう。大蔵大臣はヒーリーだったかなあ。

渡邉　ヒーリーは国防大臣じゃなかったかな。

吉野　まあ、大蔵大臣が誰だか、名前は忘れましたが……。

渡邉　股野さんは、飛行場へは行かなかったわけだ。

股野　行きませんでした。

渡邉　うっかり通訳をさせられたら、大変だから（笑）。

吉野　誰が通訳したのかな。

渡邉　小和田さんじゃないかな。小和田さんは外務大臣に付いていたのかな。

股野　今、評論家で活躍している岡本行夫氏の可能性がありますね。彼はサミットの会場へ入ることを許されたんです。従って、彼しか入っていないので、彼が会場から出て来て、まず政府関係者にブリーフするんです。それを基にして、塩川（正十郎）副長官が記者会見をする。その繋ぎを、私が副長官の補佐として手伝った記憶があります。

渡邉　七五年二月から七七年六月までの外務審議官としての二年間で、他に何か。

吉野　交渉か下話か、工作か何か知りませんが、べらぼうに忙しくてね。

渡邉　サミット関係で？

吉野　サミット関係だけじゃなくて、他の経済問題もあって、ほとんど席が温まる暇もなく、ロンドンから帰って来たら、すぐ豪州へ行くとか。豪州から帰ったら、すぐアメリカへ行くという形で、体をすり減らしましたよ。あるときなんか、東南アジアの閣僚会議か何かへ行って、本当はそこから豪州へ行けばいいのに、それができずに羽田へ帰って来て、羽田でシャワーを浴びて着替えて、その足で豪州へ行くとか。身体的には、本当に疲れました。ようやく、日本の経済外交も忙しくなってきた、その初めの頃です。

股野　マルチ経済外交が非常に盛んになった時期ですね。それの主役を演ぜられるのが外務審議官でしたから、東京におられることが少なかったですね。

渡邉　このとき牛場さんは？

吉野　アメリカ大使をやって、帰って来て辞めたのかね。

渡邉　辞めて、福田さんのときに、対外経済担当大臣になって戻られた。

吉野　それで、牛場さんが大臣をやっておられたから、私がドイツ大使のときは牛場さんや福田さんを公邸へお泊めしたんです。そのときにもう一人、園田（直）外務大臣が……。

股野　七八年七月のボン・サミット（第四回）ですか。

渡邉　鳩山外務大臣の後が園田さんですね。

吉野　園田さんを公邸に泊めることができずに、ボンの小さなホテルへお泊めしたわけです。私もベッド・ルームが足りないので、同じホテルへ泊まった。園田さんには、かえってそのほうが都合が良かったんだけれども……。ある意味では、「なぜ大使は俺を泊めずに、牛場さんを泊めたんだ」と思ったでしょうが、しかし翌日彼は、「俺は恋人と長時間電話で話をして……」と（笑）。

渡邉　羽を伸ばせた。

　そうすると、ランブイエのときは、吉野さんと牛場さんとがお手伝いされたわけですが、牛場さんはフリーな立場でされたわけですね。

吉野　そうです。

渡邉　というのは、その時代の経済外交の主役の一人が牛場さんでしょう。牛場、吉野そのあたりでやっていらっしゃった時期ですからね。

吉野　それから、もう一つ。第一回目のランブイエの後、パリを中心として、サミットではないが国際会議が何回もあったんです。それには、亡くなられた倉成（正）さんとか、その他、外務大臣や経企庁長官のお伴をしました。パリには、国際会議場に使われる大きなパレスが方々にあります。その中の一つで国際会議が数回開かれて、僕はそれに何回かお伴をしたこともあります。それはおそらく、開発途上国の援助問題が中心じゃないかと思うんだけど、もう忘れましたね。ただ忙しいだけで、議題も……。しかし、それはランブイエにちょっと似たところがあって、フランスが中心となって各国を集めて会議をしたんですね。

渡邉　物の本によれば、ランブイエで三木さんは南北問題をぶったけれども、どうも白けちゃった、と。みんな、そんなのはあまり関心がないので、話が浮いちゃったと言うんですが、そんな雰囲気だったですか。

吉野　そういう雰囲気ですね。三木さんの理想論と現実政治とは違うんですよね。殊にヨーロッパの政治家はしたたかですから、ジスカール・デスタンとか、口ではうまいことを言うけれども、何を考えているか分からないからね（笑）。

渡邉　直接、ご関係にならなかったことかも知れませんが、一般論として、総理大臣時代の三木さんは、外務省との関係はあまり良くなかった。つまり、外務省にあまり相談しないで、三木さんは個人的に平沢（和重）さんとか、国弘（正雄）さんとか、そういう人たちを通じて仕事をやって、外務省との関係は良くなかったという話を聞くんですが……。

吉野　少なくとも、事務当局とは良くなかったですね。ところが、彼には思想がありますから、彼は彼なりに理想を持っていたわけです。それは、ちょっと現実離れをしているかも知れませんがね。東南アジア外交を積極的に展開しなければいけないとか、誰から入れ知恵されたか知りませんが、「コモディティー外交」と言うんですね。つまり、開発途上国問題とか……。

渡邉　コモディティーと言うと、国際商品のことですか。

吉野　農産物なんかが多いわけですから、「開発途上国に対して、貿易においても自由化しよう」と言う。ロメ協定というのがあるでしょう。ロメ協定なんてものは――今もそうですが――ほとんど勉強もしていない。三木さんは誰から言われたか知らないけれども、「アジア・ロメ協定みたいなものをつくれないか」とか、そういう形の彼自身のイデオロギーはあったんです。彼は、事務方とは遠いけれども、それなりに理想を掲げて外交をやろうとしていたと思います。

渡邉　外交については一家言お持ちになっていた総理大臣だけれど、皮肉なことに外遊の数が一番少ない総理大臣ですね。あまりチャンスがなかったということです。

吉野　これは僕の思い出ですが、三木さんから、「吉野君、ランブイエ会議やサンファンの会議の経緯を書いてくれよ」ということを、二回ばかり催促されたんです。僕は忙しくて、本当は僕が悪いんですが、「はい、はい」と口では言ったけれども、一回もやらなかったんです。それが後になって祟って、今、あなた方に十分な話ができないことの一つの原因です。しかし彼も、会議には出たけれども、一体何を話したか分からないんですよ（笑）。それで、僕に少し解説を頼むとか……。

渡邉　だけど、ロンドンのときに岡本さんが入ったように、会場に誰か一人入れるわけでしょう。ランブイエとサンファンは、吉野さんが入ったんじゃないんですか。

吉野　いや、入ってない。ランブイエのときは、牛場さんも入っていないんです。

股野　ランブイエとサンファンの経験を踏んで、ロンドンから、誰かを入れようということになったんでしょう。だから、サンファンのときはともかくとして、ランブイエのときは、本当に首脳だけだったと思います。

吉野　確かに、そうですよ。それでランブイエのときは、牛場さんと僕は雨の中をぼやきながら、宮殿（ランブイエ城）の外で待っていたんですよ。

股野　お城の中にも入れなかったんですね。

渡邉　それで三木さんは、心細かったわけだ（笑）。

吉野　だから、本当のサミットだったんですね。それは、ある意味では良かったんですけどね。

渡邉　でも、「書いてくれ」と言われても、ご存知ないことは書けないじゃないですか。幾ら吉野さんでも、それはちょっと無理だと思いますが……（笑）。

吉野　しかし、通訳が入っていたんでしょうね。

股野　ブースに入っていたんですかね。

渡邉　通訳がいたんですか？

股野　三木さんは全く分かりませんから、ブースに誰かが入っていたんでしょう。

吉野　しかし、ブースの置き場もないくらいの狭い部屋ですから、背後から通訳が囁いていたのでしょう。

東西対立の時代——ドイツ大使として

渡邉　七六年の十二月に、三木さんから福田内閣に替わりますが、七七年五月にロンドンでサミットがあって、吉野さんはすぐに大使としてボンへいらっしゃるという順番になりますね。

吉野　はい。

渡邉　その前に確認しておきたいんですが、「経歴」を拝見しますと、七九年一月に「大蔵省顧問」というのがあるんですがね。特命全権大使として、かつ大蔵省顧問ですか。

吉野　それは外債か何かの起債のときに、保証書に日本政府の代表と

してサインするとか何か、そういうことで大蔵大臣の代わりにするという形で、一時的なものです。

渡邉　つまり、この間、ずっと大使としていらっしゃったということですね。

吉野　そうです。現地の大使が代わりに……。神戸債か何かですかね。結局、後に日本円が高くなったですから、神戸はそれで儲けたんです。その間、ドイツから借りた金で新しい人工島か何かをつくったわけですから、神戸は外債で儲けたんですよ。後になってやった連中は、損もしたんですが……。そういうことで、おそらく顧問になったんでしょうね。

渡邉　「経歴」では、七七年の六月と十二月の両方に「大使」と書かれているので、実際に行かれたのは六月なのか、十二月なのかよく分からないんですが……。

吉野　外務審議官を辞めたのは六月ですね。それで、「大使」という名称をもらったんじゃないでしょうかね。とにかく、ドイツ赴任までは、同じような仕事をしていたと思います。

渡邉　実際に赴任されたのは十二月ですか？

吉野　そうそう。

渡邉　では、それは後で確認することにして、七七年の十二月にボンにいらっしゃって、七八年、七九年……八二年五月まで、ずっとボンにいらっしゃったということで、かなり長いですね。今日は途中までになるかも知れませんが、ドイツにおける大使時代の話を思い出していただきたいと思います。

吉野　印象に残っているのは、シュミットというドイツ連邦の総理――彼はＳＰＤですが、これが相当切れる政治家だということで、日本でも評判になって、「シュミット詣で」をする大臣が、たくさんボンに来た。その中には牛場さんその他もいて、僕等はいつもそれに付いて行ったわけです。彼は、コールと同じように、戦争へ行ったわけです。コールのほうが年が若く、十六歳かなんかで、国内で高射砲の操作をしていた。シュミットは兵隊として、ソ連戦線に出ていたのです。そのシュミットが総理で、日本から、「ドイツ経済の現状および将来」なんていうことを聞きに来る大臣方がたくさんいて、それにお伴をしてシュミットに何回かお会いしました。その間、シュミットは日本を一回訪問しましたが、そのときは、やはり僕も付いて国内を歩いたりしたんです。

　いま考えてみても、なぜシュミットはそういう激しい言葉を使ったか分かりませんが、アメリカの政策を強く非難するわけです。ドルが高過ぎるとか、金利が高過ぎるとか、あるいは勝手にニクソン・ショックみたいなことをやるとか、と。要するに、それによってヨーロッパが、殊にドイツの経済が振り回されるので、何とかしなきゃいかん、と。これが、ジスカールと一緒になってサミットをつくった一つの要因だと思いますが、そういう話をするわけです。そうすると、僕等も面白がって、「そうか、そうか」ということで話が弾むわけです。

　もう一つは、彼はＳＰＤですから、本来なら左寄りであるべきなんです。ところが、その前に「ゴーデスベルク宣言」というものをやりまして、ドイツの左翼が右傾化したわけです。彼はその代表の一人なんですが、その後、彼は国防大臣を務めたりしたので、ヨーロッパの防衛問題について、非常に強い関心を持っていたのです。日本は、どちらかと言えば防衛はアメリカに任せておけとか、自衛隊を大きくすることについて批判的ではないまでも、ヨーロッパの人とは違うわけ

です。それから、日本は領土問題にえらく固執しているわけです。これまたシュミットに言わせれば、領土なんて、ドイツは何回も大きくなったり小さくなったりしているわけで、今ごろ領土問題を言うのは、時代後れだという気持ちなんですよね。そうは言っても、彼は大学を卒業するとき、日本経済の復興について――まだ復興前ですが――博士論文を書いたわけですから、日本に対して興味は非常にあるわけです。今も、ありますがね。

それから、私が大使中にやったもう一つのことは、アメリカでやってきたことの続きです。当時、ヨーロッパにおいては保護主義というか、ヨーロッパの産業を守ろうという動きが非常に強いわけです。ところが幸いなことに、ドイツは率先して「自由化」なんです。これはエアハルト以来の伝統ですが、僕の時代に、いろいろ事件が起きたわけです。例えば、それまでドイツのモーターバイクはヨーロッパに市場を持っていたわけです。ところが、ホンダやヤマハ、カワサキが出て来て、たちまちドイツ国内の市場は日本に全部取られちゃった。それで、バイク業界は経済省に陳情するんです。

ところが、グラーフ・ラムスドルフという経済大臣（ＦＤＰ）は、シュミットとは党が違いますが、思想は同じなんです。「自由化、自由経済で、マーケット・エコノミーでいかなきゃいかん」ということに徹底している男ですから、そういうものに一切耳を貸さないわけです。アメリカやその他の国からは、「日本を規制してくれ」とか、「自主規制をしろ」と言われているときに、ラムスドルフにその話を持って行くと、「弱い産業が潰れるのは、当たり前だ」と言う。ですから僕は、ドイツ国内ではいかに自由貿易が大切であり、それについてドイツが非常によくやっているということを、たびたび演説して回ったわけです。業界には、必ずしも評判は良くなかったですけれども、「これが、私たちが一番よく栄える道だ」という話をして歩いたんです。

その意味では、ドイツ大使時代は、僕にとってはアメリカから言って来るバイラテラルなプレッシャーから、初めて解放されたときだったんですね。当時、フランスその他の国では、プロテクショニズムが相当強かったんですが、ドイツに関する限りは非常に自由で、開放的だった。しかも、そのとき、ドイツは日本に対して輸出超過であったのが、だんだん輸入超過になりつつあったんです。そういう境目のときでしたが、ドイツと日本との間は、アメリカに次ぐ第二の貿易量だったわけです。日本も、大量にドイツの物を買っていた。しかし、ドイツには、それ以上に日本品が出て行った。一番よく売れたのは、日本の工作機械でした。ドイツは工作機械の本拠なんです。ところが、コンピュータで制御された日本の工作機械が、飛ぶように売れ始めた。

当時は、飛行機に乗ると、日本から来るお客の多数は、それを売りに来るメーカーの人でした。そういう時代でした。全体としてドイツは〇％成長みたいな状態で、失業率はまだ五％ぐらいだったんです。しかし、だんだん増えてくるという時代でしたが、そんなには悪くなかったです。ただ、ようやくドイツの学者なんかが、「このまま放っておくと、ドイツは没落する。従って、構造改革をしなきゃいかん」と。具体的な構造改革の方法はなかったけれども、そういう意見が強く出て来たわけです。

もう一つは、安全保障問題ですね。「東」との対話ができるようになってからではあるんですが、シュミットは実質的には領土問題を軽視してはいるけれども、東西ドイツの融合は彼等の悲願なんです。と

ころが、東西ドイツがいつ融合できるかということについては、外務省を含めて全部悲観的なんです。悲観的というか、それは客観的ではあるんでしょうが、ソ連とアメリカとの対立が続く限りは、絶対あり得ないと考えていた。まさに、その通りなんです。それでは東西ドイツが統合する日は、いつか……。それが大きな問題なんですが、ソ連が「西」に対して敵対関係を持たなくなるときに、（東西の対立は）自然解消する、と。そして、それがいつ来るかと言うと、我々が生きている間には来ないだろう、と。これは、ドイツの外務省も含めて、ドイツ人全体が考えていることでした。

それは、ヨーロッパにとっては二つの意味があるわけです。ドイツが東側ないしはソ連側と、ちょっと政治的な話をすると、フランスが一番これを気に病んでいるわけです。ですから、僕等がシュミットに会ったり、ゲンシャー外務大臣――彼も、その間に日本に来ましたから、僕も付いて日本国内を回った関係上、かなり親しかった――に会ったりすると、その日のうちにフランス大使が、僕のところへ電話をかけてきました。「ちょっと、お前に会いたいから行ってもいいか」と言うわけです。

そのフランス大使は、後に日本の大使になった男ですが、「お前、ドイツの外務大臣（あるいはシュミット）と、東西融合について話したんじゃないか」と訊くわけです。フランスにとっては、一番大きな関心事なんです。ところが、私がドイツ外務省の幹部連中と話をすると、彼等は、「いや、東西ドイツが統一するなんて、俺たちが生きている間にはあり得ないんだから、そんな話なんか、あるはずないじゃないか」と言うわけなんです。ことほど左様に、ヨーロッパの状況は、東西対立を主題にして神経を遣っていたわけですね。それが思い出の一番大きなものです。

渡邉　次回は、ボン・サミットのあたりからの話をお聞きしたいと思います。

どうもありがとうございました。

〈以上〉

吉野文六
オーラルヒストリー

第7回

[1999年9月29日 15:00～17:00]

〔インタビュアー〕（肩書きはインタビューの時点）

渡邉昭夫（青山学院大学教授）

股野景親（元駐スウェーデン大使・政策研究大学院大学共同研究員）

武田知己（東京都立大学法学部助手・政策研究大学院大学共同研究員）

（於：国際経済研究所）

シュミット政権の自由主義

渡邉　私の手元の記録では、一九七七年十二月にドイツ駐箚大使として赴任されて、八二年の五月に大使をお辞めになっています。これを最後に、外務省を退官されたのですか。

吉野　そのあと半年ぐらい外務省に残って、主としてＧＡＴＴ関係の交渉をやっていました。

渡邉　では、もし時間があれば、そのお話も伺いしましょう。あるいは前回と時期的に重なるかも知れませんが、一応今日は退官までをカバーして、お話をお聞きします。

七七年にドイツ大使として赴任されるときは、福田内閣―園田外務大臣という時期だと思います。繰り返しになるかも知れませんが、七〇年代の終わり頃から八〇年代初めにかけての、ドイツあるいはドイツを中心にしたヨーロッパというのは、どういう感じだったのでしょうか。

吉野　僕も、それほどはっきり憶えてはいないんです。戦争中に滞在したドイツと、戦後に貿易協定で訪れたときの若々しいドイツ、そして大使館参事官を務めていた頃のドイツ、つまり戦後再興を掲げて日本と同じように非常に努力していたドイツ、それから大使として赴任したときのドイツというのは、相当様相が違っていたわけです。なぜかと言うと、一つは、もうその頃ドイツは戦後復興が終わり、一種の経済停滞に入っていたわけです。しかも、ソ連のアフガニスタン侵攻（七九年十二月）などがあって、東西関係がまた一段と緊張してきた。そういう意味で、非常に冷え冷えとしたような感じがあって、ひと頃のような、戦後の復興期の上昇するドイツとは、全く様変わりしたものを感じました。

渡邉　これはシュミット時代ですね。

吉野　シュミット時代です。後になると、失業率もだんだん増していったんですが、当時は（失業率は）それほど高くはなかったんです。しかし、ゼロ成長の時代でした。今、我々はそういう時代を経験していますから、よく理解できますが、当時は、「こんな冷蔵庫に入れられたような状況で、ドイツ人はよく我慢できるな」と思ったわけですね。ただ、別にゼロ成長でも、ドイツ人はあまり文句を言っていなかったです。もちろん、失業はそれほど増えていなかったから、その点で社会的にはある程度安定していたんでしょうが、「ゼロ成長なんていうのは、日本では考えられない」というような気持ちで見ていたわけです。しかし、当時ドイツの経済学者の中には、「ドイツは経済的に、もっといろいろなことができるはずなのに、それをしないから、今のような状態になった」と言う人もいました。……あれは、何と言ったんでしょうかね。特別な言葉がありました。ドイツ語を忘れましたが、要するに、「動脈硬化になってしまって、しかも、それから脱却するような努力を、政府や産業界がしていない」と。そういう批判をする学者もいました。

しかし、それに対して一般の風潮は、「ゼロ成長で、どうして悪いんだ。別に、ドイツの国際収支が悪くなるわけでもない」と。当時、日本はエレクトロニクスで世界中を制覇していましたから、「ドイツは、日本みたいに新しいインダストリーがどんどん興ってくるような

状況ではないけれども、国内は安定しており、みんなが就業できるならば、別に悪いことはないんじゃないか」というような雰囲気でした。

渡邉　そうすると、日本だけが突出していたんでしょうか。この前のお話から続きますが、先進国サミットが始まって、第一回が七五年のランブイエ、第二回が七六年のサンファン、第三回の七七年がロンドンで、七八年にボンのサミットということですね。特にロンドン、ボンは総理大臣が福田さんで、私が記憶しているところでは、「経済成長率七％達成」ということが問題になって、それを国際的に公約したとか、しないとか。そして、「日本とドイツが機関車になって、引っ張って行け」とか。そういうようなことを言われた時代ですが、今のお話だと、ドイツはゼロ成長だ、と。

吉野　ドイツは達成できなかったんです。日本は達成したんですが、日本も達成することについては相当文句を言って、「どうして日本とドイツだけが機関車にならなければいけないのか」と。その後、日本は大盤振舞と称する予算をたくさん使って、そのお蔭で日本も成長し、機関車の役目は果たしたわけです。ところが、ドイツはそれをしなかったのです。ドイツも日本と同じように、シュミットなんかは相当文句を言っていました。

渡邉　アメリカにこき使われて、機関車論で「やれ！　やれ！　やれ！」と言われて……。

吉野　「こき使われて嫌だ。『やれ！　やれ！』なんて、とんでもない話だ」と言っていたんですが、実際問題としてもドイツは、大して成長しなかったというわけですね。ですから、日本のみが機関車の役目をしたわけです。そして、日本は初めは文句を言ったけれども、長期的に見れば、それによって日本経済が、また躍進したということになるわけです。

渡邉　G7の中でも、日本が少し突出していたような時代ということになりますか。

吉野　そういうことですね。それで、この前もお話ししたかと思いますが、ドイツの目ぼしい産業が日本の輸出によって、どんどんと食われたり後退していく。例えばオートバイは、ドイツではほとんどつくれなくなりましたが、経済大臣は、「それは競争だから、やむを得ない」ということでした。エレクトロニクス産業も、ドイツは日本と同じように、アメリカのマーケットを目指して早く力を入れればいいのに、相変わらず「重厚長大」の鉄鋼とか工作機械とかというものに固執していたので遅れてしまった。それで、ドイツの店頭には、日本の東芝とか日立とかソニーとか富士通とかというような製品が、軒を連ねて並ぶようになった。

　かつては日本の観光客がドイツに行くと、必ず「ドイツのテレフンケンの蓄音器を買いたい」とか、「ブラウパンクトというドイツのラジオを買いたい」とか言って、お土産に買って帰るわけです。ところが、僕が大使として赴任した頃には、そういうドイツの楽器屋とかラジオその他を売っている店のショーウィンドーには、日本製品が並んでいるんです。それを、ドイツの庶民が見て、「ああ、ドイツは、いつの間に、こういうことになってしまったのか。昔のドイツの姿は、どこに行った」と嘆いていた。それくらいに、日本の進出は凄かったんです。

　日本はアメリカというマーケットがあって、一所懸命にアメリカ向けにつくった製品を、そのままヨーロッパに持って来たんですから、それは強いに決まっているわけですよね。ところが、ドイツはそうい

う努力は、少なくともしなかったか、あるいはしなくても済んでいる体制にあったわけです。そういうことで、ドイツに僕が行った頃には、いま言ったように、非常に冷え込んでいた。ゼロ成長というのは、今の日本のように、急に冬がやって来たような感じがするわけです。

渡邉　そういうとき、フランスはガードが硬くて強いんですが、お話を聞くと、ドイツが、ちょっと寛容なのはどうしてなんでしょうか。

吉野　それは、彼だけじゃないんですけど、経済大臣にグラーフ・ラムスドルフという自由貿易主義者がいて、「自分で努力しないで負けるのは、当たり前だ。我々のところへ、産業界が『保護してくれ』と言って来ても、そうした陳情は聞かない」というような態度だったわけです。彼はフリー・デモクランツ、つまりシュミットと連立していた自由民主党（ＦＤＰ）の党首だった。

渡邉　ＳＰＤじゃないんですね。

吉野　ＳＰＤじゃないんです。それに、ＳＰＤのシュミットも、根は自由貿易主義者ですから、別に異議を唱えなかったということでしょうね。

渡邉　「日本商品は、けしからん」とか、そういう感情はあまりなかったんですか。

吉野　そういう感じは、巷の一部にはありましたし、産業界なんかも直接、僕等に訴えて来たんです。「日本はアメリカが言って来ると、少し自制するけれども、我々のときには、なぜやってくれないのか」というような形でね。それで、それをラムスドルフに伝えると、「いや、お前、そんなことは一切聞いちゃいかん。それは、彼等が自分で努力すべきだ」と言われるんです（笑）。そのくらい余裕があったんですね。

渡邉　まだ余裕があったんですね。

吉野　ドイツ自身はね。もちろん、ドイツの一部の工作機械なんかは日本でも売れていました。それから、僕の行った頃になって初めて、ドイツと日本との貿易バランスで、日本が「出超」になって来たんです。それによって、日本は近代化して行ったわけですけれども、その頃までは、ずっと日本はドイツから工作機械を買い続けていたんです。ですから、いつも日本の「入超」だったんです。アメリカに対しては「出超」であり、その他の国に対しても大抵「出超」なんですが、ドイツに対しては不思議なことに「入超」だったんです。ところが、その頃から、ドイツも日本に対して「入超」になりつつあるというような時代でした。

渡邉　それで、七月にサミットがボンで開かれるわけですが、ドイツ駐在の大使としては、どういうふうに関係なさるんですか。

吉野　本来なら大使はホストとして、つまり日本からのお客さんをもてなし、彼等が会議で活躍できるようにする。殊に、当時からテロリストがドイツ国内にも現れていましたから、公邸の警戒その他を厳しくするということです。というのは、セキュリティを考慮して福田さんも公邸に泊まったし、牛場さんも泊まりました。牛場さんは対外経済担当大臣です。そういうこともあるし、もちろん、そこで晩餐会も開きますからね。

渡邉　それで、公邸に泊まったわけですか。

吉野　福田さんと牛場さんとはね。

渡邉　普通、サミットというのは、迎賓館などに泊まるのでは？

吉野　そうなんですけど、どういうわけか、福田さんが、「吉野君、泊めてくれよ」と言って来たわけです。確かに、公邸へ泊めれば気は

楽だし、それから田舎の街ですから、残念ながらボンには昔からスウィートの付いた大きなホテルなんかないわけですよね。しかし、公邸の収容能力はそんなに高くなくて、福田さんを入れれば、それ以上は泊められない。まあ、牛場さんは事情を知っているから、お泊めした。それから一週間近くも一緒に泊まっているという状況で、残念ながら、園田外務大臣はお泊めできなかったわけです。

渡邉　他に泊まっていただいた。

吉野　ところが、前回お話ししたように、それは園田さんにとっては、かえって都合が良かったのかも分かりません。あまり僕には、文句は言わなかったです（笑）。

渡邉　サミットというのは、今流に言うとシェルパ的なお仕事で、大使は、初めの頃からおやりになっていたわけですね。

吉野　そうそう。それで、なぜ僕がシェルパに近いような仕事を大使としてせざるを得なかったかと言いますと、アメリカのシェルパがヘンリー・オーエンという男でして、僕がシェルパをやっていた頃から知っている人なんです。彼は、非常に僕を頼りにしていて、「吉野君、知恵を付けてくれよ」というようなことで、いつも電話を掛けて来る。それで今度も、「吉野が日本の大使なら、彼に頼れる」とでも思ったのでしょう。というのは、例の「日本もドイツも、世界経済を引っ張るために機関車になれ」というわけで、その知恵を僕から借りようとでも思っていたのでしょう。実際には、彼は目から鼻に抜けるような金融関係の男で、後になってサルモン・ブラザーズの重役にもなったんですが、ことマクロ・エコノミーとなると、全然弱いわけです。

それで、「どうやって、日本とドイツに牽引者になることをアクセプトさせるか、ひとつ知恵を貸してくれよ」というような話で、僕にアプローチして来た。ですから、僕はシェルパではないんですが、ドイツで会議を開いている間は、彼といろいろコンタクトを取り、一回か二回、相談会議にも出たような気がします。内容は憶えていませんが、そういうようなことをやっていました。

渡邉　日本側のシェルパは当時、誰ですか。

吉野　その当時は、牛場さんが担当大臣ですから、本当はシェルパも要らないのかも分かりませんが、誰かいたと思いますね。

武田　宮崎弘道さん？

吉野　ああ、そうです。

渡邉　サミットは、その後も歴史がありますが、物の本によると、特にボン・サミットが先進国間の協調がうまくいった、ピークみたいな時期だったという言い方もあります。

吉野　それは、実質的に経済成長をアクセプトした。それで、先ほど言ったように、ドイツも全然デリバリーしなかったんではなくて、シュミットは文句を言いながらも、確か少しはやったんですよね。日本ほど成長率が伸びたかどうか知りませんがね。

渡邉　アメリカは、日本やドイツをプッシュしたい。そのときに、日本は比較的に言うことを聞く。それで、ドイツをどうやって動かすかという形のご相談なのか。それとも、そういう面もあるけれども、日本とドイツが手を組んで、アメリカに「ちょっと待ってくれよ」というほうなのか。どういう感じなんですか。

吉野　それは、おそらく前者だろうと思います。初めは日本も、日本だけが大盤振舞する――結局、一種の赤字予算みたいなものを組むことになるわけでしょうから、文句があったんです。しかし、結局それに応じていったのは、それが割合にやりやすかったということでしょ

うね。というのは、それだけ日本のほうがフレキシブルだったんです。ドイツのほうは、もう硬直化が始まっていましたからね。

それから、もう一つ、ラムスドルフという恐い人がいて、彼は「自由経済をやっているんだから、そんなに経済に干渉するのはおかしい」と。

渡邉　政府が口出す話じゃない、と。

吉野　そうです。ラムスドルフというのは、そういう意味では筋金入りです（笑）。

渡邉　アメリカも、なかなか手強い相手だ、と。直接にはお仕事の守備範囲じゃないと思いますが、ちょうどこの頃は日米の経済関係というか、いろんなことがあった時代です。牛場・ストラウス会談（七八年十二月）があって、そこで牛肉、オレンジ、果汁などの市場の自由化とか、いま言った「経済成長率を七％か、六・何％でやれ」とかという話で、「ワアワア」と言い合っていた。日本の黒字が百四十一億ドルで、史上最高だ、と。それこそ機関車論が出て来るという雰囲気で、日米でやり合っていた。それで、サミットあたりでは、もうちょっとヨーロッパも入れてやっていこうという時代だったと思いますが、そちらで日米間のやり取りをご覧になって、どんな感じですか。

吉野　憶えていますけれども、ストラウスが我が公邸へも来ました。ストラウスというのは、ＵＳＴＲ――ＳＴＲ（スペシャル・トレード・リプレゼンタティブ）と言いましたが、当時、初めて活発なＳＴＲになったわけです。その前のＳＴＲというのは、国務省が頑張ってましたから、ほとんど力がなかったのです。ストラウスに至って初めて、少しＳＴＲが活発になってきました。ＧＡＴＴの交渉なんかにも出て来てね。ちょうど、ＧＡＴＴの東京ラウンド（七九年四月、ジュネーブで仮調印）が、そのとき終結間近になったのですが、ストラウスがずっとやっていたわけです。彼は非常に気さくな人で、テキサス出身ですが、頭も良く、話も分かる――いわゆる話が分かりながらも、ごり押しするようなタイプじゃないんですよね。日本をパースウェイドすることは一所懸命やりますけれども、カンターみたいに嫌らしいところはないんです。というのは、ストラウスは彼自身も一人の政治家でして、将来は閣僚か大統領候補にもなろうと思ったことがある。少なくとも、民主党の選挙委員長だったわけです。

渡邉　カーター陣営ですね。

吉野　そうです。ですから、非常に自信もあったわけです。だけども、人柄が良くて、後になって弁護士をやっているとき、日本関係の事件なんかも扱ったりして、日本を重視していました。いわゆる日本人に好まれるようなタイプだったんです。その人が公邸に来て、牛場さんと話していたことを憶えています。けれども、僕はその頃、直接ＧＡＴＴの問題をやっていなかったものですから、お茶でも出して、話をさせていたということですね。しかし、そこで牛場さんと、問題をある程度クリアにしていたという印象を持っています。

日独親善の旅

渡邉　ヨーロッパの話ではないんですが、一九七八年と言うと、福田内閣では日中平和友好条約というのが大きな仕事で、これは夏だったと思います（八月、調印）。その秋の十一月頃になると、自民党が大

騒ぎで、総裁選で福田から大平へという、どんでん返しがあった。ちようどこの頃、米中関係も外交関係の正常化に向かった。その意味で、かなり大きく日本の外交・内政も変わりますが、こういうアジアの出来事、あるいはこの辺で起こっていることをヨーロッパからご覧になって、何か感想はございましたか。

吉野　それは残念ながら、僕自身が不勉強であったのか、あるいは、それほど世界情勢に外交官としての十分の関心を持っていなかったのか、ほとんど憶えていないですね。そういうことが起きたということは知っていますけどね。当たり前の話ですけど、ドイツの大使というのは、やることがたくさんありました。日独関係というのも、その時代、相当アテンションを要したものですから、日中関係がどういうように発展するかということには興味がなかった。しかし、これは僕の狭量なところだと思います。今だったら、そういう偏狭な態度は取らないと思いますね。

僕は、もっぱら、その頃からドイツ国内をドイツ語で演説しながら歩いたわけです。一つは、日独親善ということです。というのは、僕は戦前の日独関係を知っていますから、だんだんとドイツが日本から離れていくことを感じていたわけです。それは、どうにもならない時代ですから、当然の話ですが――今の時代が、まさにその通りなんですが――当時は、まだ日仏や日英よりも、日独のほうが親しいというような感じを、僕は持っていたわけです。それは戦前の印象が、そのまま残っていたからですね。そこで、演説して回ったということです。

もう一つは、いま言ったように、経済が沈滞していたものですから、ドイツの中にも、いわゆる保護主義が出て来た。これはラムスドルフが抑えてはくれているけれども、僕もその保護主義は駄目だと思ったわけです。むしろドイツは、もっと昔の僕等の持っているイメージのような強いドイツになれ、と。そのためには先進産業を取り入れて、近代化しろというようなことを、非常に口幅ったいですが、説いて歩いたわけですよね。それが幸い、後になって、僕の演説集になった。今、どこにあるか知りませんが、外務省でつくってくれたんです。しかし、そんなものをつくるのが目的じゃなくて、それは偶然に僕の部下がやってくれたわけで、当時はもっぱら演説して歩いて、同時にドイツの国内も見て回ったというわけです。そういうようなことをやっていましたから、世界的視野は欠けていただろうと思います。

渡邉　もちろん、いろんな場合があるんでしょうが、そのときの聴衆というのは、どういう方が対象ですか。

吉野　聴衆は、その都市にある日独協会とか商工会議所とか、大使の講演を歓迎するような組織があるわけです。それに連絡して、講演の会場を決めてもらったり、日にちを決めてもらったりして、そこへ僕が出掛けて行く。ドイツは狭い国ですから、殊にアウトバーンが発達していますから、夜、演説が行われる場合には、朝発てば十分間に合うし、遠い所でも一晩前に行って、宿泊すれば良かった。

渡邉　大体、一泊で済むということですね。

吉野　そうです。そんなことを、ここで言ってはいかんけれども、対米啓発のためには、外務省は幾らでも旅費を出してくれたわけです。アメリカの政策に影響を与えるために、大事ですからね。だけど、ドイツの場合には、旅費があまりないわけです。当時の外務省の予算では、そうだったんです。他の国では、それ幸いに、あまりしなくてもいいんだけど……。僕の場合は、いろいろ会計課も頑張ってくれて、ともかく、そういう旅費がある程度出る形にしてくれたものだから、

回ることができたということです。しかし、問題は僕自身が行って、「ひとつ説得して……」という気持ちがなかったら駄目なんです。僕の場合、その気持ちの大部分は、僕自身が戦争中の、日独同盟の頃の日独の関係を知っていたからです。

渡邉　やはり、その辺が出発点ですからね（笑）。

吉野　そうです。だから、「一体、ドイツはどうしたんだ。日本は、これだけ強くなったぞ」という気持ちで訴えたわけです。

渡邉　今、日独親善とか日独交流というお話がありましたが、この頃でしたか、ケルンに日本文化会館、つまり総領事館のカウンターパートみたいなものができますね。これは、まだその頃はできていなかったんですか。

吉野　いや、できていました。それは、僕の在任中にできたのか、その前にできたのか……。ちょうど、それがスタートして、初代の館長には、あまりパッとしない人が来ていました。それは、なぜできたかというと、これもまた不思議なんです。吉田（茂）さんが「ローマに、まずつくれ」と言って、ローマにつくったのが最初なんです。

渡邉　吉田茂が？　昔、大使をやったからかな。

吉野　そうかも知れませんが、ともかくローマに……。イタリアなんていうのは、最も保護主義の国であって、取り付く島もなかったんですが、まずローマにつくりました。それが故に、他の国にも益々つくるということになるのかも分かりませんね。それから、その次にドイツだと思います。

渡邉　それで、後でパリにできた。

吉野　そう。ところが、あの制度の欠点は、結局オペレーションの金をくれないわけです。家だけつくってね。

渡邉　箱だけつくって……。

吉野　箱だけつくって、後は「所長の月給は出すよ」と。だけど、所長は自分で演説したり、会をやったりして初めて任務を果たすわけでしょう。その費用が、あまり出ないんですよね。それから、箱をつくっても、メンテナンスの費用というのは、また別です。こういうところは、本当に日本は……。それなら、そんなものはつくらんほうがいいんです。それは、大蔵省が当時からそういうことで……。だから、結局無理して予算を取ろうとすると、そういうことになってしまうわけです。ですから、ほとんどファンクションせずに終わるのです。しかし、それを外務省のほうも心得てきて、フランスの場合は、ちゃんと常任スタッフを置いて、広報活動もできるようになった。外務省のほうも広報資料をどんどん送るとか、講師を送るとか、芸人を送るとか、そういうようなことをするように、だんだんとなりつつあります。

当時は、つくったら悲劇ですね。あんなものをつくったって、箱があるだけです。だけど、当時、アデナウアーの後のケルン市長が割合と親日的な人で、ケルン自身も発展しなきゃいかんということもあったんでしょうが、土地を提供し、その傍にケルン博物館か何かもいろいろできた。「土地が空いたから、ここへつくったらいい」と、場所その他はいいところを確保してくれたんですね。それから、前川国男さんだったかな、日本から建築家が来て設計してくれたわけです。これは、ほとんど奉仕的にやってくれたんでしょう。それで、できたんですが、できた後、例えばせっかく日本からいろいろと文化関係の本なんかを送って来ても、これを貸し出すための組織ができていないわけです。そうすると、その場で読んで返さなければいかん。まあ、あれやこれやで、大変でした。つまり、オペレーションのほうが大事だ

という認識がないわけですね。「ない」と言うか、大蔵省は、「金は出せないから、お前たちは勝手に知恵を出せ」というようなことです。

渡邉　その施設は、大使の監督下にはないんですか。

吉野　いや、あります。それで、館長は日本大使館の公使を兼任しています。

渡邉　公使の資格で来るわけですか。

吉野　ですから、そういうことによって、おそらく月給を出したんでしょうね。来た人は、非常に気の毒でした。しかし、後になって、小塩節さんのように、放っておいても、自分でどんどんやれるような人が来た。それは、もう自分でやっていくわけです。そういう積極的な人は別として、並の人では活動できなかったですね。

渡邉　これはドイツ側の施設かも知れませんが、元のベルリンの日本大使館のあったところに、ドイツ・日本センターとかいうのがございますよね。あれは、その頃からもうありましたか。

吉野　それは、その頃はなかったです。

渡邉　もっと後にできたわけですか。

吉野　もっと後でね。今度はベルリン市のほうが、日本のドイツ大使館が廃墟になっていて、「目障りだ。だから、きれいにしてくれ」とか、「あれはナチ時代の、いま三つぐらい残っている建築学的に珍しい建物の一つだから、保存・復旧する必要があるんじゃないか」とか、いろんなことを言って、積極的に働きかけてくれました。そこで、あそこに文化センターみたいなものができたんです。だから、ドイツにはケルンにあるものと偶然二つ……。まあ、やる仕事は違いますけどね。

渡邉　ベルリンのほうは、ドイツ側の……。

吉野　ドイツ側の積極的なイニシアティブですね。ケルンのほうも、ケルン市のイニシアティブだったでしょうけどね。

渡邉　いまおっしゃったような活動のお金というのは、日本が出さないわけですね。

吉野　あまり出しません。それから、復旧の仕事もね。しかし、市のほうが多少出してくれたりとか、税金がかかるかどうか知りませんが、いろいろ免除したり、便宜を図ってくれるんです。それは、ドイツみたいに方々に戦争の廃墟が残っていた国としては、当然だろうと思います。ですから、その意味では、客観的に見れば、ドイツには日本の公館が多過ぎました。あんな小さい国でも、僕の時代に、もう既にケルンのセンターがあったし、フランクフルト、ミュンヘン、ハンブルク、ベルリンに領事館ないし総領事館があったわけでしょう。五つあるわけです。そんなに小さな国で、しかも西側だけですよ。「おかしいじゃないか」ということではあったんだけれども、それはまた、どうして大蔵省が、そういうことを許してくれたか……（笑）。

渡邉　そっちの予算を削って、こっちに出せばいいんじゃないか、と（笑）。

吉野　しかし、熱心さです。外務省も努力したんでしょうね。それで、英国はどうかと言うと、当時はロンドンの大使館の中に総領事館があるだけで、他にはなかったですね。そういうように、ああいう予算の配分というのは、不思議ですね。

渡邉　しかし、まさかドイツ大使としては、「それを潰せ」とは言えないでしょうね（笑）。

吉野　言わないし、むしろ大いにありがたかった。例えば、ハンブルクあたりで講演する場合には、そこで……。

渡邉　また、政治経済の話に戻りますが、非常に一般的な話で、かつ時代もちょっと幅がありますが、七九年五月にイギリスでサッチャー政権が誕生する。もうちょっとすると、アメリカでレーガン（八一年一月、大統領就任）が出て来て、いわゆる新保守主義に動きますね。私はドイツとかフランス、イタリアで、どういうことが起きたか分からないのですが、そういう大陸の動きとは別に、いま言ったサッチャーなりレーガンなり、あるいは日本では中曽根さんが出て来て（八二年十一月）、経済政策についての潮流が変わってくる時代だと思います。その辺は、どういうふうにご覧になっていましたか。

吉野　ドイツの場合は――フランスの場合は尚更そうですが――一つはECないしEECがあって、要するに今のEUの前の、関税および為替の協定、即ちコモン・マーケットがあったわけでしょう。それを、だんだん発展させたり、深めていくのがヨーロッパの役目であるということで、その措置に集中していた。ですから、サッチャーが新しい経済政策を打ち出したとか、レーガンがサプライサイドの経済政策を推進したとかというのは、あまり響かなかったですね。だから、またそこがヨーロッパの唯我独尊というのか知りませんが、独り善がりがあったような気がします。その中に、僕も埋没していたわけです。ですから、日本へ帰って来て初めて、サッチャーのお蔭で英国がいかに復興し、近代化したかということが分かったわけです。それまでは、ほとんど僕は、その意味合いが分からなかったですね。サッチャーが英国の改革を実現しつつあったことは知っていましたけどね。

渡邉　そうすると、ボンにいらっしゃる間は、ずっとシュミットの時代ですか。

吉野　そう。それで、僕は八二年の三月頃に日本に帰ったと思いますが、僕が帰ったあと間もなく、半月も経たないうちにシュミットが辞めたんです（八二年十月）。ですから、初めから終わりまで、シュミットの時代ですね。

渡邉　そうすると、これはSPDですね。そしてフランスが、もうちょっと経ってからミッテランで、社会党が出て来る。やはりヨーロッパは「社民」（社会民主主義）が強いんですかね。

吉野　「社民」が強かったんですよね。「社民」の雰囲気が、ずっとヨーロッパを支配していたわけです。だから、レーガンとかサッチャーとかは……。

渡邉　だから、それはちょっと、その辺が違うんですよね。

吉野　保守陣営というのはなかったわけですよね。それで満足していたわけです、労働組合と、うまくゲット・オンして行ってね。それから、もう一つは七九年十二月に、ご存知の通り、アフガン侵攻が起きたわけでしょう。

渡邉　そうですね。七九年の末ですね。

吉野　それで、それ以来、また緊張が高まって……。

渡邉　そうですね。いわゆる「新冷戦」なんて言う時代ですね。

吉野　ですから、こういうセキュリティ問題も、ドイツにとっては一番大きな問題であるわけです。地続きですから、これは無理ないです。

渡邉　だから、社会民主主義と言っても、日本の感覚と違って、経済政策では、もちろん社会主義的なんだけれども、安全保障とかになると、全く日本の社会党の感覚とは違いますからね（笑）。

吉野　違います。それから、現実の問題としても、ソ連がますます大きな脅威になっていくというパーセプションがある。だから、それだけが非常に大きな関心事だったですね。

当時、東西ドイツの統合というのは、彼等は口では唱えていたけれど、いつそうなるか分からんし、そんなものは夢のまた夢だと思っていたわけです。それで、僕等が外務省の訓令で、「ドイツ政府から、聞け」と言われたのは、対ソ政策をどうするかということです。ドイツ外務省で、僕等の相手をする次官も主任局長も、みんなソ連通ないしは安全保障関係の連中ですからね。そういう話には、僕も調子を合わせて聞くよりほか手はなかったんですが、ドイツの外務省というのは、その話に尽きたわけです。

渡邉　ちょうど、いまおっしゃったように、七九年の末にアフガン侵攻があって、八〇年に入ると対ソ制裁（一月）とか、モスクワ・オリンピックのボイコット（七月）とかという話が出て来るわけですね。それは、いまおっしゃったように、かなりドイツでも……。

吉野　ですから、そういう緊張が、ドイツ国民の間にも一般的にあったわけです。今の時代のように、Eメールだ、何だかんだと言って、大いに商業ないしはサービス業を拡大しようなんてことは、あまりドイツ人の心の中にはなかったですね。それから、サッチャーのほうはおそらく、一つはコモン・マーケットが少しずつ進んで行って、うっかりすると英国が締め出される、と。それに対しては、アメリカを背景にして、もっと近代化をさせなければいかんということもあったんでしょう。それは後の話ですけど、有名なサッチャーの演説がありますよね。ベルギーのブルージュで、彼女は演説した。

あれは、有名な演説なんですが……。結局、その演説でサッチャーと大陸との間の喧嘩が始まったわけです。僕は、むしろサッチャーの見解には、ある程度同情していました。要するに、サッチャーはコモン・マーケットに入れなかった腹いせに、「コモン・マーケットが内向きになって、固まって行くのはおかしい」というようなことを言ったわけですよね。あれは有名な演説です。そういうようなこともあったくらいに、コモン・マーケットは、もっぱらミッテランとシュミットがゲット・オンして、うまくいっていたわけです。当時の風潮として、ドイツ人とフランス人との結婚が相当増えていました。フランスとドイツというのは、昔は犬猿の仲であったのがね。

渡邉　元々はね。

吉野　ドイツ人とフランス人とが結婚して、どっちかに住む。僕の運転手はフランス人と結婚していたし、僕の親しい友人の息子もフランス人と結婚しました。そういうような例が、近くで起きるくらいに、だんだんと時代が発展していったわけですね。

渡邉　独仏関係が、逆に接近するという時代ですね。ちょっと話が逸れますが、七九年六月が東京サミットで大平首相ですね。ここで、例の石油とかエネルギーの問題が大変な問題になるわけですが、その辺はどうですか。

吉野　僕は、OECDの大使のときにエネルギー・アグリーメントをつくりましたから、エネルギー問題には関心を持っていました。また、サミットでも、例の原子力平和利用というものについては、相当日本の立場を防衛したものですから、エネルギーには関心がありました。しかし、東京サミットには、それほど関心を持ちませんでした。

渡邉　そうすると、イランで大使館員人質事件（七九年十一月）が起きて、アメリカとイランが断交（八〇年四月）したり、モスクワ・オリンピックのボイコットがあり……というように、八〇年代に入ると、中東や石油絡みでいろいろな事件が起こるんですが、この辺は、ヨーロッパではどういう感じですか。

吉野　ドイツには、割合イランに対してはシンパがいたわけですよ。一つは利権もあるし、かつてはドイツの中近東政策で、そこら辺へも進出していた。イラン国王の妃殿下はドイツ系の人じゃなかったですかね。

渡邉　パーレビの奥さんですか。

吉野　ああいう人質事件については、ドイツ人の気持ちとしては心外であったでしょうね。心外であったけれども、アメリカがやっていることだし、それから彼等も相当酷いことをやったし、適当に付いて行かないといかんということですが、日本以上にドイツはイラン寄りだったと思います。今でもドイツは、イラン・イラクに対してはいろいろと……。フランスも、そうですけども、ちょっとアメリカとは違う気持ちを持っていますよね。それは、みんな彼等の過去における中近東政策の……。

渡邉　名残があるわけですね。

吉野　彼等のバグダッドとかテヘランへのイメージは、日本人が持つ印象とは違いますね。日本人が北京とか南京に対して持っているような気持ちですよね（笑）。

渡邉　我々は中東というと石油だけで、申し訳ないけど、「アラブは油だ」という感じがあります（笑）。

吉野　彼等は、やはりオリエンタル・エキスプレスの歴史を憶えていますから……。

渡邉　一種のロマンティシズムみたいなのが、中東に対してはあるんでしょうね。

吉野　そう、あります。それから、フランスあたりでは、フランスの国籍を持って働いているイラク人も多いし、両親か片親が中近東出身の人もたくさんいます。それは、彼等の政策の結果でしょうがね。

ドイツの核政策

渡邉　話は少し変わりますが、年表によると、八一年の十月にボンで大規模な反核デモがあって、ちょうどこれはＩＮＦの交渉が始まる時期ですね。核配備の問題で、いろいろヨーロッパが揺れるという時期で、先ほどの安全保障の問題と関わってきますが、この辺は何かご感触はございますか。

吉野　ただ一つ、ドイツの核政策で我々が非常に惜しむことは、ドイツのほうが早くに新しい原子炉の構築をやめてしまったわけです。

渡邉　電力のほうですか。

吉野　電力のほうです。ドイツは原子力については、原子力船をつくったというような実績もあるし、日本がその後、真似してつくった『むつ』が放射線漏れ（七四年九月）を起こして動かなくなったのに、ドイツの原子力船は成功して、いろいろ役立っていたわけです。ブレーメンかどこかに停泊しておりましたね。それほど原子炉の使い方についても経験があるので、日本からドイツの原子力船を見に来た人がたくさんいたんです。それにも拘わらず、原子炉を早くやめてしまったというのは、環境論者の声が大きかったのか分かりませんが、僕はある意味では不思議に思っているわけです。

渡邉　フランスとは対照的ですね。フランスは原子力に力を入れていますね。

吉野　ええ。ドイツはつくりかけの核発電所をやめてしまいました。

渡邉　石油もないでしょうし、ドイツはどうするんですか。

吉野　石炭があります。石炭があるんだけど、この石炭も公害の点から言えば、そんなにいいわけでもない。しかし、石炭は日本のコメの問題と同じで、「コールペニー」と言って、石炭を掘り出すについて補助金を与えているんです。しかも、石炭というのは泥炭みたいなもので、煙がたくさん出て、あまり環境には良くないんですけど、石炭産業および労働組合が強いんですね。それともう一つは、いま言った原子炉に対する左翼というのか、「グリーン」の運動が激しかったわけです。

　これは不思議な話なんですが、西ドイツもそうですけれども、殊にポーランドから東ドイツにかけては大きな岩塩層があります。岩塩が出るというのは、下が塩の層なんですよね。それを掘って、洞窟をつくって、廃棄物をそこへ入れておけば、何億年経っても問題ないはずなんです。だから、日本なんかと全然違うわけです。日本は地震もあるし、雨も降るし、岩塩なんてものもあまりない。例えば、ザルツブルクはその名の通り、岩塩の上に立っている街です。これはオーストリアですけど、あそこら辺は全部、下は岩塩なんです。だから、それだけの地盤があるなら、核廃棄物の問題は、当分の間、心配いらないじゃないか。しかも岩塩ですから、水が入ってくることはなくて、全く後顧の憂いがないはずなんです。それにも拘わらず、「どうして、そんなに騒ぐんだ」ということを、僕はドイツ人によく言っていたんです。返答はなかったですけどね。どういうわけかドイツは一般大衆に耳を貸して、いち早く原子炉をやめました。

　ドイツはちょうどその頃、ブラジルだったと思いますが、大きなプロジェクトとして、二つぐらい原子炉をつくっていたんです。ところが、アメリカがそれを「やめろ！」と言って来たわけです。それで、そのプレッシャーに折れたんでしょうね。日本人だったら、いろいろなことを言って抵抗したと思いますが、ドイツはやはりＮＡＴＯの関係もあって、アメリカ軍が駐留し、かつアメリカが守ってくれることが一番大切だという認識で、ブラジルでつくりかけていた原子炉をやめた。

　それから、名前はみんな忘れましたが、国内でつくりかけていたものもやめたわけです。ドイツは別に、その間に原子炉の事故みたいなものはなかったですがね。皆さんもご存知のように、ドイツ国内にはライン川に沿って、空に向かってプウプウと水蒸気を噴き上げている原子炉が二ヵ所ばかりあります。その横を高速のアウトバーンが走っていて、一つの景観を成していたわけです。そのくらい原子炉に対しては最初は熱心であって、かつ輸出産業としても育てていくつもりでいたのが、突然やめてしまったのです。おそらくアメリカのプレッシャーで、「ラテン・アメリカなんかに持って行っちゃ困る」と言われたんでしょうね。

渡邉　それは、時期的には吉野大使の頃ですか。

吉野　そうです。

渡邉　そうすると、カーター政権の政策があって……ということですね。

吉野　そう。カーター政権の政策ですよね。そういうことで、あらゆる条件が日本よりもドイツのほうがずっといいんですが、それをやめた。それに対して、フランスとか英国は一回使用した燃料を、もう数回燃やすというほうに力を入れていたわけです。これも一つの方法だ

と思います。

渡邉　リサイクルですね。

吉野　そう。ドイツはむしろ原子炉をそのまま使って、使用済み燃料は岩塩の洞窟に入れておけばいいじゃないかと思っていたんでしょうね。しかし、それにしても原子力船までつくって、それが世界中を航海してね。何と言う名前の船だったですかね。

渡邉　それは原子力船ですか。

吉野　最初の原子力船ですよ。その頃は、ロシアもアメリカも原子力潜水艦をつくっていたんでしょうが、ドイツはデモンストレーションの船をつくっていたわけです（鉱石運搬船『オットー・ハーン号』）。

渡邉　確かに、ドイツの反核運動というのは説明を要する。

吉野　説明を要しますね。「岩塩の中へ入れるんだ」というような説明を、反核派の連中にはしたことはないですね。

渡邉　先ほど申し上げた一九八一年の十月にボンで、「反核三十万人集会」という大集会が開かれた。その頃、西ヨーロッパ各地でこういう大集会があって、ちょうど秋の国連の軍縮集会に合わせて、いろんな運動が起こった。その背景には、先ほど言ったアメリカとソ連との間で、欧州の中距離核戦力――ＩＮＦ制限交渉が始まるというような動きがある時期なんです。

吉野　そう。その頃、日本の政治家が中距離核弾頭との関連でしょうか、「ＩＮＦという言葉を知っているか」と言われて、「知らない」と言ったという有名な話がある。ソ連がそれを配備するということで、その頃、ドイツ人は非常に関心があったわけですよ。

渡邉　そうですね。一番関心があった。

吉野　一番関心があって、シュミット首相は苦慮した末に、ソ連側の配備をやめさせるために、自国内に、これに対抗するＩＮＦを置くことに「うん」と言ったわけです。つまり、「彼にとっては、国内政治的に不利だけれども、世界のためにはいい」という意味で、「よく彼は決断したな」と、当時言われていました。そして、やがてソ連も配備を撤去するということになり、シュミットの決断は成功したわけです。その辺の詳しい経緯は忘れました。その関係で、シュミットが日本の政治家に、「こういう問題がある」と言ったら、日本の政治家は知らなかったというような話がありました。誰だったか忘れましたが……。

渡邉　鈴木善幸氏あたりの時代ですかね。中曽根さんだと違いますからね。

吉野　どうも忘れましたね。しかし、それは大きな理論的なイシューだったんです。

渡邉　七七年末から八二年五月――四年ちょっとですか。任期としては普通ですか？

吉野　普通の任期です。

渡邉　その他一般的に、ドイツ大使の時代の印象を総括すると、どういうことになりますか。

吉野　総括すると、先ほど申しましたように、大使というのはもっと世界に目を向けて、他の国々の外交問題にも関心を持たなければいけない。ところが、現地の大使というのは、ともすれば、あまりに現地の政府とのやり取りのために忙殺されてしまって、大きな視野を忘却しがちだと思います。僕の経験ではね。それが残念なことです。

渡邉　大使館の態勢をお聞きするのを忘れていましたが、大使をサポートするスタッフというのは、どういう方々だったんですか。

吉野　そんなことを言ってはいかんのだけれども、最初は参事官としては黒川剛君という、非常にドイツ語の達者な、また頭脳明晰な人がいたわけです。結局、その人は後にオーストリア大使になったんですけど、「本来ならば、ドイツ大使になればいい」と、密かに思っていた人です。彼は在京ドイツ大使のドィトマンの通訳もしていた人で、ドイツに留学もしたし、もともとドイツ語学科の人です。それで、その人が参事官として助けてくれたのです。その点では僕はありがたかったんですが、彼の後任で来た人は英語しか話せなくて、ドイツについての関心もあまり強くなかった。ただ、その人も後になってポーランドの大使を務めたりして、だんだんヨーロッパに近くなっていったけれども、ドイツの参事官としては即戦力にはならなかった。もちろん、館内を融和したり、いろんな点では助けてくれてありがたかったが……。

渡邉　公使は、どういう方ですか。

吉野　参事官と公使と一緒だったのかな。要するに、それが次席です。

渡邉　その方が次席ですか。

吉野　だから、ドイツは、あのときには公使と言ったかな。最初は参事官と言って、その後、公使になったのかな。今は公使です。

渡邉　最近だと、外務省だけではなくて、通産とか大蔵とかいろんなところから来て、複数の公使がいるというのが普通ですね。

吉野　それは、アメリカや英国の場合です。

渡邉　ドイツの場合は、そんなことはないんですか。

吉野　ドイツの場合には、最初は参事官だけだったかな。

渡邉　割と、こじんまりとした感じですね。

吉野　そうそう、割合にこじんまりとした大使館なんです。その代わり、方々に総領事館と領事館を持っていました。でも、大使館だけで四十五人ぐらいいたのかな。要するに、公使であれ参事官であれ、ドイツないしはオーストリアでドイツ語を勉強した人たちで、普通は固めるわけです。しかし、僕のときには、それ以降もそうでしょうけれども、そういう人が黒川君の後は来なかったわけです。

渡邉　全体としては、英語でジャーマン・ハンズと言うんですか。戦後は、そういうのが少なくなってきた。

吉野　それもあるでしょうね。それから、そのうちに、今はもっと酷くなったんでしょうが、中近東問題や石油問題、アラブ問題が大きくなってきてしまった。そのために、ドイツへ務めていれば、ドイツの大使にはなれなくても、ドイツ語圏で生き延びられると思っていたのが、今は「お前、サウジへ行け」とか「カタールへ行け」とか……。

渡邉　アフリカにも飛ばされるんじゃないですか。

吉野　そういうような時代に、だんだんなってきたわけです。それは時代が進んで、当たり前の話です。それから、ヨーロッパもまた、それ自体がＥＵや何だかんだと違う形になってきましたからね。時代が変わってきたわけですが、そういう変遷の中にあったわけです。

日本外交の行方

渡邉　取り敢えず一九八二年にドイツから帰国されて、しばらくは嘱託と言うか、何と言うんですか。

吉野　「大使」という特別な職をもらって、「ＧＡＴＴをやれ」と言

われて、まだウルグアイ・ラウンドは始まっていなかったのかな（八六年九月、開始）。ともかく、ＵＳＴＲのボールドリッジなんかとも会ったり、ジュネーブで会議をしたことは覚えてます。つまり、「ＧＡＴＴ担当大使」ということに、形式的になっていたわけですね。その頃、外務省はいろいろ交渉事項も多かったものですから、外務審議官の他にも、そういうことをやる人が必要なわけです。

渡邉　どこに机を持っていらっしゃったんですか。

吉野　「ＧＡＴＴ大使室」というものがありまして、そこにいたわけです。一般大使室の他に、一つ部屋をもらったような気がします。部屋と、秘書官もね。

渡邉　それで、半年ぐらい、その仕事をやった。

吉野　その間に、ＵＮＣＴＡＤの交渉とか、いろいろあったわけです。そういう雑務を引き受けていたのです。

渡邉　一般的な話なんですけど、キャリアを伺っていると、経済問題を初めからずっと手掛けて来られた。このインタビューでも何回か出て来た「経済外交」という言葉ですが、現場で実際に携わっていらっしゃる方々も、そういう言葉でお考えになっていたんでしょうか。

吉野　「経済外交」と、自分から言ったことはないんです。我々の最大関心事は日本の経済復興、経済発展、つまり日本の行く道は、あるいは我々の行く道は、それしかないと考えていたわけです。それで、僕も通産省へ志願して行ったり、その後も経済局へ戻ったりして、一所懸命「経済外交」の一端を担おうとしたわけです。それは、いま考えてみますと、それなりの理由はあるだろうと思います。

どういうことかと申しますと、僕等はどうしても戦前の育ちですから、戦争中の日独枢軸外交の華やかなりし頃――つまり日本が、まだ三大強国の一つだった頃の記憶が残っているのです。それで、日本をそういうような大国に、また戻していかなければならないという考えを、無意識のうちに持っていたわけです。それには当分の間、経済で立つほか手はない、これが唯一の道だと言って、今までやってきたわけです。

ところが、いま振り返ってみますと、グローバル・エコノミーというものになって、もう国境や国籍に関係なく、優秀な会社は大きくなるし、駄目な会社は小さくなる。それが当たり前です。ナショナリティを背景にしての経済はないんだ、と。今は、必ずしもそこまでは行ってはいないんですけど、それが未来の姿だ、と。となると、問題は何かと言うと――将来はアメリカのようになるかも分かりませんが――ヨーロッパのように、経済ではなくて、国ないしは国の集合で外交政策を強力に推し進める。そういう時代になったわけです。

そうすると、日本みたいな国は無力です。残念ながら、今までのような形でこれからもやっていくと、日本の外交というのはもっぱら受身にしかならないんですよね。経済で発展し、かつ強ければ、アメリカに対しても、ある程度重みがあるし、ヨーロッパにも重みがあると思っていたところが――実際、そういう国にしようと我々は考えていたんですが――むしろ時代は、もっと先へ行ってしまった。経済というのはグローバルだ、と。インターネットで、あらゆるコミュニケーションができるようになった、と。そうすると、一国の外交を支配しているものは何かと言うと、背後に隠然としてあるもので、「いざとなれば、お前をやっつけるよ」という、武力ないしは武力に似たようなものでしかなくなったんですね。例えば、今度の人質の問題――これは、どこでしたか？

股野　キルギスの事件（九九年八月）ですか。

吉野　ああいう人質だって、日本とスイスとどこが違うか。あそこでスイス人が何かやって引っ張られていても、やはり何ら力がないんです。日本も相手のリーズナブルな欲求――人道主義とかお金とか、そういうようなものにアピールするしかない。ところが、おそらくアメリカだったら、成功するかしないかは別として、いろいろ武力で脅しますよね。「従わないと、どうする」とか、脅かしもできるわけです。ところが、日本はその脅かしもできなくなった。そうすると、外交というのは、一体何だ？　今までなら、東西が対立したりしているときには、どっちに付くかという形で外交ができた。しかし、そういう対立もなくなった。

そうすると、武力ないしは武力と似たようなものを背景にしない外交というのは――少なくとも、今の日本のような経済力においては――あまりエフェクティブでなくなったんじゃないか。アメリカに対して、「お前の大豆を買わんよ」とか、そういう形の交渉はまだできるかも分かりませんが、これもだんだんできなくなってくるでしょうね。だって、国民は大豆をアメリカから輸入しなくなったら、大変ですからね。ですから、それもできない。要するに、これからの外交においては、残念ながら、今まで日本が持っていた利点というものが、だんだんなくなってきた。

あまつさえ金融問題や情報通信の後れで、日本は当面弱くなってきている。「弱くなった」と言ったって、潜在的にえらく落ちたかと言うと、そうではないと思います。要するに、ヨーロッパのように団結している地域や、アメリカのように一国だけでも強い国と比べた場合には、日本外交の発揮する力というのが非常に少ない。まだ今でも、ある程度の経済力はあるとは思いますが、例えば円の乱高下を防ぐために米国と交渉する場合に、アメリカに対して――誰かが言っているように――米国債をドッと安売りするようなことは、やろうと思えばできないことはないけれども、これは自分の足に拳銃を撃つようなものです。グローバルな世の中になると、日本にとっては、そういう手段がだんだんなくなってきているわけです。そういう時代になってきたんだから、外交というものも、自分のリミットを知って、「その範囲でしか動けない」ということを、国民にも納得してもらわなければならない。そんな気がしています。

渡邉　それで、今のお話にも出て来ましたが、特にヨーロッパはヨーロッパの統合という形で、大使がいらっしゃる頃から動きがあったと思います。ちょうどその頃、つまり八〇年から八一年にかけて、大平さんから鈴木さんの時代にかけて、日本は「アジア太平洋」ということを言い出した。まだ、それほど大きなインパクトはないと思いますが、その辺はどうですか。ヨーロッパから見ていて、「何か始まっているな」という感じですか。それとも、「大したことはない」という感じだったんですか。

吉野　僕等も、そういうことを大いに吹聴して回ったんです。日本はアジアがあって、アジアとの貿易がだんだん大きくなるし、投資もだんだん大きくなる。だから、将来は、日本とアジアというものは一つの勢力になるというようなことは言いました。しかし、それほど具体的には……。ＡＳＥＡＮが、まだ海のものとも山のものとも分からんような時代だったですからね。それから、我々のようなヨーロッパないしはアメリカ外交で育った連中は、開発途上国に対して、ある種の先入観がありましたから、それらの国々を利用するとか、日本の将来

を賭けるという考えはなかった。

しかも、残念ながら、日本の外交の出発点は韓国とか台湾という、日本のかつての植民地でした。これらの国と、うまくゲット・オンすれば、取り敢えずはコモン・マーケットに似たようなものをつくれる地理的条件もあったわけです。しかし、北朝鮮がああいう形になったし、韓国との関係も、ようやく金大中政権ができて、少しずつ良くなってきたものの……。台湾との関係は、初めから相当良かったんですが、中国が後ろにいるから手が出ないという形で、これもチャンスを失った。一方においては、「対米外交だ」と言って、一所懸命やったんですが、時代の変遷とともに日本は外交の武器を失ってしまったわけです。まあ、それで、ちょうどいいのかも知れませんがね。

渡邉　……ということで、形の上では外務省のお仕事を終えて、その後、経団連の仕事とか、言わば民間の立場から、依然として経済外交に携わっていらっしゃるわけですね。結構長い時期なので、一言で言うには難しいでしょうが、ご退官後、具体的にはどういう感じを持たれましたか。

吉野　幸いなことに、僕の興味は依然として諸外国に起きている事象であり、そのために毎日、フィナンシャル・タイムズやヘラルド・トリビューン等の、いろいろな新聞・雑誌、資料を読むことが主たる仕事であるわけです。幸いに、外交に興味があるお蔭で、それを続けることができますが、その間に世の中が本当にどんどん変わっていく。例えば、日本の金融破綻や、その前のバブルを中心として起きたいろいろの事象、そして今の不景気と自信喪失、それから莫大な国の借金と、その返済問題等々……。日本の現状を見ますと、かつての僕が、若き外交官として夢を抱いていた「上り坂」の日本とは全然違いますね。

しかし、そうかと言って、諦めているわけじゃないんだけど、日本の当面の仕事というのは、先ほど言ったように、非常にリミッテッドです。再び枢軸外交時代のような強国になるなんて、もちろん初めから夢は見ていませんでしたが、そういうような世界というのは、最早来ないんだということを、つくづくと認識させられるわけです。殊に、最近の通信情報産業を通じての世界の変革というのは、新しい時代をつくるものではないでしょうか。現実は、そんなに変わってはいないんでしょうが……。僕は年を取って、その中に入り込んで行こうという気はないのですがね（笑）。

渡邉　九〇年にバブルが弾ける。九〇年代に入ると、またガラッと変わりますね。しかし、八二年十二月にご退官になってから、暫くはまだ上り坂で、「プラザ合意」が八五年九月で、「世界最強の日本」という時代が八〇年代一杯続くんですが、その辺はどうですか。特に、「プラザ合意」なんていうのは、どういうふうに受け止められましたか。

吉野　「プラザ合意」と同時に、日本はアメリカの保護主義ないしは日本攻撃に晒されましたね。我々から見ると、ＧＡＴＴ違反のことでも何でも、強引に押し付けて来るということで、それに対する反感と敵愾心みたいなものがあった。相当ファイティング・スピリットもあったわけですよ（笑）。あったわけなんですが、それがバブルの崩壊とともに、しぼんじゃったんですね。それで、今ではバブルというのは本当に悪夢だった、と。しかし、最後の徒花を咲かせたようなもので、中にはそれでエンジョイした連中もいるでしょう。しかし、ここまで馬鹿な形になってしまうとは、想像していなかったですね。

渡邉　あの時代は、何だったですかね（笑）。

吉野　いつか話したでしょう。シュミットが僕に、「どうか日本の業者も、ハンブルクのフィーアヤーレスツァイテンというホテルを買おうなんて、馬鹿なことをしないでくれ」と言っていました。もう買ってしまった後ですけどね。それから、ギムニッヒにあるドイツ政府の迎賓館のお城まで、日本の業者が買ったわけです。そういうことに対して、彼は、「これは経済の世の中だから、なるようにしかならんことは知っているけれども、どうも日本の野放図なやり方は、おかしいじゃないか」と。ちょうど奈良の大仏さんを、外国人が買うようなものですからね。そういうようなことを、彼が言ったのを憶えています。もちろん、シュミットは辞めた後だし、僕も辞めた後ですが、そういう普通では考えられない日本人の狼藉ぶりも、当時あったわけですよね（笑）。

渡邉　やはり驕りがあったんですね。

吉野　しかし、それが弾けたわけですからね。話がちょっと違いますが、自分がいま勤めている会社（国際経済研究所）の、ある会計担当の役員に、「世の中で、これだけ方々で財テクが流行っている。財テクをやらないのは人にあらずとか、馬鹿だと言われているけれども、トヨタはどうして財テクに手を出さないんですか」という質問をしたことがあります。そうしたら、その会計担当の重役は、「我々は、決して財テクのような危ない商売には手を出しません」と断言しました。僕は「ハッ」としたんです。僕は、自分ではどちらでもいいと思っていた。どういう返事が返って来ようと……。しかし、トヨタというのは不思議な会社ですね。あれだけ何兆円かの余資を持っていて、今だったら株主が黙っていないわけです。「お前は、なぜその金をもっと使わないのか。土地は値上がりするから、買っておけ。さもなければ、俺たちに配当しろ」とかと言う。ところが、幸いに、その頃はまだ株主ヴァリューというのが尊重されていなかったし、それだけの大きな力にもなっていなかった。

　しかし、会計担当が、それだけの一つの識見を持っていたわけです。はっきりと、「そういうものに手を出しません」と言ったわけです。僕は、そのとき「ハッ」としました。後になって考えてみると、あのとき手を出さなくて良かったと思います。僕は、結果的には会計担当の重役を尊敬します。そういう時代だったですよね。もちろん、トヨタもコンバーチブル・ボンド（転換証券）を少し出して、別に損はしなかったですけどね。しかし、ごくわずかなんです。その頃、「コンバーチブル・ボンドを出せば、幾らでも儲かるよ」と。コクテル・パーティーへ出ても、そういう話ばかりでした。それだけ日本全体がユーホリズム（熱狂的陶酔）に入っていたときですから、「海外で一番高いビルを買うには、どうしたらいいか」というような話で、僕のところに相談に来る人がいたわけですからね（笑）。

サミットにおける日本の立場

渡邉　今昔の感がありますね。

　ところで、ひと通りお話を伺いました。取り敢えず、今日が締め括りなんですが、まだ多少時間がありますので、股野さんからご質問なり感想がありましたら、どうぞ……。

股野　私が見ていて、吉野大使は相当発言を控えておられると思います。ですから、渡邉さんは、もっと引き出さなきゃいけない。だから、可能なら、もうワン・セッションは時間をいただきたいですね。

一つ、吉野大使にお伺いしたいことは、途上国の問題です。戦後日本経済がここまで伸びてきた中に、日本はＯＥＣＤに一九六〇年代に加盟（六四年四月）して、六〇年代の高度成長を通して、西側先進国に追い付き、更に追い越すというプロセスを経て来た。その中での西側先進国との関わり合いというのが、我が国の経済外交ではウエートが大きかったと思います。

しかし、さっきおっしゃられた日本の伝統的な考え方や外交の姿勢の中に、まず近隣のアジアの国とともに発展していくとか、日本はやはり近隣のアジアの国を豊かにし、日本もそのリーダーシップを取り、そして全体として伸びていくという構図があったと思います。それが、かつては南北問題というような言い方でもありました。しかし、八九年十一月に、ベルリンの壁が崩れてから、東側の国についても、いわゆる市場経済化の未だ未熟成の国には、市場経済化を進めて、西側の資本と技術を入れて豊かにするということが、日本経済外交の一つの大きな課題になって来ました。

残念ながら九七年以降は、ちょっとアジア経済は調子が悪いという時期はありましたが、基本的な流れはアジア経済が非常にダイナミックになって来たということで、世界経済に対する影響も大きなものがあったと思います。そういう中で、吉野大使は、例えば経済協力に力を入れ、一番最初のインドに、ミッションで行かれたあたりを克明に憶えておられた。あの時代から、そういう問題にいち早く取り組んでおられたということを考えますと、吉野大使は途上国との関わり合いについて、一つのお考えを持って臨んで来られたのではないか。その辺のところを、今一度お伺いできれば……。

吉野　少し時間をおいてから、補足の会を開いていただきたいですね。それから、途中で僕は名前を忘れてしまって、いま思い出したような人が二、三いるわけです。

渡邉　それは、速記録に書き込んでください。それを、もう一遍我々は整理して、聞き損ねているところがあったら、改めて伺いましょう。

股野　それから、もう一つ。これは事実関係ですが、吉野大使と宮崎大使とは、シェルパを前任・後任でされましたか。

吉野　そうです。

股野　そうすると、吉野大使が一九七五年の最初と、七六、七七年の三回、シェルパをされた。失礼、当時はシェルパと言わなかった。シェルパと言うようになったのは、いつからでしたか。

吉野　それから、一年か二年経ってからですね。

股野　それでは、まだ吉野大使の時代は、実際にアテンドしておられたけど、まだシェルパとは言われなかった。

吉野　シェルパという言葉もなくて、初めはパーソナル・リプレゼンタティブという言葉もなかったわけです。そのうちに、「Ｐ．Ｒ．」とか何とかということになって、それから今度はシェルパとか、いろいろなことを言うようになったわけですね。

股野　いずれにしても、吉野大使が最初の三回をなさったんですね。

吉野　……したんですが、ただ最初は、おそらく牛場大使――経済担当の大臣になっておられたかどうか知りませんが――も、一緒に行ったんですね。

股野　ランブイエへ……。

吉野　ええ。ところが、牛場大使も僕も、ランブイエの本会議には出られなかったのですよ。牛場大使も出られなかった。当時、大臣であったかどうか、僕も憶えていないんですがね。

渡邉　牛場さんが対外経済相になったのは、福田内閣になってからですからね。三木さんのときには、まだ大臣じゃないと思います。

股野　ランブイエには、牛場さんは行かれたわけですね。

吉野　彼と一緒に、雨宿りしたことを憶えていますから……。

渡邉　今日も、ちょっとそのお話を聞いて、ボン・サミットのときには吉野さんは大使でいらっしゃったから、シェルパ役は宮崎さんでしょうね。しかし、仕事の上では……。

股野　連続性があったわけですね。四回目ですからね。

渡邉　実質的に、最初の四回は吉野大使が関わっていらっしゃるわけですね。その次は、東京ですから、これは……。

吉野　もう全然関係しなかった。

股野　最初の三回のランブイエ、サンファン、ロンドンを比較していただいて、今、どんな印象がおありですか。ちょっと、役者も替わっているんですね。

吉野　役者も替わっているんですけど、実質的な討議が一番興味深かったのは、ロンドンでしょうね。最初のランブイエは、どうも日本はどの程度参加していたのか分からんくらい、「ただ、出た」というだけの話ですね。我々のアシストもあれだし、それから……。

渡邉　三木さんも……。

吉野　三木さんも、そうだしね。いわゆるシェルパと称する「部族」の間の緊密な関係もなかったですからね。二回目あたりから、そこら辺がだんだんと変わって来ました。

股野　そうすると、いわゆる先進国間の経済政策討議としての、実を備えて来始めたのがロンドンで、たまたま我がほうも福田総理であった。

渡邉　ロンドン、ボンというのは、サミットの中でもピークみたいな感じの時期ですよね。

股野　ちょうど、「機関車論」があったときですね。

吉野　そうそう。最初にジスカールデスタンが言い出したときは、まだ日本は、「何で、こんな会議に呼び出されるのかな。政治問題がないなら行ってもいいよ」というような話だったですからね。それから、向こうも意図的に、日本をそんなに重視しなかったですからね。

股野　当時、少し前に中東戦争があって、石油危機が起こって、産油国のカルテルとかがあった。それに加えて、一次産品の諸国も連合して、消費国側に要求を出す。それに対して、先進国側はどうするかというような意識で、ジスカールデスタンが「まず、集まろう」と言い出した。

吉野　それで、彼が呼んだんでしょうね。

股野　ところが、その辺の意識が、どうも当時の三木内閣には十分伝わって来なかった。だから、日本は、要領がよく分からないままに、第一回に臨んだ。

吉野　そうですね。「まあ、出てみよう」という形でした。僕は、あの段階では無理ないと思います。我々とヨーロッパとの間の、共通の意識もなかったですからね。

股野　当時、第一回のランブイエの頃には、既に日本は世界でＧＮＰがナンバー2でございましたね。

吉野　それは、そうでしょうね。

股野　ですから、そういう意味では日本を度外視できないところまで来ていたんですが、日本側のほうに何となく、まだそれにふさわしい自己意識がなかったという感じが残ります。

吉野　その通りですね。

股野　サンファン会議というのは、どうも印象が薄いですね。

吉野　サンファン会議も、意識は薄いんです。ただ、ああいうきれいなところでやった。それから、アメリカのリーダーシップが割合少なかったんです。

渡邉　フォードですからね。ロンドンは、もうカーターですか。

股野　カーターです。ですから、役者も替わっていた。

吉野　それから、アシストするシェルパも替わったわけですから、そのときは、もっと積極的だったわけですね。それから、もう既にカーターの場合には「原子炉を抑えよう」という、非常に強い意識があったわけです。だから、我々も、これをどうやって防ぐかという危機意識があったわけです。

渡邉　サミットは歴史が長いんですが、この頃のサミットについては、あまりいい研究書がないんです。

股野　そうですね。確かに、あまり日本では体系的にサミットを研究したものがない。

吉野　松浦（晃一郎）君が、何か書いたんですね。どの程度書いているか知りませんが……。

渡邉　松浦さんの本は、いつ頃をカバーしていたかな。

吉野　第一回、第二回については、彼がそんなに詳しく知っているはずがないですから……。日本は、それほど初めからコンサルテーションに引き入れられなかったんです。大体、シェルパというのは、「日本は、こうしてくれ」とか、「ああしてくれ」とかという話が出て、そこで初めて盛んに問題を練るわけです。第一回は、初めはシェルパなしでやったわけですからね。

渡邉　朝日新聞の船橋洋一が『サミットクラシー』という本を書いていまして、あれは吉野さんにインタビューしたんじゃないかな？　そこに「吉野は、こう言った」と書いていまして、「ランブイエは参加することに意義があったんだ」と（笑）。

吉野　それは、三木さんが言ったことです。

渡邉　「吉野さん」と書いていましたよ。私は、実は自分の本に、そのことを引用したんだけど……。

吉野　そうでしたか。そういうことです。「仲間に入った」ことに意義があったんです。初めての首脳会議ですからね。

渡邉　ついでだから、ちょっとお訊きすると、船橋氏は、その中でこういうことを言っているんです。要するに、それは彼の考え方なのかどうか、その辺をお訊きしたいんです。――ちょうど戦前の日本は、五大国か何大国か知らないけれど、それがあって、当時は海軍軍縮だとか、そういう中で日本は世界の何大国かの一つになった。それが今度は経済の問題で、再び世界に伍して一人前になった。（日本には）こういう考えがあるんだ、と。そこに書いてあります。

吉野　そういう考えもあったでしょうね。「ようやく……」というふうにね。

渡邉　「日本も再び、ここまで来たか。今度は経済だけど……」という感じだった、と。そういうふうに、彼は書いているものですからね。

吉野　あなたの言われたように、実質は、もう日本は二番目の国ではあったけれども、日本人の意識としては、未だ「欧米の先進国の仲間

入りした」という程度のことですよ。

股野　吉野大使のお話を初めから伺っていて、併せて第二次大戦前夜の頃の記録をいろいろ読み返したところ、我々の先輩である三谷（隆信）元侍従長の回想録が、実によく書けていて、大変興味深いんです。

それから、吉野大使のお話で、ドイツがソ連に侵攻したとき、下宿のおばさんが朝、吉野大使の部屋のドアをどんどん叩いて、「大変だ！」と言ったという話も、極めて印象的なんです。なぜ、あのときにヒットラーはソ連を侵攻することにしたのか。あのときには、もうヒットラーは、ソ連は別としまして、ヨーロッパ大陸は押さえてしまっていたわけです。それで、イギリスを何とかしようということでしたが、なかなか思うようにいかない。そういう中で、次の手として、なぜ対ソ開戦という手をヒットラーは打ったのか……。

吉野　それを、ここでは話していないですかね。戦争中、ドイツ大使館内においても――それは、相当戦争が悪くなって来てからですが――内田さんとか、我々の先輩と、「なぜか」ということを議論したことがあります。そのときの内田さんの意見は……。それは、ドイツは英国を討ちたいし、討ったら最後のあれだという構えのときに、ヒットラーが、なぜソ連を討ったかと言うと、英国を討てば、アメリカも参戦するだろう。当時、U-ボートがアメリカ商船を攻撃したりしていましたから、参戦するだろう。そうなると、戦争は長期化する。そうすると、食糧問題を含めてヨーロッパは困る。つまり、ドイツが困るということです。そこで、まずウクライナの小麦その他の豊富な穀物資源が欲しい――これはまた、ドイツの夢なんです。

渡邊　穀倉ですね。

吉野　穀倉。それで、そこを確保する。「長期戦になる前に、ソ連を討たなかったら駄目だ」という思想なんです。しかも、その思想は多かれ少なかれドイツの伝統的な考え方です。第一次大戦のときも、英仏との戦争では五分五分ないしはドイツが相当優勢であったにも拘わらず、結局、当時のロシアを叩いたんです。それで、「それは間違いだった」ということを、ヒットラーは『マイン・カンプ』の中に書いたんです。こういう二重作戦をしたのは、あのカイザーの間違いだった、と。あるいは、当時の参謀本部の……。

ところが、その同じ間違いを、また犯さざるを得なかったわけです。それはなぜか、と。ヒットラーは知っているはずなのに、どうしてやったかと言うと、それは唯一英国を討った場合には大戦争になって、長期戦を要する。それにはドイツは耐えられないから、ウクライナの穀倉を手に入れようとした。それが、当時の我々の議論だったんです。それは理屈としては、僕は分かると思います。しかし、ナポレオンの戦争とか、その他のことを考えたら、ソ連なんてそう簡単に……。殊に、シベリアその他を考えたらね。そこで、「日本も一緒にやってくれ」という形になって来たわけですね。あの頃の戦争というのは、本当の意味での妄想ですね。

股野　下宿のおばさんの反応からして、ドイツ国民は非常に深刻に受け止めたわけですよね。大変なことになってしまう……というね。

吉野　それはもう、ドイツ国民は、本当にひっそりとしてしまったんです。それで、ヒットラーは、「いや、ソ連はこういう悪いことをしている。それから、モスクワは二週間で片付くんだ」という演説をした。

股野　そうですね。短期にモスクワとレニングラードは押さえられる、と……。

吉野　夏だから。それで、その勢いでモスクワの近くまで行ったんだけれども、そこで冬になってしまった。

渡邉　これまた、ナポレオンがやったことだ（笑）。

吉野　そうなんです。

渡邉　お話は尽きませんが、時間になりました。どうも長い間、ありがとうございました。取り敢えずのところは、これで終了したいと思います。

吉野　こちらこそ、ありがとうございました。

〈了〉

あとがき

吉野文六氏のオーラルヒストリーは、一九九九年二月二十二日から同年九月二十九日まで合計七回、吉野氏が理事長を務めておられた国際経済研究所の理事長室で行われた。私（渡邉昭夫）が主たるインタビュアーとなり、伊藤隆氏、股野景親氏、井上寿一氏、佐道明広氏、武田知己氏が参加した。生い立ちの頃から始めて、学生時代、外務省入省前後の話、入省後は順に戦時中のドイツ駐在、佐世保の終戦連絡事務局、通産省通商局、外務省経済局、在外時代（米国、ドイツ）、経済協力局、在米大使館公使、アメリカ局長、駐ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）代表部大使、経済担当外務審議官、駐ドイツ連邦共和国大使の各時代についてのご経験を、時代を追ってお話しいただいた。本書は、その記録である。

この個人別のオーラルを行う前に、数人の大使の方にご出席いただいて、戦後日本外交の再建時代に関する聞き取りを二回実施したが、吉野氏にはこれにもご参加いただいている。それは、政策研究大学院大学の政策情報プロジェクトで、外交官に関するオーラルヒストリーを本格的に実施していくことを計画した際、その最初の企画として行われたものである。これまでも外交史料館をはじめとして、外交官に関するオーラルヒストリーは行われてはいたものの、組織的・系統的に実施されたものは少なく、その公開などについても制約が多かった。しかし、戦後も半世紀以上経過し、現在の外交文書公開の状況等から考えても、戦後日本外交の再出発以来の貴重な経験を記録として残すことの重要度は高い。そこで、政策研究大学院大学政策情報プロジェクトでは、その発足に当たって、外交官プロジェクトを重要な柱の一つとして組織的・系統的に実施していくことにしたのである。この趣旨をご理解いただき、ご賛同いただいた外交官ＯＢの方にご参集いただき、まずお話しいただきやすいテーマとして、在米事務所設置から大使館再開といった戦後日本外交再建時代の事情をお話しいただいたのが、この二度にわたるオーラルである。この二度のオーラルには、私自身は参加していないが、第一回目にご参集いただいたのは吉野文六大使、竹内春海大使、宮崎弘道大使、本野盛幸大使、インタビュアーは北岡伸一氏、伊藤隆氏、御厨貴氏、飯尾潤氏、股野景親氏、佐道明広氏、武田知己氏で、一九九八年九月二十四日に開催された。第二回目は、第一回目に参加された各大使に沢木正男大使が加わり、第一回目と同じインタビュアーで一九九八年十一月四日に行われた。この二度のオーラルの結果、まず「経済外交」を軸に系統的にお話をうかがっていくという方針を立て、その分野に関係の深い外交官ＯＢの方々に集まっていただき、複数者でのオーラルを一度実施したが、それに引き続いて個人別の系統的オーラルを実施することになり、そのトップバッターとしてお話をお聞きしたのが、この吉野氏のオーラルヒストリーであった。

吉野氏は、戦後日本の「経済外交」を担った代表的な外交官の一人である。在米大使館公使やアメリカ局長の時代には、沖縄返還交渉をはじめ日米安保関係の諸問題にも関係されており、決して「経済外交」のみにそのご経歴は限られるわけではないので、このオーラルでも広くお話

をうかがっている。しかし、戦後貿易の再開やインドをはじめとしたアジア諸国への経済協力の開始と展開、そしてランブイエに始まる先進国首脳経済サミットなど、日本の復興や経済発展に関わる重要な部分に関係しておられ、本書での証言は戦後日本の「経済外交」の貴重な記録となっている。快く我々の求めに応じてお話しくださった吉野大使には、この場を借りて心から感謝申し上げたい。

なお、速記を担当したペンハウスの川島由紀・戸部芳珠子、丹羽清隆の各氏、ならびに面倒な編集作業の任に当たられた政策研究院C.O.E.オーラルヒストリー研究プロジェクトの安田泉氏と、編集助手の宮城須賀子、塩原有子の両氏にも感謝したい。

平成十五年五月一日

(財)平和・安全保障研究所理事長
政策研究大学院大学客員教授　渡邉昭夫

平成 15 年度　文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕
発行：2003 年 7 月 15 日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト
〒162 - 8677　東京都新宿区若松町２－２
Tel：03(3341)0458　Fax：03(3341)0446